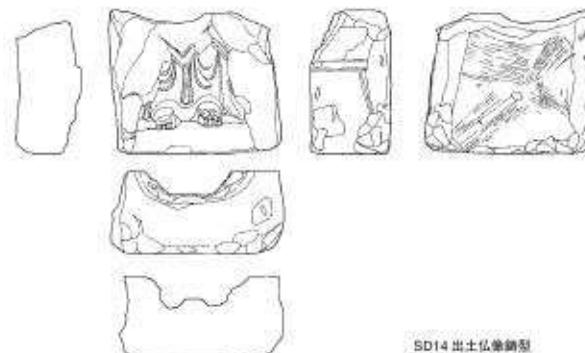


茨城県石岡市

東成井山ノ神遺跡

— 県営畠地帯総合整備事業（東成井西部地区）に伴う発掘調査 —



SD14 出土仏像銅型

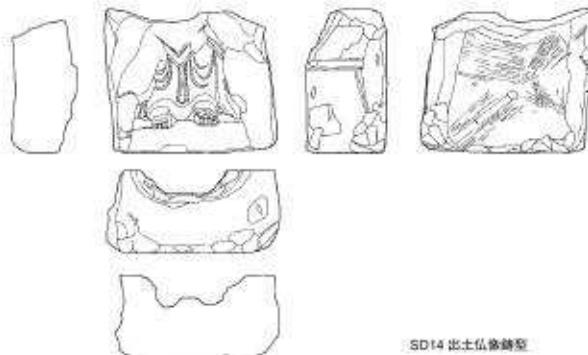
2012

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 ノガミ

茨城県石岡市

東成井山ノ神遺跡

— 県営畠地帯総合整備事業（東成井西部地区）に伴う発掘調査 —



2012

茨 城 県
石 岡 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 ノガミ

序

石岡市内には、392箇所もの「遺跡（埋蔵文化財包蔵地）」が存在しています。これら埋蔵文化財は、われわれの祖先の生活を知る貴重な財産にあたりますが、工事や開発などにより一度破壊されてしまうと二度とも戻すことができません。石岡市としても、その意義や重要性を踏まえ、保護保存に努めているところです。

さて、本書で報告されます「東成井山ノ神遺跡」は、平成21年度に新たに発見された遺跡です。今回、県営畠地帯総合整備事業に伴い発掘調査が行われ、古墳時代～奈良・平安時代、中世の集落跡などが発見されました。そのなかでも注目されるのは、仏像の鋳型の出土です。これまで中世の東成井地区には「鋳物師」という仏像の製作者が住んでいたと推測されていましたが、それを考古学的に裏付ける発見と言えます。

このような成果をあげることができましたのも、調査にあたりご理解とご協力をいただいた皆様方や、ご指導・ご助言をいただきました皆様方のおかげであり、心から感謝申し上げます。

石岡市としても、今回の成果をもとに、より一層、文化財の保護・保存・活用に取り組んでいく所存でありますので、引き続いてのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

本書が学術的な研究資料としてはもとより、石岡市の歴史に関する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

平成24年3月

石岡市教育委員会
教育長 石橋 凱

例　　言

1. 本書は茨城県石岡市東成井に所在する東成井山ノ神遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は県営畠地帯総合整備事業（東成井西部地区）道路工事に伴い、石岡市より委託契約を受けた株式会社ノガミが実施した。
3. 調査は石岡市教育委員会の指導の下に行った。調査内容及び調査組織は下記の通りである。

所 在 地 茨城県石岡市東成井832ほか

調査面積 約3,030m²

調査期間 発掘調査 平成23年7月12日～平成23年11月9日

整理調査 平成23年11月15日～平成24年3月16日

事務局・調査指導

石岀市教育委員会教育長	石橋　凱
教育部長	高野喜市郎
次長	上曾宗則
生涯学習課長	真家　忠
生涯学習課長補佐	吉川　隆
生涯学習課係長	安藤敏孝
生涯学習課係長	箕輪健一
生涯学習課主任	小杉山大輔
生涯学習課主幹	曾根俊雄

調査担当者 発掘 福山俊彰・秋山真好（株式会社ノガミ）

整理 福山・秋山・佐藤俊（株式会社ノガミ）

調査参加者

青木毅彦 市毛友則 岩田時彦 海老原光 海老原龍生 小堤静江 小野 豊
斎藤与志朗 佐久間弘美 佐藤としえ 鈴木晃佳 鈴木とし江 仙波由美子
高田幸江 高野正行 高安幸且 豊島英典 中島 昭 中島貞雄 中島トミ子
中村 薫 根矢 稔 野村正子 平林敬子 藤倉秋之助 武藤瑞良

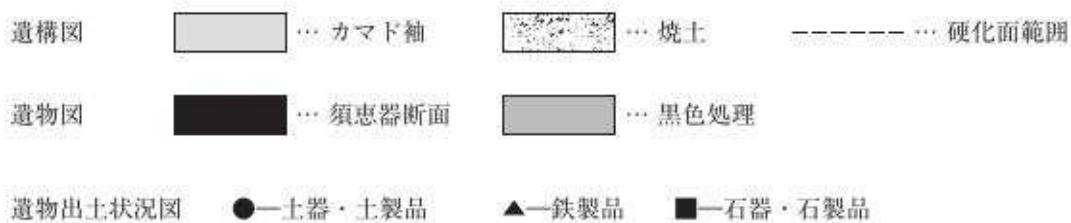
4. 本書は曾根・福山・秋山・佐藤が分担執筆し、編集は小杉山・曾根の助言のもと秋山・福山が行った。
5. 執筆分担は下記の通りである。
第1章第1節・附編…曾根、第1章第2節…福山、第2・3章…秋山、第4章…秋山・福山
第5章…秋山・佐藤・福山 第6章…秋山・福山
6. 遺構の写真撮影は秋山・福山が、遺物の写真撮影は秋山・福山・山中悟朗が行った。
7. 遺物の基礎整理・実測・観察表作成は福山・秋山・佐藤・石垣義則・折原洋一・小村正之・小山昌枝・瀬尾布美子・武田裕紀子・戸根与八郎・長谷川則子・日枝妙子・渡辺容子が、遺構図面整理・デジタル編集は秋山・福山・山中・長谷川一郎・星芳子が行った。

8. 記録類及び出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関及び諸氏のご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。[順不同、敬称略]

茨城県教育庁文化課・茨城県立歴史館・上高津貝塚ふるさと歴史の広場・茨城中世考古学研究会
株鬼沢組・有新成田総合社・芦田和義・宇留野主税・近江屋成陽・大久保隆史・大関武・狩谷崇文
越田真太郎・関口慶久・高橋透・田口睦子・飛田英世・土生朗治・比毛君男・広瀬季一郎

凡　例

1. 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を用いている。方位は座標北を示す。
2. 本文中の色調表現は「新版標準土色帖」2008年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
3. 標高は海拔標高である。
4. 掲載した図面の基本縮尺は以下の通りである。
遺構図　調査区全体図1/600　住居跡・地下式坑・土坑・井戸跡・土層図1/60　住居跡カマド1/30
方形竪穴状遺構1/80　溝跡1/120・1/200・1/300
遺物図　土師器・須恵器・鉄滓・炉壁1/4　縄文土器・石器1/3　五輪塔1/6　鉄製品・古鏡1/2
なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその縮尺率を表した。
5. 遺物写真は基本的に実測図の縮尺に合わせて掲載した。
6. 掲載図中のスクリーントーン及び記号は以下に示す通りである。



7. 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。
SI：住居跡 SK：土坑・地下式坑・方形竪穴 SD：溝跡 SE：井戸跡 P：ピット K：攪乱
8. 遺物観察表の法量単位はcmである。法量に付した()は復元値、()は残存値を示す。
9. 本遺跡の略号はHYK-2011とした。遺物の注記もこれに従っている。

本文目次

序		第2節 住居跡	11
例言		第3節 土坑・井戸跡	60
凡例		1 地下式坑	61
目次		2 方形豎穴状遺構	66
第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1	3 その他の土坑	66
第1節 調査に至る経緯	1	4 井戸跡	68
第2節 調査の経過	1	第4節 溝跡	68
第2章 遺跡の位置と環境	2	第5節 遺構外出土遺物	76
第1節 地理的環境	2	第6章 まとめ	77
第2節 歴史的環境	2	第1節 遺構の変遷について	77
第3章 調査の方法と標準堆積土層	4	第2節 中世の遺構と遺物について	77
第1節 調査の方法	4	引用・参考文献	81
第2節 標準堆積土層	5	附編 資料紹介	82
第4章 試掘調査と遺物	5	写真図版	
第5章 検出された遺構と遺物	11	抄録	
第1節 概要	11		

挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図	3	第30図 SI09出土遺物	22
第2図 周辺遺跡図	3	第31図 SI10	23
第3図 標準堆積土層図	4	第32図 SI10カマド	23
第4図 調査地点位置図	5	第33図 SI10出土遺物	24
第5図 試掘トレンチ位置図（1）	6	第34図 SII1	25
第6図 試掘トレンチ位置図（2）	7	第35図 SII1カマド	26
第7図 試掘調査出土遺物（1）	7	第36図 SII1出土遺物	26
第8図 試掘調査出土遺物（2）	8	第37図 SI12	27
第9図 全体測量図（折込）	9・10	第38図 SI12出土遺物	28
第10図 SI01	12	第39図 SI13	29
第11図 SI01カマド	12	第40図 SI13出土遺物	29
第12図 SI01出土遺物	12	第41図 SI14	30
第13図 SI02	13	第42図 SI14出土遺物	31
第14図 SI02出土遺物	13	第43図 SI14カマド	32
第15図 SI03	13	第44図 SI15	33
第16図 SI03出土遺物	13	第45図 SI15カマド	34
第17図 SI04	14	第46図 SI15出土遺物	35
第18図 SI04出土遺物	14	第47図 SI16	36
第19図 SI05	15	第48図 SI16カマド	36
第20図 SI05出土遺物	15	第49図 SI16出土遺物	37
第21図 SI06	16	第50図 SII17	38
第22図 SI06出土遺物	16	第51図 SII17カマド	38
第23図 SI07	17	第52図 SII17出土遺物	39
第24図 SI07出土遺物	18	第53図 SII18	39
第25図 SI08	19	第54図 SII18出土遺物	39
第26図 SI08カマド	19	第55図 SII19	40
第27図 SI08出土遺物	20	第56図 SII19出土遺物	40
第28図 SI09	21	第57図 SI20	41
第29図 SI09カマド	21	第58図 SI20カマド	41

第59図	SI20出土遺物	42	第85図	SI31	55
第60図	SI21	43	第86図	SI31出土遺物	55
第61図	SI21カマド	44	第87図	SI32	56
第62図	SI21出土遺物（1）	44	第88図	SI32カマド	56
第63図	SI21出土遺物（2）	45	第89図	SI32出土遺物	57
第64図	SI22	46	第90図	SI33	59
第65図	SI22出土遺物	46	第91図	SI33出土遺物	59
第66図	SI23	47	第92図	SI34出土遺物	60
第67図	SI23カマド	47	第93図	SI34	60
第68図	SI23出土遺物	48	第94図	SK01・02	61
第69図	SI24	49	第95図	SK03・04・08	62
第70図	SI24出土遺物	49	第96図	地下式坑出土遺物	63
第71図	SI25	49	第97図	SK05・出土遺物	65
第72図	SI25出土遺物	49	第98図	SK09・10・11	67
第73図	SI26	50	第99図	SK12・出土遺物	67
第74図	SI26カマド	50	第100図	SE01	67
第75図	SI26出土遺物	51	第101図	SD01・02・03・04・05・06	69
第76図	SI27	52	第102図	SD05・07	70
第77図	SI27カマド	52	第103図	SD08・09・10・11	71
第78図	SI27出土遺物	52	第104図	SD12・13・14	73
第79図	SI28	53	第105図	溝跡出土遺物	74
第80図	SI28出土遺物	53	第106図	遺構外出土遺物	76
第81図	SI29	54	第107図	遺構変遷図（1）	78
第82図	SI29出土遺物	54	第108図	遺構変遷図（2）	79
第83図	SI30	54	第109図	遺構変遷図（3）	80
第84図	SI30出土遺物	54	第110図	西久保遺跡出土和同開示	82

目次

第1表	試掘調査出土遺物観察表	8	第21表	SI20出土遺物観察表	42
第2表	SI01出土遺物観察表	11	第22表	SI21出土遺物観察表	45
第3表	SI02出土遺物観察表	11	第23表	SI22出土遺物観察表	46
第4表	SI03出土遺物観察表	13	第24表	SI23出土遺物観察表	48
第5表	SI04出土遺物観察表	15	第25表	SI24出土遺物観察表	49
第6表	SI05出土遺物観察表	15	第26表	SI25出土遺物観察表	49
第7表	SI06出土遺物観察表	17	第27表	SI26出土遺物観察表	51
第8表	SI07出土遺物観察表	18	第28表	SI27出土遺物観察表	52
第9表	SI08出土遺物観察表	20	第29表	SI28出土遺物観察表	53
第10表	SI09出土遺物観察表	22	第30表	SI29出土遺物観察表	53
第11表	SI10出土遺物観察表	24	第31表	SI30出土遺物観察表	54
第12表	SI11出土遺物観察表	27	第32表	SI31出土遺物観察表	55
第13表	SI12出土遺物観察表	28	第33表	SI32出土遺物観察表	58
第14表	SI13出土遺物観察表	29	第34表	SI33出土遺物観察表	58
第15表	SI14出土遺物観察表	32	第35表	SI34出土遺物観察表	60
第16表	SI15出土遺物観察表	35	第36表	地下式坑出土遺物観察表	64
第17表	SI16出土遺物観察表	37	第37表	SK05出土遺物観察表	66
第18表	SI17出土遺物観察表	39	第38表	SK12出土遺物観察表	68
第19表	SI18出土遺物観察表	40	第39表	溝跡出土遺物観察表	75
第20表	SI19出土遺物観察表	40	第40表	遺構外出土遺物観察表	76

写真図版目次

遺構図版 1

- 1 調査区東側全景 西から
- 2 調査区西側全景 南東から

遺構図版 2

- 1 調査区南側全景 南西から
- 2 調査区北側全景 南西から

遺構図版 3

- 1 標準堆積土層 1 南東から
- 2 標準堆積土層 2 南東から
- 3 SI01遺物出土状況 南から
- 4 SI01カマド 南から
- 5 SI02全景 北西から
- 6 SI03遺物出土状況 北から
- 7 SI04遺物出土状況 北から
- 8 SI05全景 南から

遺構図版 4

- 1 SI06遺物出土状況 南から
- 2 SI07・SK04全景 南東から
- 3 SI08遺物出土状況 南から
- 4 SI08カマド 南から
- 5 SI09・0全景 南西から
- 6 SI09カマド 南西から
- 7 SI10遺物出土状況 南東から
- 8 SI10カマド 南東から

遺構図版 5

- 1 SI11セクション 東から
- 2 SI11遺物出土状況 南から
- 3 SI11カマド 南から
- 4 SI12遺物出土状況 北から
- 5 SI13遺物出土状況 南から
- 6 SI14セクション 南から
- 7 SI14遺物出土状況 南東から
- 8 SI14カマド 南東から

遺構図版 6

- 1 SI15遺物出土状況 南から
- 2 SI15カマド 南から
- 3 SI16セクション 南から
- 4 SI16全景 南から
- 5 SI16カマド 南から
- 6 SI17炭化材出土状況 西から
- 7 SI17カマドセクション 南から
- 8 SI17カマド 南から

遺構図版 7

- 1 SI18全景 南から
- 2 SI19全景 南から
- 3 SI20全景 南から

- 4 SI20カマド 南から

- 5 SI21全景 南から

- 6 SI21カマド 南から

- 7 SI22遺物出土状況 南東から

- 8 SI22鉄斧出土状況 東から

遺構図版 8

- 1 SI23遺物出土状況 東から
- 2 SI23遺物出土近景 南から
- 3 SI23カマド 南から
- 4 SI24遺物出土状況 東から
- 5 SI25全景 北から
- 6 SI26全景 南から
- 7 SI26主柱穴遺物出土状況 南から
- 8 SI26カマド 南から

遺構図版 9

- 1 SI27全景 南西から
- 2 SI27カマド 南から
- 3 SI28・SD12全景 北西から
- 4 SI29遺物出土状況 西から
- 5 SI29紡錘車・鉄製品出土状況 北東から
- 6 SI30全景 南から
- 7 SI31・32・33セクション 東から
- 8 SI31全景 西から

遺構図版 10

- 1 SI32遺物出土状況 南から
- 2 SI32遺物出土近景 北から
- 3 SI32 カマドセクション 南から
- 4 SI32 カマド 南から
- 5 SI32 カマド支脚出土状況 南から
- 6 SI31・32・33全景 南東から
- 7 SI33 遺物出土近景 東から
- 8 SI34 全景 南から

遺構図版 11

- 1 SK01セクション 南から
- 2 SK01全景 南から
- 3 SK02セクション 北東から
- 4 SK02全景 南から
- 5 SK03全景 北西から
- 6 SK04全景 東から
- 7 SK05セクション 南西から
- 8 SK05全景 南から

遺構図版 12

- 1 SK08全景 南から
- 2 SK09全景 北から
- 3 SK11全景 北東から
- 4 SK12遺物出土状況 1 南から

5	SK12 完掘状況 西から	遺物図版7
6	SE01 全景 南から	SI21出土遺物(2)
7	SD01 全景 北西から	SI22出土遺物
8	SD02 全景 北西から	SI23出土遺物
遺構図版13		遺物図版8
1	SD05・06 セクション 南から	SI24出土遺物
2	SD05・06 全景 南から	SI25出土遺物
3	SD08・09 全景 北から	SI26出土遺物
4	SD10 全景 南西から	SI27出土遺物
5	SD11 全景 南から	SI28出土遺物
6	SD13 全景 東から	SI29出土遺物
7	SD14 セクション 西から	SI30出土遺物
8	SD14 全景 西から	SI31出土遺物
遺構図版14		SI32出土遺物(1)
東成井山ノ神遺跡周辺空中写真 (昭和22年10月25日・米軍撮影)		遺物図版9
遺物図版1		SI32出土遺物(2)
試掘調査出土遺物		SI33出土遺物
SI01出土遺物		SI34出土遺物
SI02出土遺物		遺物図版10
SI03出土遺物		SK01出土遺物
遺物図版2		SK02出土遺物
SI04出土遺物		SK04出土遺物
SI05出土遺物		SK08出土遺物
SI06出土遺物		SK05出土遺物(1)
SI07出土遺物		遺物図版11
遺物図版3		SK05出土遺物(2)
SI08出土遺物		SK12出土遺物
SI09出土遺物		SD01出土遺物
SI10出土遺物		SD05出土遺物
遺物図版4		SD06出土遺物
SI11出土遺物		SD07出土遺物
SI12出土遺物		SD11出土遺物
SI13出土遺物		遺物図版12
SI14出土遺物(1)		SD14出土遺物
遺物図版5		遺構外出土遺物
SI14出土遺物(2)		SK01・05出土炉壁
SI15出土遺物		SD14出土炉壁
遺物図版6		
SI16出土遺物		
SI17出土遺物		
SI18出土遺物		
SI19出土遺物		
SI20出土遺物		
SI21出土遺物(1)		

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

東成井山ノ神遺跡は、平成21年6月、開発行為に伴う埋蔵文化財確認のための現地踏査によって発見された。一方、茨城県では平成18年度より「畑地帯総合整備事業 東成井西部地区」として計画を立ち上げ、平成19年度には埋蔵文化財包蔵地の地図に記載がないことを確認し、計画書を作成していた。平成20年12月に県営事業として計画が決定、平成21年1月に確定したことから、事業に着手、実施設計業務を行った。そして、平成22年1月より区画整理工事に着手した。

このような状況のなか、平成22年6月15日、茨城県文化財保護指導委員より東成井山ノ神遺跡の範囲内において掘削を伴う工事が実施されている旨、石岡市教育委員会へ連絡があった。市教育委員会が同日現地を確認したところ、工事範囲内において土器の散布を確認したことから、事業主体である茨城県県南農林事務所に工事の中止を要請するとともに、埋蔵文化財に関する協議を申し入れた。

これを受け、平成22年6月21日、県南農林事務所より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が市教育委員会に提出された。

市教育委員会は、平成22年6月22日～29日に中断中の工事の未着手部分の試掘調査を行い、古墳時代後期～奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒などを確認した（第3地点-1）。合わせて事業地内の踏査を行い、事業地全域について試掘調査を実施する必要がある旨を平成22年7月22日付で回答した。そして、県南農林事務所および市農政課と協議を重ね、その協力を得ながら、事業地ほぼ全域の試掘調査を平成22年9月～11月に断続的に実施した（第3地点-2）。その結果、当初の東成井山ノ神遺跡の範囲を超えて遺跡が確認されたことから、平成22年12月1日に東成井山ノ神遺跡の範囲を拡大する「埋蔵文化財包蔵地調査カードの更新」および、新たに東成井東原遺跡を埋蔵文化財包蔵地に登録する「遺跡発見の通知」を県教育委員会へ提出した。

県南農林事務所は、平成22年11月15日付で「埋蔵文化財発掘の通知」を県教育委員会に提出した。市教育委員会、市農政課、県南農林事務所は試掘調査の結果をもとに協議を続け、また県教育庁文化課は12月8日に現地を確認し、協議を行った。

平成22年12月17日付で県教育委員会から、東成井山ノ神遺跡および東成井東原遺跡の1. 道路工事部分については工事着手前に発掘調査を実施するよう、2. 区画整理工事部分については市教育委員会が立会うように通知があった。

これらを受け平成23年度は、東成井山ノ神遺跡の道路工事部分（約3,030m²）について株式会社ノガミ関東支店に委託し、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

本遺跡の発掘調査は、平成23年7月12日より開始し、平成23年11月9日に現地での調査を終了した。以下に現地調査の概略を記す。

発掘調査（平成23年7月～11月）

7月期 調査範囲を確認した後、12日より重機による表土除去作業を調査区南端から開始する。14日、調査補助員による全体清掃・遺構確認作業を開始する。22日、重機による表土除去・残土処理作業を終了する。28日、遺構確認作業を終了し、遺構検出状況写真撮影、遺構確認図の作成を開始する。

- 8月期 2日、調査区に測量基準杭を設置する。3日、遺構の掘り下げを調査区東側より開始する。9日、住居跡の掘り下げを開始する。22日、遺構平面図の作成を開始する。29日、住居跡カマド調査を開始し、調査区中央部の遺構掘り下げを開始する。
- 9月期 5日、調査区中央部の遺構平面図作成を開始する。7日、調査区中央部の住居跡カマド調査を開始し、遺構の掘り下げは順次調査区北側に移行する。15日、調査区北側の遺構平面図作成を開始する。25日、台風及び大雨により調査区の浸水・湧水が異常に多く、水中ポンプを導入する。29日、調査区東側及び中央部の遺構調査を終了する。
- 10月期 3日、調査区北側及び南側の遺構掘り下げを開始する。6日～8日、調査区全体測量を行う。17日、調査区南端部に位置するSD14より仏像鑄型が出土する。18日、住居跡床下調査を開始する。22日、現地説明会を開催する。24～26日、旧石器試掘調査を行う。27・28日、調査区北側及び南側の全体清掃、全景写真撮影を行う。31日、調査区の安全対策点検、発掘器材の整備を行い、調査補助員の作業を終了する。
- 11月期 1日、調査区全体測量の補足作業を行う。4・5日、発掘器材撤収。9日、安全対策のロープ・ビン・立入禁止板等を撤収し、現地での調査を終了する。

整理調査（平成23年11月～24年3月）

整理作業・報告書作成は、平成23年11月1日から株式会社ノガミ関東支店で開始した。遺物収納整理箱で約50箱分出土した遺物の洗浄から着手し、遺物乾燥後、遺構・調査区単位で注記を行い、その後、遺構出土遺物の接合を行った。報告書掲載遺物の選別は1月16日に石岡市教育委員会立ち会いのもと、株式会社ノガミで行い、1月21日には土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場資料館において、茨城中世考古学研究会の諸氏に中世出土遺物の実見をしていただき、報告書掲載遺物の選別を終了した。その後、遺物の実測・採拓・トレースと写真撮影を行った。遺構図面は遺物整理と併行して確認・修正・デジタル処理を行い、併せて遺構写真の選別を行った。2月には遺構のトレース、遺構挿図のレイアウトを行った。その間、原稿執筆を行い、2月下旬には全体割付、写真図版作成を終了し、確認・見直し作業の後に印刷を発注して3月に刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

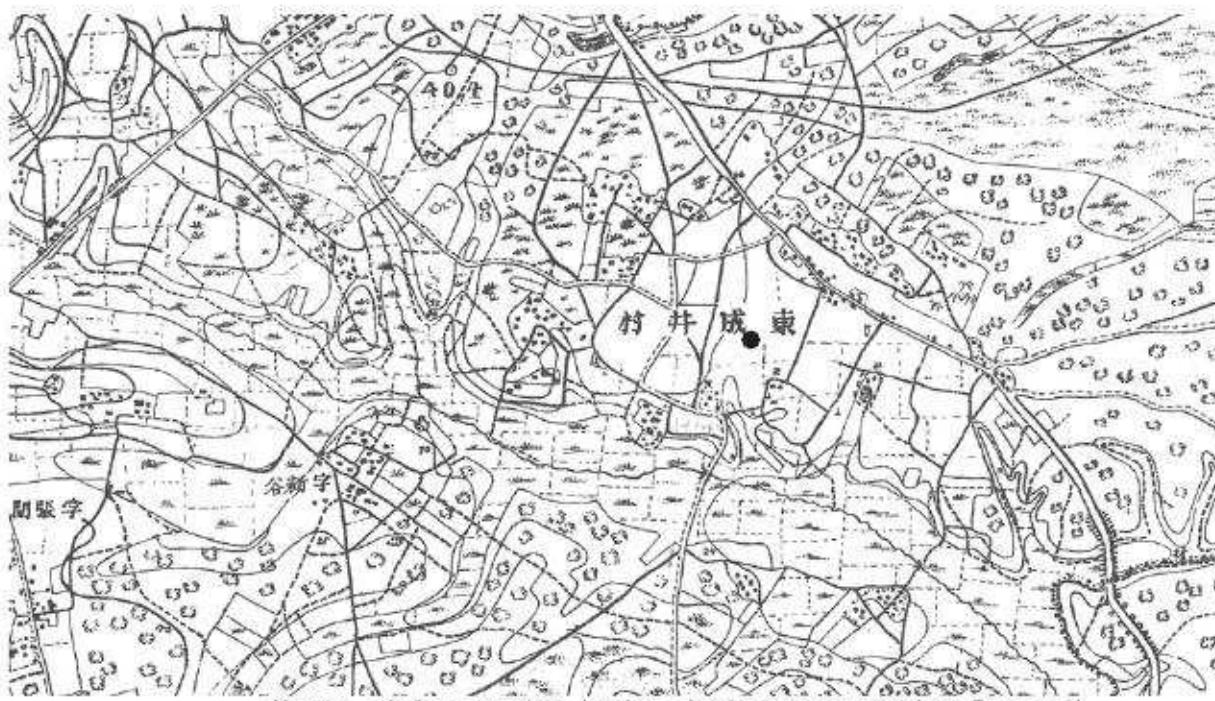
第1節 地理的環境

東成井山ノ神遺跡は、旧八郷町の石岡市東成井832ほかに所在する。石岡市は筑波山の東麓、茨城県のほぼ中央に位置し、本遺跡の位置する旧八郷町域は、西側を筑波山、足尾山、加波山、難台山等の筑波山系の山々に囲まれ、柿岡盆地が形成されている。また、これらの山並みとはほぼ平行して恋瀬川が南流しており、盆地は恋瀬川とその支流による開析を受け、河川周辺に樹枝状の沖積地が形成されている。旧町域東部は東茨城台地の東端にあたり、巴川、園部川等の河川が流れしており、これらの河川の開析によって、周辺台地には小支谷が刻まれている。本遺跡の所在する東成井地区は、石岡市域の北東部に位置し、調査区は巴川と園部川に挟まれた標高33m前後の台地上に立地する。調査前の現況は畠地及び雑木地であった。

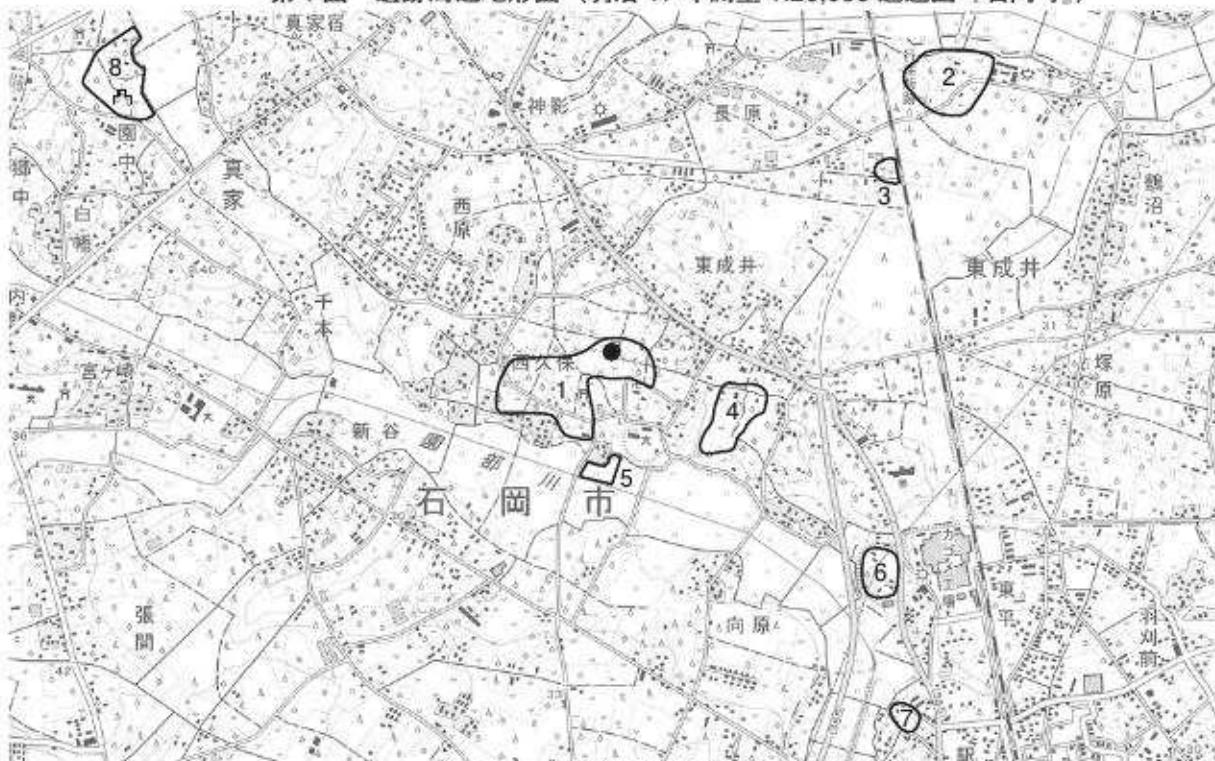
第2節 歴史的環境

東成井山ノ神遺跡の所在する東成井地区は、発掘事例が少なく歴史的に不明な点が多いが、近年、茨城県教育財團による猫松遺跡（2）と長原遺跡（3）の発掘調査が行われ、徐々にではあるが地域の歴史が明らか

かになってきている。周辺の遺跡を概観すると、猫松遺跡では旧石器時代の石器集中地点4か所と縄文時代の住居跡、陥し穴、古墳時代の住居跡等、長期間に亘る遺構と遺物が検出されている。縄文時代の陥し穴は長原遺跡でも2基検出されており、台地上は縄文時代の狩猟場となっていたと推測されている。縄文時代の遺跡は園部川下流域の羽鳥駅周辺に集中しており、北田向遺跡や小美玉市の逆瀬遺跡（6）、西平遺跡（7）等が周知されている。古墳時代～奈良・平安時代の遺跡は、本遺跡と前述した猫松遺跡、本遺跡の東側に位置する東成井東原遺跡（4）等があり、台地上に集落が広く営まれていた様である。本遺跡南側の沖



第1図 遺跡周辺地形図 (明治17年測量 1:20,000 迅速図「石岡町」)



第2図 周辺遺跡図 (1:25,000 「岩間」)

積地には和同開珎の出土した西久保遺跡（5）が所在し、今回、本書に資料紹介として掲載させていただいだ。中・近世の遺跡としては、園部川の上流に真家館址（8）、宍戸氏の泉城の支城とされる厚茂砦跡等が周知されている。中世以降の本遺跡周辺は領主が平氏、八田氏、佐竹氏と替わりながら近世に至っており、佐竹氏の秋田転封に伴い秋田六郷より転封してきた志筑本堂氏の所領となった。尚、鎌倉時代末期、東成井には常陸国から下総国にかけて活動した鎔物師がいたことが知られており、宍戸鳴井善性（沙弥善性）銘の梵鐘が一口のみではあるが現存している。

第3章 調査の方法と標準堆積土層

第1節 調査の方法

本遺跡の調査は道路部分の調査であるため、調査範囲は東西方向が長い十字状を呈している。現地調査時には、調査区中央の十字路部分を基点として、東・西・南・北に調査区を分け、東側は更に現道を境として東と中央に分けて調査を進めた。

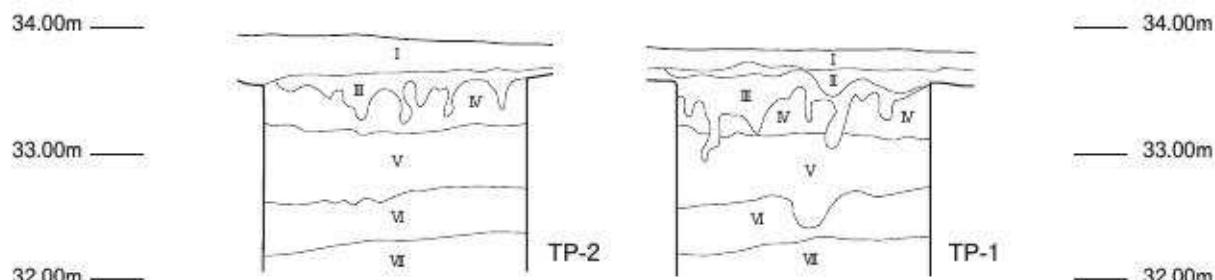
表土除去は石岡市教育委員会の行った試掘結果に基づき、遺構確認面となるソフトローム層上面までバックホー（0.4m³）を用いて除去した。その後、人力により鋤籠を用いて遺構検出作業を行った。確認された遺構は平板実測により遺構確認図（1/200）を作図し、順次遺構番号を付した。遺構の種類別表記は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の記号表記に準じた。

調査区には調査・測量の基準として道路センターラインに沿って測量基準杭を打設し、グリッドの設定は世界測地系IX系を用いて、調査区全体に10m方眼のグリッドを被せた。基準点（A-0グリッド）はX=29100、Y=39270に設定し、北から南にアルファベット、西から東に算用数字を付し、10mグリッドの北西角をグリッド呼称とした。

検出された遺構は半削もしくは土層観察用ベルトを設定して掘り下げを行った。記録は遺構平面図を平板実測にて作図し、状況に応じて遺り方実測で補足した。遺物の出土状況はレベル及び平板を用いて3次元位置の記録をした後に取り上げを行った。平面図及び土層断面図・エレベーション図の縮尺は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1・40分の1で作図した。カマド微細図は10分の1で作図した。

写真による記録は、35mmの白黒フィルム及びカラースライドとデジタルカメラを用いて撮影し、調査の進捗状況を35mmのカラーフィルムとデジタルカメラで記録した。

出土遺物は、遺構別及び出土位置別に分類して遺物収納箱に収納し、番号を付して遺物一覧表・遺物収納箱一覧表を作成した。



第3図 標準堆積土層図 (1:60)

第2節 標準堆積土層

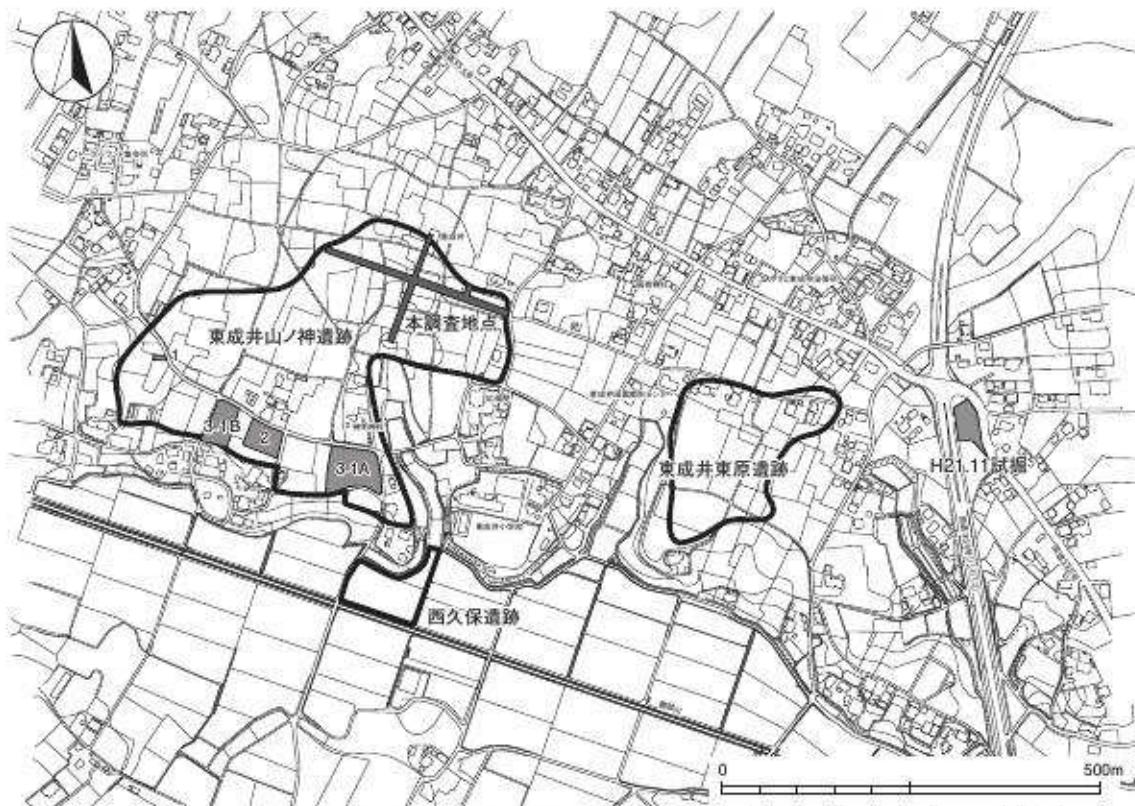
標準堆積土層は、調査区北側で実施した旧石器時代試掘調査の西側壁面で観察を行った。TP1はC-12グリッド、TP2はD-12グリッドに位置する。第Ⅰ層は表土・耕作土層で、暗褐色～黒色の腐葉土層である。第Ⅱ層は散発的にみられた褐色のソフトローム漸移層で、調査区中央部から西側には比較的厚く残存していた。第Ⅲ層は暗黄褐色のソフトローム層で、上面が遺構確認面となる。第Ⅳ層は黄褐色のハードローム層、第V層は褐色のハードローム層で第2黑色帯に相当する層である。第VI層は黄色の鹿沼軽石層で、層厚30～40cm堆積している。第VII層は締りの強い褐色のハードローム層である。

第4章 試掘調査と遺物

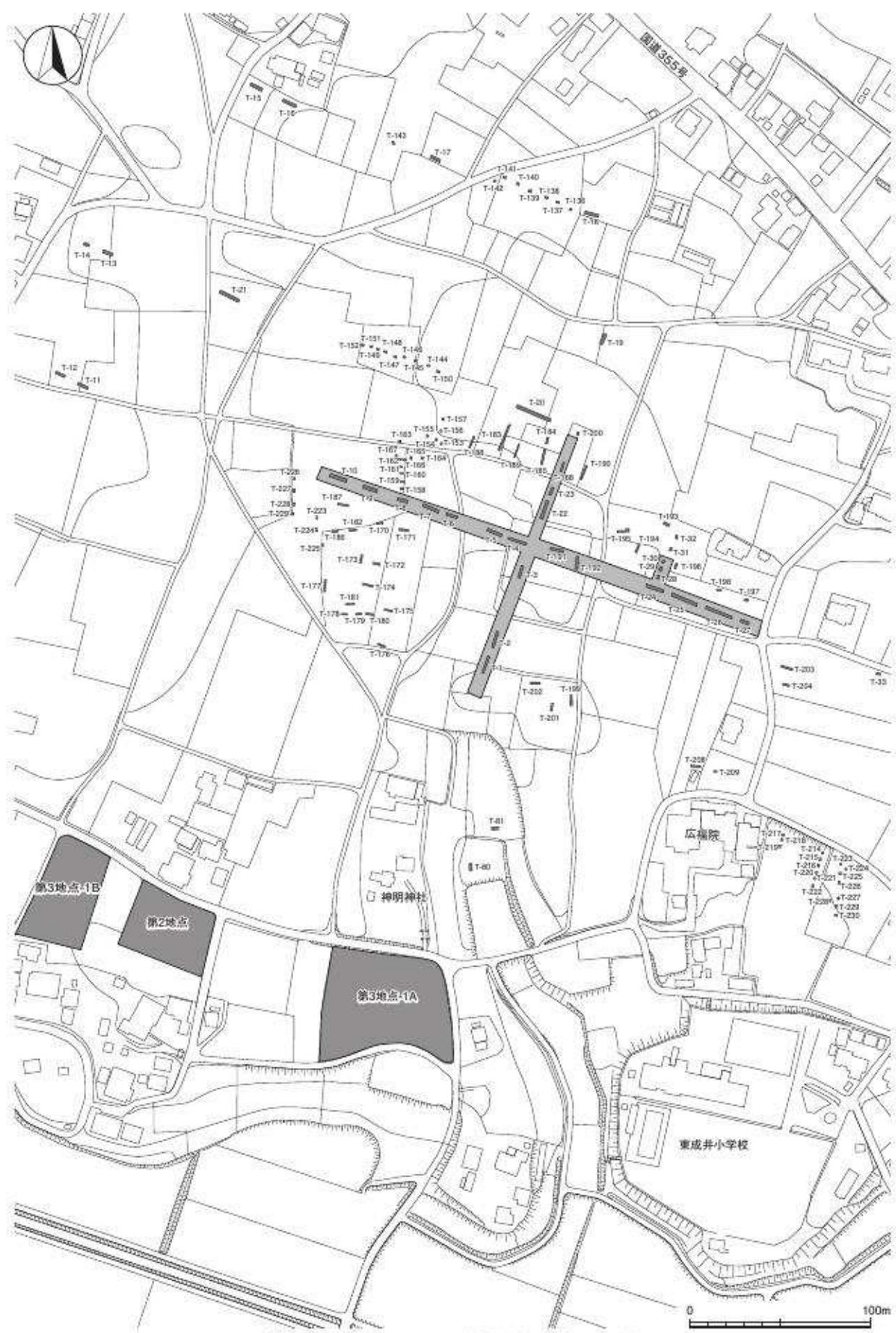
東成井山ノ神遺跡の試掘調査は、平成21年6月23日の第1地点、平成22年1月12・13日の第2地点、平成22年6月22～29日に実施した第3地点－1の試掘調査を経て、開発区域ほぼ全域の試掘調査を平成22年9月～11月に断続的に実施した（第3地点－2）。その結果、本調査の範囲から住居跡7軒、土坑2基、溝跡7条等が確認された。

遺物は遺物整理箱2箱が検出され、時期は古墳時代～奈良・平安時代の須恵器・土師器が主体である。本報告では16点を抽出して掲載する。

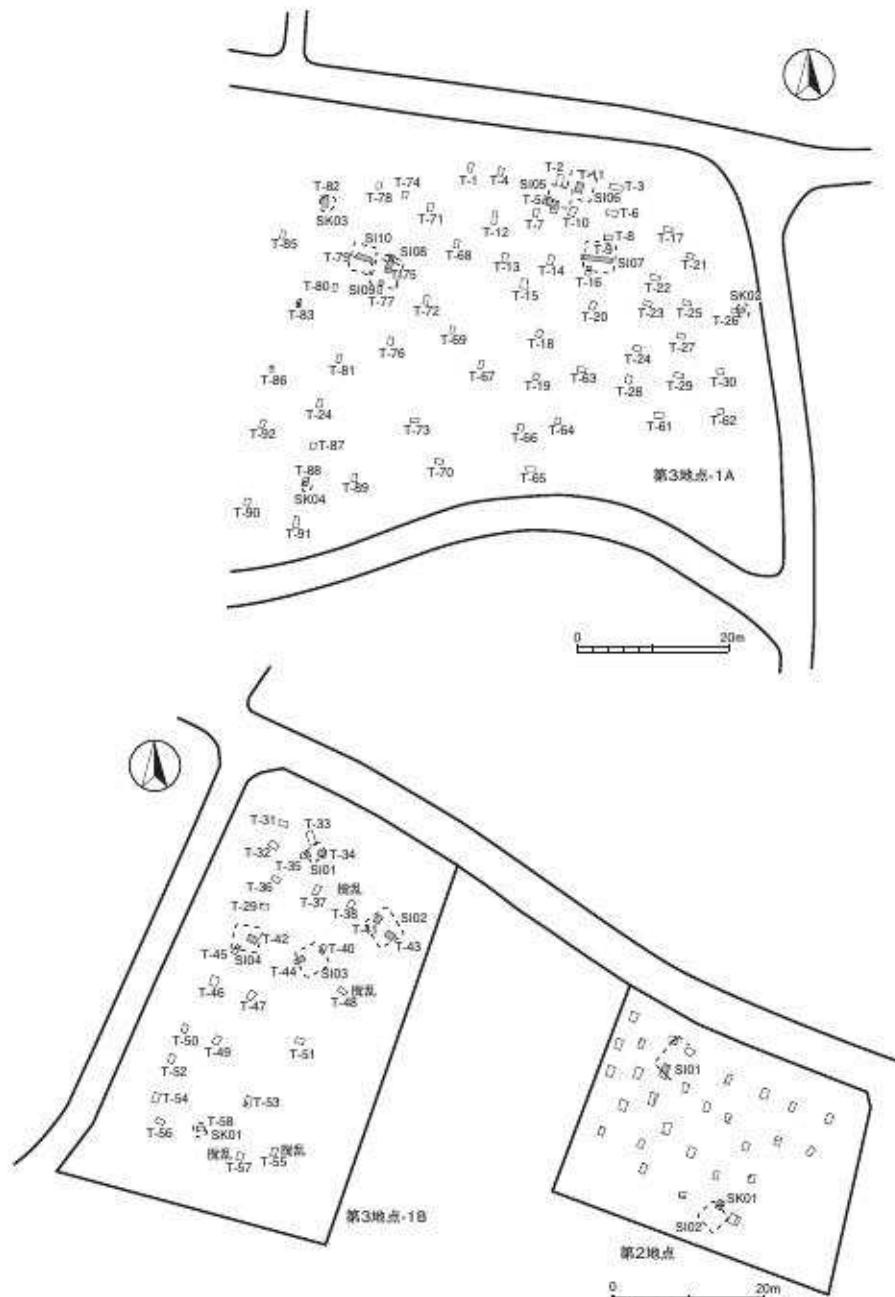
試掘8～16は調査区南東に位置する広福院付近の計画道路法面から出土した遺物で、土師器壺、甕、小型甕、手捏土器がある。一括出土していることから古墳時代後期の住居跡が存在した可能性が高い。他に剥片石器（7）、須恵器壺（1）、土師器内黒高台付壺（4）、土師器内黒壺（2・体部外面墨書）、縁部破片（3）、円面硯脚部破片（5）、古銭（6・寛永通宝）が出土している。墨書き土器、縁部破片、円面硯は本調査では検出されておらず、試掘調査でのみ検出されたものである。



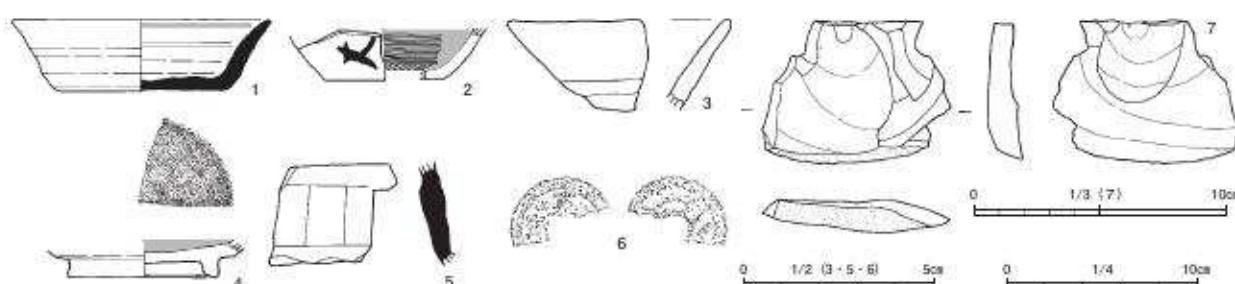
第4図 調査地点位置図 (1:10,000)



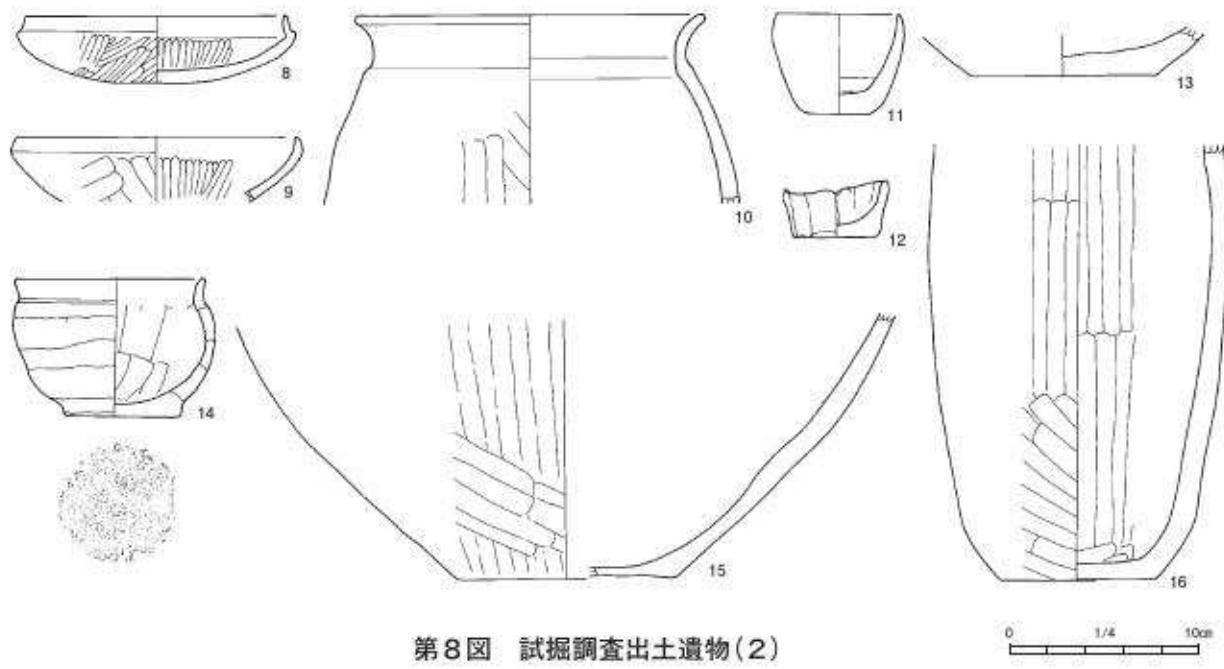
第5図 試掘トレンチ位置図(1)(1:3,000)



第6図 試掘トレンチ位置図(2)(1:1,000)



第7図 試掘調査出土遺物(1)

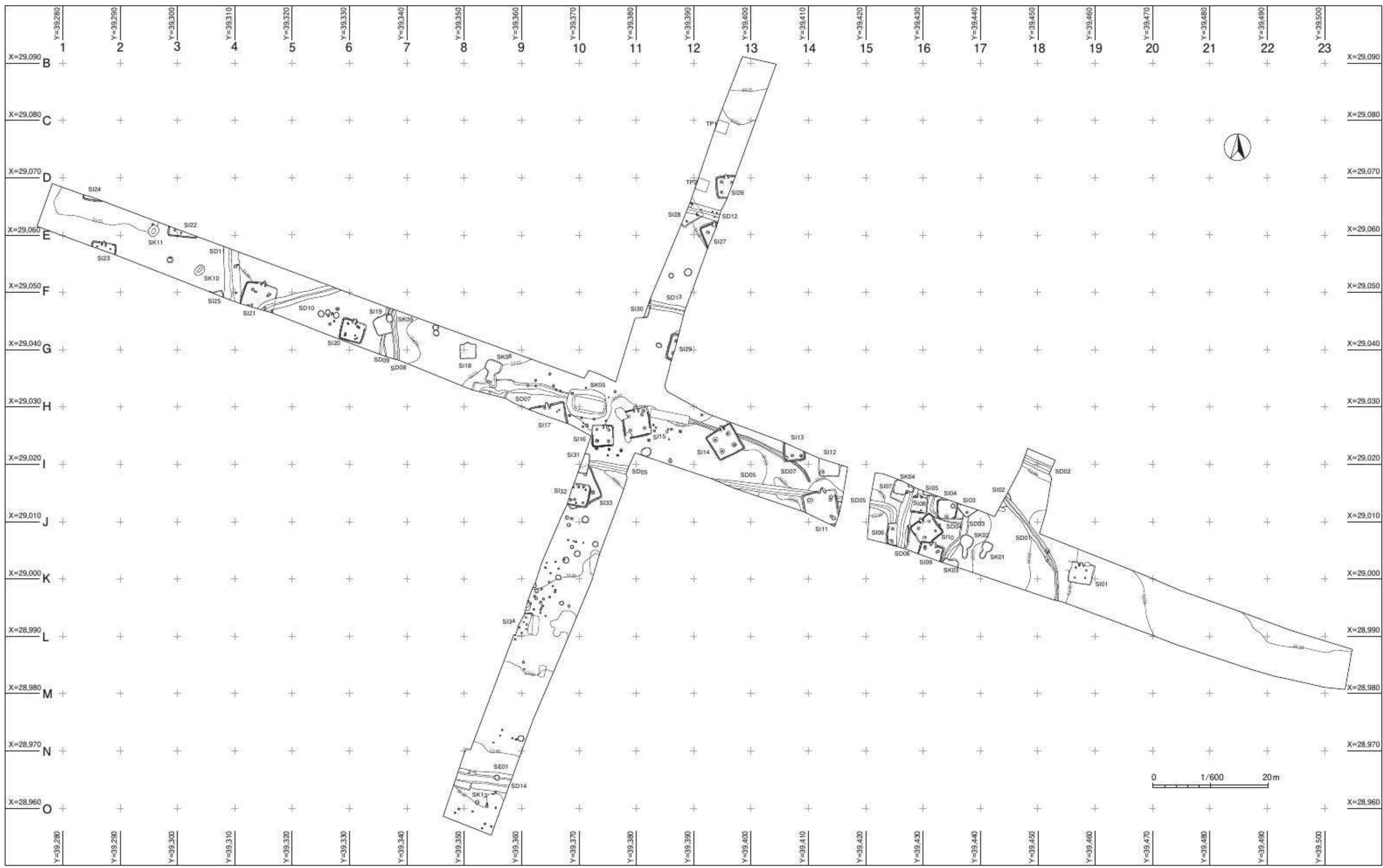


第8図 試掘調査出土遺物(2)

0 1/4 10cm

第1表 試掘調査出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
試1	須恵器	壺	(13.6)	3.8	(8.7)	ロクロ調整、底部手捺ちヘラケズリ。	灰	白色粒・雲母	口縁～底	T-182
試2	土師器	壺	—	—	(6.2)	内黒の環体部破片。体部外側に「大」または「丈」の墨書きあり。	にぶい 黄緑	白色粒・石英・雲母	体～底	第3地点-1 T-41
試3	練釉陶器	塊	—	—	—	練釉陶器口縁部破片。	灰白	白色粒微量	口縁	第3地点-1 T-44
試4	土師器	高台付壺	—	—	(7.8)	低い高台が付く内黒の高台付壺。内面密なミガキ。	にぶい 青	白色粒・黒色粒	底	第3地点-1 T-41
試5	須恵器	円面鏡	—	—	—	脚部窓部周囲の破片で、直線の沈線が引かれている。	灰白	石英・白色粒	脚部	第3地点-1 T-9
試6	古錢	寛永通宝	径 2.70cm、下半部を欠損する。							第3地点-1 T-28
試7	石器	剥片	長さ5.4cm、幅7.5cm、厚さ1.3cm、重さ64.78g。裏面のバルブを除去する二次加工が施される縫長剥片。表面下端に自然面がある。石材は安山岩。							表剥
試8	土師器	壺	13.8	3.5	—	口縁部が内削する須恵器壺身模倣壺。体部内外面ミガキ。	灰白	緻密・白色粒	口縁～底	表剥
試9	土師器	壺	14.8	—	—	口縁部が直立する半円形の壺。体部外側ヘラケズリ、内面ミガキ。	灰白	緻密・白色粒	口縁～体	表剥
試10	土師器	甕	18・2	—	—	甕部に最夫孫をもつ甕上半部。甕部外側ヘラケズリ、内面ナデ。	浅黄緑	白色粒	口縁～胴	表剥
試11	土師器	手捏土器	6.7	5.3	3.0	底部は平底で、体部は内溝して立ち上がる。外面指頭痕、内面輪積み痕。	にぶい 青	砂粒・白色粒	口縁～底	表剥
試12	土師器	手捏土器	5.4	2.5	4.4	底部は平底で体部は短く立つ。外面指頭痕	にぶい 黄緑	白色粒	完形	表剥
試13	土師器	甕	—	—	9.8	底部から大きく開く甕底部。甕部外側下端・底部ナデ。	にぶい 青	砂粒・白色粒	底	表剥
試14	土師器	小甕甌	9.9	7.3	6.0	甕部外側に輪積み痕を残す。内面ナデ。底部木葉痕。ミニチュア土器か。	明黄緑	砂粒・白色粒	ほぼ完形	表剥
試15	土師器	甕	—	—	12.0	内溝しながら大きく開く甕。甕部外側ヘラケズリ。内面ナデ。	橙	砂粒・白色粒・石英	肩～底	表剥
試16	土師器	甕	—	<23.0>	8.0	内溝しながら直立気味に立ち上がる長甕甌。甕部内外面ヘラケズリ。	橙	白色粒・石英	肩～底	表剥



第9図 全体測量図

第5章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

本調査では住居跡34軒、地下式坑5基、方形竪穴状遺構1基、土坑2基、陥し穴状土坑2基、井戸跡1基、溝跡14条が検出された。遺物は、土師器・須恵器・常滑焼を主体として、手捏土器、土製支脚、土製紡錘車、石製紡錘車、鉄製品（斧・釘・鎌・刀子等）、砥石、渥美焼、古瀬戸陶器、かわらけ、内耳鍋、仏像鋳型、布目瓦、五輪塔（水輪）、茶臼、鉄滓、炉壁、古銭等が出土している。

第2節 住居跡

SI01（第10・11・12図、第2表、遺構図版3、遺物図版1）

調査区東側のJ-18・K-18グリッドに位置し、カマド右側及び北西隅部が擾乱により消失している。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-9°-Eである。規模は東西方向4.20m、南北方向3.60m、残存壁高は最大10cmであったが、遺構の確認面で既に一部の床面が露出する状態であった。覆土は黒色土の単層で、床面は緩やかな凹凸が認められる。付帯施設はカマド1基、主柱穴4基が検出された。カマドは北壁中央に付設され、煙道部は壁を16cm程掘り込んでいる。袖部は灰褐色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は左袖寄りに位置し、明瞭ではないが、僅かに赤褐色の焼土が検出されている。主柱穴は基本的配置で検出され、規模はP-1が径32cm、深さ40cm、P-2が径32cm、深さ40cm、P-3が径30cm、深さ30cm、P-4が径32cm、深さ35cmである。遺物は床面直上に散在する状況で出土し、須恵器壺、土師器壺、甕、瓶と鉄製品（刀子）の5点を図示した。時期は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

第2表 SI01 出土遺物観察表

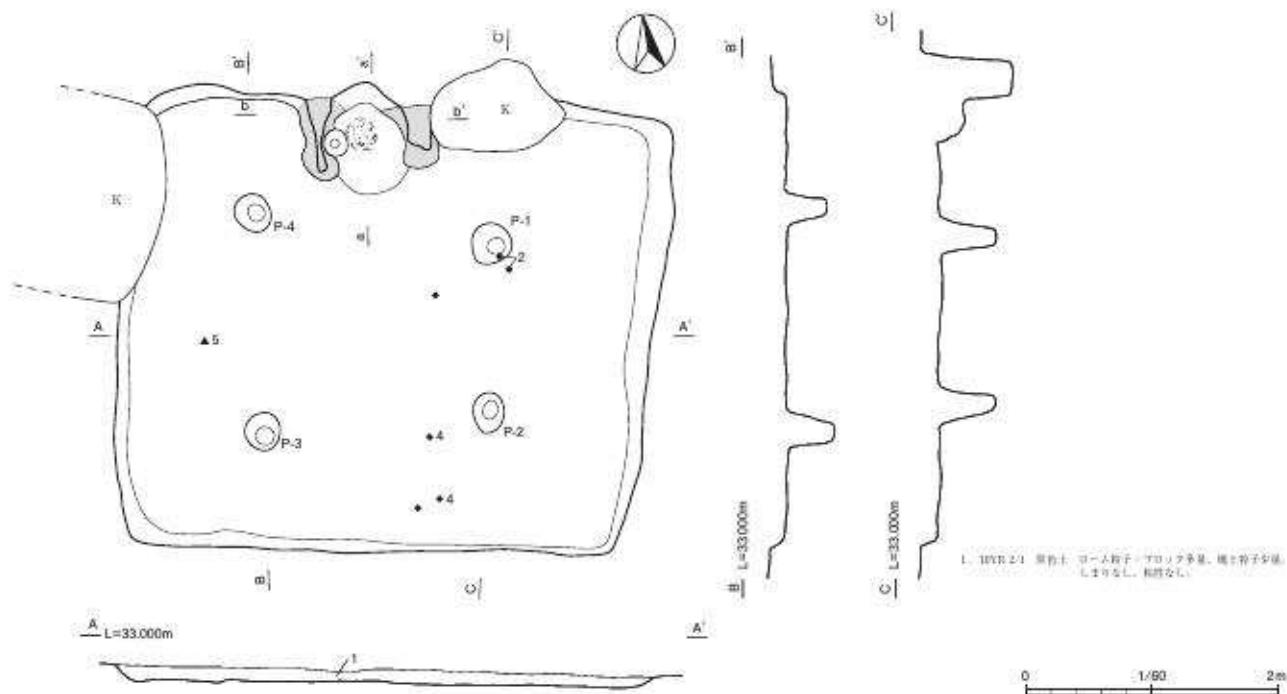
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	壺	13.2	—	—	内外面口クロ調整、体部下端ヘラケズリ。	灰	白色粒	口縁～体	覆土
2	土師器	壺	19.2	(6.6)	—	外表面ヘラケズリのちミガキ。内面ミガキ。	にぶい 赤褐	長石・石英・雲母	口縁～底	覆土
3	土師器	甕	—	—	14.8	器面荒れ・剥落著しい。外表面ミガキ。	にぶい 橙	白色粒・雲母	底	覆土
4	土師器	甕	26.0	<20.0>	—	二次焼成により器面荒れ著しい。外表面ミガキの常緑變。	黄橙	白色粒・雲母	口縁～胴	床面
5	鉄製品	刀子	残長7.4cm	刀身幅0.9cm	茎幅0.4cm	刀身厚さ0.2cm、茎厚さ0.3cm、重さ5.22g、両先端部を欠損する。				床面

SI02（第13・14図、第3表、遺構図版3、遺物図版1）

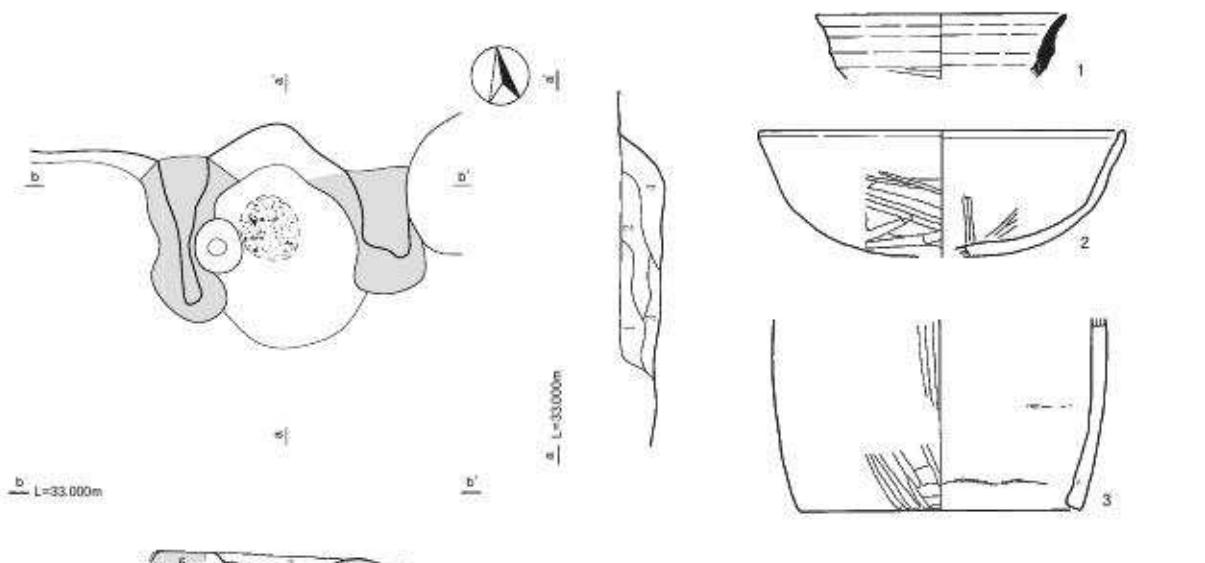
調査区東側のI-17グリッドに位置する。住居跡の南東隅部のみ検出されたもので、遺構西側の大部分が調査区外になり、検出部の中央もSD01に切られているため、詳細は不明である。覆土は暗褐色土の単層で、確認面からの残存壁高は20cmである。遺物は覆土から少量が出土し、須恵器高台付壺、甕口縁部と砥石の3点を図示した。時期は明瞭ではないが、7世紀末～8世紀前半と考えられる。

第3表 SI02 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	甕	(16.5)	—	—	内外面口クロ調整の口縁部破片。	灰	白色粒・黒色粒	口縁～頸	覆土
2	須恵器	高台付壺	—	—	9.3	貼り付け高台。内外面口クロ調整。	灰	石英・白色粒	底	覆土
3	石製品	砥石	長さ6.8cm	幅5.3cm	厚さ5.7cm	重さ3235g、上下面を使用する砂岩製の砥石。				覆土

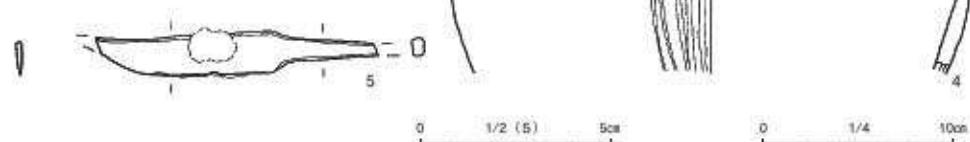


第10図 SI01

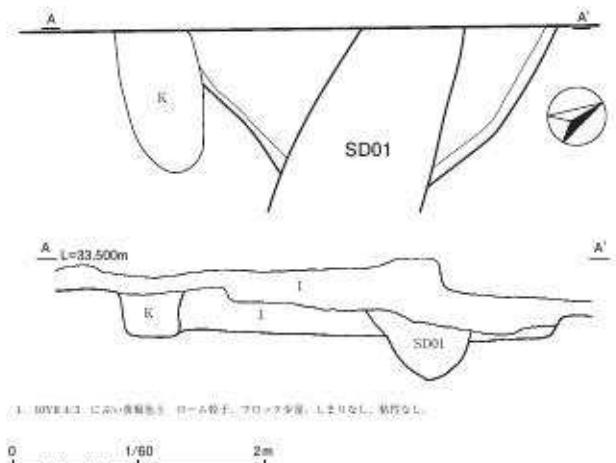


1. 10YR 2/1 黑 砂 土 a1~2mmローム粒子多量、a1-2mm地に粒子少量、しまりなし、粘性なし。
2. 10YR 2/2 黑 砂 土 a1~2mmローム粒子多量、a1-5mm地に粒子多量、しまりあり、粘性なし。
3. 10YR 2/2 明 黑 砂 土 小1~2mmローム粒子少量、a1-5mm地に粒子少量、しまりあり、粘性なし。
4. 10YR 4/4 黑 砂 土 a1~2mm地に粒子少量、a1-2mm地に粒子多量、しまりなし、粘性なし。
5. 10YR 4/6 黑 砂 土 a1~2mm地に粒子少量、a1-2mm地に粒子多量、しまりあり、粘性あり。
6. 10YR 4/2 黑 褐 砂 土 粘性無量、ローム粒子少量、しまりなし、粘性なし。
7. 10YR 4/3 C(As) 黑 褐 土 粘性無量、ローム粒子中量、しまりなし、粘性なし。
8. 10YR 4/1 黑 褐 土 a10~20mmロームヒッコリ多量、粗骨粒少量、しまりなし、粘性なし。

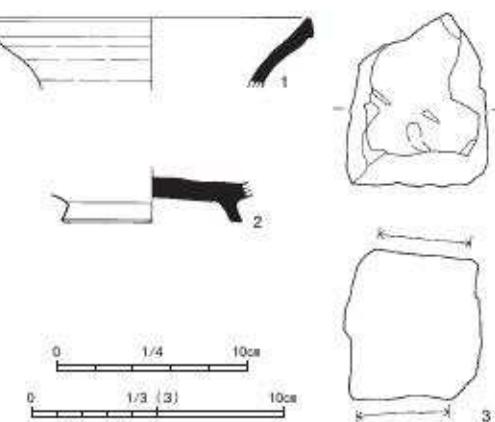
第11図 SI01 カマド



第12図 SI01 出土遺物



第13図 SI02



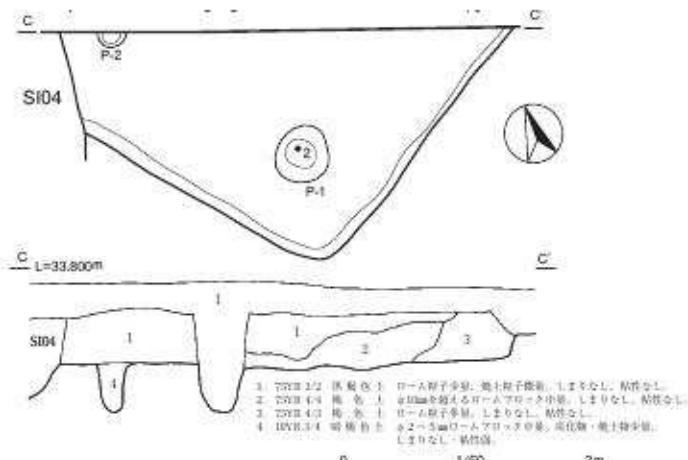
第14図 SI02 出土遺物

SI03（第15・16図、第4表、遺構図版3、遺物図版2）

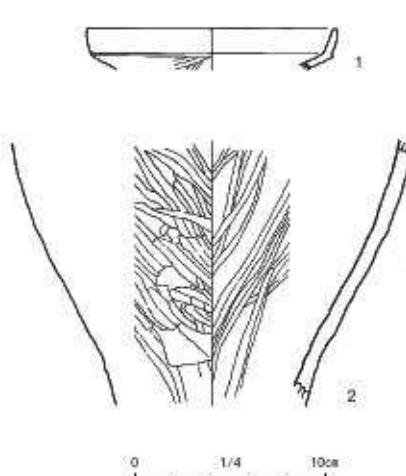
調査区東側のJ-16グリッドに位置する。住居跡の南隅部が検出されたもので、遺構北側の大部分が調査区外になり、検出部西端をSI04に切られている。覆土は3層に分層される自然堆積で、確認面からの残存壁高は30cmである。付帯施設は南隅部と検出部西端から主柱穴の可能性のあるピットが検出されている。P-1は径45cm、深さ35cm、P-2は径25cm、深さ40cmである。遺物は極少量が覆土から出土し、土師器環口縁部破片、瓶底部破片を図示した。時期は明瞭ではないが、6世紀後半と思われる。

第4表 SI03 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	環	(13.0)	—	—	須恵器環身模擬环。体部外面ヘラケズリ。	明赤褐	白色粒・雲母	口縁	覆土
2	土師器	瓶	—	—	—	内外面艶なミガキ。底部内面剥落。	暗褐	白色粒・雲母	肩～底	床面



第15図 SI03

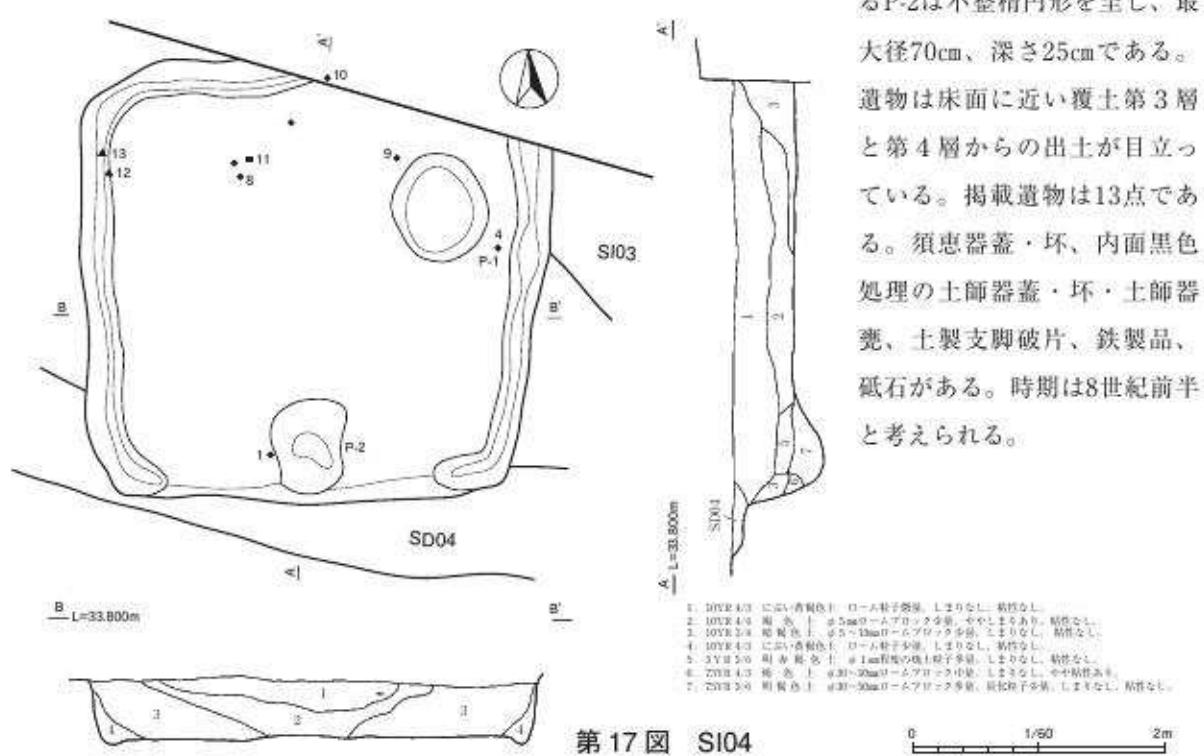


第16図 SI03 出土遺物

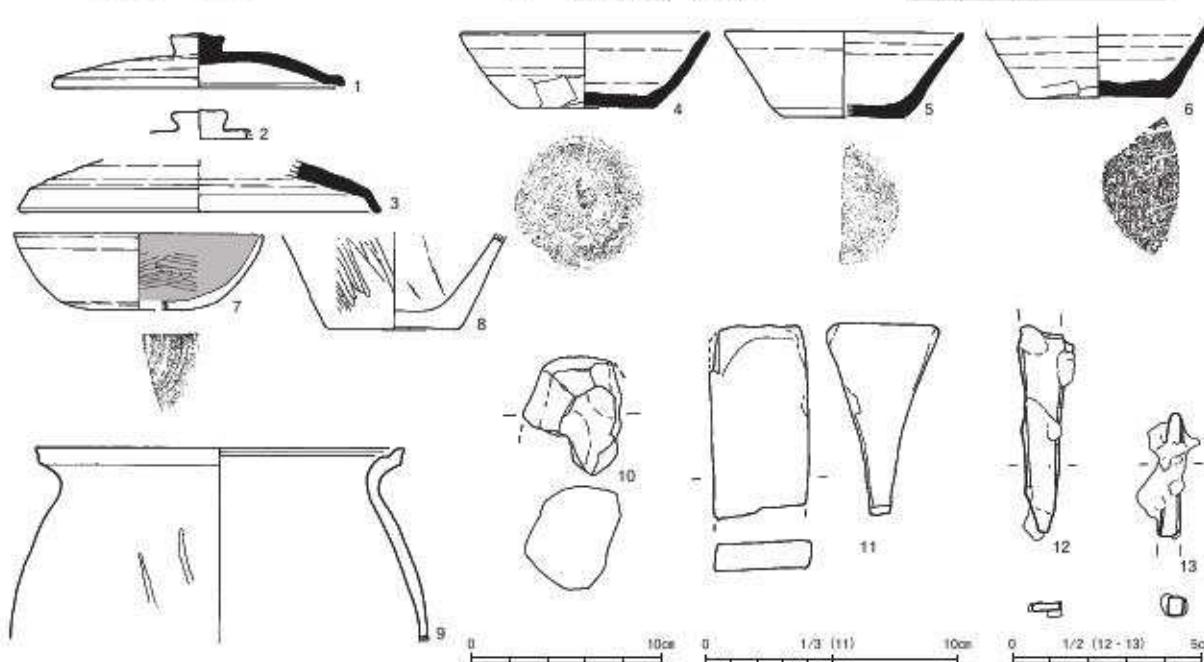
SI04 (第17・18図、第5表、遺構図版3、遺物図版2)

調査区東側のI-16グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-S方向と思われる。規模は東西方向3.75m、南北方向3.50m以上、残存壁高は50cmで、北側の壁から北西隅部は調査区外になる。覆土は7層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸が認められ、やや軟弱であった。付帯施設は壁溝、貯蔵穴状のピット (P-1) と出入り口に伴う可能性のあるピット1基 (P-2) が検出され、北側の調査区外にはカマドが付設されていたと考えられる。壁溝は南壁部分を除いて確認され、最大幅20cm、深さ10cmである。貯蔵穴状のピット (P-1) は楕円形を呈し、最大径85cm、深さ20cm、出入り口ピットと思われ

るP-2は不整楕円形を呈し、最大径70cm、深さ25cmである。遺物は床面に近い覆土第3層と第4層からの出土が目立っている。掲載遺物は13点である。須恵器蓋・壺、内面黒色処理の土師器蓋・壺・土師器甕、土製支脚破片、鉄製品、砥石がある。時期は8世紀前半と考えられる。



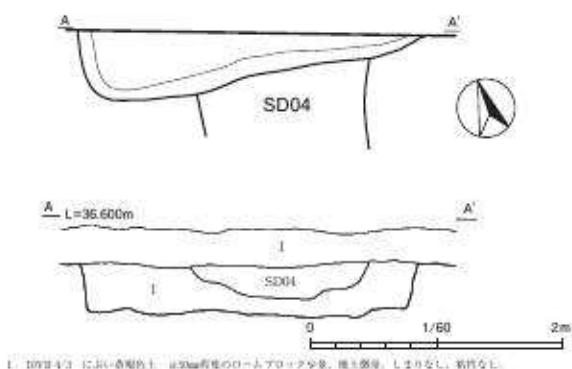
第17図 SI04



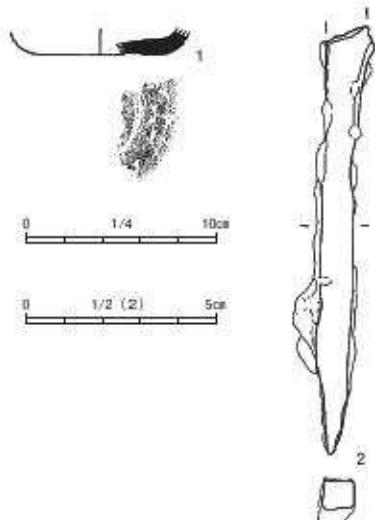
第18図 SI04 出土遺物

第5表 SI04 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	15.3	2.9	—	擬宝珠状の摘み。ロクロ調整、天井部は回転ヘラケズリ。	灰	石英・白色粒多量	摘み～口縁	床面
2	土師器	蓋	—	—	—	擬宝珠状の摘み。内面黒色処理。	褐	白色粒	摘み	覆土
3	須恵器	蓋	(19.0)	—	—	ロクロ調整、天井部は回転ヘラケズリ。	灰	長石・石英・白色粒	口縁	覆土
4	須恵器	坏	13.0	4.0	7.2	外面ロクロ調整、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	灰	白色粒	完形	床面
5	須恵器	坏	(12.4)	(4.5)	(6.4)	外面ロクロ調整、体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	灰	長石・石英	口縁～底	覆土
6	須恵器	坏	—	—	(7.6)	外面ロクロ調整、体部下端手持ちヘラケズリ、底部ヘラケズリ調整。	灰	長石・石英	体～底	覆土
7	土師器	坏	(13.0)	(4.0)	(5.5)	内面ミガキ、黒色処理、底部回転ヘラ切り。	にぶい 橙	白色粒少量	口縁～底	覆土
8	土師器	壳	—	—	(6.8)	外面裏ミガキの底部破片。	にぶい 赤褐色	石英・白色粒	底	床面
9	土師器	壳	(19.3)	—	—	外面裏ミガキの常輪型。	にぶい 赤褐色	石英・白色粒・雲母	口縁～胴	床面
10	土製品	支脚	径5.3cm、土製支脚の上端部破片。被熱による割離著しい。	にぶい 赤褐色	石英・白色粒多量	上口縁	床面			
11	石製品	砥石	残長7.5cm、幅3.7cm、厚さ4.4cm、重さ110.7g、凝灰岩製の砥石。全面使用しており、廻断面は複型を呈している。							
12	鉄製品	釘か?	残長5.6cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ4.67g、上部を欠損する。							
13	鉄製品	釘か?	残長3.3cm、幅0.4cm、厚さ0.5cm、重さ2.56g、上端部を欠損、12の上部の可能性がある。							



第19図 SI05



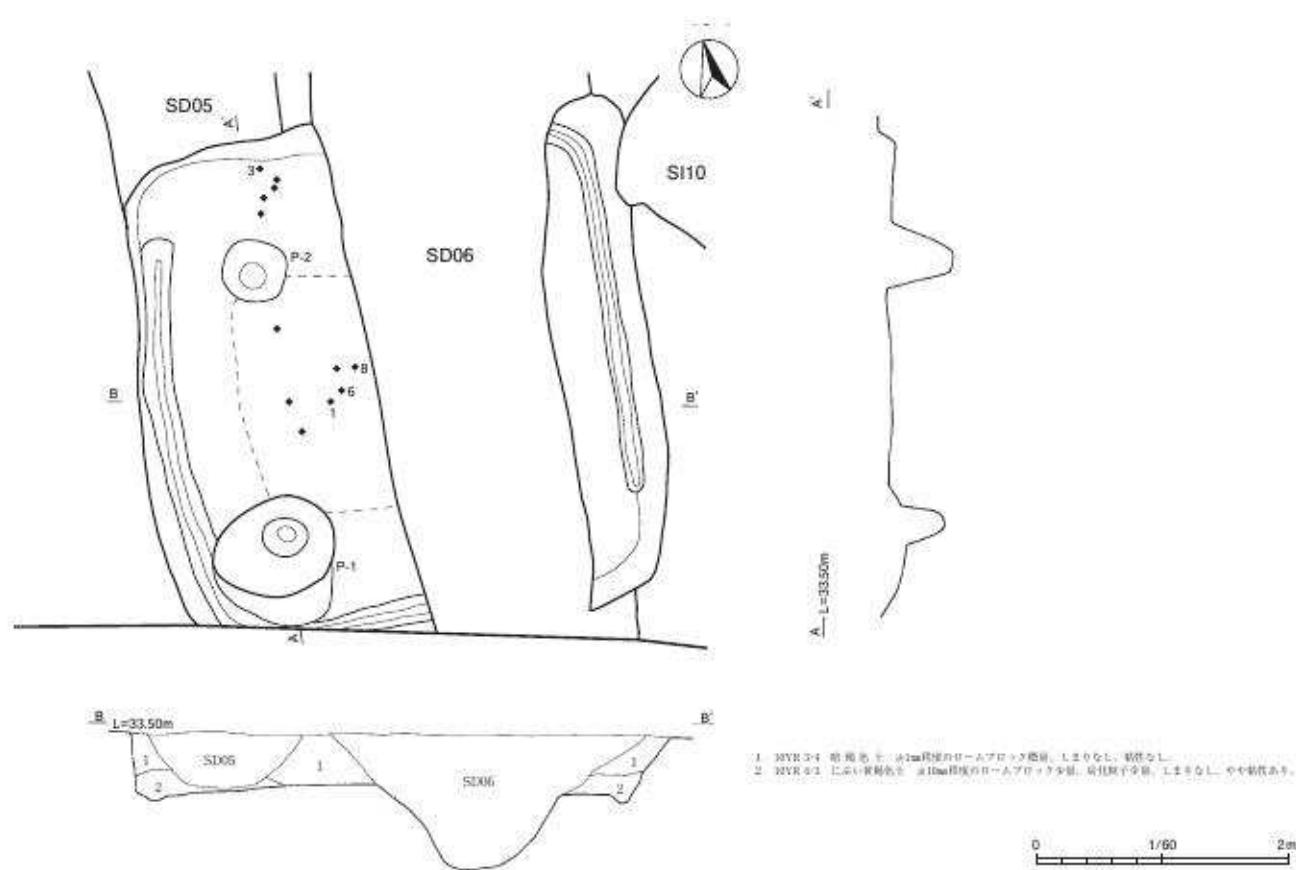
第20図 SI05 出土遺物

SI05 (第19・20図、第6表、遺構図版3、遺物図版2)

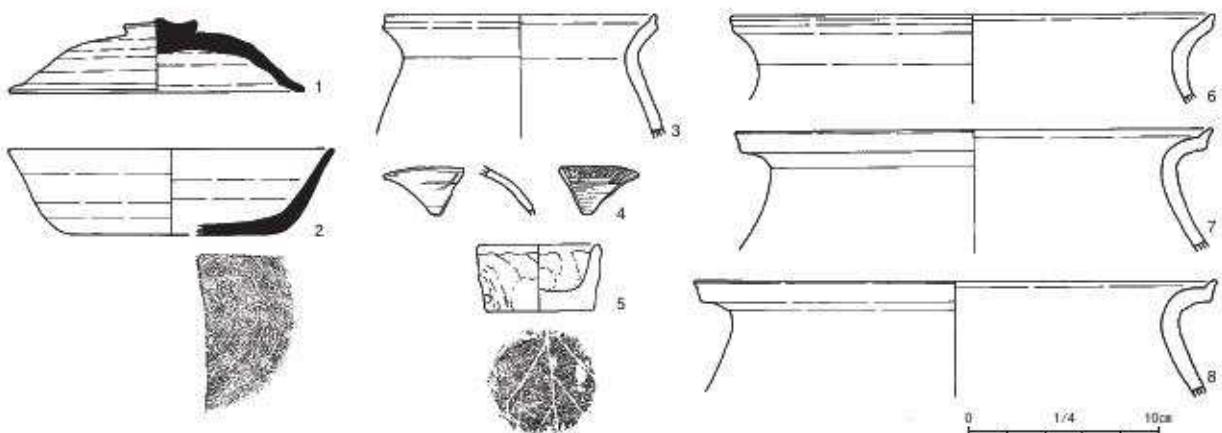
調査区東側のL-16グリッドに位置する。住居跡の南西隅部のみ検出されたもので、遺構北側の大部分が調査区外になるため、詳細は不明である。覆土は黄褐色土の単層で、覆土中にSD04が掘り込まれている。確認面からの残存壁高は30cmである。遺物は極少量が覆土から出土し、須恵器坏底部片と鉄製品（釘）を図示した。時期は明瞭ではないが、8世紀前半と思われる。

第6表 SI05 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	坏	—	—	(6.4)	丸底の坏底部破片。底部回転ヘラ切り。	灰	砂粒多	底	覆土
2	鉄製品	釘	残長 11.3cm、幅 0.8cm、厚さ 0.7cm、重さ 37.63 g、上部を欠損する。							



第21図 SI06



第22図 SI06 出土遺物

SI06 (第21・22図、第7表、遺構図版4、遺物図版2)

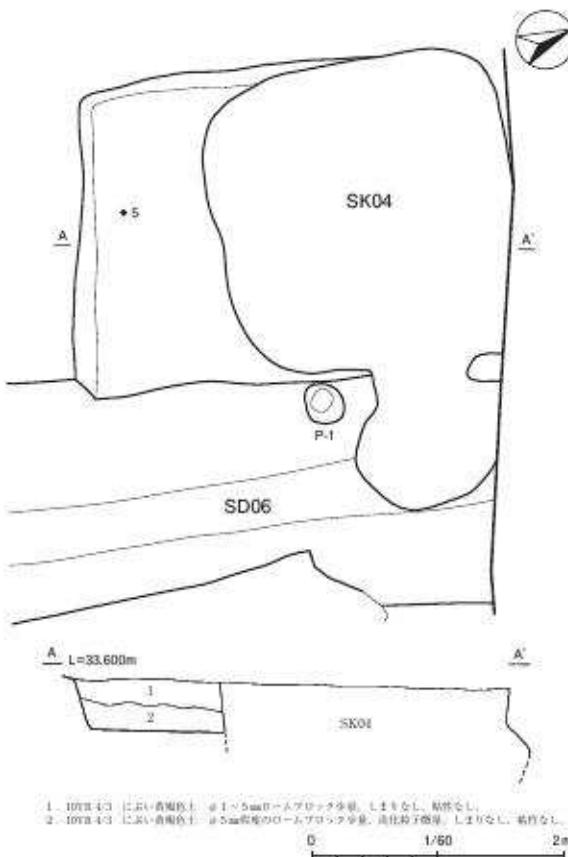
調査区東側のJ-15グリッドに位置する。SD05とSD06に住居の大部分を切られ、南壁の一部が調査区外になるが、ほぼ全容が把握されている。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-S方向と思われる。規模は東西方向4.10m、南北方向4.00m以上、残存壁高は40cmで、覆土は2層に分層される自然堆積である。残存する床面は平坦で硬質であった。付帯施設は壁溝、西側の主柱穴2基が検出され、カマドはSD06に切られる北側壁に付設されていたと考えられる。壁溝は北壁部分、南東隅部分を除いて確認され、幅10cm前後、深さ8cmである。主柱穴はP-1が楕円形を呈し、最大径96cm、深さ40cm、P-2は円形を呈し、最大径50cm、深さ45cmである。遺物は床面直上に土器片が散在する状況で出土している。掲載遺物は8点で、須恵器蓋・壺、土師器甕と畿内産土師器と思われる蓋破片、手捏土器がある。時期は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

第7表 SI06 出土遺物観察表

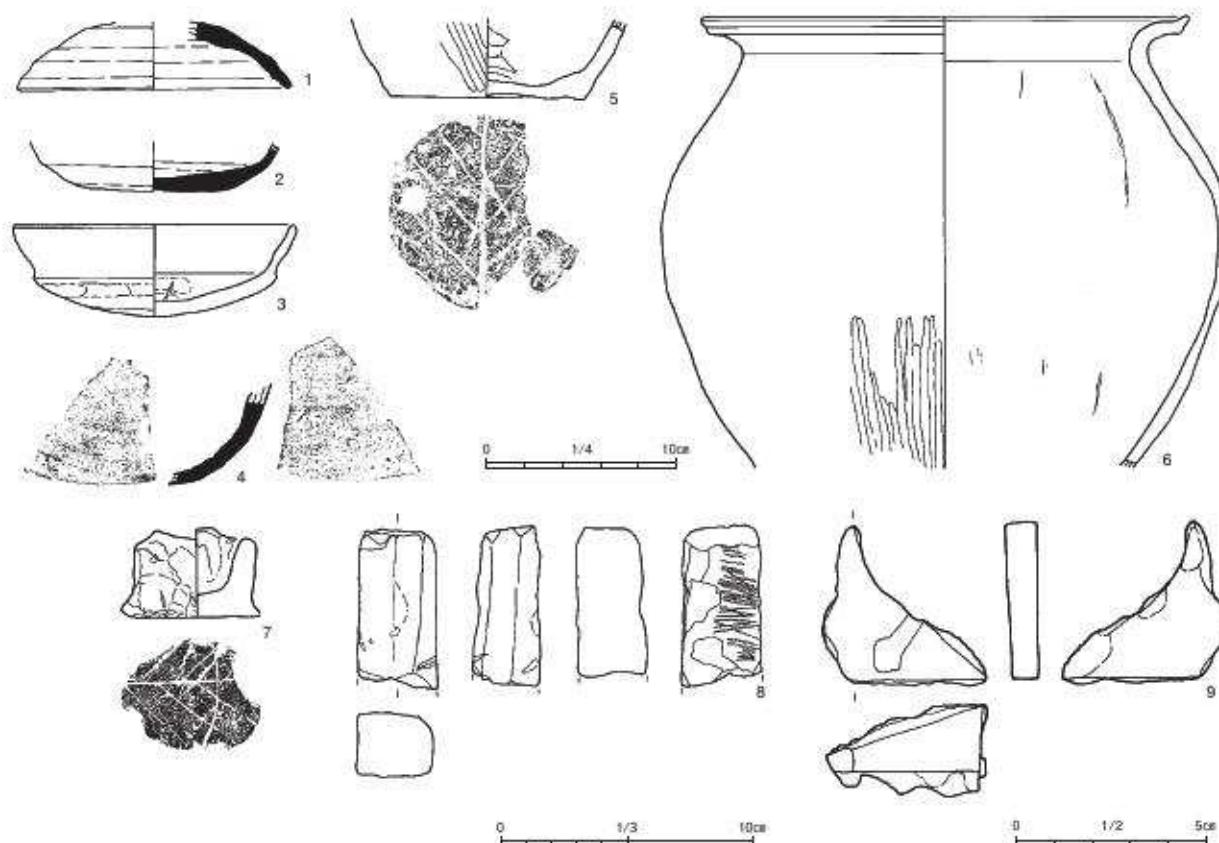
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	(15.4)	3.8	—	擬宝珠状の摘み。クロ調整。天井部は回転ヘラケスリ。	黄灰	白色絵漆絞	完形	床面
2	須恵器	坏	(17.0)	(4.5)	(11.5)	内外面クロ調整。底部回転ヘラ切り。	灰	青母・白色絵・砂粒	口縁-底	覆土
3	土師器	甕	(14.2)	—	—	常緑型の小型甕口縁部破片。口縁部内外面横ナデ。	灰褐	白色絵・青母	口縁-頸	床面
4	土師器	蓋	—	—	—	鏡内弄土師器の蓋と思われる小破片。内外面暗文。	橙	高入物ほとんどなし	天井	覆土
5	土製品	手捏土器	(6.2)	3.5	5.6	底部は平底で体部は短く立つ。内外面指頭痕。底部本漆瓶。	橙	白色絵	口縁-底	覆土
6	土師器	甕	(25.4)	—	—	常緑型甕の口縁部破片。口縁部内外面横ナデ。	橙	青母・漆粒	口縁-頸	床面
7	土師器	甕	(25.0)	—	—	常緑型甕の口縁部破片。口縁部内外面横ナデ。	にぶい 黄緑	青母・漆	口縁-頸	覆土
8	土師器	甕	(27.6)	—	—	常緑型甕の口縁部破片。口縁部内外面横ナデ。	明黄緑	白色絵・青母	口縁-頸	床面

SI07（第23・24図、第8表、遺構図版4、遺物図版2）

調査区東側のI-15グリッドに位置する。SD06と地下式坑のSK04に遺構の大部分を切られているため、詳細は不明である。平面形は方形と思われ、規模は東西方向2.60m以上、南北方向2.80m以上、残存壁高は40cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。残存する床面は平坦であった。住居の推定範囲内からはピット1基のみ検出されている。遺物は覆土中及び、SK04の崩落部分から出土し、須恵器蓋・坏・提瓶、土師器坏・甕と手捏土器、砥石、把手と思われる鉄製品の9点を図示した。時期は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。



第23図 SI07



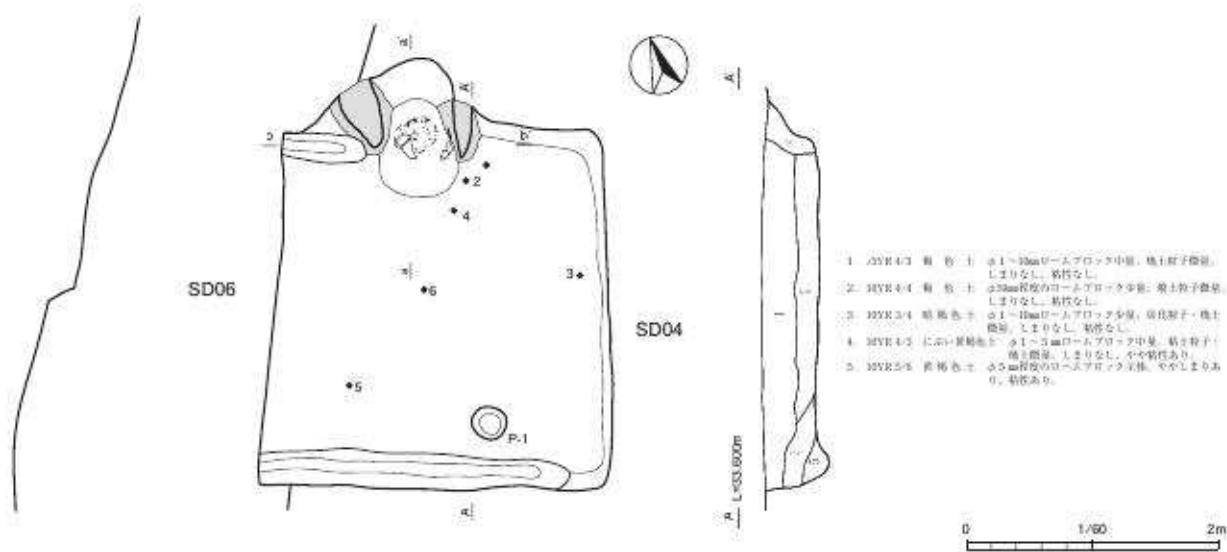
第24図 SI07出土遺物

第8表 SI07出土遺物観察表

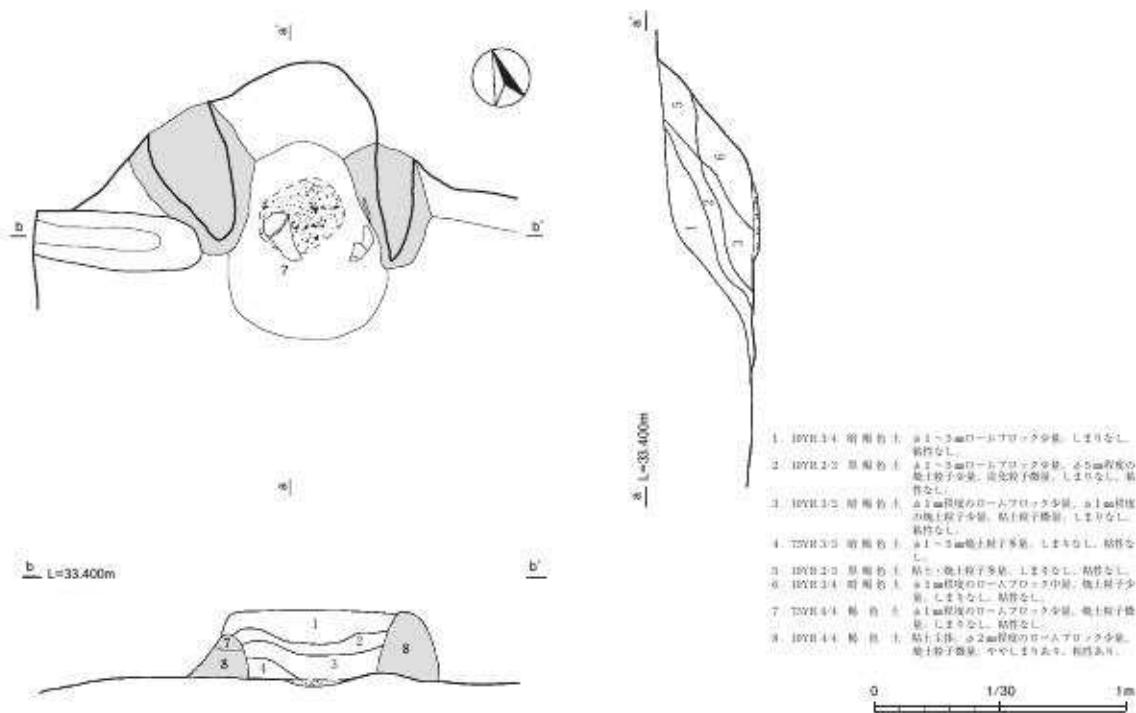
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	(14.4)	—	—	天井部は回転ヘラケズリ、端部内面には退化した返しがある。	灰	白色粒・小難	口縁部	覆土
2	須恵器	壺	—	—	7.8	丸底氣味の底部。底部回転ヘラ切り。	黒	雲母・白色粒	底	床面
3	土師器	壺	14.6	4.8	—	須恵器壺臺模倣。口縁部横ナギ、体部外面ヘラケズリ。	にぶい 黄橙	雲母・白色粒	完形	覆土
4	須恵器	提瓶	—	—	—	胴部破片。外外面カキ目。	暗青灰	白色粒・黒色粒	胴	覆土
5	土師器	壺	—	—	—	外表面ミガキ、内面ナデ、底部木葉痕。	赤褐	雲母多量・砂粒	底	床面
6	土師器	壺	25.6	<24.0>	—	常緑型壺。胴部外面下半縫ミガキ、内面ナデ。	橙	雲母・白色粒	口縁-胴	覆土
7	土製品	手捏土器	5.4	4.7	6.0	底部は平底で外に張り出す。外外面指痕痕、底 部木葉痕。	明黄褐	雲母・白色粒	完形	覆土
8	石製品	砾石	残長6.3cm、幅3.1cm、厚さ2.6cm、重さ83.96g、粘板岩製の砾石。表裏面と側面を使用し、裏面に顯著な使用痕がある。							覆土
9	鉄製品	把手?	長さ4.2cm、幅0.5-1.6cm、厚さ0.7cm、重さ54.08g、鋼等の把手の可能性がある鉄製品。							覆土

SI08（第25・26・27図、第9表、遺構図版4、遺物図版3）

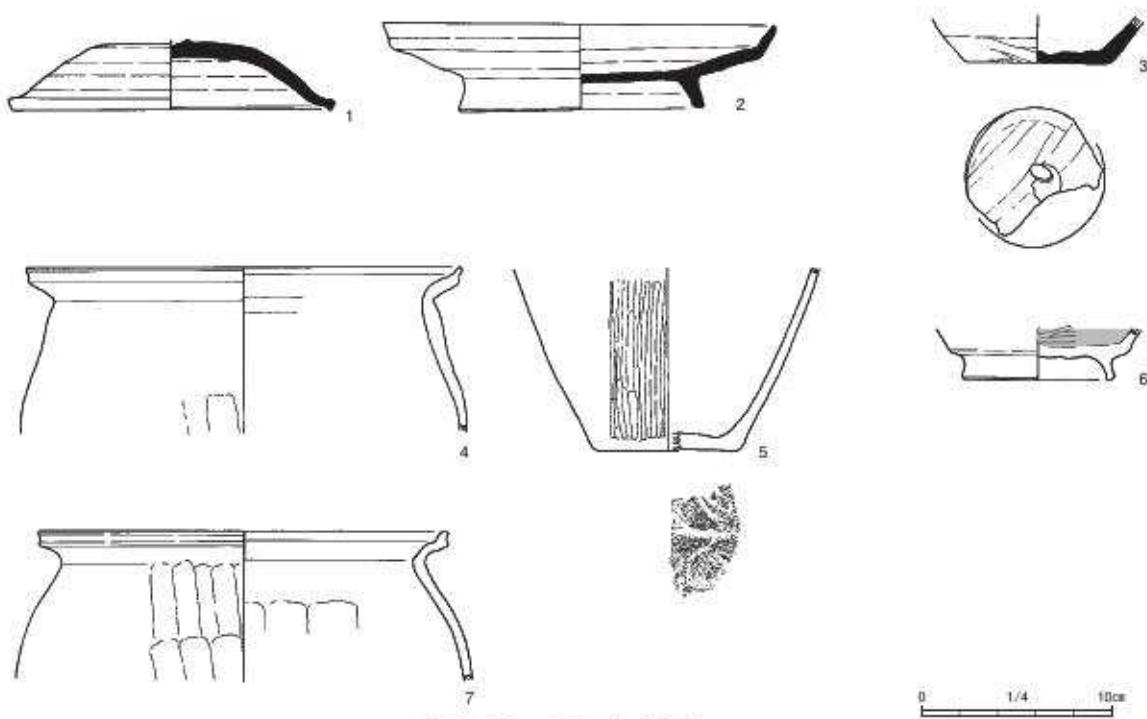
調査区東側のI-15・I-16グリッドに位置し、西側壁部分がSD06に切られて消失している。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-9°-Eである。規模は東西方向2.60m以上、南北方向2.90m、残存壁高は45cm。覆土は3層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸が認められ、硬質面は検出されなかった。付帯施設はカマド1基と壁溝が検出されている。カマドは北壁中央に付設され、煙道部は壁を約40cm掘り込んでいる。袖部は灰褐色粘土を主体として構築されていた。壁溝は南壁と北壁のカマド左側で確認され、幅10cm前後、深さ6cmである。遺物はカマド付近を主体として出土している。掲載遺物は7点で、須恵器蓋・壺・盤、内面黑色処理の土師器高台付壺、土師器壺がある。時期は8世紀後半と考えられる。



第25図 SI08



第26図 SI08 カマド



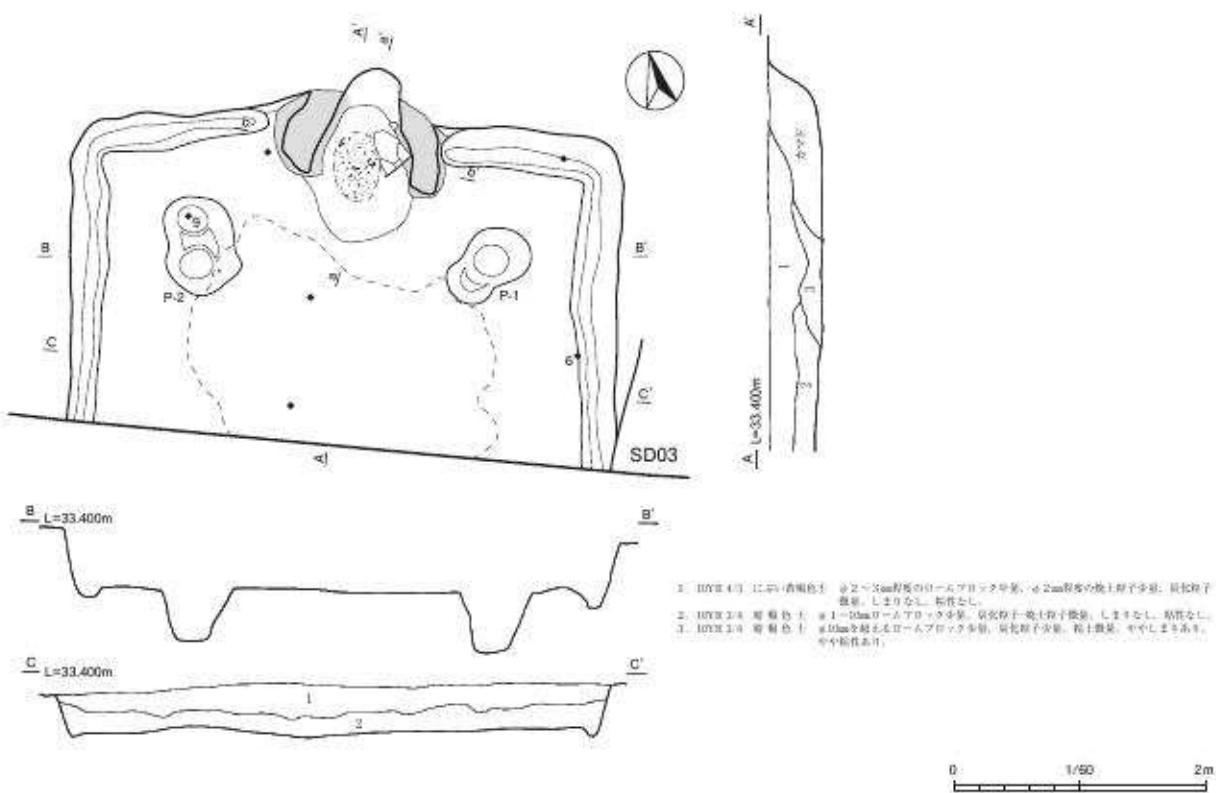
第27図 SI08出土遺物

第9表 SI08出土遺物観察表

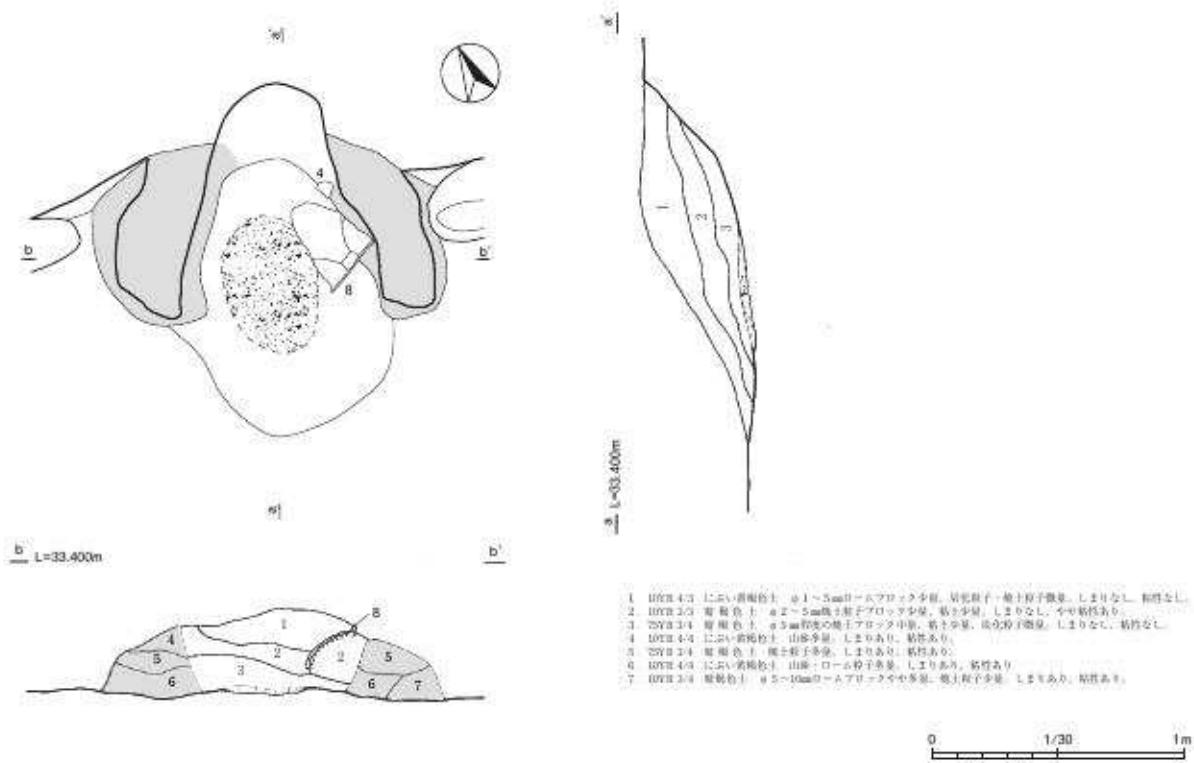
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	16.8	<3.7>	—	ロクロ調整、天井部は回転ヘラケズリ、摘み欠損。	黄灰	石英・長石・小礫	天井～口縁	覆土
2	須恵器	盤	20.6	4.8	12.8	貼り付け高台、内外面ロクロ溝整。	暗青灰	白色粒・小礫	口縁～底	カマド
3	須恵器	壺	—	—	7.4	ロクロ調整、体部下端手持ちヘラケズリ、底部ヘラ切り後ヘラケズリ。	灰	石英・長石	底	床面
4	土師器	壺	(23.0)	—	—	常滑型壺の口縁部破片。口縁部横ナギ、胴部外面裏ヘラケズリ。	橙	雲母・白色粒	口縁	床面
5	土師器	壺	—	—	(7.0)	外面縦ヘラミガキ、内面ナギ、底部木素痕。	灰黃褐色	石英・長石	胴部～底	床面
6	土師器	高台付壺	—	—	7.6	外面ナギ、内面ミガキ、黒色処理。	にぶい褐色	雲母・白色粒	底～一体	床面
7	土師器	壺	21.4	—	—	常滑型壺。胴部外面縦ヘラケズリ、内面ナギ。	褐	石英・長石・小礫	口縁～胴	カマド

SI09 (第28・29・30図、第10表、遺構図版4、遺物図版3)

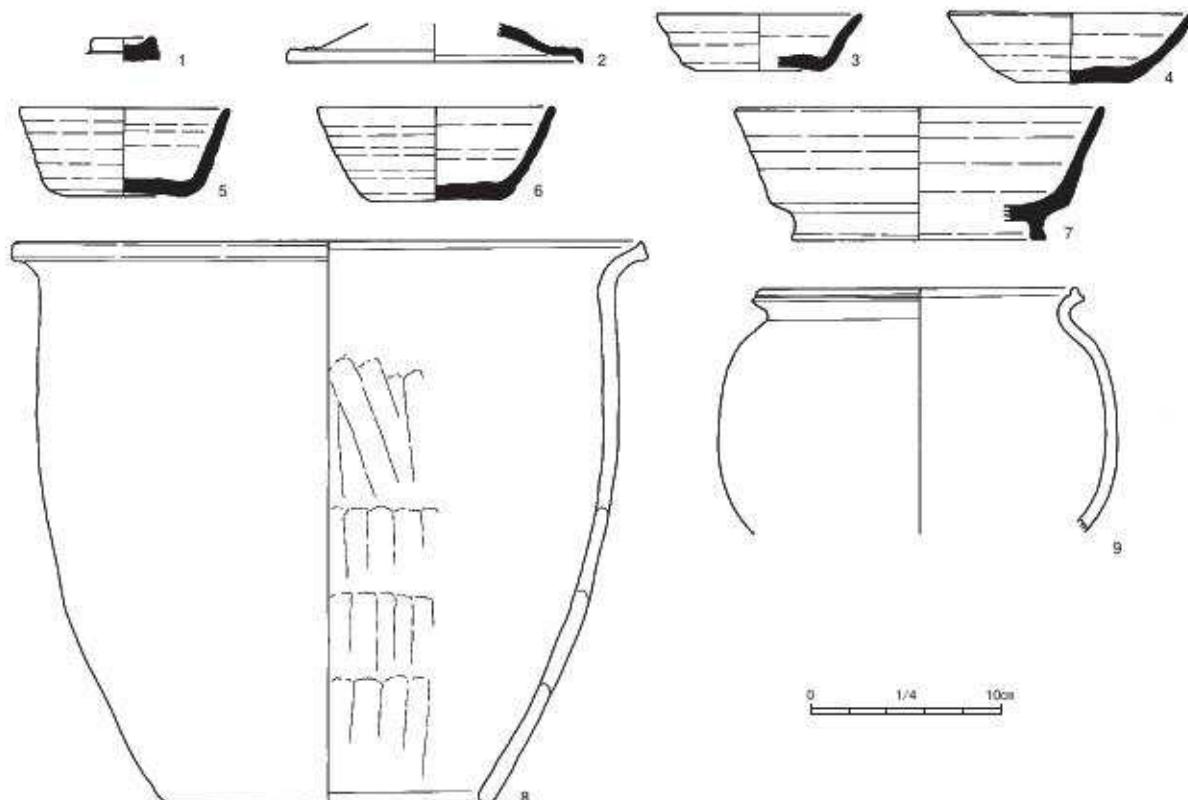
調査区東側のJ-15・J-16グリッドに位置し、遺構の南側が調査区外になり、北西隅部分でSI10を切っている。平面形は方形基調で、主軸方向はN-18°-Eである。規模は東西方向4.30m、南北方向2.80m以上、残存壁高は40cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。床面は平坦で、中央部から硬化面が検出されている。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴2基が検出されている。カマドは北壁中央に付設され、煙道部は壁を40cm程掘り込んでいる。火床部からは赤褐色の明瞭な焼土が検出されている。袖部は灰褐色の粘土を主体として構築されていた。壁溝はカマド部分を除いて確認され、最大幅14cm、深さ8~15cmである。主柱穴はP-1が径48cm、深さ35cm、P-2が径56cm、深さ40cmで、P-1、P-2ともに建て替えによる柱穴の重複が認められた。掲載遺物は9点で、須恵器蓋・壺・高台付壺、土師器壺とカマドから出土した土師器壺がある。時期は8世紀中葉と考えられる。



第28図 SI09



第29図 SI09 カマド



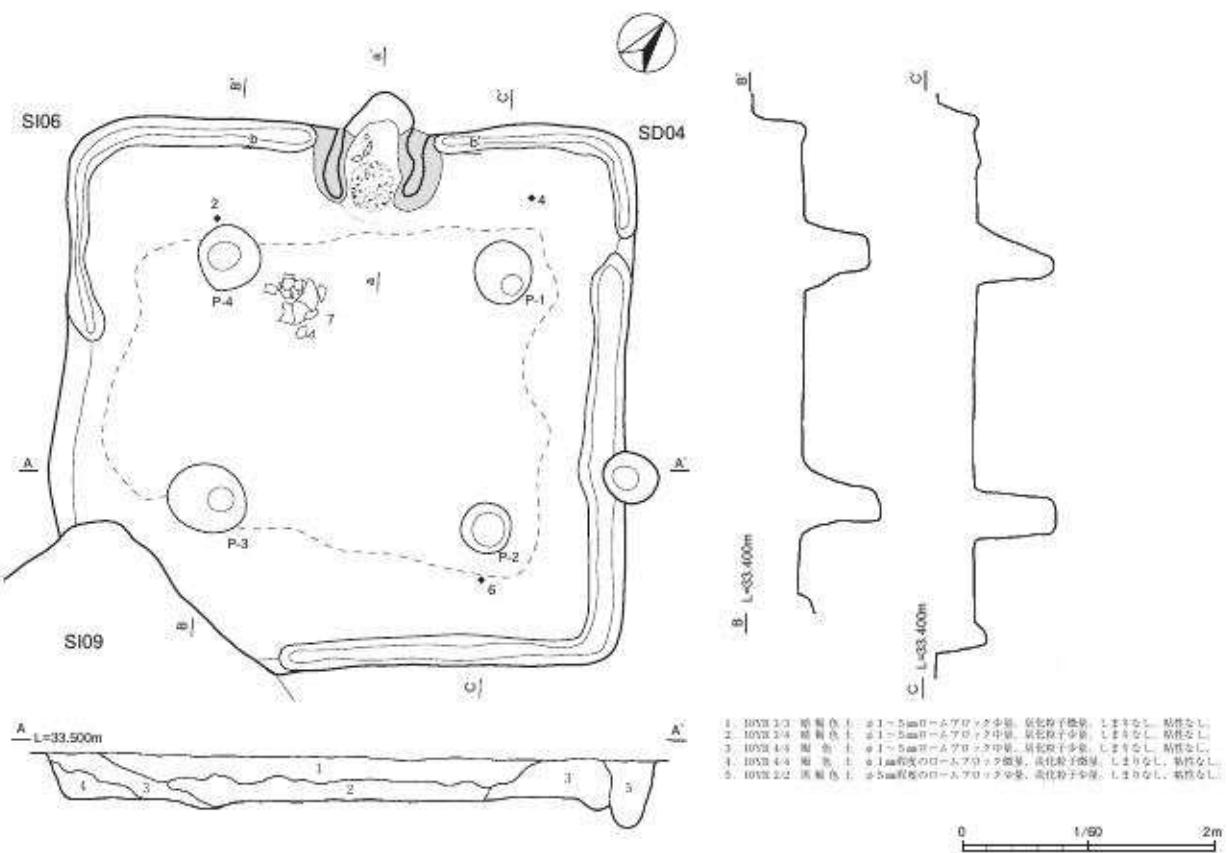
第30図 SI09出土遺物

第10表 SI09出土遺物観察表

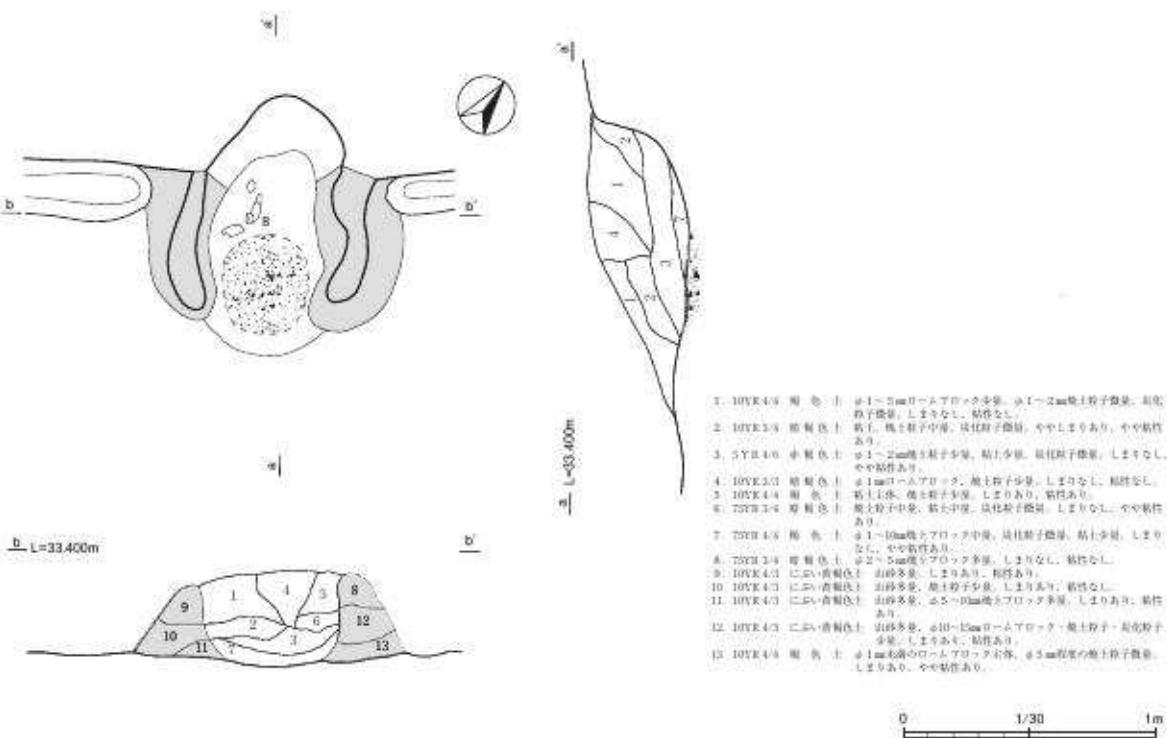
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	—	—	—	扁平な擬宝珠状の摘み。	にぶい 黄澄	板密・長石	摘み～口 縁	覆土
2	須恵器	蓋	(15.6)	—	—	口クロ調整、外面自然釉付着。	にぶい 黄澄	板密・長石	口縁	覆土
3	須恵器	坏	(10.8)	3.0	(7.0)	内外面口クロ調整、底部回転ヘラ切り。	灰	砂粒・長石	口縁～底	覆土
4	須恵器	坏	12.8	3.6	5.7	内外面口クロ調整、底部回転ヘラ切り。	灰	石英・長石・角閃石	口縁～底	カマド
5	須恵器	坏	11.0	4.6	5.2	内外面口クロ調整、底部回転ヘラ切り。	灰黄	砂粒・長石	口縁～底	覆土
6	須恵器	坏	12.3	4.9	7.0	内外面口クロ調整、底部回転ヘラ切り後ナギ。	灰	石英・砂粒・骨針	口縁～底	床面
7	須恵器	高台付坏	(19.4)	7.0	(13.3)	賀り付け高台、内外面口クロ調整。	黄灰	砂粒・長石	口縁～底	カマド
8	土師器	瓶	33.0	29.5	17.0	胴部が内溝して聞く單乳の瓶。二次焼成により 調整不明瞭、内面積ヘラヶズリ。	橙	石英・長石・雲母	口縁～底	カマド
9	土師器	壳	16.5	—	—	常輪型小切妻口縁部～胴部破片。胴部内外面ナ ギ。	褐	石英・長石・小蝶	口縁～胴	床面

SI10（第31・32・33図、第11表、遺構図版4、遺物図版3）

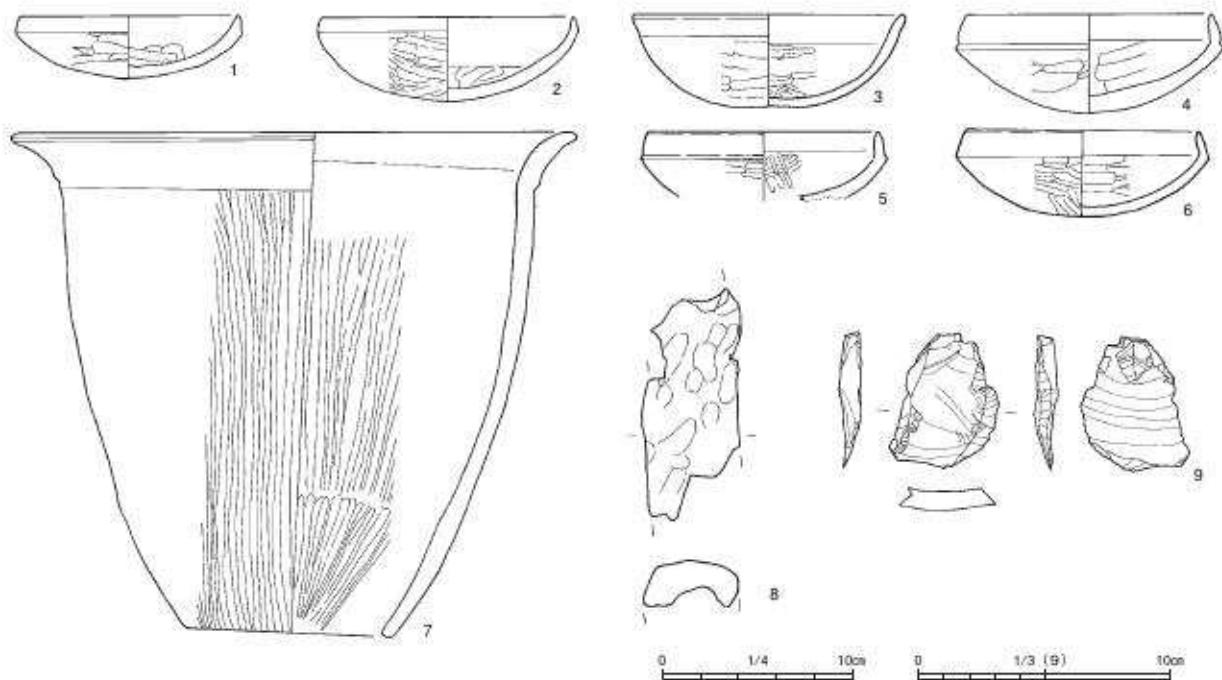
調査区東側のI-15・I-16・J-15・J-16グリッドに位置する。南東隅部分がSI09に切られて消失している。平面形は方形で、主軸方向はN-36°-Wである。規模は東西方向4.42m、南北方向4.34m、残存壁高は30cm。覆土は4層に分層される自然堆積である。床面は平坦で、中央部から硬化面が検出されている。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴4基が検出されている。カマドは北壁中央に付設され、煙道部は壁を約30cm掘り込んでいる。袖部は灰褐色粘土と砂の混土で構築されていた。壁溝はカマド部分と西壁～南西隅以外で確認され、最大幅16cm、深さ8～12cmである。主柱穴は基本的位置で検出され、P-1が径50cm、深さ60cm、P-2が径40cm、深さ60cm、P-3が径60cm、深さ60cm、P-4が径54cm、深さ50cmである。掲載遺物は9点で、土師器坏6点とP4横から出土した完形の土師器瓶、カマドから出土した土製支脚があり、他に覆土から出土したチャートの剥片を図示した。時期は6世紀後半と考えられる。



第31図 SI10



第32図 SI10 カマド



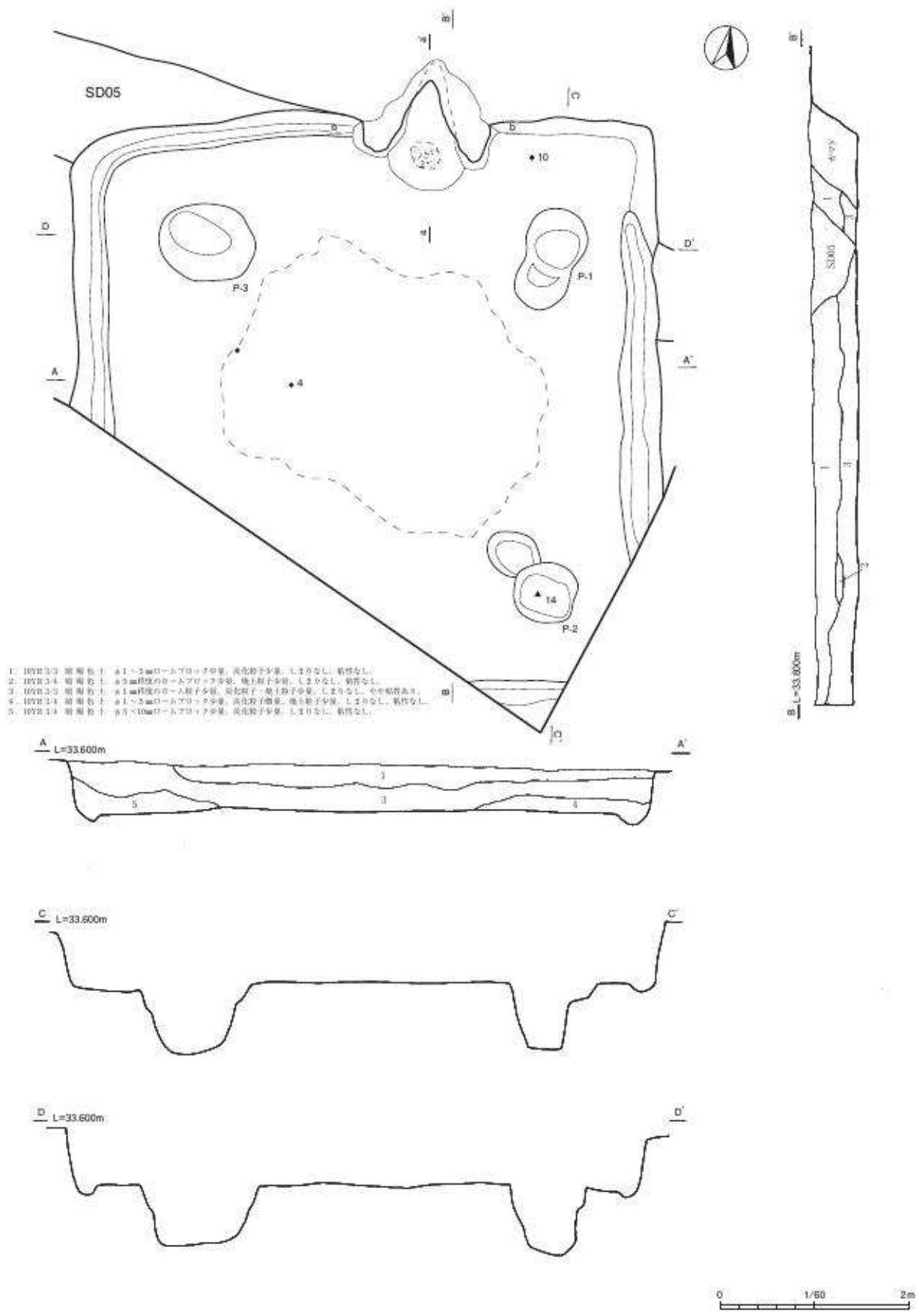
第33図 SI10出土遺物

第11表 SI10出土遺物観察表

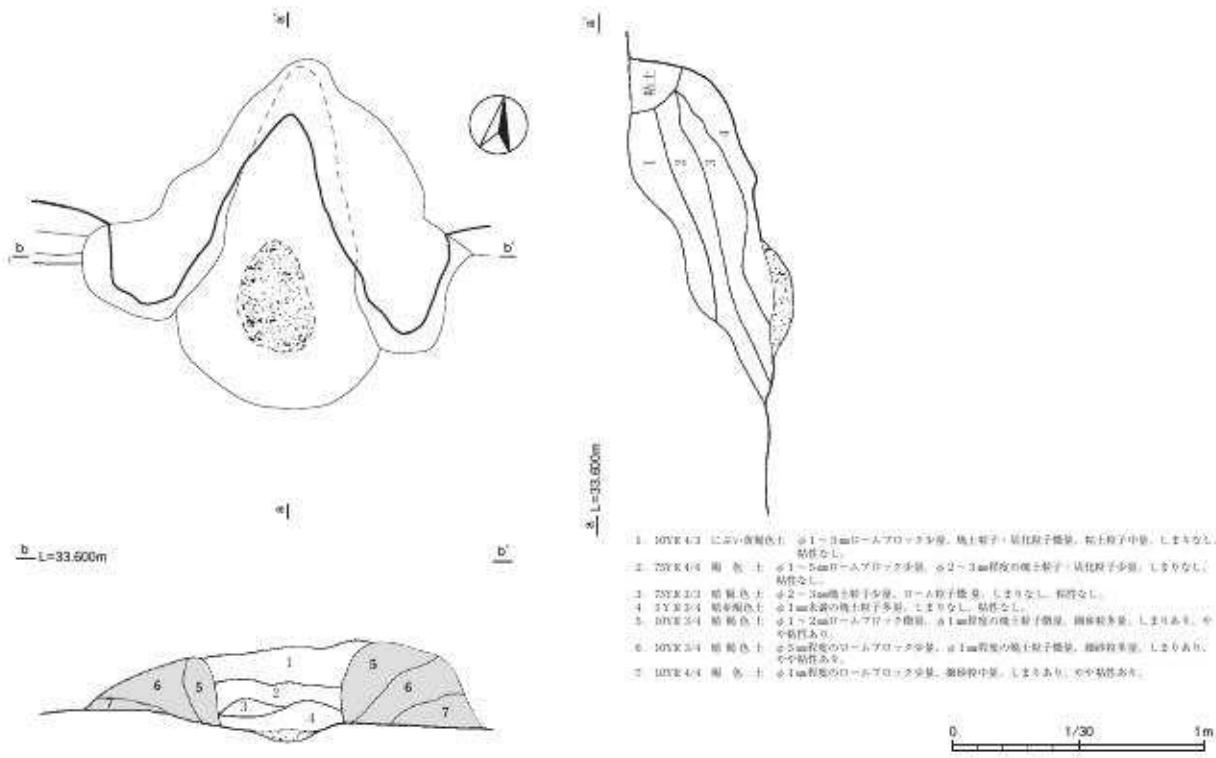
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	11.6	3.4	—	須恵器壺身模倣壺。体部内外面ヘラケズリ。	黄灰	白色粒	口縁～底	覆土
2	土師器	壺	13.2	4.5	—	半円形の壺。体部外面ミガキ。内面横テテ。	にぶい 黄橙	雲母・白色粒	口縁～底	床面
3	土師器	壺	14.0	4.9	—	半円形の壺。体部外面ヘラケズリ。内面ミガキ。	灰	白色粒	口縁～底	覆土
4	土師器	壺	12.8	5.3	—	須恵器壺身模倣壺。体部外面ヘラケズリ。内面黒色処理。	明黄褐	緻密・白色粒・石英	完形	床面
5	土師器	壺	12.0	—	—	須恵器壺身模倣壺。体部外面ミガキ。底部剥落。	浅黄橙	石英・白色粒	口縁～体	覆土
6	土師器	壺	12.2	4.5	—	須恵器壺身模倣壺。口縁部横ナデ。体部外面ミガキ。	にぶい 黄橙	緻密・白色粒・雲母	口縁～底	床面
7	土師器	瓶	29.3	27.0	10.7	胴部が緩やかに内湾して聞く単孔の壺。胴部内外面密なミガキ。	明黄褐	白色粒・黒色粒	完形	床面
8	土製品	支脚	残長12.0cm	表面に指頭痕を残すが、被熱により龜くなっている。	—	にぶい 赤褐	石英・白色粒多量	破片	カマド	
9	石器	剃片	長さ5.2cm、幅4.4cm、厚さ1.0cm、重さ17.58g	チャートの複数剃片。	—					覆土

SI11（第34・35・36図、第12表、遺構図版5、遺物図版3）

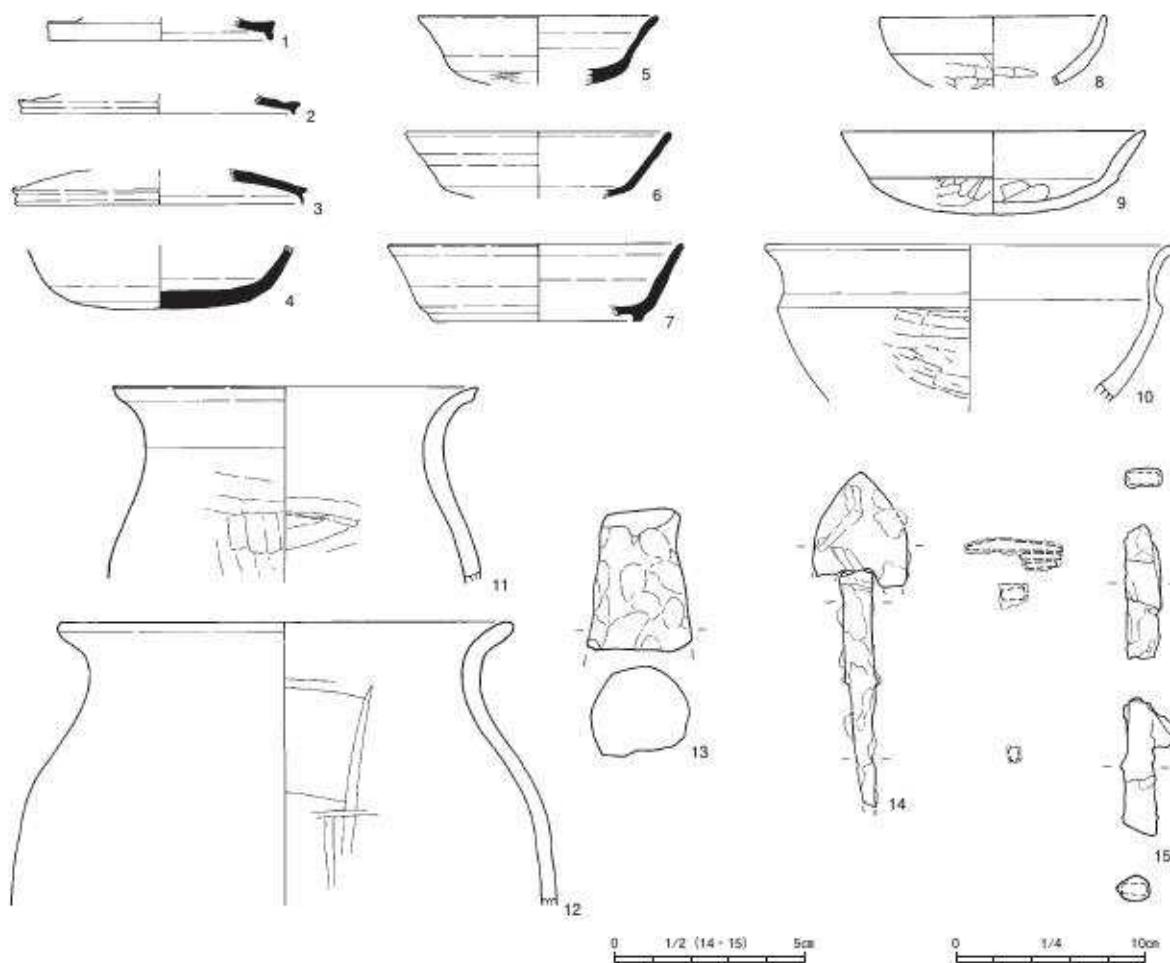
調査区中央部のI-13・I-14・J-14グリッドに位置し、南東隅部分と南西隅部から南西主柱穴位置までの部分が調査区外になる。平面形は方形で、主軸方向はN-9°-Wである。規模は東西方向6.16m、南北方向6.26m、残存壁高は60cm。覆土は5層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸が認められ、主柱穴間内側から硬化面が検出されている。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴3基が検出されている。カマドは北壁中央の東寄りに付設され、火床部から明瞭な焼土が検出されている。袖部から煙道部にかけては灰褐色粘土主体土で構築されていた。壁溝はカマド部分と北東隅部を除いて確認され、最大幅15cm、深さ10cm前後である。主柱穴は基本的位置で検出され、P-1が径64cm、深さ70cm、P2が径66cm、深さ70cmで、P-1、P-2ともに建て替えによる柱穴の重複が認められた。P-3は長径104cmの楕円形を呈し、深さは60cm。明瞭ではないがP-1・P-2と同様に柱穴が重複している可能性がある。遺物は覆土を主体として多量に出土し、15点を図示した。器種は須恵器蓋・壺・高台付壺、土師器壺・塊・甕、土製支脚、鉄製品とP-1から出土した鐵製品（鎌）がある。時期は8世紀前半～中葉と考えられる。



第34図 SI11



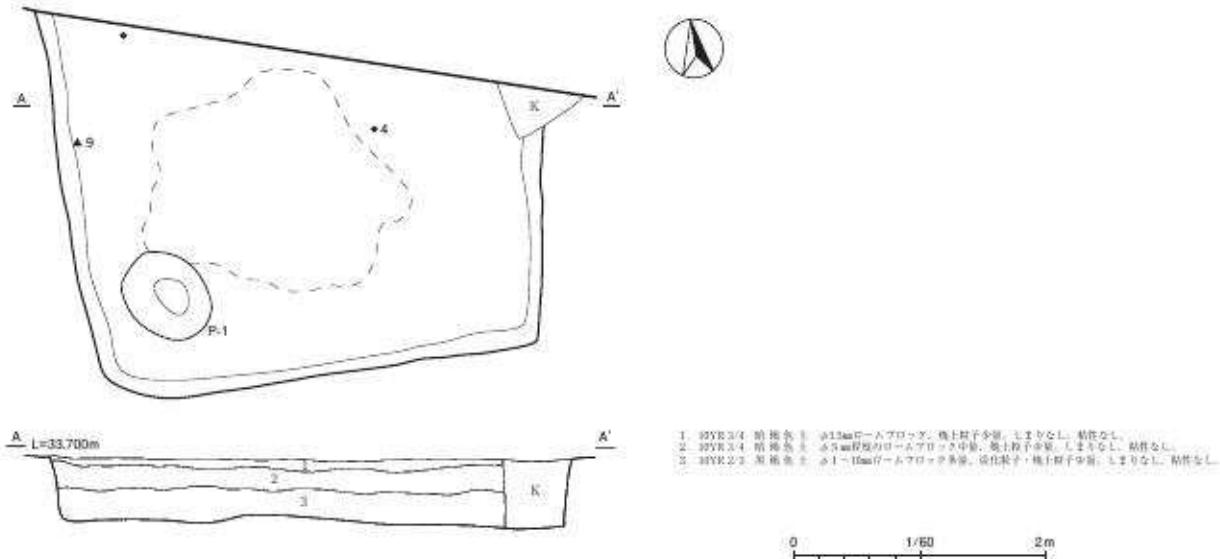
第35図 SI11 カマド



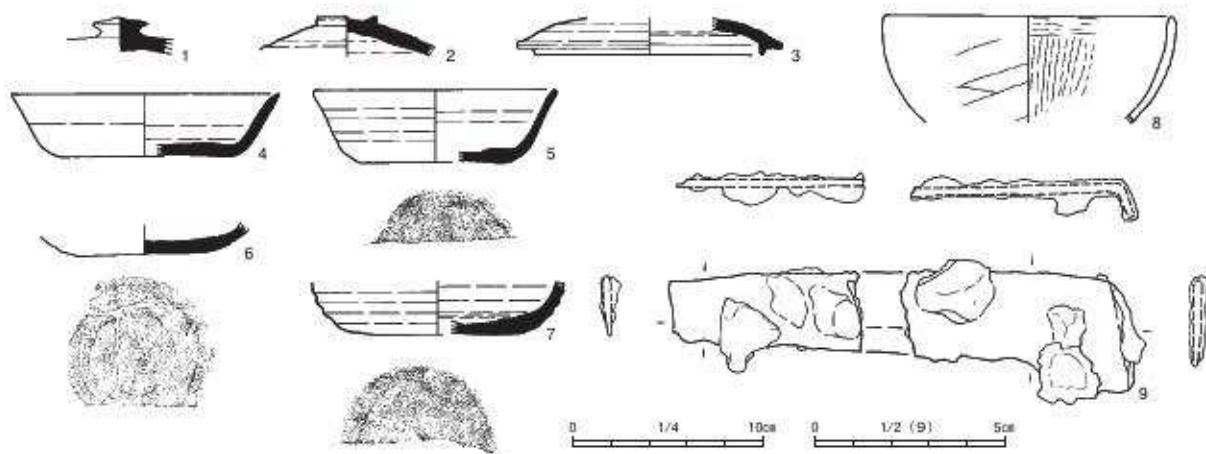
第36図 SI11 出土遺物

第12表 SI11出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	(12.0)	—	—	返しを有する蓋端部破片。内外面自然釉。	灰白	凝密・黒色粒	口縁	覆土
2	須恵器	蓋	(14.4)	—	—	返しを有する蓋端部破片。	灰	石英・白色粒	口縁	覆土
3	須恵器	蓋	(15.2)	—	—	返しを有する蓋端部破片。外面に線刻あり。	灰	白色粒	口縁	覆土
4	須恵器	坏	—	—	—	丸底氣味の坏底部。内外面口クロ調整、底部回転ヘタ切り。	灰白	石英・雲母多量	底～体	床面
5	須恵器	坏	(12.6)	—	—	内外面口クロ調整。体部下端ヘラケズリ。	灰	石英・白色粒	口縁～体	覆土
6	須恵器	坏	(13.8)	—	—	内外面口クロ調整。	灰白	石英・白色粒	口縁～体	覆土
7	須恵器	高台付坏	(15.5)	4.0	(11.0)	内外面口クロ調整、貼り付けの低い高台が付く。	灰白	白色粒	口縁～底	覆土
8	土師器	坏	(12.0)	—	—	半円形の坏。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ナダ。	黄橙	白色粒	口縁～体	覆土
9	土師器	坏	16.0	4.3	—	須恵器坏蓋模様坏。体部内外面ヘラケズリ。	黄橙	白色粒	口縁～底	覆土
10	土師器	鉢	(21.4)	—	—	口縁部は外反して開く。体部外面ミガキ、内面ナダ。	黄橙	石英・雲母多量	口縁～体	床面
11	土師器	壺	(18.0)	—	—	口縁部横ナダ、肩部外面張ヘラケズリ、内面ナダ。	浅黄橙	石英・白色粒	口縁～胴	覆土
12	土師器	壺	(24.0)	—	—	器面風化で調整不明瞭。口縁部横ナダ、内面ヘラケズリ。	橙	石英・白色粒・雲母	口縁～胴	カマド
13	土製品	支脚	長さ7.5cm、径4.8cm。表面に指印痕を残す土製支脚上部。	—	—	—	赤褐	雲母多量・砂粒	上口縁	覆土
14	鉄製品	劍	残長18.9cm、鍔身幅2.5cm、厚さ0.3cm、茎幅0.3～0.6cm、厚さ0.3cm。重さ9.84g、鍔身三角形状の鍔錐。	—	—	—	—	—	—	P.2
15	鉄製品	鐵？	残長3.5cm+3.5cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm。重さ6.20g。同一個体の棒状鉄製品。断面方形で鍔部と思われる。	—	—	—	—	—	—	覆土



第37図 SI12



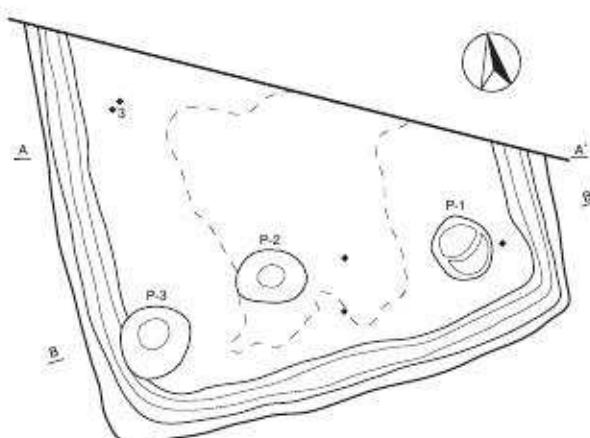
第38図 SI12出土遺物

SI12（第37・38図、第13表、遺構図版5、遺物図版4）

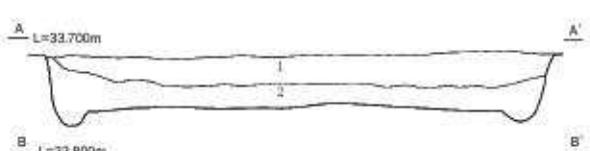
調査区中央部のH-14・J-14グリッドに位置し、遺構の北側は調査区外になる。平面形は方形基調で、規模は東西方向3.70m、南北方向3.00m以上、残存壁高は50cm。覆土は3層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸が認められ、中央部から非常に硬質な硬化面が検出されている。付帯施設としては南西隅部から貯蔵穴の可能性があるピット1基が検出されている。梢円形を呈し、長径76cm、短径62cm、深さ22cmである。掲載遺物は9点で、須恵器蓋・坏、土師器坏と鉄製品（鎌）がある。時期は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

第13表 SI12出土遺物観察表

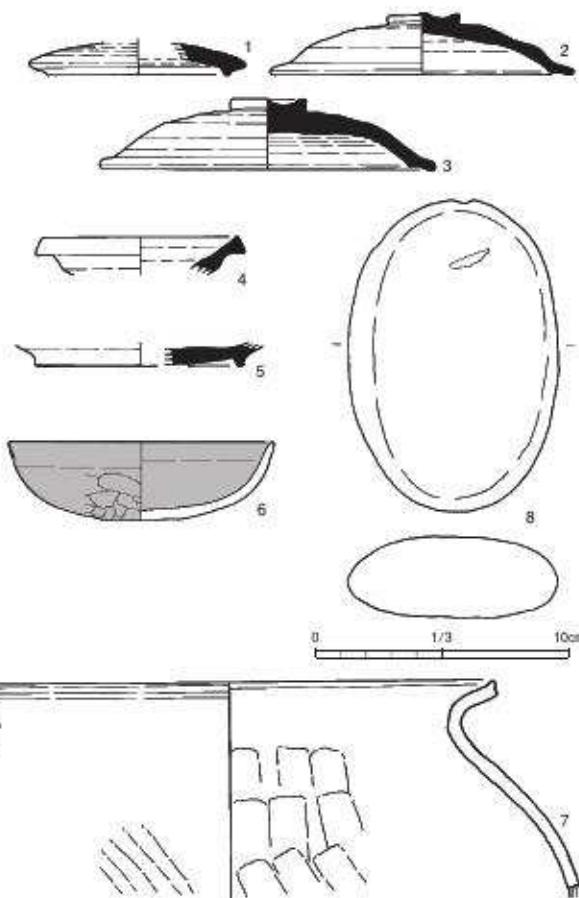
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	—	—	—	扁平な擬宝珠状の摘み。	灰	白色粒	摘み	覆土
2	須恵器	蓋	—	—	—	扁平な擬宝珠状の摘み。天井部回転ヘラケズリ。	黄橙	白色粒・小織	天井	覆土
3	須恵器	蓋	(13.8)	—	—	返しきを有する蓋口縁端部破片。	暗灰	白色粒	口縁	覆土
4	須恵器	坏	(14.0)	(3.3)	(9.0)	内外面ロクロ調整。	灰白	雲母多	口縁～底	床面
5	須恵器	坏	(12.6)	(3.8)	(8.0)	内外面ロクロ調整、底部回転ヘラ切り後ヘラケズリ。	にぶい 黄橙	雲母・白色粒・小織	口縁～底	覆土
6	須恵器	坏	—	—	(7.0)	内外面ロクロ調整、底部回転ヘラ切り。	黒褐	雲母・石英・小織	底	覆土
7	須恵器	坏	—	—	(9.0)	内外面ロクロ調整、底部回転ヘラ切り後ヘラケズリ。	灰白	雲母	底	覆土
8	土師器	坏	(15.0)	—	—	半円形の深い坏。体部外面ヘラケズリ。内面ミガキ。	棕	雲母・石英・小織	口縁～底	覆土
9	鉄製品	鎌	残長120cm、幅1.6～2.8cm、厚さ0.3cm、重さ26.74g。刃部先端付近を欠損し、着柄部は折り返して斜方向に立つ。							床面



1. 105R3/3 須恵器化粧壺 1～5mmのアラック少額、氧化物・焼土跡少額。しまさなし、柄性なし。
2. 105R2/4 須恵器化粧壺 1～2mmのアラック少額、氧化物・焼土跡少額。しまさなし、柄性なし。



第39図 SI13



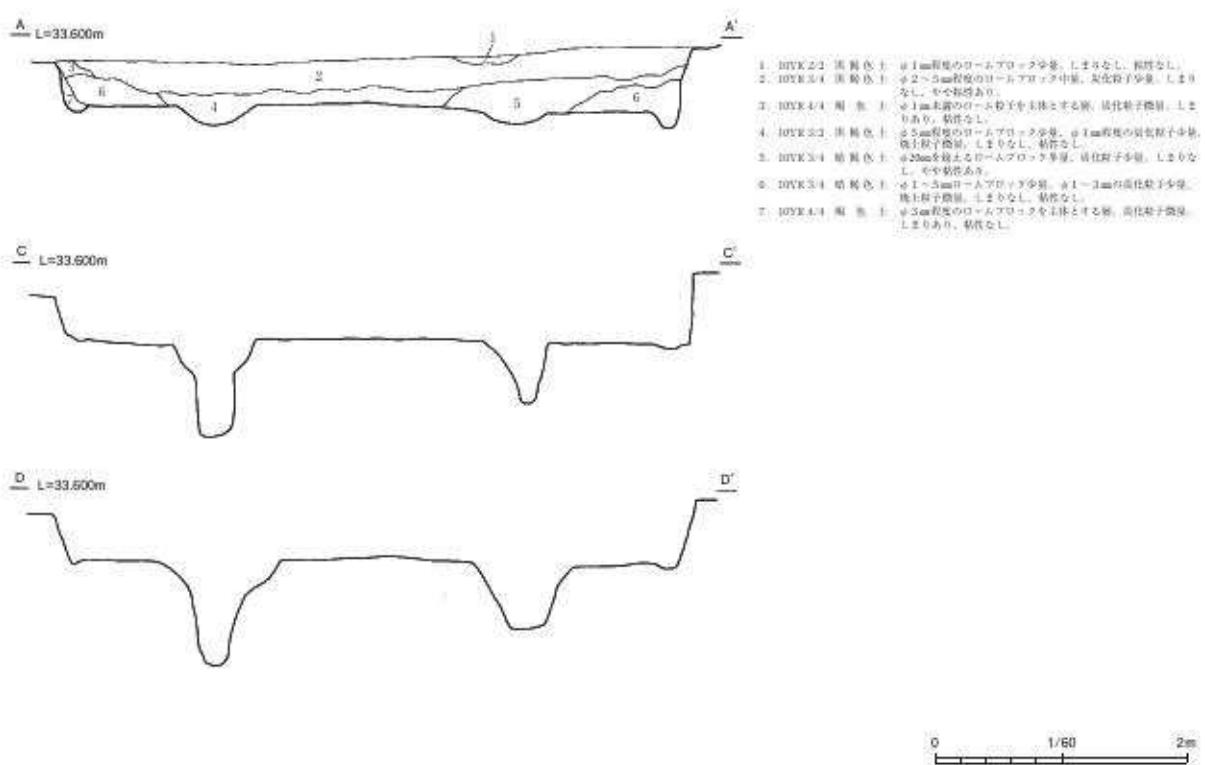
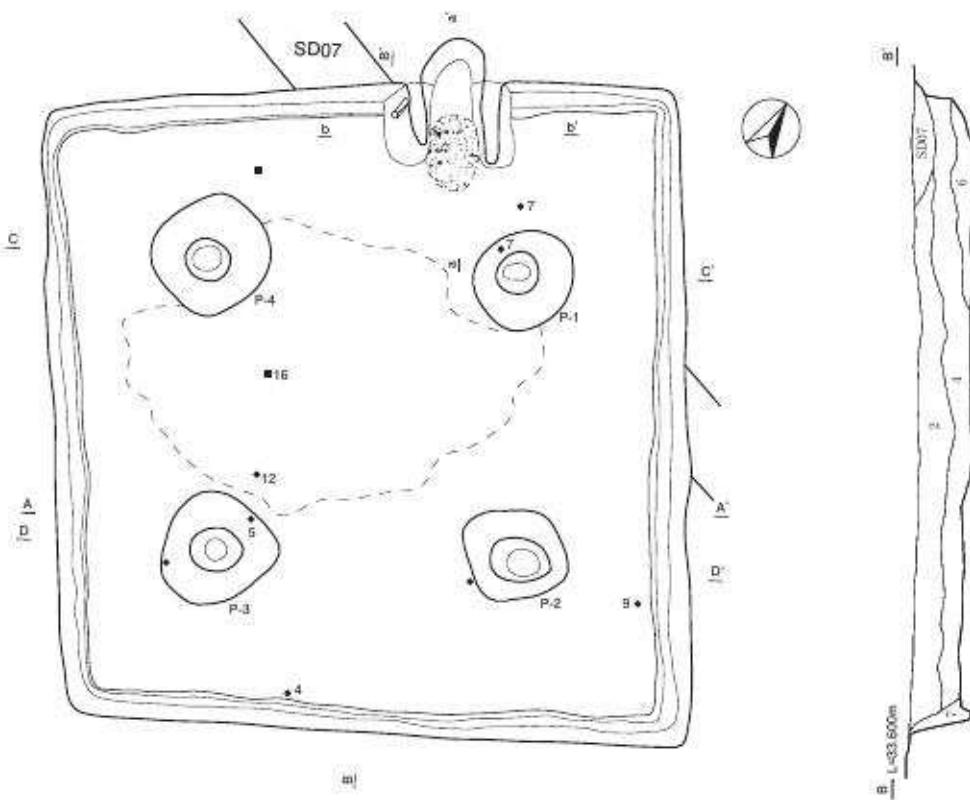
第40図 SI13出土遺物

SI13（第39・40図、第14表、遺構図版5、遺物図版3）

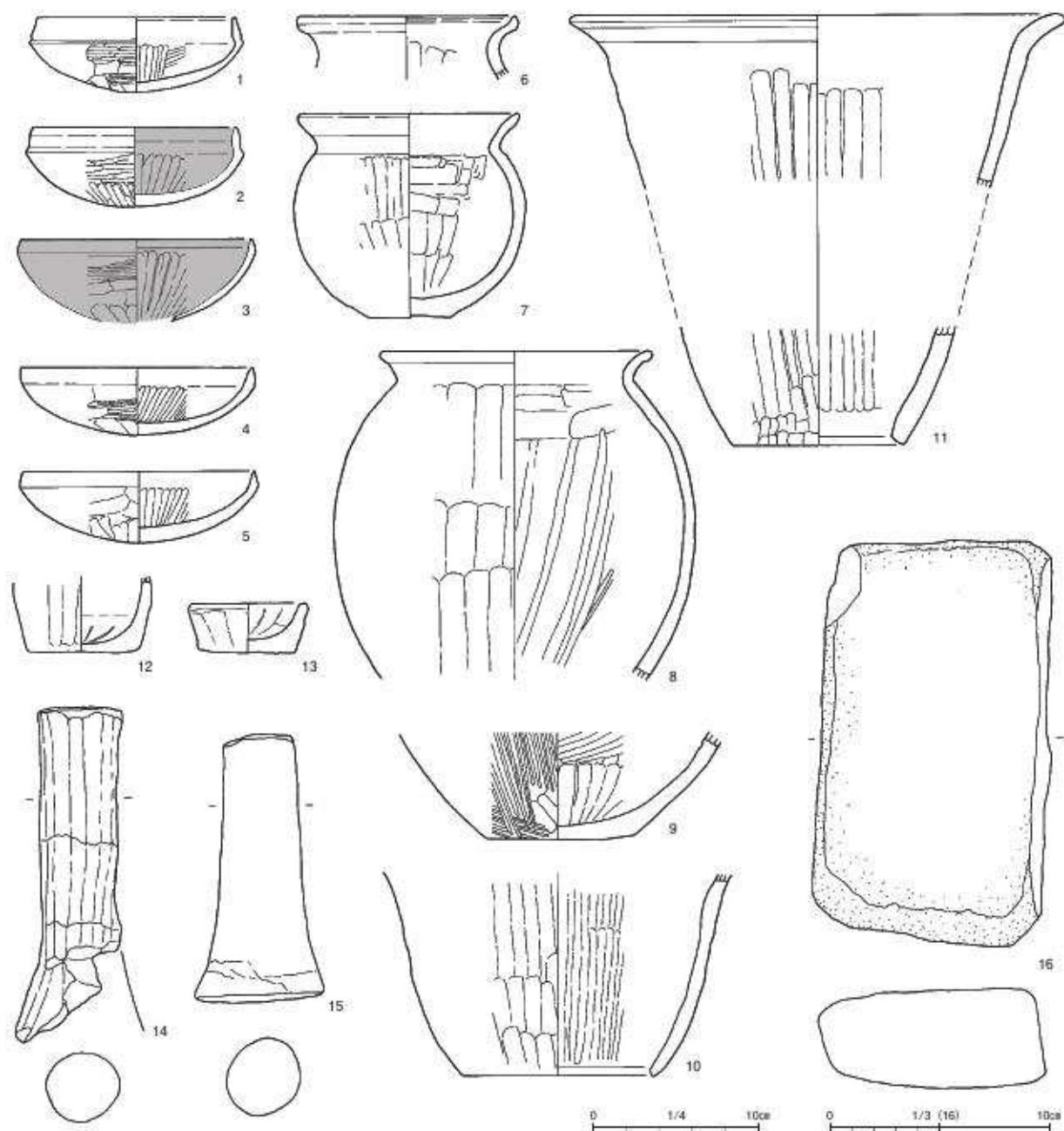
調査区中央部のH-13グリッドに位置し、遺構の北側が調査区外になる。平面形は方形基調で、規模は東西方向3.80m、南北方向3.20m以上、残存壁高は50cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸が認められ、中央部から硬化面が検出されている。付帯施設として検出された壁溝は、調査範囲の壁際すべてで確認され、最大巾15cm、深さ10cm前後で、壁からやや離れた位置に掘り込まれている。ピットは3基検出され、P-1、P-3は位置的に主柱穴の可能性がある。掲載遺物は8点で、須恵器蓋・長頭瓶・高台付壺、土師器甕、内外面黒色処理の土師器壺と、磨石もしくは砥石として使用したと思われる礫1点がある。時期は8世紀前半～中葉と考えられる。

第14表 SI13出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	釉土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	(11.4)	—	—	返しを有する蓋口縁端部破片。天井部回転ヘラケズリ。	にぶい 橙	雲母・白色粒・小礫	口縁	覆土
2	須恵器	蓋	15.5	3.3	—	扁平な擬宝珠状の摘み。天井部回転ヘラケズリ、退化した返しがある。	灰色	雲母・白色粒・小礫	摘み～口 縁	覆土
3	須恵器	蓋	17.2	3.7	—	扁平な擬宝珠状の摘み。天井部回転ヘラケズリ、退化した返しがある。	灰	白色粒・小礫	摘み～口 縁	床面
4	須恵器	長頭瓶	10.4	—	—	長頭瓶口縁部破片。内面自然釉。	灰白	石英・雲母	口縁	覆土
5	須恵器	高台付壺	—	—	10.8	内外面ロクロ調整、貼り付けの低い高台が付く。	灰白	白色粒・小礫	底	覆土
6	土師器	壺	13.8	4.1	—	半円形の壺。体部外面ヘラケズリ、内外面黒色処理。	にぶい 橙	白色粒	口縁～底	覆土
7	土師器	甕	28.0	—	—	常緑型甕。胴部内外面ヘラケズリ。	橙	雲母・白色粒・小礫	口縁～胴	床面
8	石器	磨石	長さ12.1cm、幅8.2cm、厚さ3.2cm、重さ454.75g	—	—	表裏面を使用する磨石。石材は安山岩。	—	—	—	覆土



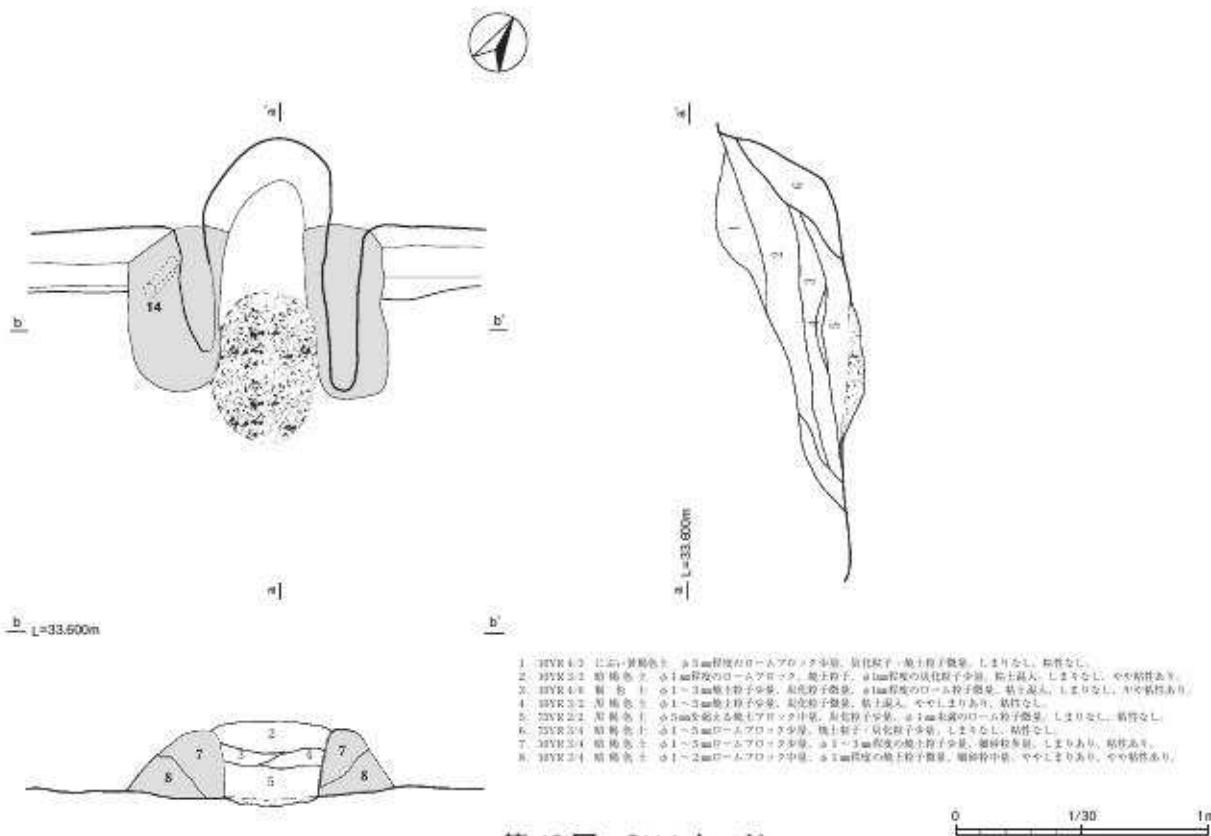
第41図 SI14



第42図 SI14出土遺物

SI14（第41・42・43図、第15表、遺構図版5、遺物図版4）

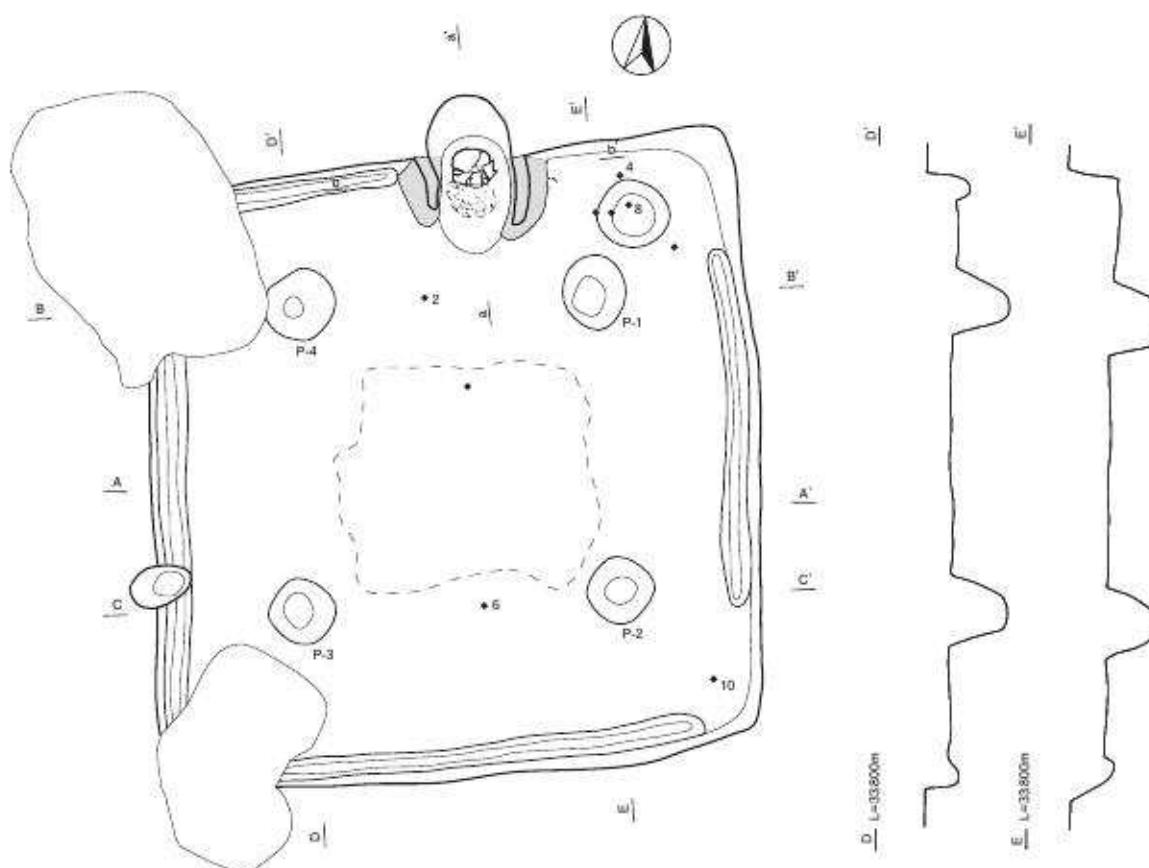
調査区中央部のH-12グリッドに位置する。平面形は台形氣味の方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wである。規模は東西方向5.00m、南北方向4.90~5.20m、残存壁高は50cm。覆土は6層に分層される自然堆積である。床面は平坦で、主柱穴間の内側から硬化面が検出されている。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴4基が検出されている。カマドは北壁中央の東寄りに付設され、袖部は灰褐色粘土と砂の混土で構築されていた。壁溝はカマド部分を除いて全周し、最大幅15cm、深さ10~14cmである。主柱穴は基本的位置で検出され、P-1が径90cm、深さ50cm、P-2が径82cm、深さ50cm、P-3が径90cm、深さ80cm、P-4が径95cm、深さ68cmである。掲載遺物は16点で、土師器壊・甕・瓶、手捏土器、土製支脚と、側面を砥石として使用したと思われる礫1点がある。時期は6世紀後半と考えられる。



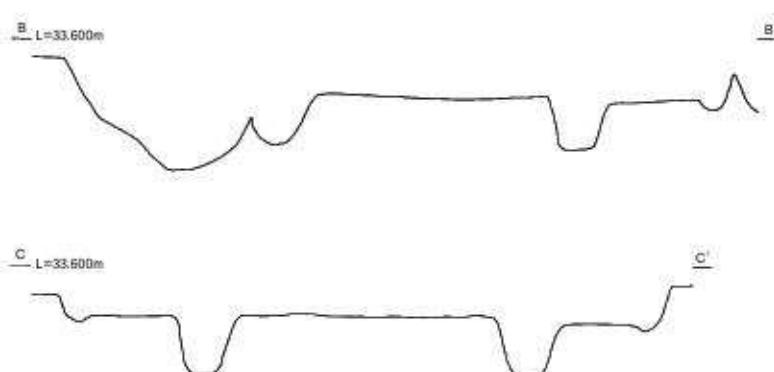
第43図 SI14 カマド

第15表 SI14 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	环	(12.0)	(4.5)	—	口縁部が内側する須恵器環身模倣环。体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	にぶい 黄褐色	白色粘	口縁～底	P.3
2	土師器	环	12.3	4.8	—	須恵器環身模倣环。体部内外面ミガキ、内面黒色処理。	灰褐色	白色粘・雲母	完形	覆土
3	土師器	环	(13.8)	—	—	口縁部が内側する半円形の环。体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ、黒色処理。	褐	白色粘・雲母	口縁～底	床面
4	土師器	环	14.0	4.1	—	半円形の环。体部外面ヘラケズリ。内面滑なミガキ。	褐	白色粘・雲母	完形	床面
5	土師器	环	(14.0)	4.3	—	口縁部が内側する半円形の环。体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	明赤褐色	白色粘・雲母	口縁～底	床面
6	土師器	小型甕	13.0	—	—	口縁部横ナデ、内面縦ヘラケズリ。	橙	白色粘・石英・雲母	口縁	覆土
7	土師器	小型甕	13.4	12.3	5.0	肩部直下に棱を有する小型甕。口縁部横ナデ。肩部外面縦ヘラケズリ、内面上半端ヘラケズリ、下半端ヘラケズリ。	赤褐色	白色粘・石英・雲母	ほぼ完形	床面
8	土師器	甕	16.4	—	—	肩部外面縦ヘラケズリ、内面横ヘラケズリ、ミガキ。	暗褐色	白色粘・石英・雲母	口縁～胴	覆土
9	土師器	甕	—	—	9.0	肩部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ナデ。	にぶい 赤褐色	白色粘・石英・雲母	底	床面
10	土師器	瓶	—	—	11.6	單孔の壓底部。肩部外面縦ヘラケズリ、内面ミガキ。	にぶい 赤褐色	白色粘・石英	胴～底	床面
11	土師器	瓶	(29.0)	—	(10.3)	肩部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。焼成が非常に良く堅硬。	にぶい 橙	白色粘・石英・雲母	口縁、底	覆土
12	土製品	甕	—	—	6.4	甕底部。外面縦ヘラケズリ、内面ナデ。	にぶい 褐	砂粒	底	床面
13	土製品	手程土器	6.9	3.0	5.8	底部は平底で体部は短く立つ。内外面指頭痕。	黒褐色	白色粘・雲母	完形	覆土
14	土製品	支脚	残長20.0cm、径4.5cm、下端部が広がる棒状の土製支脚。表面は縦ヘラケズリ、被然により龜くなっている。	明赤褐色	白色粘・石英・雲母	ほぼ完形	カマド下			
15	土製品	支脚	長さ15.6cm、幅4.5cm、縦部径8.0cm、表面はナデ仕上げ。	橙	白色粘・石英・雲母	完形	覆土			
16	石製品	砥石	長さ17.8cm、幅10.1cm、厚さ4.3cm、右側面のみ使用痕がある。石材は砂岩。						床面	

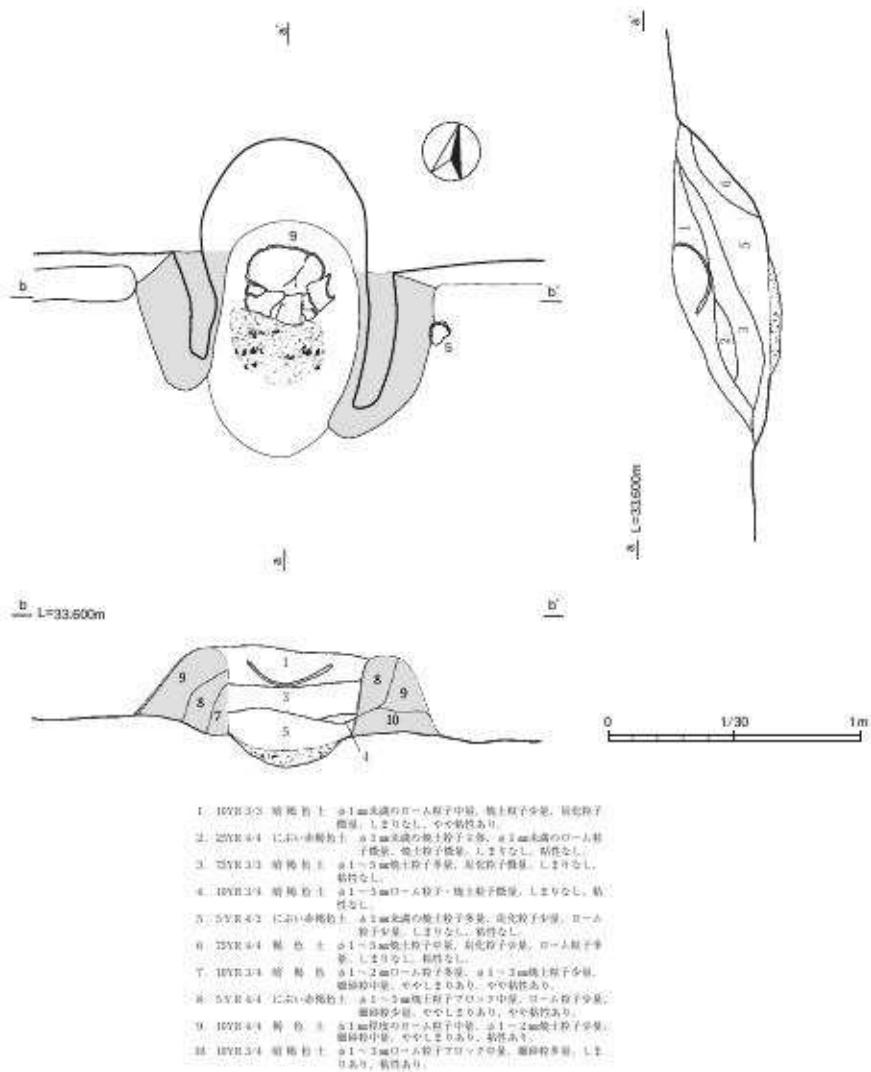


1. HYR 44 植物 3. 0.1-2mmロームブロック全層、炭化粒子・塊上粒子微見、しまりなし、軟性なし。
2. HYR 42 植物 2. 0.1-5mmワームブロック全層、炭化粒子・塊上粒子微見、しまりなし、軟性なし。
3. HYR 34 植物 3. 0.1-10mmロームブロック中層、炭化粒子・塊上粒子微見、しまりなし、やや軟性あり。



0 1/60' 2m

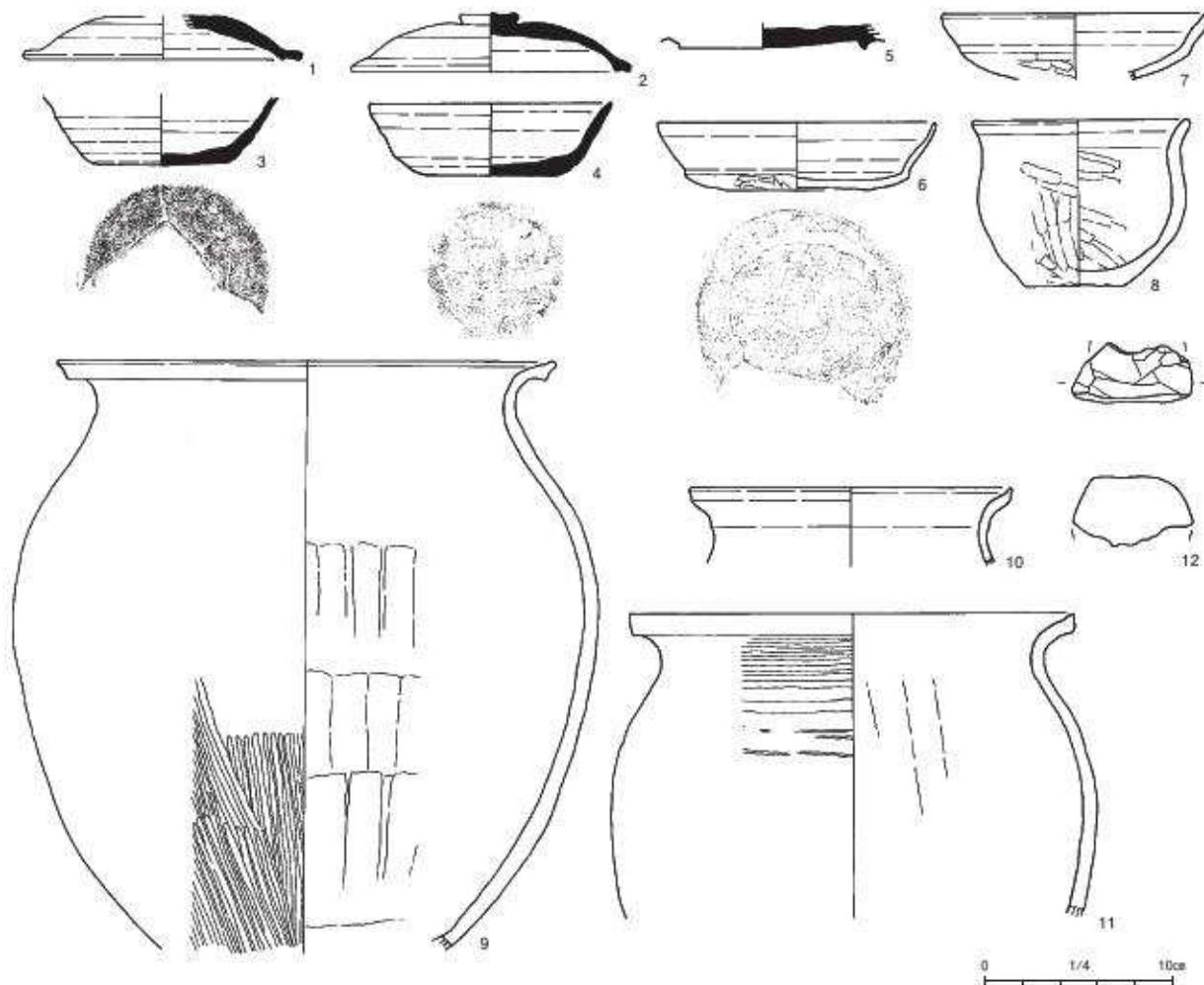
第44図 SI15



第45図 SI15 カマド

SI15 (第44・45・46図、第16表、遺構図版6、遺物図版4

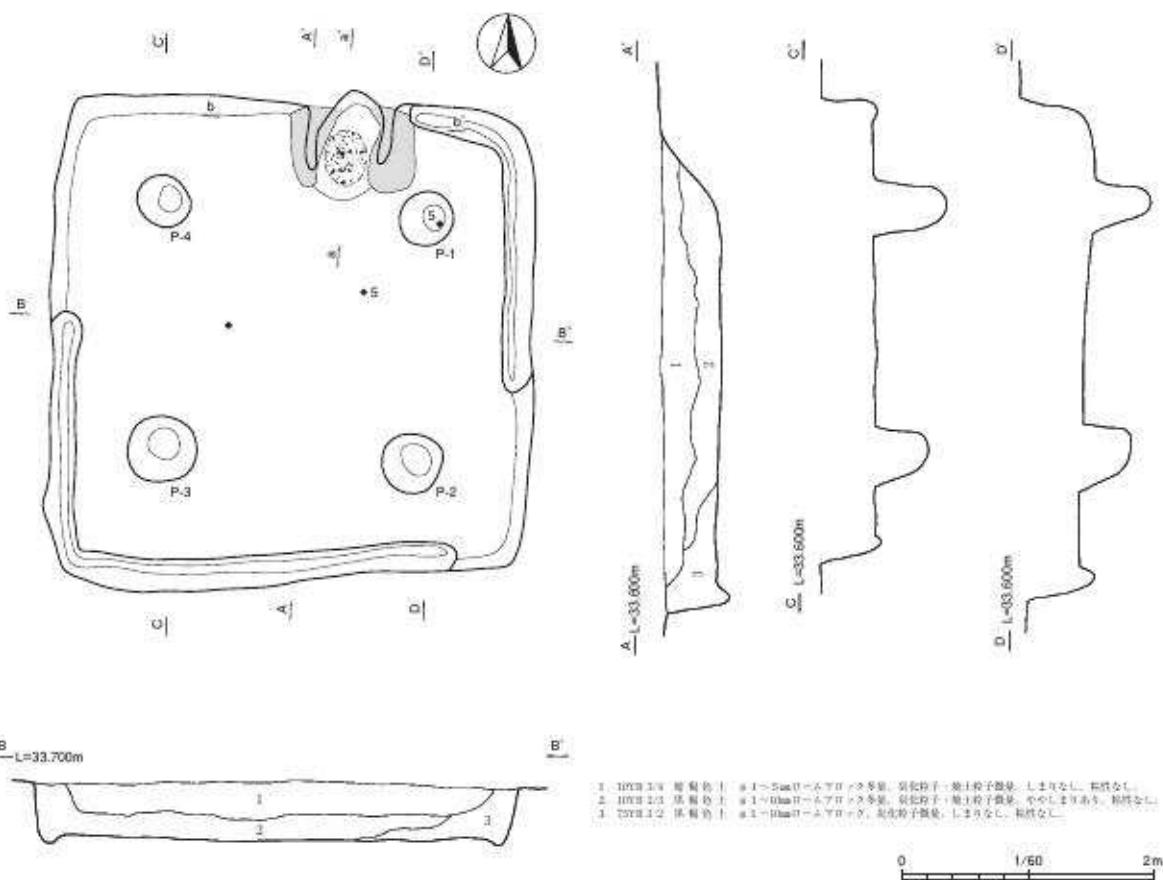
調査区中央部のG-10・G-11・H-10・H-11グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-10°-Wである。規模は東西方向4.80m、南北方向4.90m、残存壁高は35cm。覆土は3層に分層される自然堆積である。床面は平坦で、主柱穴間の内側から硬化面が検出されている。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴4基、貯蔵穴1基が検出されている。カマドは北壁中央の東寄りに付設され、袖部は灰褐色粘土と砂の混土で構築されていた。壁溝はカマド部分から北東隅部と南東隅部を除いて確認され、幅10~16cm、深さ10cmである。主柱穴は基本的配置で検出され、P-1が径60cm、深さ40cm、P-2が径56cm、深さ40cm、P-3が径54cm、深さ50cm、P-4が径56cm、深さ45cmである。貯蔵穴はカマド右側の北東隅部から検出された。円形を呈し、径60cm、深さは30cmである。遺物はカマド及び貯蔵穴付近を主体として出土し、12点を図示した。須恵器蓋・壺・高台付壺、土師器壺・甕・小型甕、土製支脚がある。時期は8世紀前半~中葉と考えられる。



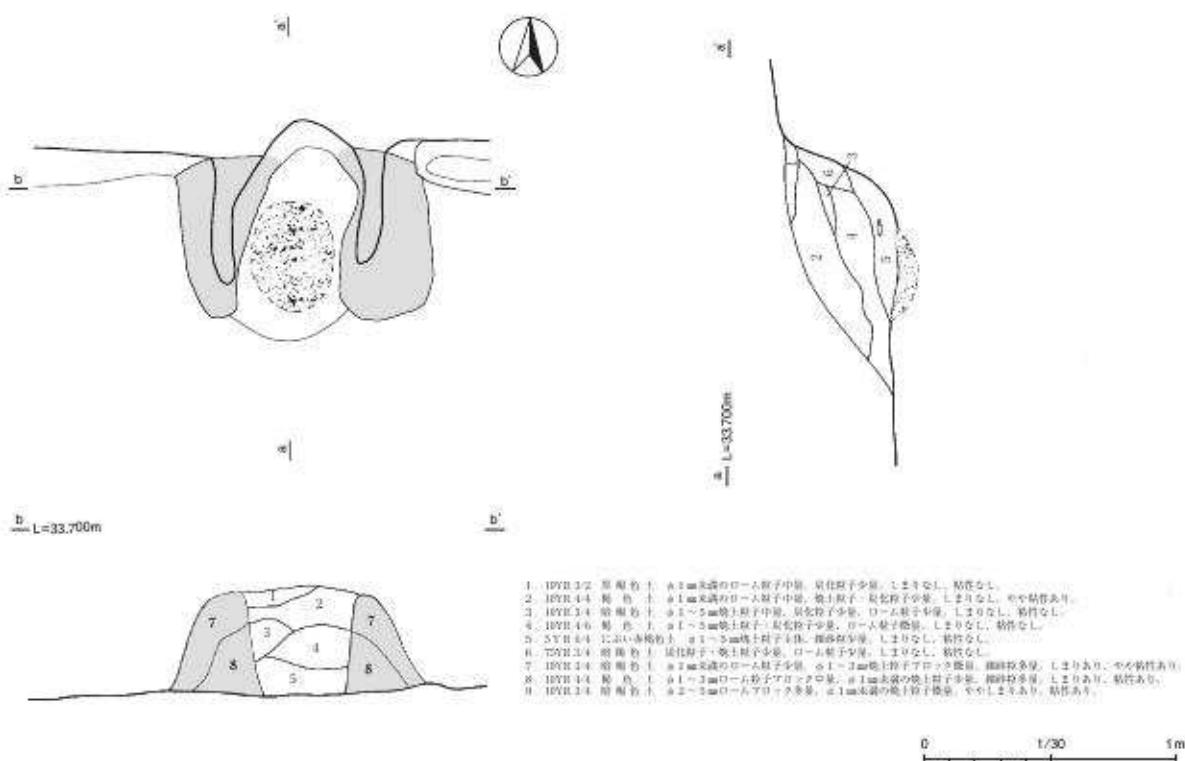
第46図 SI15出土遺物

第16表 SI15出土遺物観察表

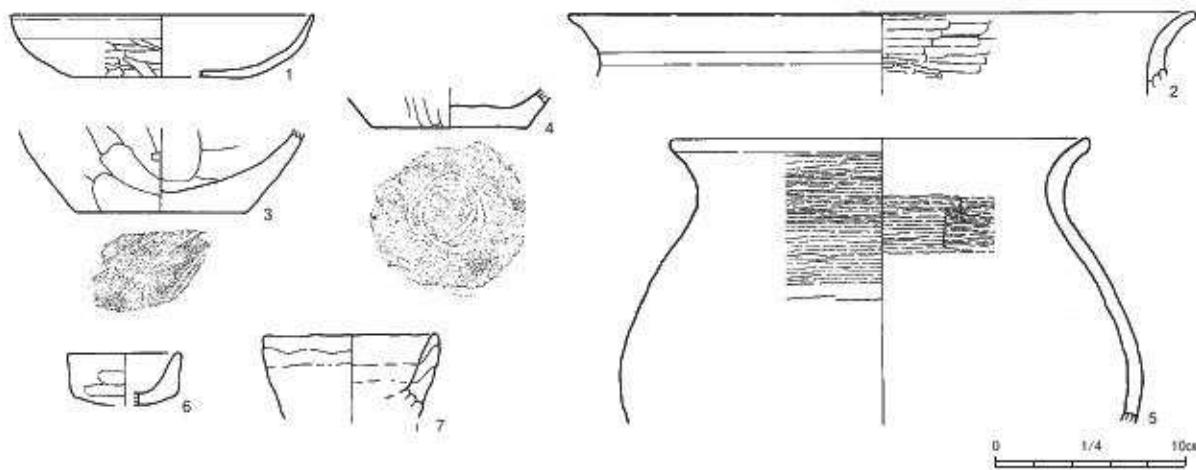
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	—	—	15.0	天井部回転ヘラケズリ、退化した返しがある。	浅黄	小疋・白色粒・石英	天井～口縁	覆土
2	須恵器	蓋	—	—	15.0	扁平な擬宝珠状の摘み。天井部回転ヘラケズリ、退化した返しがある。	灰白	小疋・白色粒・石英	摘み～口縁	床面
3	須恵器	杯	—	—	7.3	内外面ロクロ調整、底部ヘラナデ。	浅黄橙	白色粒・石英	体部～底	覆土
4	須恵器	坏	13.0	3.9	6.8	内外面ロクロ調整、底部ヘラナデ。	灰	白色粒・石英・雲母	口縁～底	床面
5	須恵器	高台付坏	—	—	11.0	ロクロ調整、低い高台が付く。	灰	雲母多量	底	床面
6	土師器	坏	14.7	3.6	12.0	体部は扁平で口縁部は内溝しながら大きく開く。底部手持ちヘラケズリ。	浅黄橙	白色粒・石英・雲母	口縁～底	床面
7	土師器	坏	14.7	—	—	体部は扁平で口縁部は内溝しながら開く。底部手持ちヘラケズリ。	にぶい赤褐	白色粒・石英・雲母	口縁～体	覆土
8	土師器	小型甕	11.4	8.9	5.1	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ヘラケズリ。	橙	小疋・白色粒・石英	ほぼ完形	床面
9	土師器	甕	26.8	<31.5>	—	常裁型甕。胴部外面ミガキ、内面ナデ。	橙	小疋・白色粒・石英	口縁～胴	カマド
10	土師器	小型甕	17.0	—	—	常裁型小型甕口縁部破片。口縁部内外面横ナデ。	橙	白色粒・石英・雲母	口縁～頭	床面
11	土師器	甕	24.0	—	—	常裁型甕。風化により器面荒れて調整不明瞭。内面ヘラナデ。	にぶい橙	白色粒・石英・雲母	口縁～胴	カマド
12	土製品	支脚	最大径6.4cm、土製支脚の上端部破片。表面に指痕痕を残す。				赤褐	雲母多量・砂粒	上口縁	床面



第47図 SI16



第48図 SI16 カマド



第49図 SI16出土遺物

SI16（第47・48・49図、第17表、遺構図版6、遺物図版4）

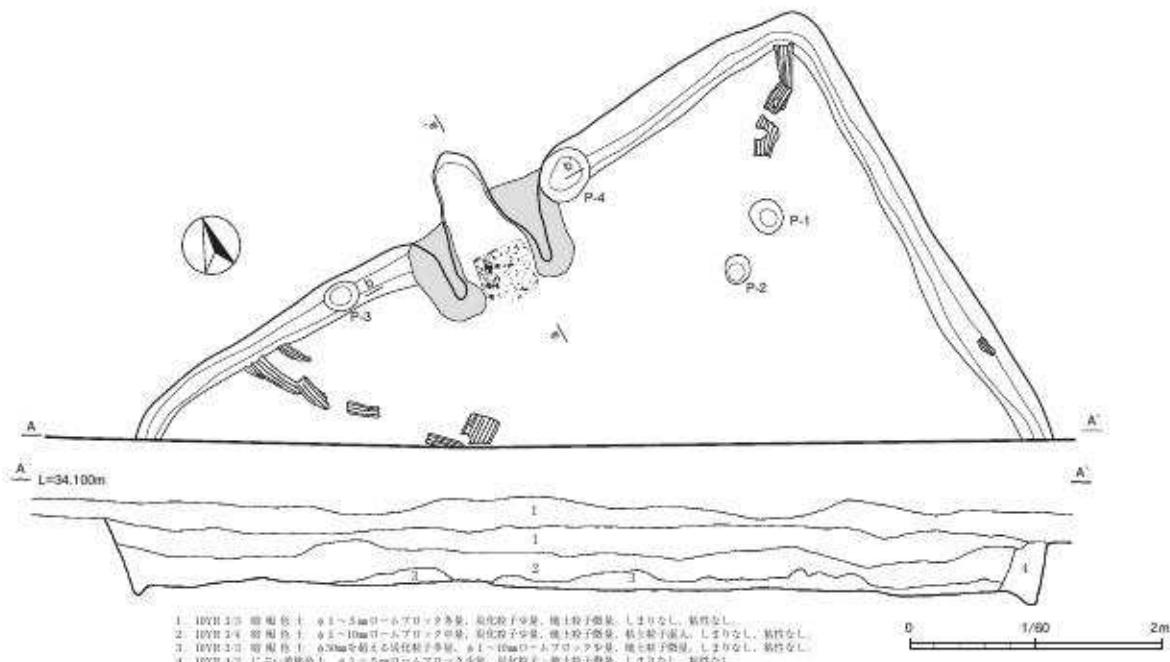
調査区中央部のH-10グリッドに位置する。平面形は台形気味の方形を呈し、主軸方向はN-Sである。規模は東西方向3.80m、南北方向3.65m～3.90m、残存壁高は50cm。覆土は3層に分層される自然堆積である。床面は平坦であるが軟弱で、顕著な硬化面は検出されなかった。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴4基が検出されている。カマドは北壁中央の東寄りに付設され、煙道部は急激に立ち上がり、壁を12cm程掘り込んでいる。袖部は灰褐色粘土と砂の混土で構築されていた。壁溝はカマド部分から北西隅部と南東隅部を除いて確認され、幅10cm、深さ10cmである。主柱穴は基本的配置で検出され、P-1が径44cm、深さ54cm、P-2が径46cm、深さ44cm、P-3が径54cm、深さ40cm、P-4が径45cm、深さ40cmである。掲載遺物は7点で、土師器壺・甕、手捏土器がある。時期は6世紀後半と考えられる。

第17表 SI16出土遺物観察表

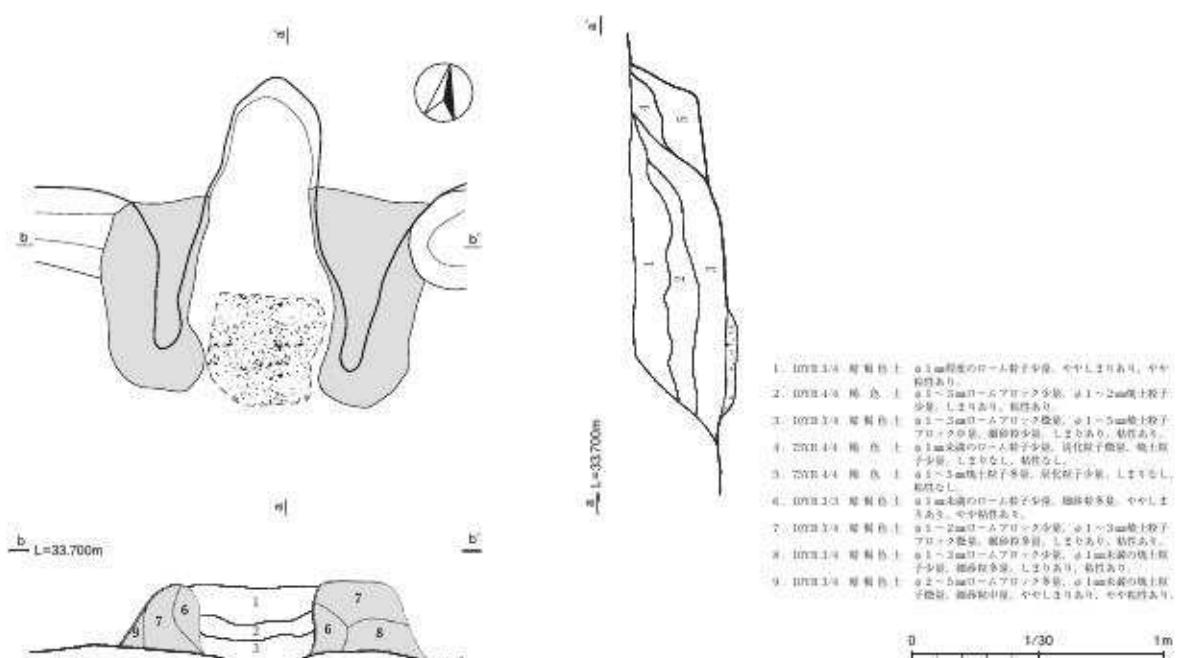
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	(16.0)	3.3	(9.2)	扁平な半円形の壺。体部外面ヘラケズリ。	褐	白色粒・石英	口縁～底	覆土
2	土師器	甕	(32.8)	—	—	口縁部外面横ナデ、内面ミガキ。	褐	緻密・白色粒	口縁	覆土
3	土師器	甕	—	—	(9.0)	木葉模を残す底部破片。外面報ヘラケズリ、内面ナデ。	褐	白色粒・石英	底	覆土
4	土師器	甕	—	—	8.1	底部破片。外面報ヘラケズリ、内面ナデ。底部に格円形状の線刻痕。	にぶい赤褐	小蝶・白色粒・雲母	底	覆土
5	土師器	甕	22.0	—	—	胴部に最大径をもつ。口縁部～胴部上半外面横ナデ、内面ナデ。	灰褐	白色粒・石英・雲母	口縁～胴	床面
6	土製品	手捏土器	6.0	(2.8)	—	底部は丸底気味で体部は短く立つ。外面に指頭痕を残す。	灰白	白色粒・雲母	口縁～底	覆土
7	土製品	手捏土器	(8.8)	<4.5>	—	体部は直線的に開く。内外面に輪積み痕を残す。	浅黄褐	白色粒・石英	口縁～体	覆土

SI17（第50・51・52図、第18表、遺構図版6、遺物図版4）

調査区中央部西側のG-9・H-9グリッドに位置する。カマドが付設される北壁側から東壁側にかけてのみ検出されたもので、遺構南側の大部分は調査区外になる。平面形は方形基調で、規模は東西方向5.90m以上、南北方向3.80m以上、残存壁高は30cm。覆土は4層に分層される自然堆積である。床面は平坦であるが、顕著な硬化面は確認されなかった。床面直上からは炭化材が散在する状況で出土している。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴と思われるピット2基、壁柱穴と思われるピット2基がある。カマドは北壁中央部に付設され、煙道部は壁を40cm程掘り込んでいる。袖部は灰褐色粘土と砂の混土で構築され、火床部からは赤褐

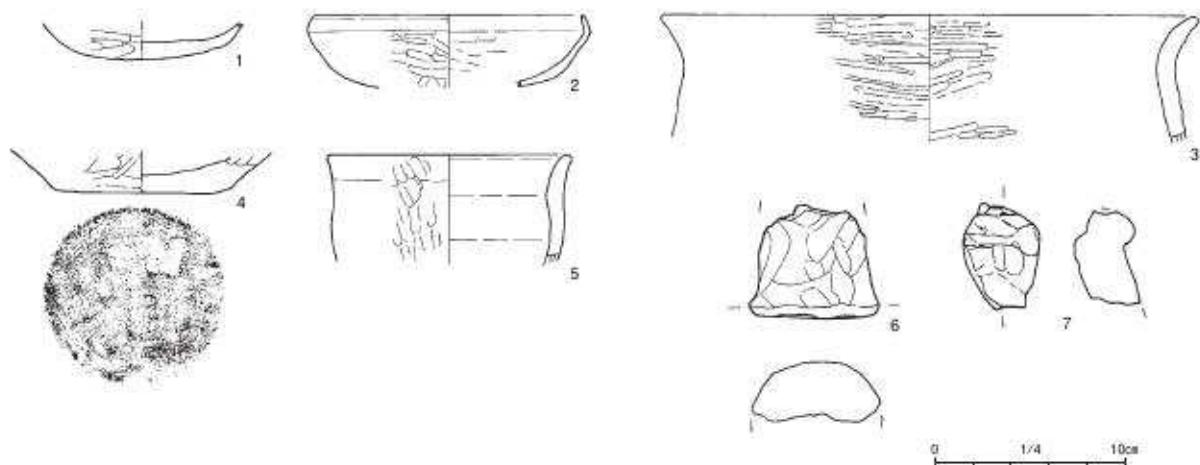


第50図 SI17



第51図 SI17 カマド

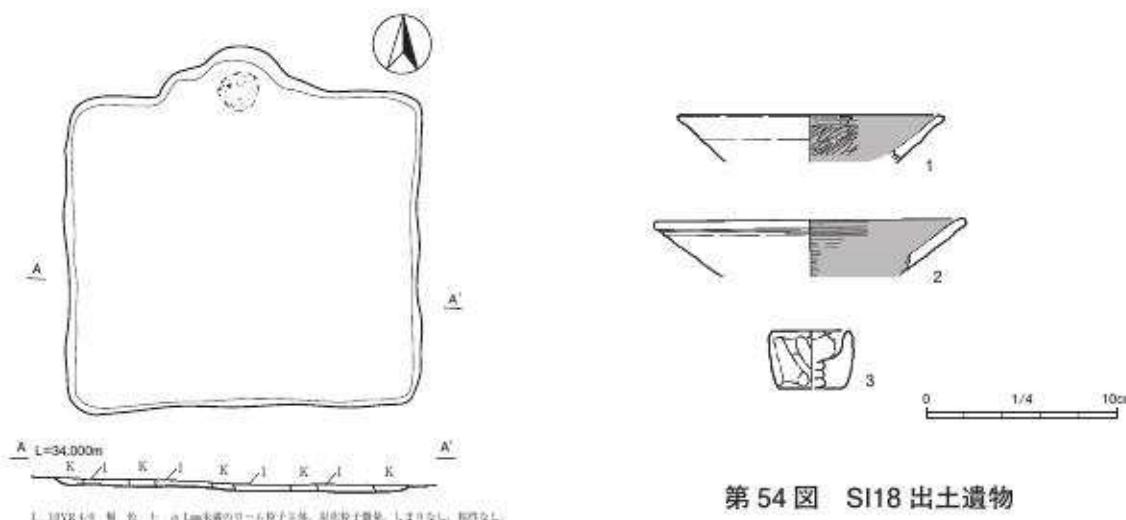
色の明瞭な焼土が検出されている。壁溝は検出部の壁際全てで確認され、巾10~15cm、深さ12cmである。なお、カマド下部分からも壁溝が検出されており、カマド位置の変更・造り替えが行われた可能性が指摘される。主柱穴と思われるピットはP-1が径28cm、深さ40cm、P-2が径24cm、深さ35cmで、新旧は不明であるが、主柱穴の建て替えがあったと考えられる。壁柱穴状のピット2基はカマドを挟む状態で検出されている。掲載遺物は7点で、土師器壺・甕、土製支脚がある。時期は6世紀後半と考えられる。



第52図 SI17出土遺物

第18表 SI17出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	粘土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	—	—	—	丸底の壺底部。外面ヘラケズリ。内面ナデ。	灰褐色	白色粒・雲母	底	覆土
2	土師器	壺	14.0	—	—	口縁部が内留する須恵器壺身模倣壺。体部外面ミガキ。内面ナデ。	浅黄橙	白色粒・砂粒	口縁一帯	カマド
3	土師器	壺	(28.0)	—	—	口縁部・頸部外外面ミガキ。	棕	白色粒・石英	口縁一帯	覆土
4	土師器	壺	—	—	9.3	底部破片。刷下端～底部手持ちヘラケズリ。	浅黄橙	白色粒・石英	底	覆土
5	土師器	小型壺	(12.6)	—	—	頸部に輪積み模、外面縦ミガキ。内面ナデ。	棕	白色粒	口縁一帯	覆土
6	土製品	支脚	表面に指頭痕を残す土製支脚下端部破片。			にぶい赤褐色	白色粒・石英	破片	カマド	
7	土製品	支脚	表面に指頭痕を残す土製支脚上部破片。				白色粒・石英	破片	覆土	



第54図 SI18出土遺物

第53図 SI18

SI18（第53・54図、第19表、遺構図版7、遺物図版4）

調査区西側のF-7・F-8・G-7・G-8グリッドに位置する。耕作土と牛蒡のトレントチャーヤによって遺構の遺存状態は非常に悪く、遺構確認面で既に床面が露出・消失している状態であった。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-Sである。規模は東西方向2.80m、南北方向2.50m、残存壁高は8cm。覆土は暗褐色土の単層である。カマドは北壁中央に位置するが、火床部の焼土のみが僅かに残存している状態であった。掲載遺物は3点で、内面黒色処理の土師器壺・皿、手捏土器がある。時期は明瞭ではないが、9世紀後半と考えられる。

第19表 SI18出土遺物観察表

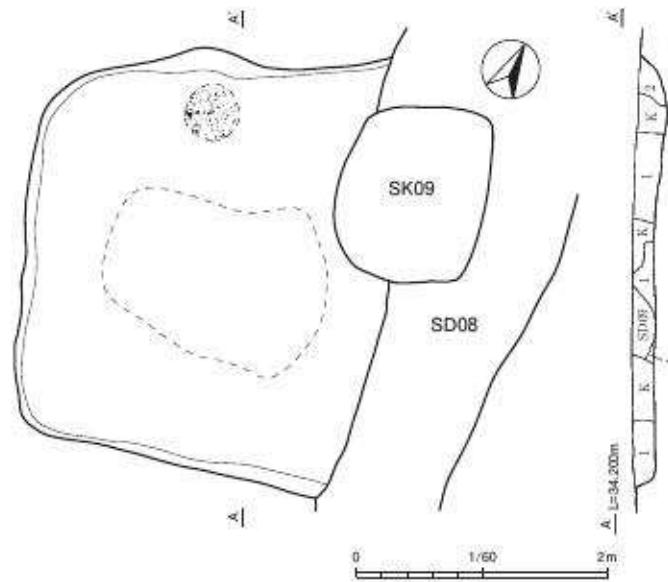
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	(13.5)	—	—	内黒の口縁部破片。内面ミガキ、皿の可能性がある。	黄橙	白色粒・雲母	口縁	覆土
2	土師器	壺	(16.0)	—	—	内黒の口縁部破片。内面横ミガキ、皿の可能性がある。	灰褐	白色粒・雲母	口縁	覆土
3	土製品	手捏土器	(4.0)	(3.0)	(3.4)	底部は平底で体部は短く立つ。内外面に指痕痕を残す。	棕	白色粒・石英	口縁-底	覆土

SI19（第55・56図、第20表、遺構図版7、遺物図版5）

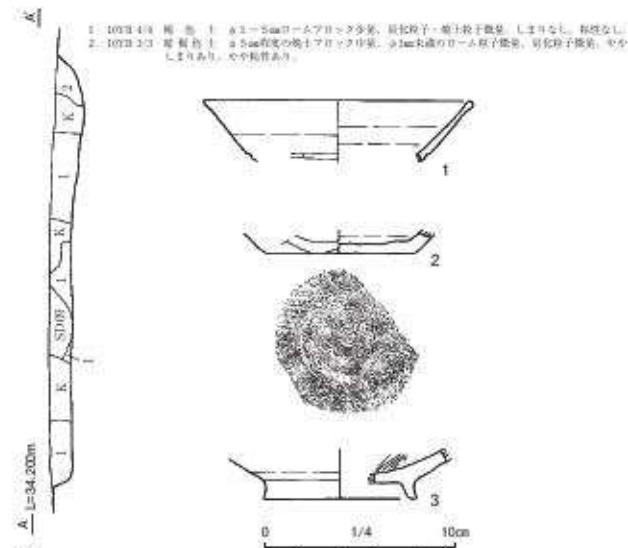
調査区西側のF-6グリッドに位置する。遺構の東側はSD09、SD10、SK09に切られて消失し、残存部も牛蒡のトレントチャーヤを受けており、遺構の遺存状態は非常に悪い。平面形は方形基調で、主軸方向はN-22°-Wである。規模は東西方向2.80m以上、南北方向3.40m、残存壁高は20cm。覆土はカマド部分を含めて3層に分層される自然堆積である。残存する床面の中央部からは硬化面が検出されている。カマドは北壁中央西寄りに位置し、火床部の焼土が僅かに残存している状態であった。掲載遺物は3点で、土師器壺・高台付壺がある。時期は明瞭ではないが、9世紀中葉～後半と考えられる。

第20表 SI19出土遺物観察表

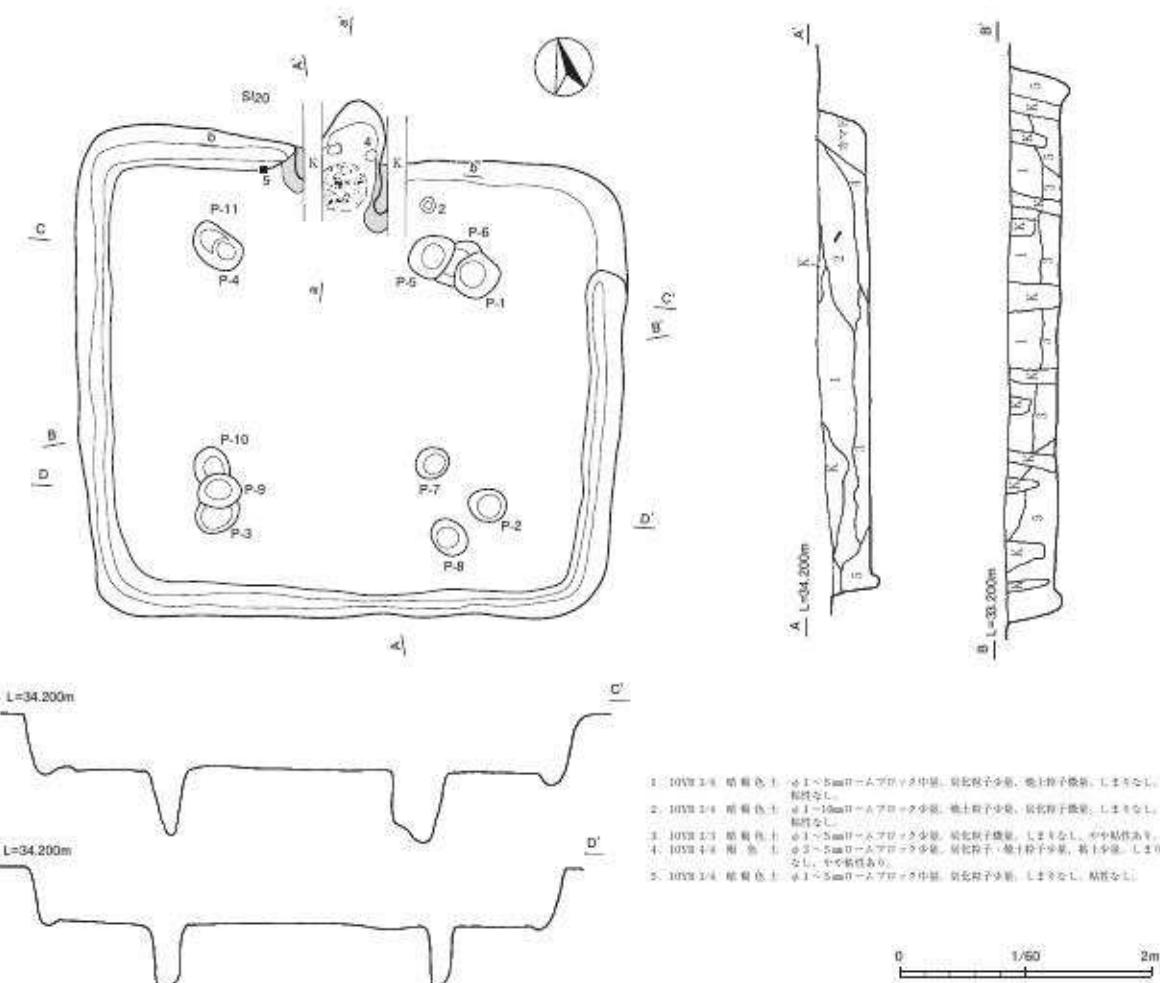
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	(14.0)	—	—	口縁破片。体部は直線的に開く。	赤褐	白色粒・雲母	口縁	覆土
2	土師器	壺	—	—	8.0	体部下端ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り残ナゲ。	にぶい褐	白色粒・雲母	底	覆土
3	土師器	高台付壺	—	—	(8.0)	内面ミガキ。高台はハの字状に開く。構成が非常に良く堅緻。	明赤褐	白色粒・雲母	底	覆土



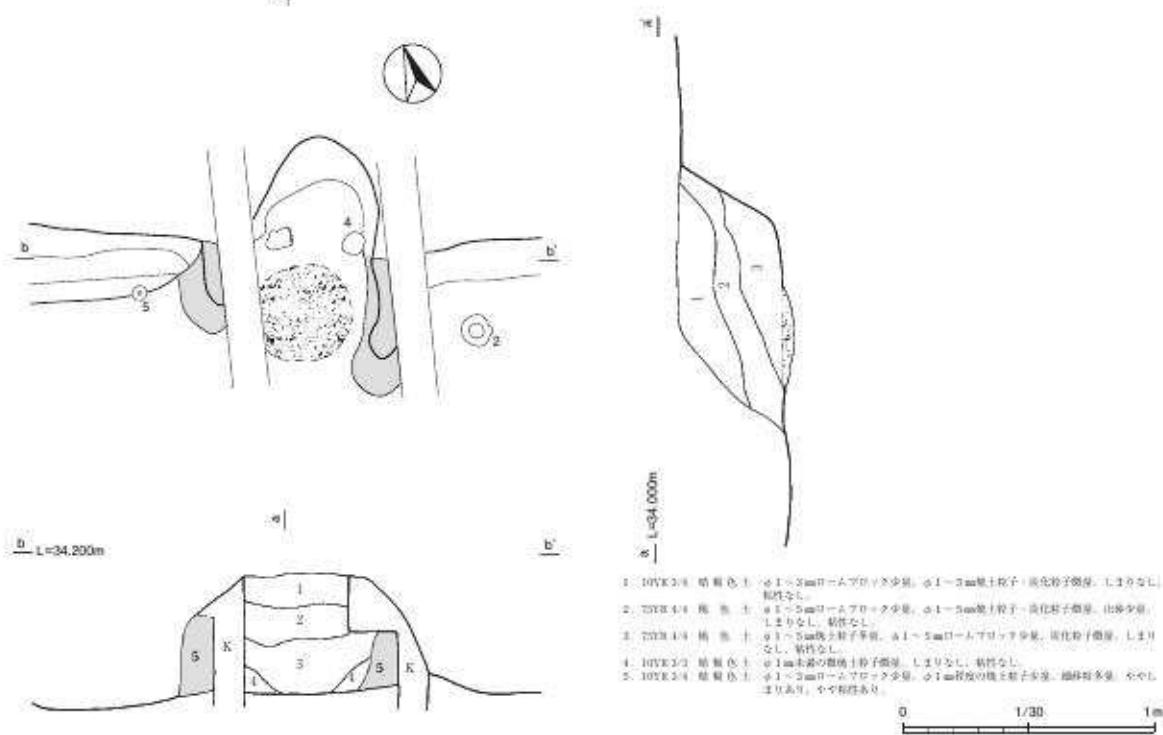
第55図 SI19



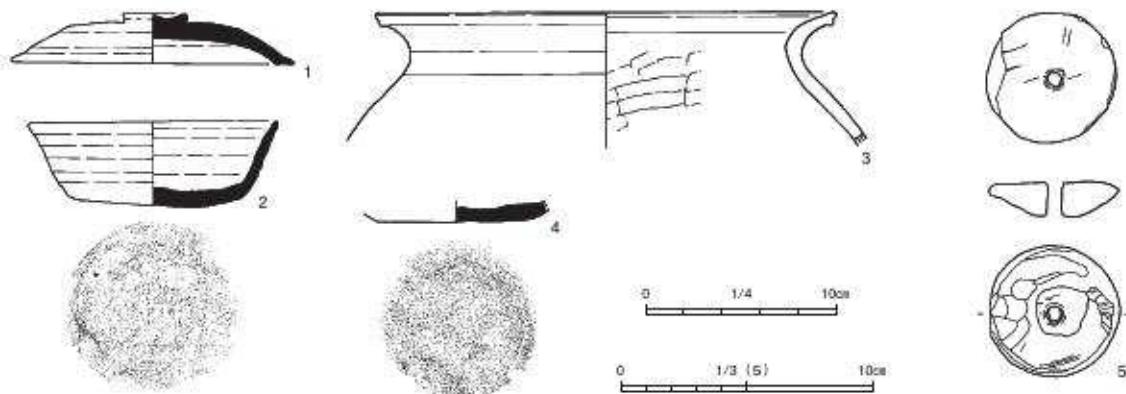
第56図 SI19出土遺物



第57図 SI20



第58図 SI20 カマド



第59図 SI20出土遺物

SI20（第57・58・59図、第21表、遺構図版7、遺物図版5）

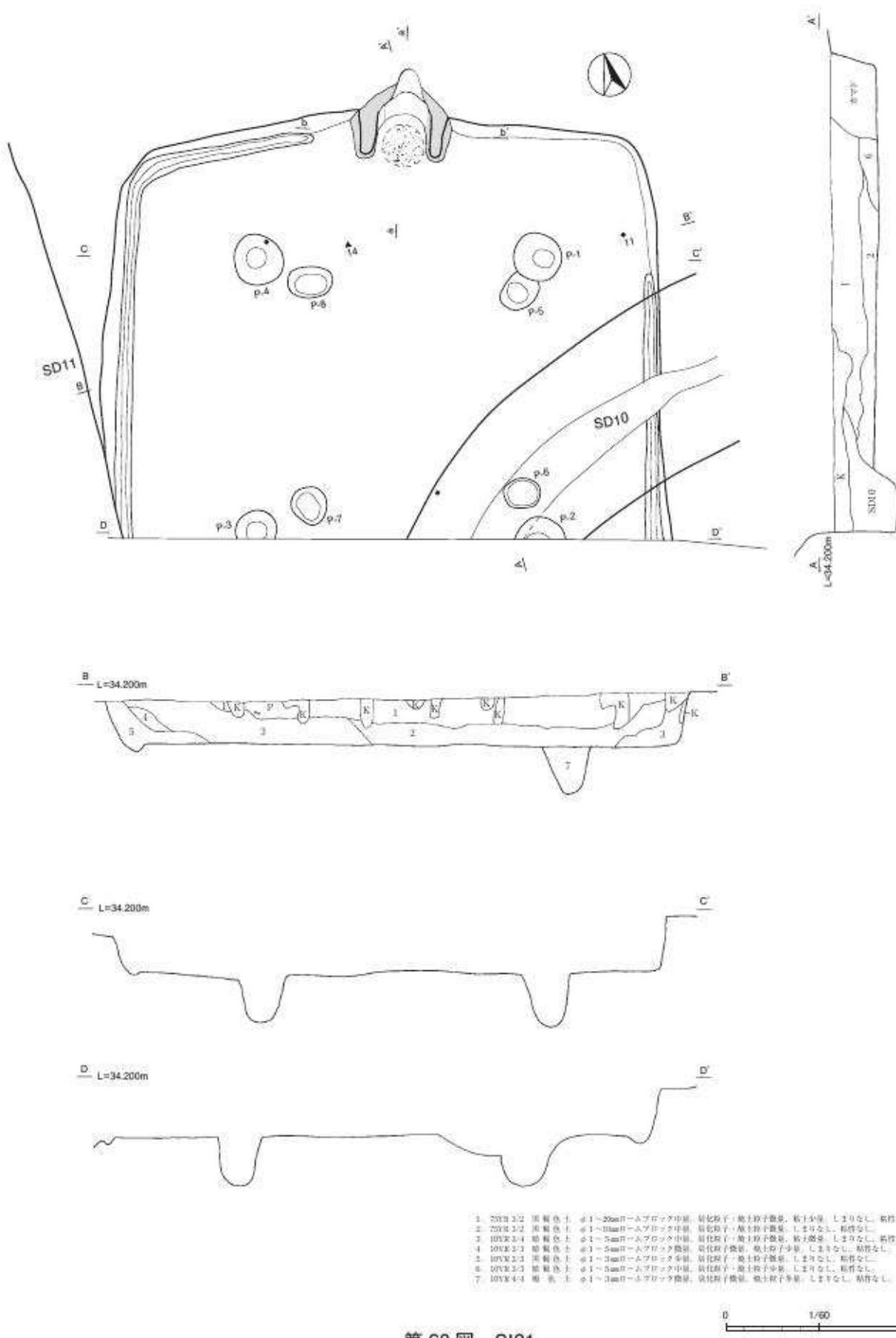
調査区西側のF-5・F-6グリッドに位置する。平面形は台形気味の方形を呈し、主軸方向はN-18°-Eである。規模は東西方向4.00~4.35m、南北方向3.60~3.85m、残存壁高は60cm。覆土は5層に分層される自然堆積である。床面は平坦であるが、牛蒡のトレーンチャーチを受けており、顕著な硬化面は確認されなかった。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴が検出されている。カマドは北壁中央の東寄りに付設され、残存する袖部は褐色の粘土で構築されていた。壁溝はカマド部分から北東隅部を除いて確認され、幅10~15cm、深さ10cmである。主柱穴は基本的配置で検出され、径30~40cm、深さ25~40cmである。柱穴はP-1とP-3が3基の重複、P-4が2基の重複とみられ、P-2部分では3基が離れて検出されており、複数回の建て替えが行われたと考えられる。遺物はカマド付近を主体として出土し、5点を図示した。須恵器蓋・坏、土師器壺、石製紡錘車がある。時期は7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

第21表 SI20出土遺物観察表

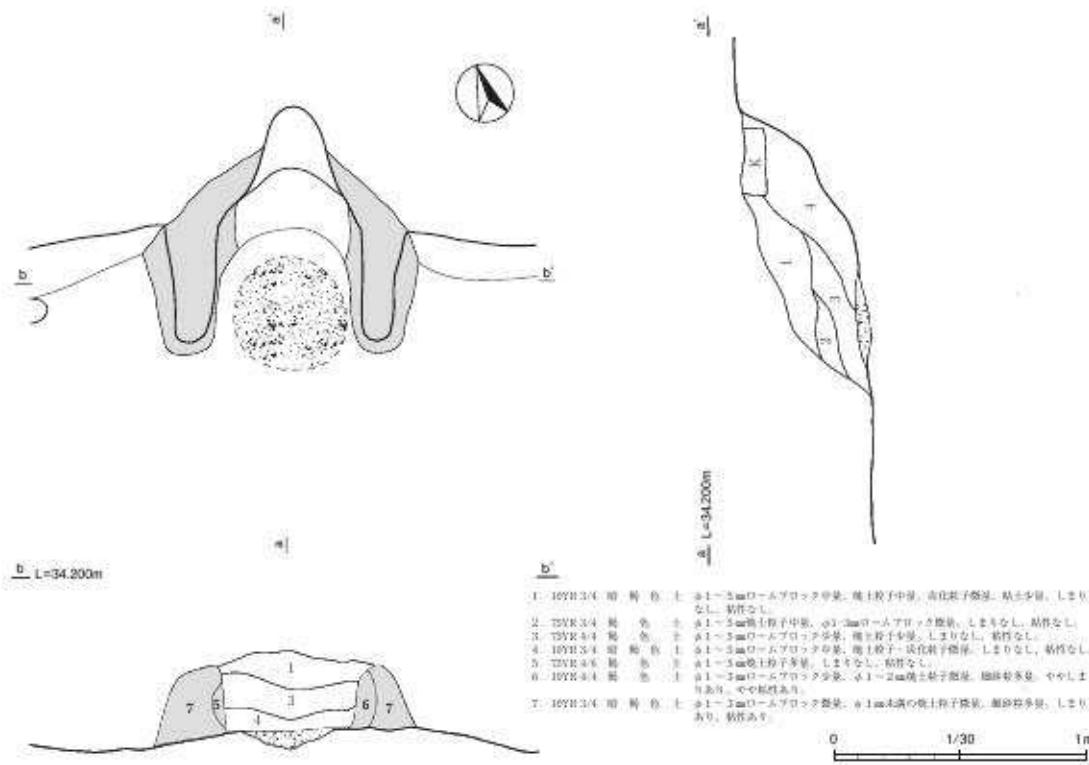
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	(14.8)	(2.6)	—	扁平な擬宝珠状の蘋み。天井部回転ヘラケズリ。退化した返しがある。	にぶい 黄	白色粒・雲母	撰み~口縁	覆土
2	須恵器	坏	13.0	4.5	9.2	丸底気味の底部。内外面クロロ調整、底部手拌ちヘラケズリ。	灰	石英・雲母	完形	覆土
3	土師器	壺	(24.0)	—	—	常滑型壺。器面風化で調整不明瞭。内面横ヘタケズリ。	明赤褐	砂粒・石英	口縁	覆土
4	須恵器	坏	—	—	8.0	器面風化で調整不明瞭。丸底気味の底部は手拌ちヘラケズリ。	灰白	白色粒・雲母	底	カマド
5	石製品	紡錘車	上面径5.0cm、下面径1.9cm、孔径0.6cm、厚さ1.3cm、重さ37.98g、断面扁平な台形状を呈するほぼ完形の紡錘車。石材は粘板岩。							

SI21（第60・61・62・63図、第22表、遺構図版7、遺物図版5）

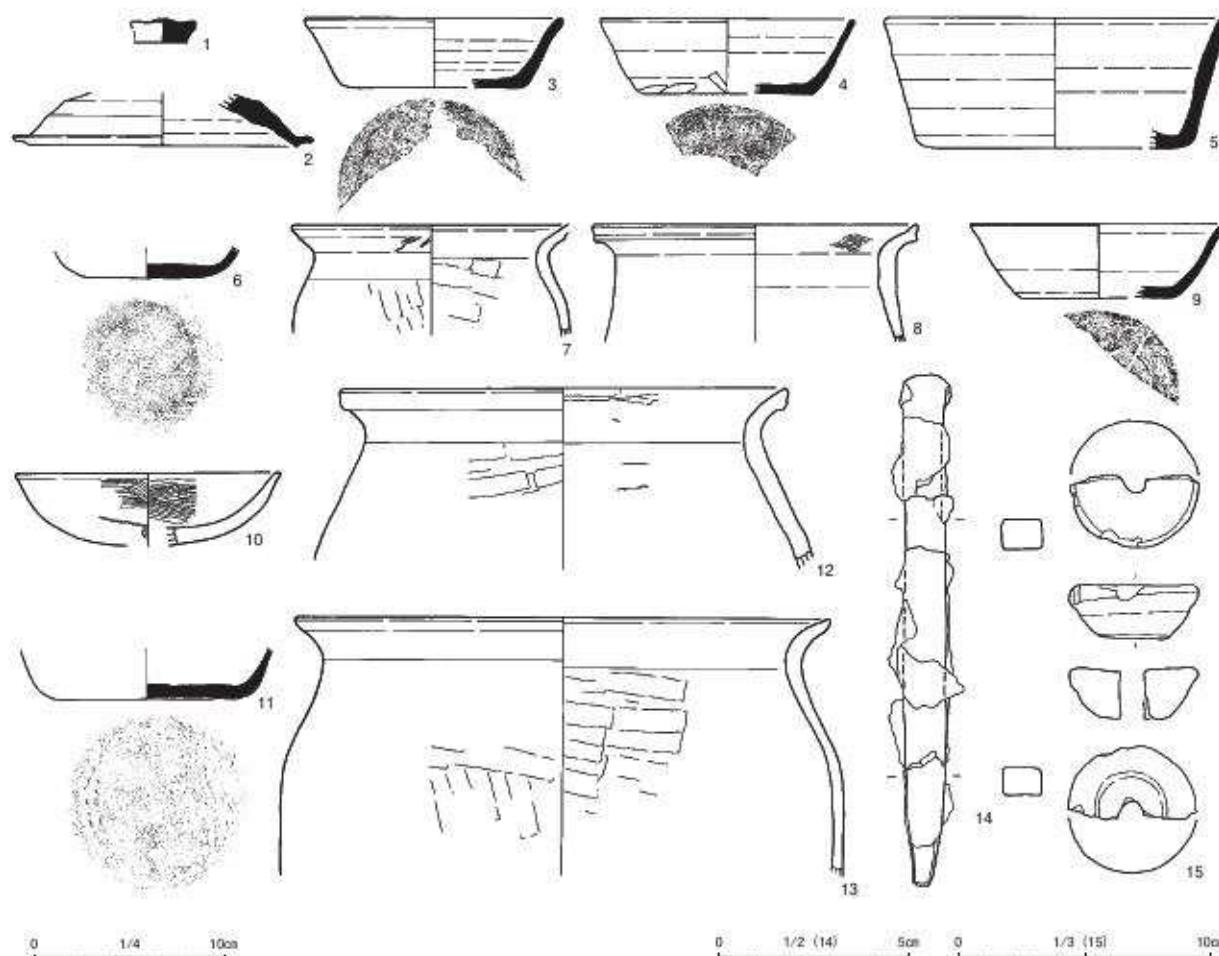
調査区西側のE-4・F-4グリッドに位置し、南列主柱穴の南側は調査区外になる。また、SD10及びSD11に壁の一部を切られている。平面形は方形基調で、主軸方向はN-17°-Eである。規模は東西方向6.00m、南北方向4.56m以上、残存壁高は60cm。覆土は5層に分層される自然堆積である。床面は平坦であるが軟弱で、顕著な硬化面は検出されなかった。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴4基が検出されている。カマドは北壁中央に付設され、煙道部は緩やかなスロープ状を呈して住居外に約40cm掘り込まれている。袖部は灰白色の粘土主体土で構築され、火床部からは赤褐色の明瞭な焼土が検出されている。壁溝はカマド部分から北東隅部を除いて確認された。巾10~16cm、深さ6~8cmである。主柱穴は基本的配置で検出され、P-1が径50cm、深さ60cm、P-2が径54cm、深さ50cm、P-3が径45cm、深さ50cm、P-4が径54cm、深さ50cmである。床下調査の段階でやや規模の小さい旧主柱穴と思われるビット4基（P-5~8）も検出されている。遺物は覆土中から多量に出土し、21点を図示した。須恵器蓋・坏、土師器坏・壺、土製紡錘車、土製支脚、手捏土器、鉄製品（釘）がある。時期は8世紀前半と考えられる。



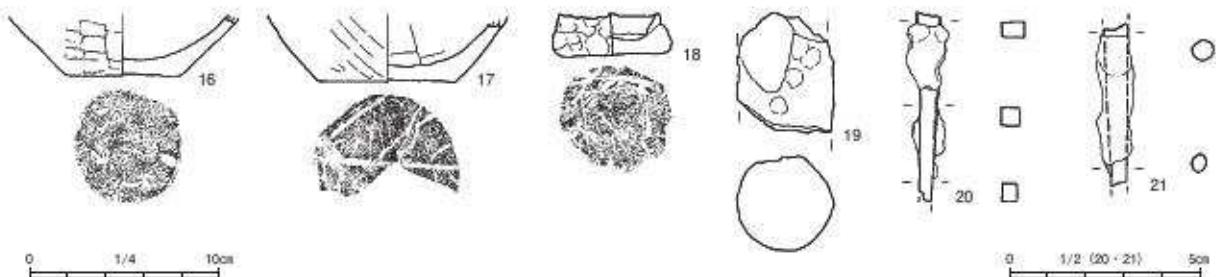
第60図 SI21



第61図 SI21 カマド



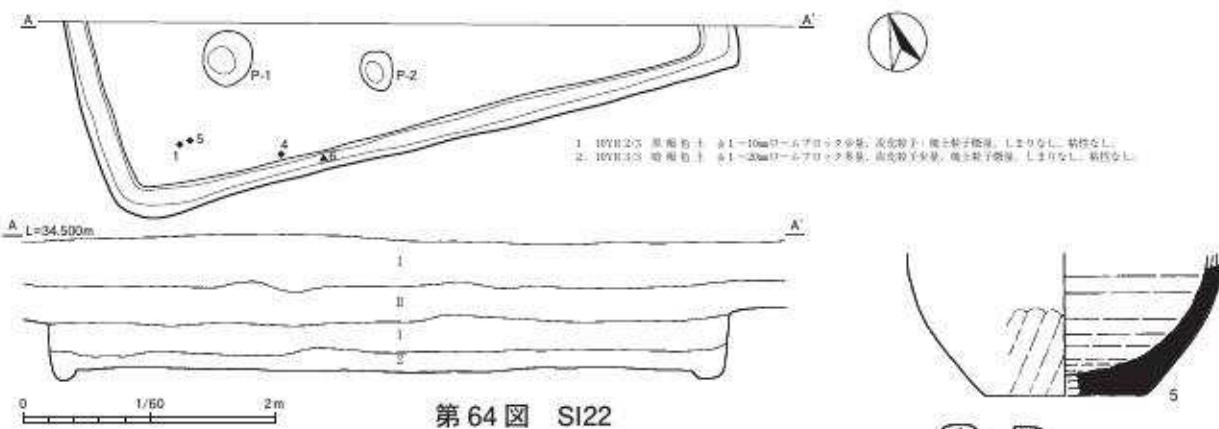
第62図 SI21 出土遺物 (1)



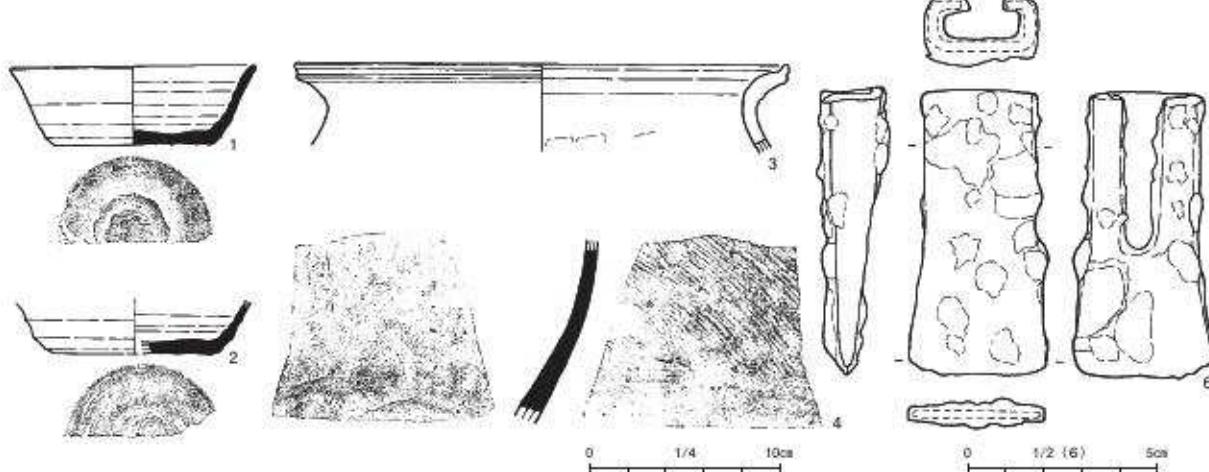
第63図 SI21出土遺物(2)

第22表 SI21出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	—	—	—	扁平な擬宝珠状の摘み。	灰	白色粒	摘み	覆土
2	須恵器	蓋	(11.0)	—	—	天井部回転ヘラケズリ。退化した返しがある。	橙	白色粒・薄粒	天井～口縁	覆土
3	須恵器	坏	(13.3)	(3.7)	(9.4)	外面口クロ調整、底部ヘラケズリ調整。	暗灰	白色粒・雲母	口縁～底	覆土
4	須恵器	坏	(13.2)	3.9	(8.9)	外面口クロ調整、体部下端～底部手持ちヘラケズリ。	灰	白色粒・石英	口縁～底	振り方
5	須恵器	坏	(17.7)	6.9	—	断面台形状を呈する大型の坏。内外面口クロ調整、底部回転ヘラ切り。	暗灰	白色粒・石英	口縁～底	覆土
6	須恵器	坏	—	—	6.3	丸底気味の底部。体部下端～底部手持ちヘラケズリ。	灰白	白色粒・石英・雲母	底	覆土
7	土師器	壺	14.4	—	—	外面縁ヘラケズリ、内面横ヘラケズリ。	橙	砂粒・雲母	口縁～頸	覆土
8	土師器	壺	(17.0)	—	—	常緑型小型壺口縁部破片。内外面ナデ。	にぶい赤褐	白色粒・石英・雲母	口縁～頸	覆土
9	須恵器	坏	(13.3)	(3.9)	(8.0)	器面風化で調整不明瞭。底部回転ヘラ切り。	橙	砂粒・石英	口縁～底	P-4
10	土師器	壺	(13.8)	3.8	—	扁平な半円形の坏。体部外面ヘラケズリ後ナデ、内面密なミガキ。	にぶい黄棕	白色粒・雲母	口縁～体	覆土
11	須恵器	坏	—	—	9.4	器面風化で調整不明瞭。底部回転ヘラ切り後ナデ。	浅黄	白色粒・石英・雲母	体～底	覆土
12	土師器	壺	(23.5)	—	—	常緑型壺。口縁部内面ミガキ、胴部外面ヘラケズリ。	橙	白色粒・雲母	口縁～頸	カマド
13	土師器	壺	(28.0)	—	—	常緑型壺。胴部内外面ヘラケズリ。	にぶい黄棕	白色粒・雲母	口縁～胴	振り方
14	鉄製品	釘	残長13.4cm、幅1.1cm、厚さ0.8cm、重さ42.58g。断面方形の釘。頭部を欠損する。							
15	土製品	筋糸車	上面径4.6cm、下面径2.5cm、孔径0.9cm、厚さ2.1cm、重さ27.01g。断面は台形状を呈する、約1/2を欠損する。							
16	土師器	壺	—	—	5.8	壺底部。胴部外面～底部ヘラケズリ。	橙	白色粒・石英・雲母	底	覆土
17	土師器	壺	—	—	7.2	壺底部破片。胴部外面ヘラケズリ、底部木葉痕。	橙	白色粒・雲母	底	覆土
18	土製品	手捏土器	5.1	22	5.3	底部は平底で体部は短く立つ。内外面指頭痕・輪積み紋。	橙	白色粒	完形	覆土
19	土製品	支脚	径5.0cm、表面に指頭痕を残す土製支脚上部破片。							
20	鉄製品	釘	残長5.0cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm、重さ4.75g。断面は方形。							
21	鉄製品	釘	残長4.0cm、径0.6cm、重さ3.80g。断面は円形。							



第64図 SI22



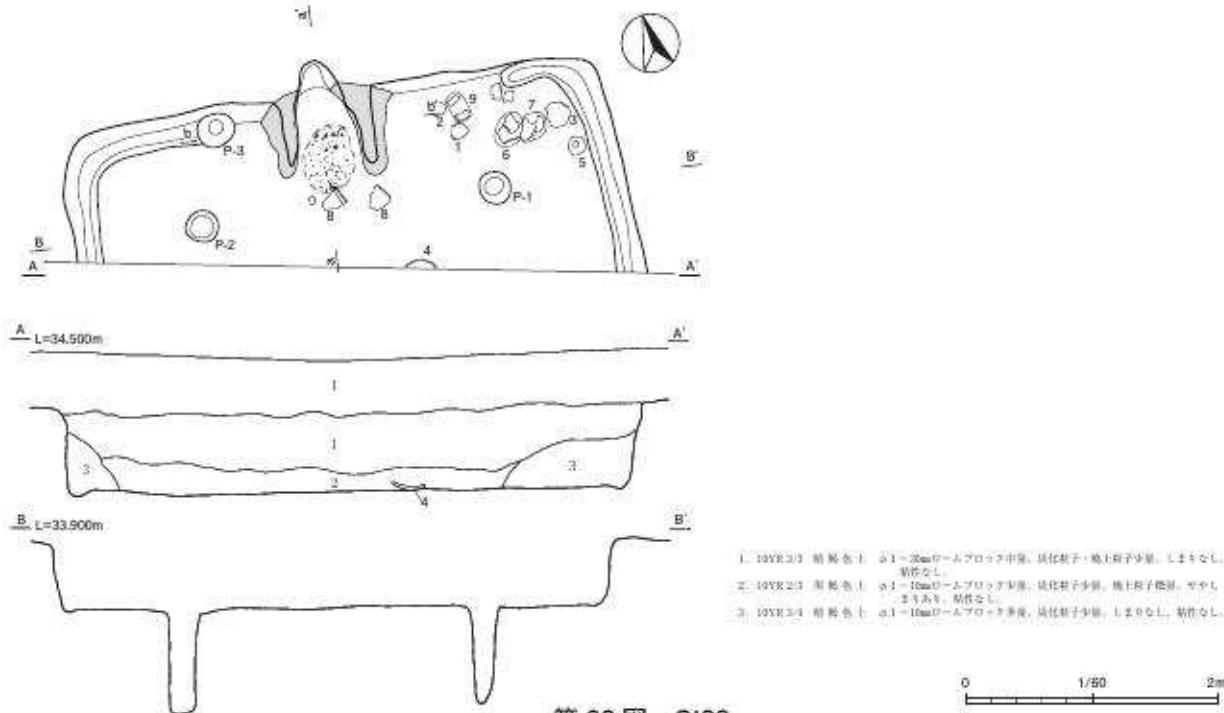
第65図 SI22出土遺物

SI22 (第64・65図、第23表、遺構図版7、遺物図版5)

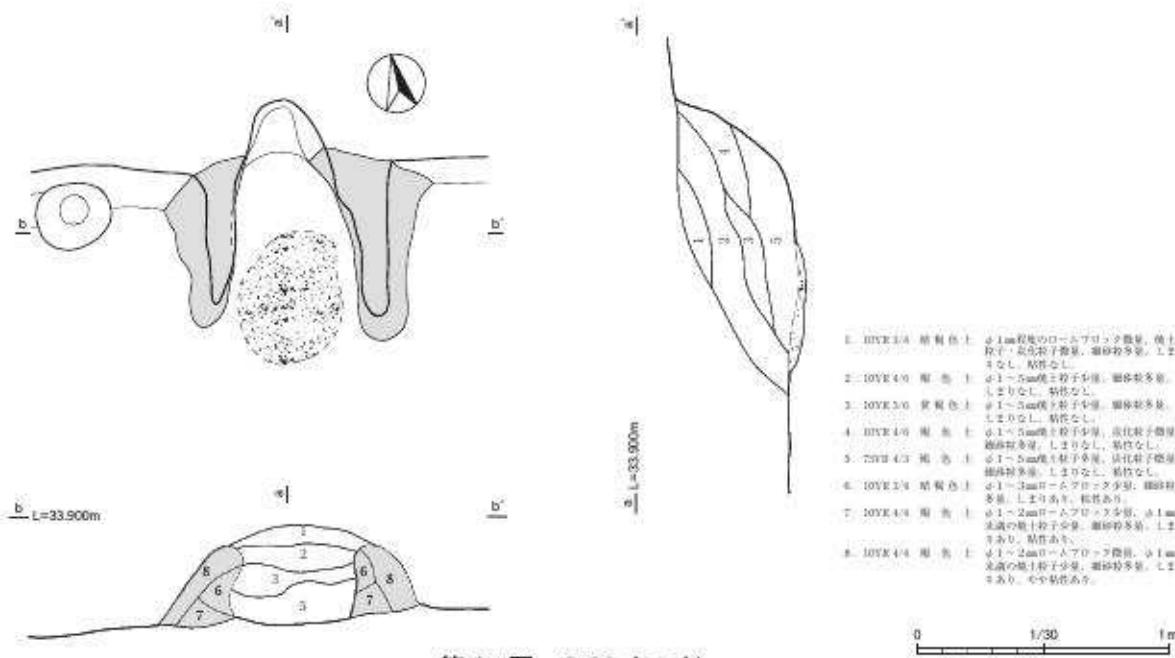
調査区西端部のD-2・D-3グリッドに位置する。住居の南壁際のみ検出したもので、遺構北側の大部分が調査区外になるため、詳細は不明である。平面形は方形基調で、規模は東西方向5.16m、残存壁高は44cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。付帯施設は壁溝、主柱穴1基、出入り口に伴う可能性のあるピット1基が検出されている。壁溝は検出部分全ての壁際で確認され、幅10~14cm、深さ10cmである。主柱穴(P-1)は径42cm、深さ45cmである。出入口ピットと思われるP-2は径35cm、深さ30cmである。掲載遺物は6点で、須恵器壺・甕・鉢、土師器甕と鉄製品（斧）がある。時期は8世紀前半と考えられる。

第23表 SI22出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	壺	13.0	4.1	(8.2)	内外面クロコ溝整、底部回転ヘラ切り。	灰黄	石英・骨針	口縁～底	床面
2	須恵器	壺	—	—	(8.4)	内外面クロコ溝整、底部回転ヘラ切り。	灰白	板密・墨母	体部～底	覆土
3	土師器	甕	(26.0)	—	—	常緑型甕口縁部破片。内外面ナデ。	にぶい 黄根	石英・雲母	口縁	覆土
4	須恵器	甕	—	—	—	甕胴部片。外面平行叩き、自然釉。	灰	砂粒・長石	剥破片	床面
5	須恵器	鉢	—	<7.4>	(8.2)	内外面クロコ溝整。体部下端～底部手持ちヘラケズリ。	灰黄	砂粒・長石・石英	底部～体	床面
6	鉄製品	斧	長さ7.5cm	身幅3.0cm	刃部幅3.6cm	装着部厚さ1.4cm、刃部厚さ0.4cm、重さ88.61g、完形の鉄斧。装着部は折り返して半袋状を呈す。				床面



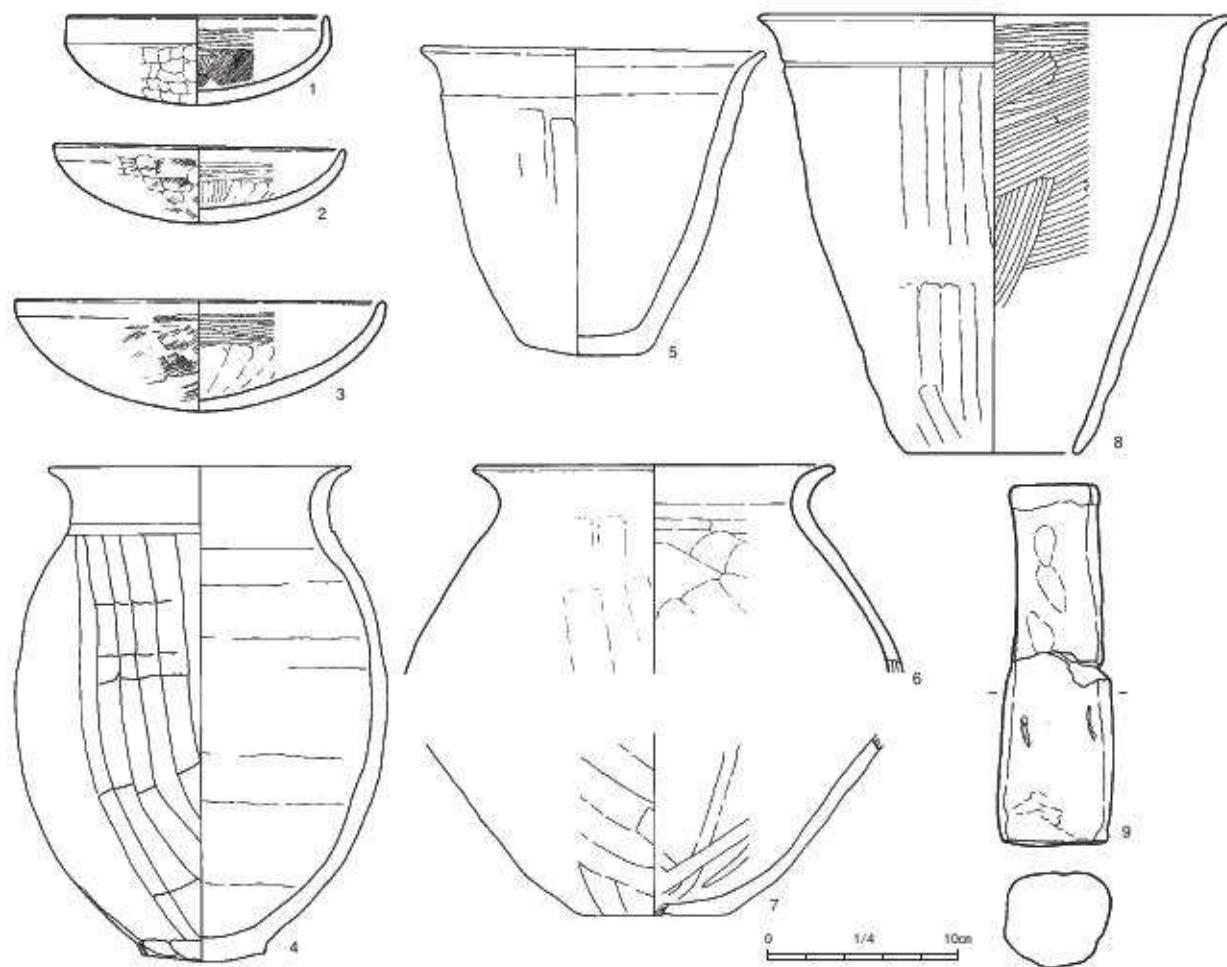
第66図 SI23



第67図 SI23 カマド

SI23 (第66・67・68図、第24表、遺構図版8、遺物図版6)

調査区西端部のE-1グリッドに位置する。カマドが付設される北壁側のみ検出されたもので、遺構南側の大部分が調査区外になる。平面形は方形基調で、東西方向4.40m、残存壁高は50cm。覆土は3層に分層される自然堆積である。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴2基が検出されている。カマドは北壁中央に位置し、火床部から赤褐色の明瞭な焼土が検出されている。袖部は灰褐色粘土主体で構築されていた。壁溝はカマド部分を除いて確認され、幅10cm、深さ6cmである。主柱穴はP-1が径27cm、深さ34cm、P-2が径26cm、深さ45cmである。遺物はカマド周辺から北東隅部の床面に集中して出土しており、9点を図示した。土師器壊・甕・瓶と土製支脚がある。時期は6世紀後半と考えられる。



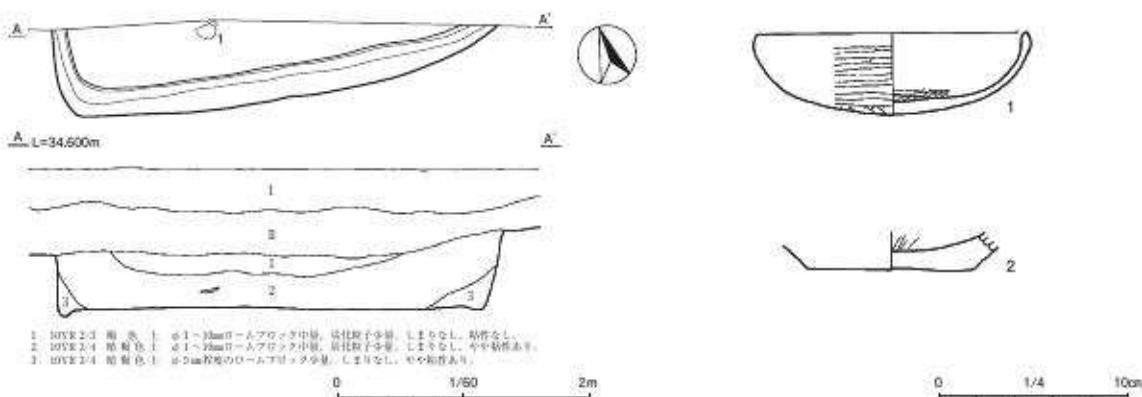
第68図 SI23出土遺物

第24表 SI23出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	13.6	4.7	—	須恵器壺身横微環。体部外面ヘラケズリ、内面ミガキ。	灰黄褐色	砂粒・長石・石英	口縁-底	床面
2	土師器	壺	15.2	4.0	—	扁平な半円形の壺。体部外面ヘラケズリ、内面密なミガキ。	にぶい 黄褐色	緻密・長石・石英	口縁-底	床面
3	土師器	壺	19.4	5.8	—	扁平な半円形の壺。体部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	灰黄褐色	緻密・長石・石英	口縁-底	床面
4	土師器	甕	17.2	29.0	7.1	丸底気味の底部で最大径を胴部にもつ。胴部外面縫ヘラケズリ、内面ナデ。	明赤褐色	白色粒・白色款	完形	床面
5	土師器	小型甕	18.0	16.2	6.0	丸底気味の底部で胴部は直線的に開く。器面荒れ調整不明瞭。	明赤褐色	白色粒・石英・雲母	完形	床面
6	土師器	甕	18.4	10.9	—	胴部に最大径をもつ甕上半部。胴部内外面ヘラケズリ。	にぶい 黄褐色	砂粒・小砾・石英	口縁-胴	床面
7	土師器	甕	—	—	18.0	甕底部片。胴部下端ヘラケズリ。	橙	白色粒・石英・雲母	底	床面
8	土師器	甕	24.5	23.15	9.0	頸部に棱が造り、胴部は直線的に開く。胴部外面縫ヘラケズリ、内面ミガキ。	橙	砂粒・石英	完形	床面
9	土製品	支脚	長さ19.1cm、径5.0-6.1cm、下端部周が太い棒状の土製支脚。表面に指頭痕。	—	—	赤褐色	雲母多量・砂粒	完形	覆土	

SI24（第69・70図、第25表、遺構図版8、遺物図版6）

調査区西端部のD-1グリッドに位置する。南壁側の一部のみ検出されたもので、遺構の大部分は調査区外になるため、詳細は不明である。平面形は方形基調で、東西方向3.50m以上、残存壁高は44cmである。覆土は3層に分層される自然堆積である。壁溝は検出部分全ての壁際で確認され、幅10cm、深さ8cmである。掲載遺物は完形の土師器壺と土師器甕底部の2点である。時期は6世紀後半と考えられる。

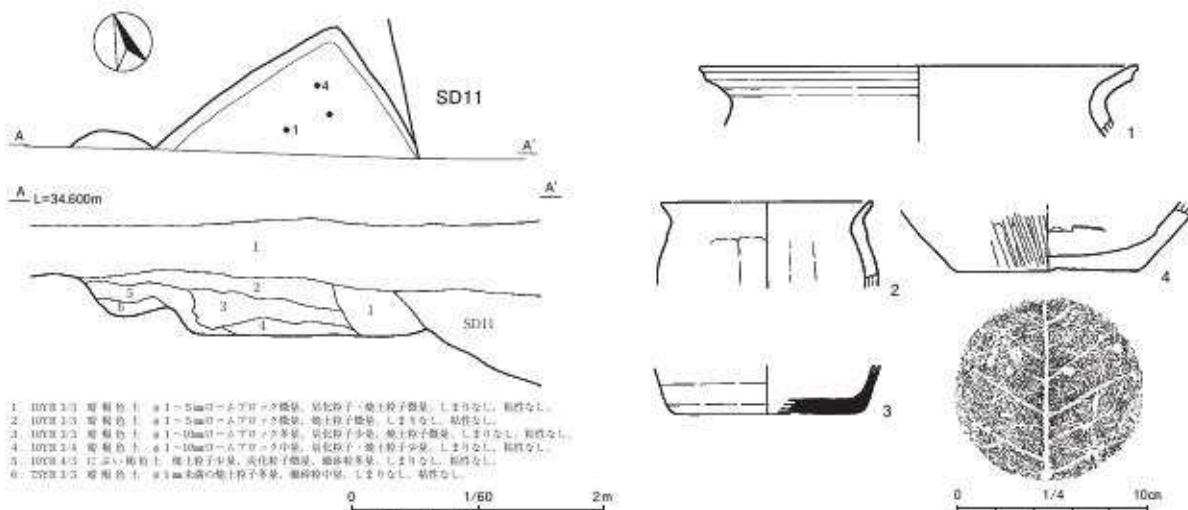


第69図 SI24

第70図 SI24出土遺物

第25表 SI24出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	14.0	4.3	—	扁平な半円形の壺。体部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	にぶい 橙	白色粒・石英・雲母	口縁～底	床面
2	土師器	甕	—	—	(8.6)	甕底部片。胴部下端・底部ヘラケズリ後ナデ。	黒	白色粒・雲母	底部	覆土



第71図 SI25

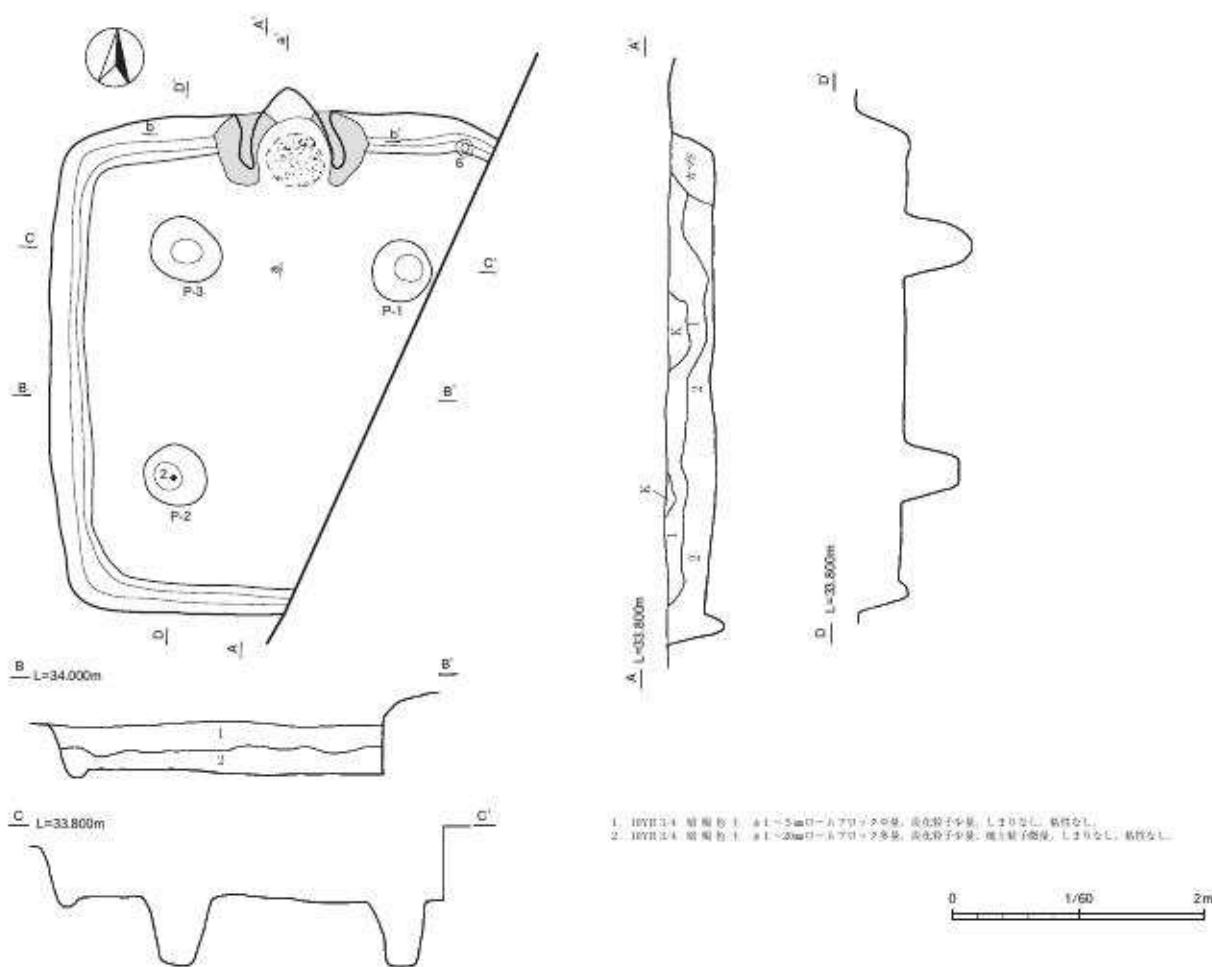
第72図 SI25出土遺物

SI25(第71・72図、第26表、遺構図版8、遺物図版6)

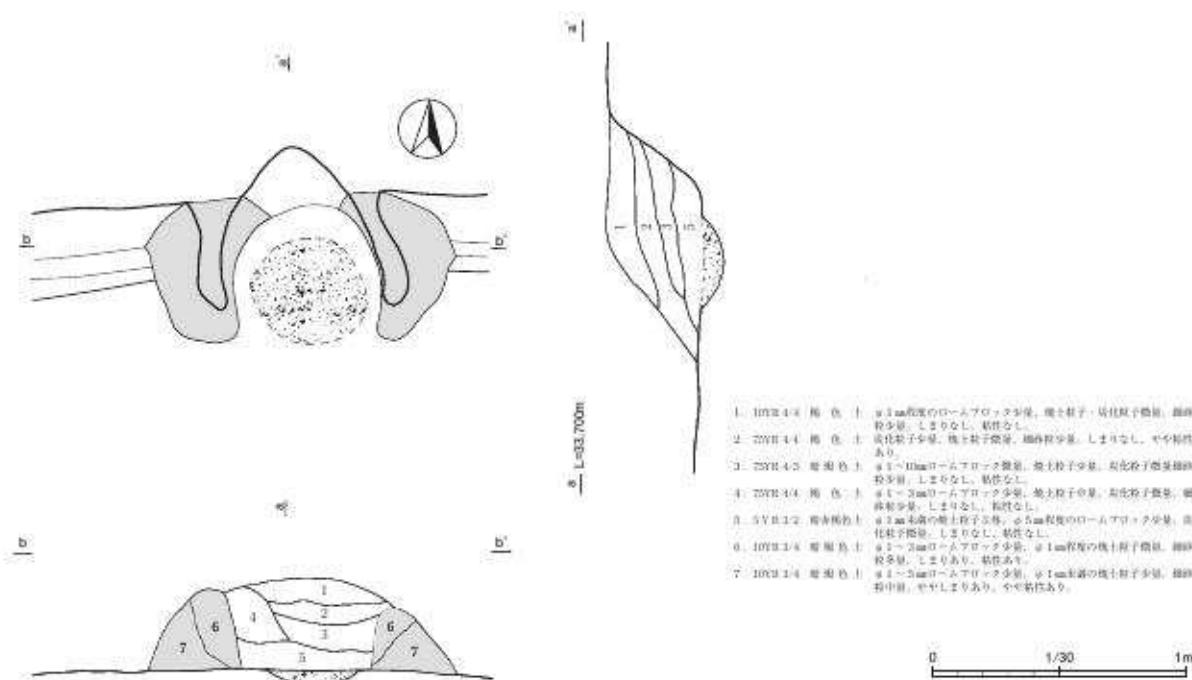
調査区西側のF-3グリッドに位置する。北東隅部とカマドの一部のみ検出されたもので、遺構の大部分が調査区外になるため、詳細は不明である。平面形は方形基調と思われ、残存壁高は35cm。覆土はカマド部分を含めて6層に分層される自然堆積である。カマドは北壁中央部に位置すると考えられる。掲載遺物は4点で、須恵器壺、土師器甕がある。時期は明瞭ではないが、8世紀前半と考えられる。

第26表 SI25出土遺物観察表

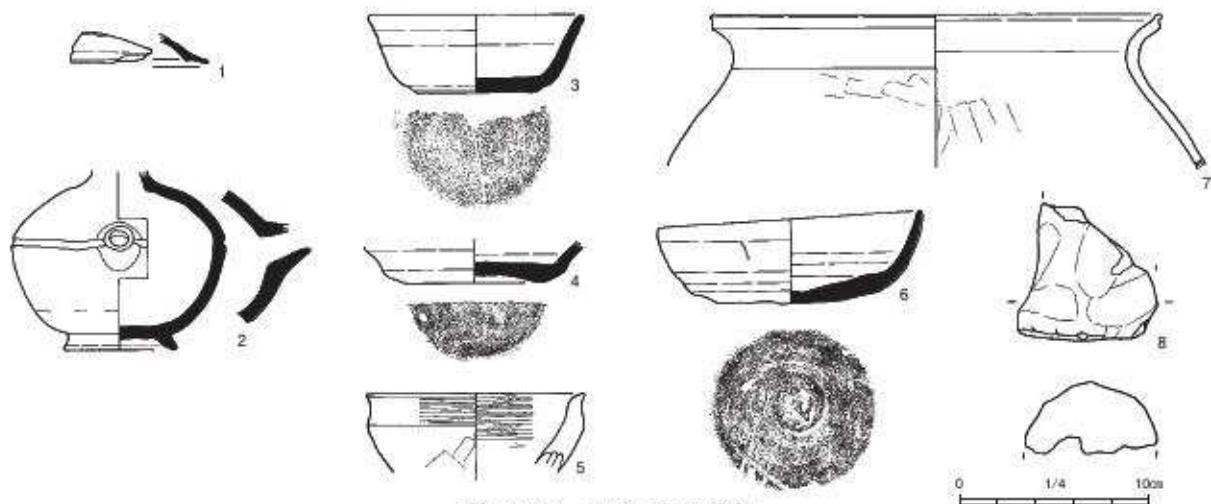
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	(23.0)	—	—	常遊型甕口縁部破片。口縁部内外面ヨコナデ。	橙	白色粒・石英・雲母	口縁	床面
2	土師器	小型甕	(11.0)	—	—	口縁部破片。口縁部ヨコナデ。胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	にぶい 赤褐	白色粒・雲母	口縁	覆土
3	須恵器	壺	—	—	(9.8)	内外面ロクロ調整、底部回転ヘラ切り後ナデ。	灰白	白色粒・雲母	体～底	覆土
4	土師器	甕	—	—	9.5	胴部下端ミガキ、内面ナデ、底部木葉痕。	にぶい 褐	石英・雲母	底部	覆土



第73図 SI26



第74図 SI26 カマド



第75図 SI26出土遺物

SI26（第73・74・75図、第27表、遺構図版8、遺物図版6）

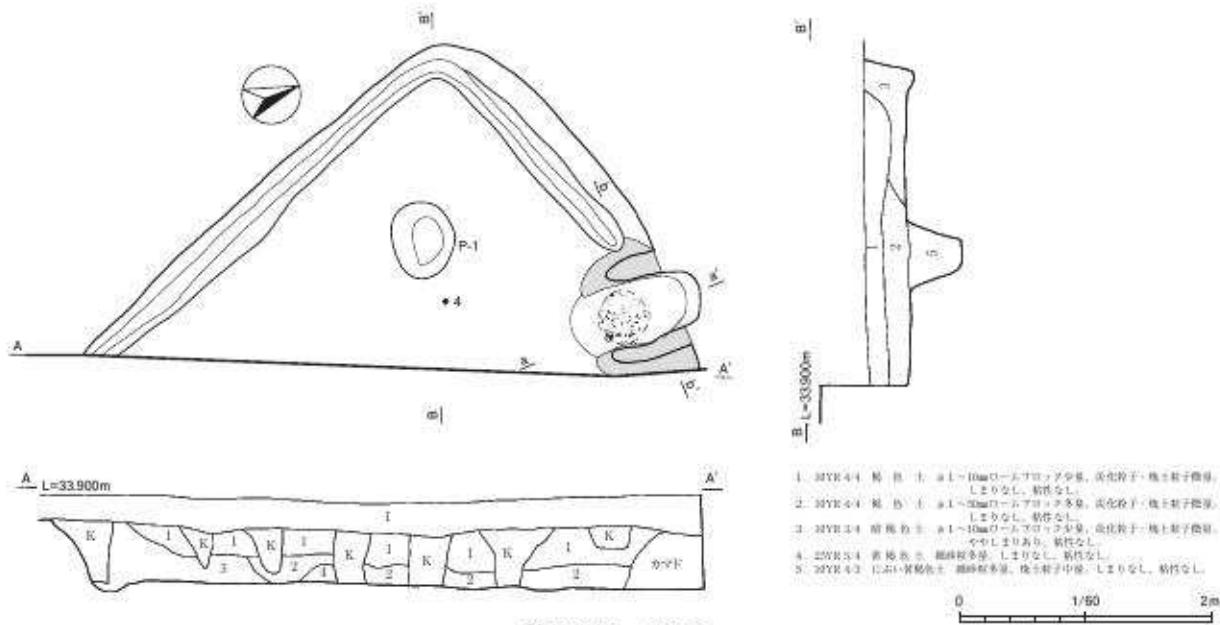
調査区北側のC-12・D-12グリッドに位置し、東壁側から南東隅部にかけて調査区外になる。平面形は方形基調で、主軸方向はN-3°-Wである。規模は東西方向3.30m以上、南北方向3.90m、残存壁高は40cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸があり、硬化面は検出されなかった。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴3基が検出されている。カマドは北壁中央に付設され、奥壁は急激に立ち上がり、煙道部は約20cm住居外に掘り込まれている。袖部は褐色粘土と砂の混土で構築されていた。壁溝はカマド部分を除いて確認され、幅12~15cm、深さ6~10cmである。主柱穴は基本的配置で検出され、P-1が径48cm、深さ50cm、P-2が径48cm、深さ50cm、P-3が径55cm、深さ46cmである。掲載遺物は8点で、P-2出土の須恵器底と須恵器蓋・坏、土師器坏・甕、土製支脚である。時期は7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

第27表 SI26出土遺物観察表

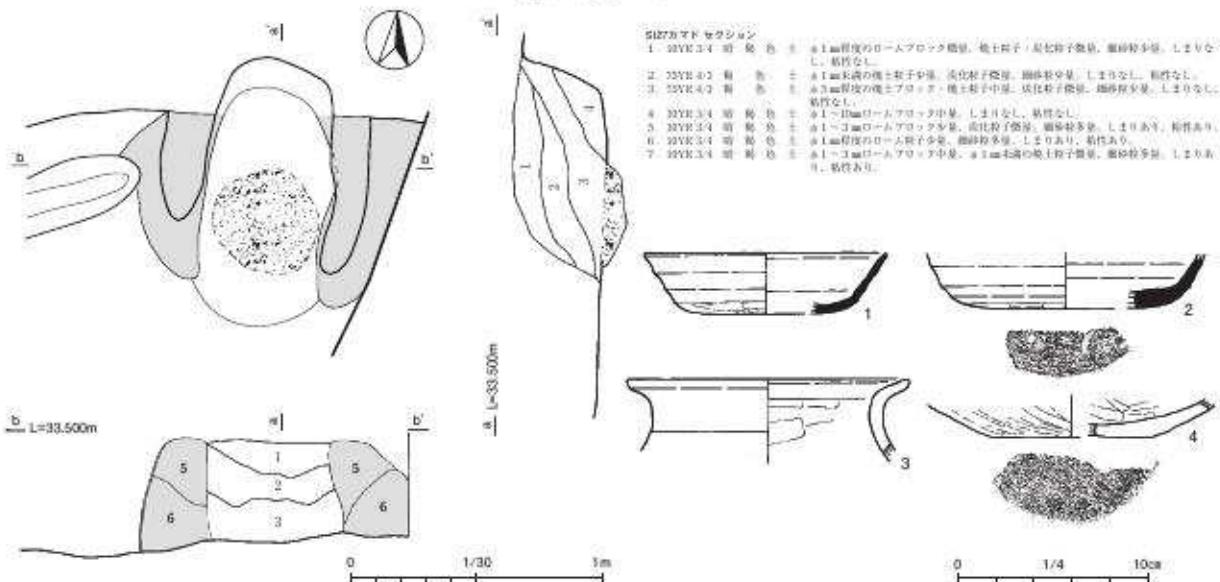
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	粘土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	—	—	—	退化した返しがある蓋口縁部破片。	にぶい黄	白色粘・石英・雲母	口縁	覆土
2	須恵器	底	—	<9.7>	5.9	肩部に流線が造り、注口が突出する。低い高台が付くタイプで、7世紀末~8世紀初頭の猿投窓岩崎41号窯式等に類似がある。	灰	白色粘・小礫	頭~底	P-2
3	須恵器	坏	(11.4)	4.1	6.0	内外面ロクロ調整、底部手持ちヘラケズリ。	灰	砂粘・小礫	口縁~底	カマド
4	須恵器	坏	—	—	(7.0)	内外面ロクロ調整、底部手持ちヘラケズリ。	灰	白色粘・砂粘	体~底	覆土
5	土師器	坏	(10.0)	—	—	口縁部破片。白線部ヨコナギ、体部外面ヘラケズリ。	にぶい赤褐	白色粘・雲母	口縁	覆土
6	須恵器	坏	13.9	4.7	8.6	丸底の底部。内外面ロクロ調整、底部回転ヘラ切り。	黒褐	白色粘	完形	覆土
7	土師器	甕	(23.5)	—	—	常緑型甕口縁部破片。肩部内外面ヘラケズリ。	棕	白色粘・雲母	口縁~頭	覆土
8	土製品	支脚	径7.4cm	—	—	表面に指頭痕を残す土製支脚下部破片。	にぶい赤褐	石英・雲母	下部	覆土

SI27（第76・77・78図、第28表、遺構図版9、遺物図版6）

調査区北側のD-12・E-12グリッドに位置する。カマドの付設される北壁から西壁側にかけてのみ検出されたもので、遺構東側は調査区内になるため、詳細は不明である。平面形は方形基調で、東西方向2.80m以上、南北方向3.60m以上、残存壁高は40cm。覆土は5層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸があり、硬化面は検出されなかった。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴1基が検出されている。カマドは北壁に付設されているが、煙道端部と右袖上部がSD11上端部との重複によって消失しているため、カマド全体がやや歪んだ様な状態で残存していた。袖部は灰褐色粘土と砂の混土で構築され、火床部からは赤褐色の明瞭な焼土が検出されている。壁溝はカマド部分を除いて確認され、幅15cm前後、深さ8cmである。1基のみ検出された主柱穴（P-1）は径60cm、深さ40cmである。掲載遺物は4点で、須恵器坏、土師器坏・小型甕口縁破片がある。時期は明瞭ではないが、7世紀末~8世紀初頭と考えられる。



第76図 SI27



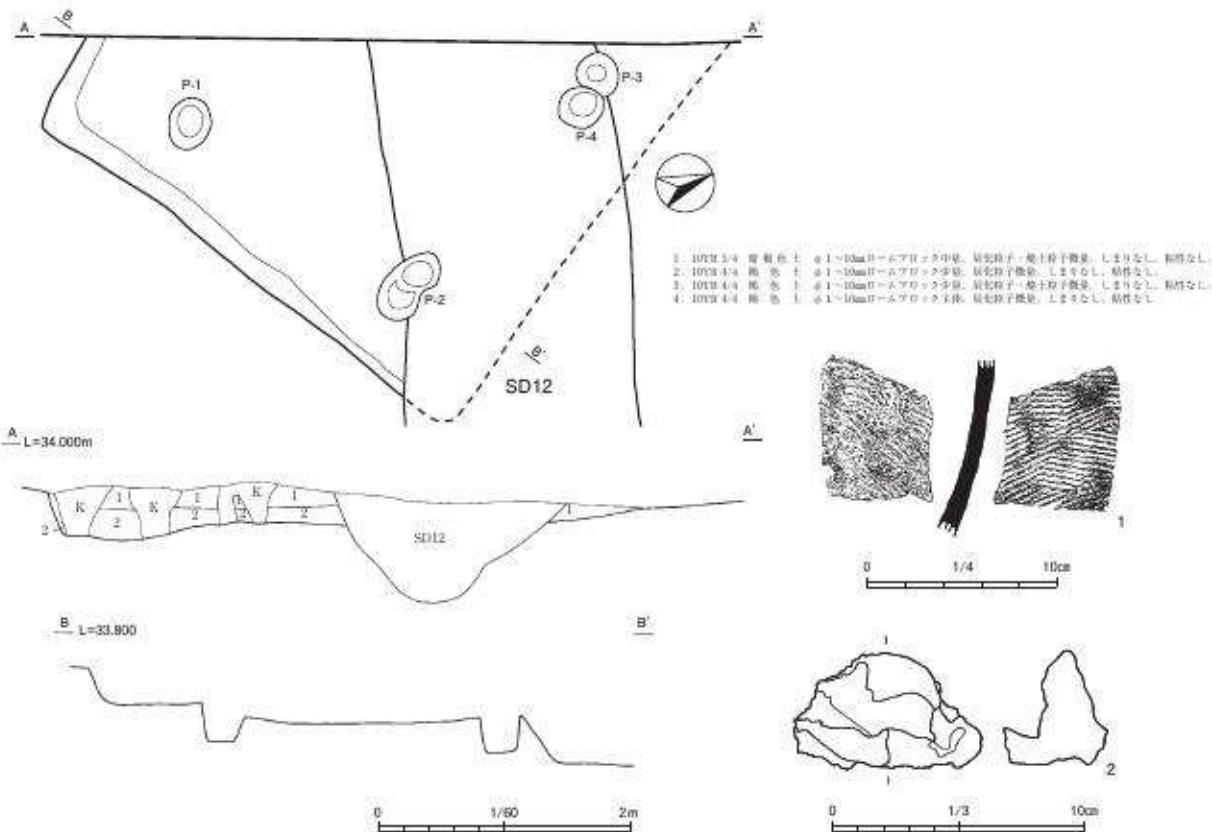
第78図 SI27 出土遺物

第28表 SI27 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	环	(12.6)	3.2	(6.2)	内外面クロクロ調整、底部下端・底部手持ちヘラケズリ。	灰白	砂粒・小砾	口縁～底	覆土
2	須恵器	坏	—	—	—	内外面クロクロ調整、底部回転ヘラ切り。	浅黄橙	砂粒・白色粒・雲母	体～底	カマド
3	土師器	小型甌	14.6	—	—	口縁部破片。口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	にぶい赤褐	砂粒・白色粒・雲母	口縁	カマド
4	土師器	甌	—	—	(8.4)	底部破片。胴部下端外縁ミガキ、底部手持ちヘラケズリ。	褐	小砾・白色粒・雲母	底	床面

SI28 (第79・80図、第29表、遺構図版9、遺物図版7)

調査区北側のD-11・D-12グリッドに位置する。西側は調査区内になり、北側はSD12に切られて消失している。平面形は方形基調で、規模は東西方向が推定4.10m前後、南北方向3.20m以上、残存壁高は30cmである。残存する床面の中央部からは硬化面が検出されている。付帯施設としては基本的配置の主柱穴が調査範囲から検出されている。規模はP-1が径41cm、深さ30cm、P-2は径32cm前後のピット2基の重複で、深さ40



第79図 SI28

cm、P-3は径33cm、深さ34cm、重複するP-4は径32cm、深さ38cmである。遺物は極少量で、須恵器甕胴部片と鉄滓の2点を図示した。時期的には伴う状況の出土遺物がなく、不明である。

第29表 SI28 出土遺物観察表

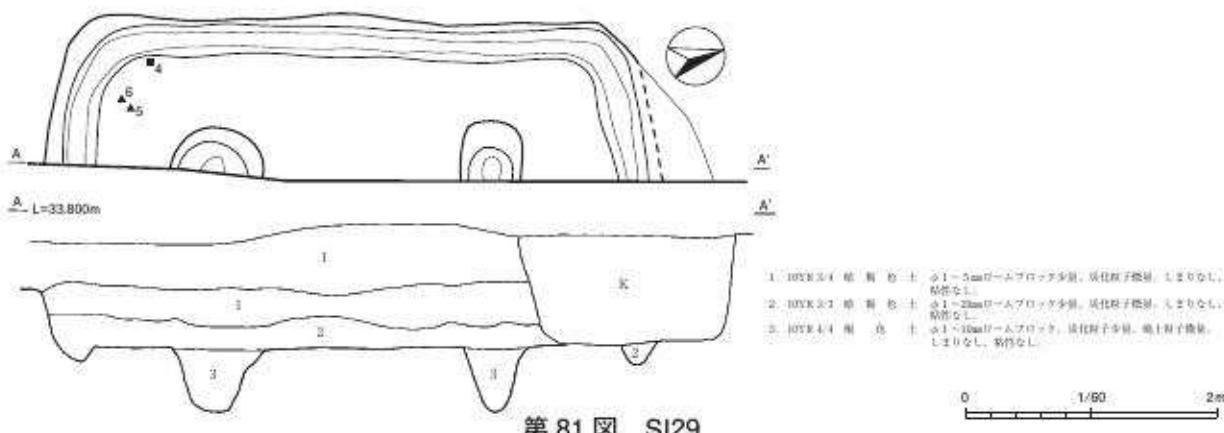
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	甕	—	—	—	甕胴部破片。内面同心円当て具痕、外面平行叩き。	暗灰	白色粒・雲母	胴	覆土
2	鉄滓	—	長さ4.6cm、径7.4cm、厚さ1.1cm、重さ114.0g、鍛冶滓と思われる。							覆土

SI29 (第81・82図、第30表、遺構図版9、遺物図版7)

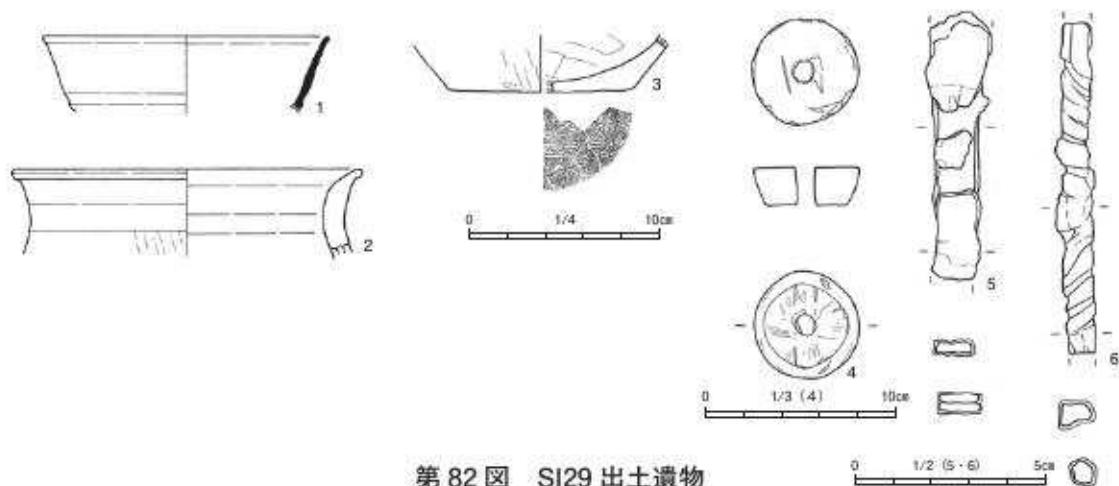
調査区北側のP-11グリッドに位置する。西列主柱穴の西側のみ検出されたもので、遺構の大部分が調査区外になるため、詳細は不明である。平面形は方形基調で、東西方向4.85m、残存壁高は42cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。付帯施設として壁溝、主柱穴2基が検出されている。壁溝は壁からやや離れた位置で確認され、検出部では全周している。幅15~20cm、深さ8~12cmである。主柱穴はP-1が径74cm、深さ50cm、P-2が径48cm以上、深さ46cmである。掲載遺物は6点で、須恵器壺、土師器甕と南西隅部から出土した石製紡錘車と鉄製品である。時期は明瞭ではないが、8世紀前半と考えられる。

第30表 SI29 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	壺	(15.0)	—	—	口縁部破片。ロクロ調整。	灰白	砂粒・白色粒・雲母	口縁	覆土
2	土師器	甕	(18.0)	—	—	甕口縁部片。口縁部ヨコナギ、胴部外面ヘラケズリ。	にぶい 黄褐色	砂粒・白色粒・雲母	口縁	覆土
3	土師器	甕	—	—	(9.6)	甕底部片、内面・底部ヘラケズリ。	黒	白色粒・雲母	底	P-2
4	石製品	紡錘車	上面径4.2cm、下面径3.2cm、孔径0.8cm、厚さ1.5cm、重さ37.96g、断面は台形状を呈する完形の紡錘車。石材は粘板岩。							床面
5	鉄製品	釘?	残長7.1cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ11.38g、断面は長方形を呈する。							床面
6	鉄製品	軸棒?	残長8.6cm、径0.7~1.0cm、重さ11.23g、断面は円形及び台形状を呈し、紡錘車の軸棒の可能性がある。							床面



第 81 図 SI29



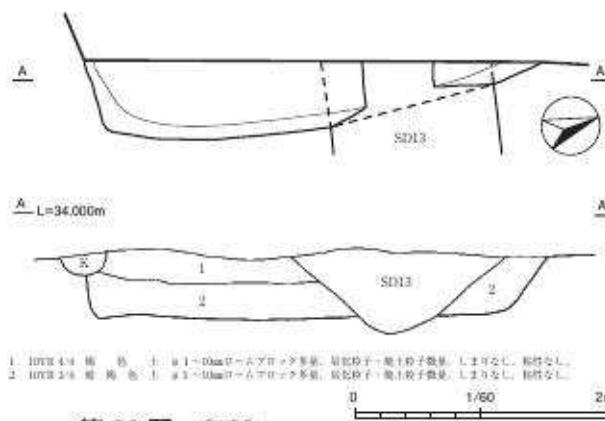
第 82 図 SI29 出土遺物

SI30 (第83・84図、第31表、遺構図版9、遺物図版7)

調査区北側のF-11グリッドに位置し、遺構の大部分は調査区外になる。住居の南壁際のみ検出されたもので、検出部分の一部もSD13に切られるため、詳細は不明である。平面形は方形基調で、規模は南北方向3.50m以上、残存壁高は50cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。掲載遺物は覆土出土の須恵器壺底部1点で、時期は明瞭ではないが、8世紀前半の可能性が高い。

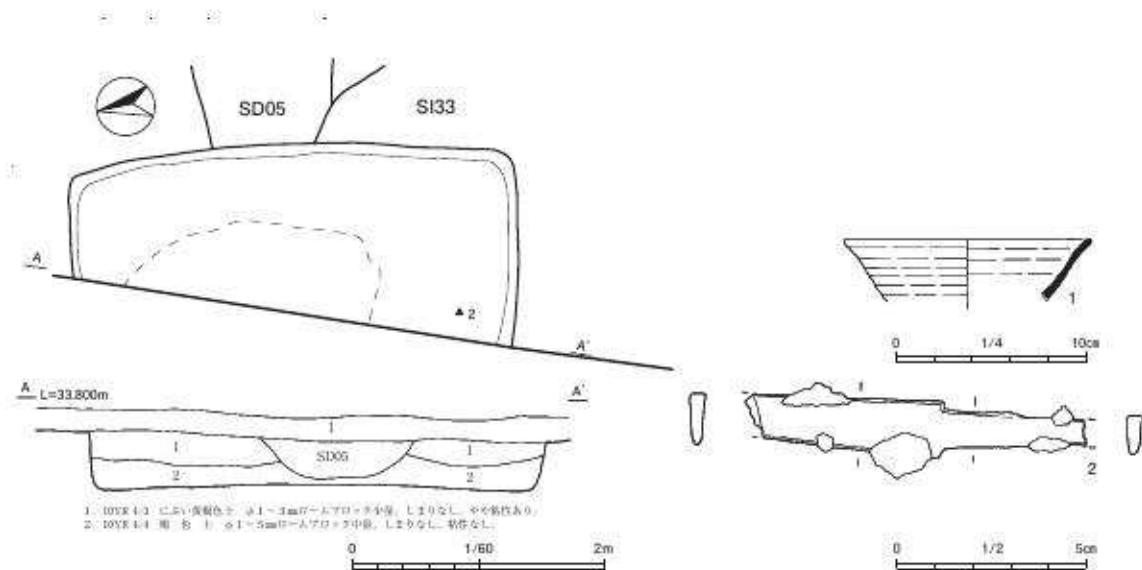
第 31 表 SI30 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
I	須恵器	壺	—	—	(7.6)	底部破片。底部ハラケズリ。	灰	白色粒・石英	底	覆土



第 83 図 SI30

第 84 図 SI30 出土遺物



第85図 SI31

第86図 SI31出土遺物

SI31（第85・86図、第32表、遺構図版9、遺物図版7）

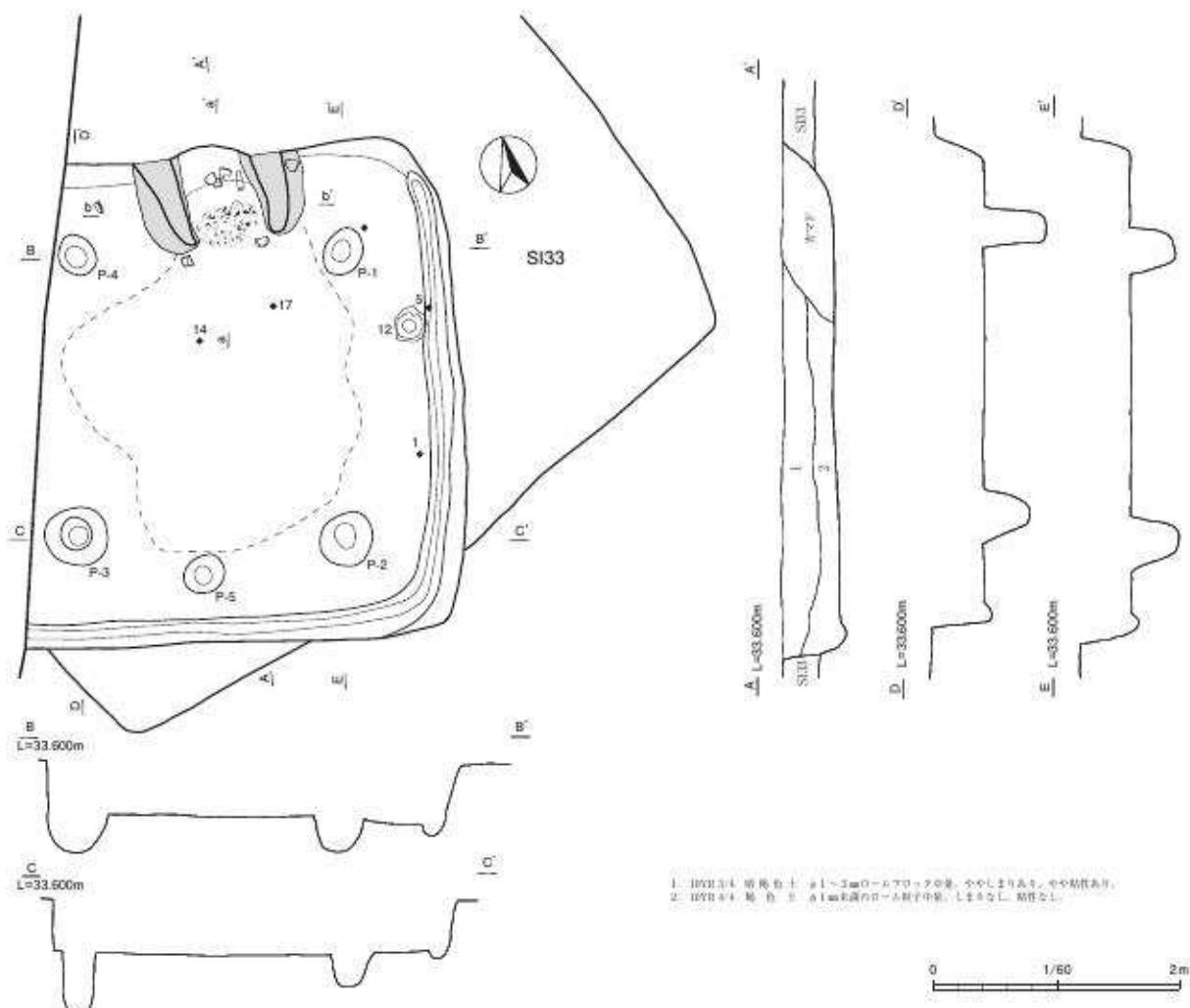
調査区中央部南側のH-10・I-10グリッドに位置し、西側の大部分が調査区外になるため詳細は不明である。SI33を切って掘り込まれ、覆土をSD05に切られている。平面形は方形基調で、南北方向3.56m、残存壁高は34cm。覆土は2層に分層される自然堆積である。床面は緩やかな凹凸があり、中央側から硬化面が検出されている。出土遺物は少量で、須恵器壺口縁部破片と床面上から出土した鉄製品（刀子）を図示した。時期は明瞭ではないが、8世紀前半の可能性が高い。

第32表 SI31出土遺物観察表

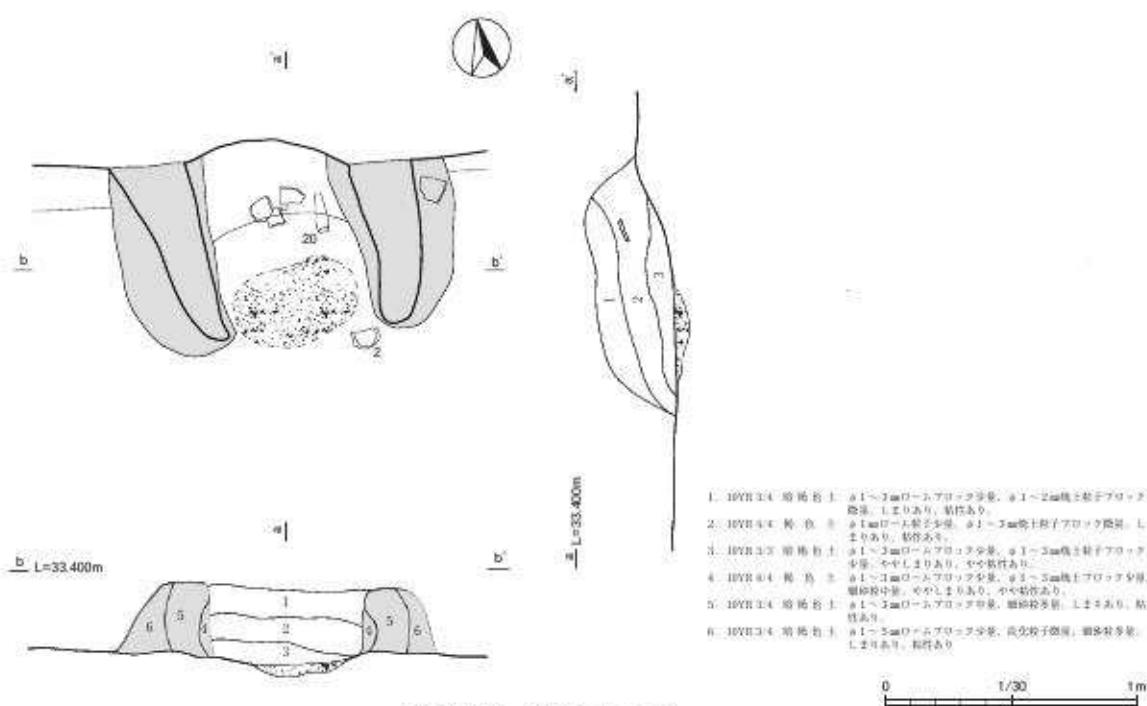
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	壺	(13.0)	—	—	口縁部破片、内外面クロト調整。	灰	白色粒・石英	口縁	覆土
2	鉄製品	刀子	残長9.0cm	刀身幅1.1～1.5cm	茎幅0.9cm	刀身厚さ0.4cm、基厚さ0.4cm、重さ11.41g、両刃の刀子、両端部を欠損する。				床面

SI32（第87・88・89図、第33表、遺構図版10、遺物図版8）

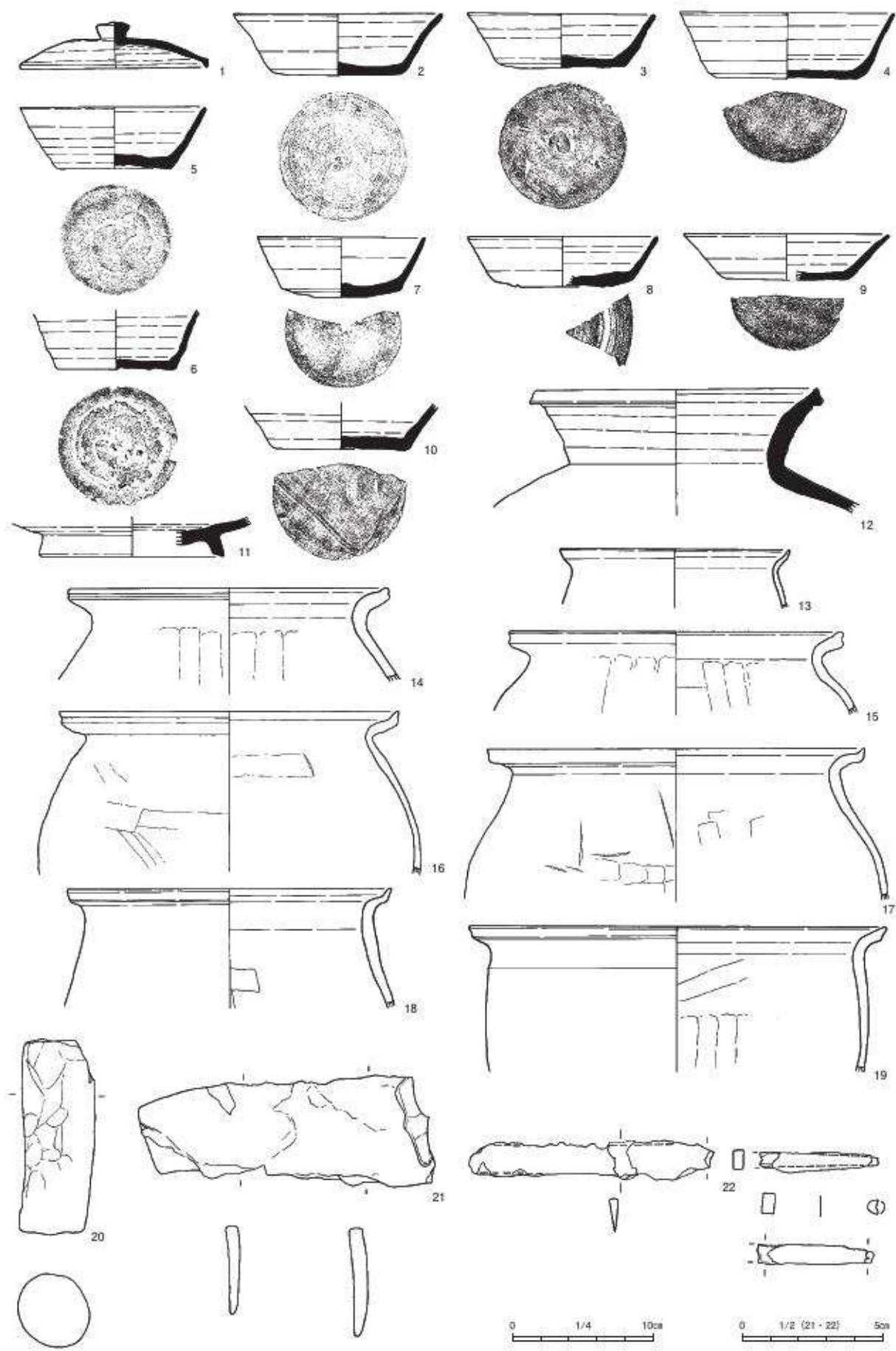
調査区中央部南側のI-9・I-10グリッドに位置し、西側壁部分が調査区外になるが、ほぼ全容が把握されている。平面形は方形基調で、主軸方向はN-11°-Eである。規模は東西方向3.45m以上、南北方向3.95m、残存壁高は42cm。覆土は3層に分層される自然堆積である。床面は平坦で、カマド前及び主柱穴間の内側から硬化面が検出されている。付帯施設はカマド1基、壁溝、主柱穴4基、出入り口に伴うと思われるピット1基が検出されている。カマドは北壁中央に付設され、煙道部はSI33の覆土中に掘り込まれていた。袖部は黄灰色の粘土主体土で構築され、火床部からは赤褐色の明瞭な焼土が検出されている。壁溝は東壁及び南壁部分で確認され、幅12～20cm、深さ8cmである。主柱穴は基本的位置で検出され、P-1が径40cm、深さ40cm、P-2が径46cm、深さ42cm、P-3が径50cm、深さ38cm、P-4が径36cm、深さ50cm、出入り口ピットと思われるP-5は径34cm、深さ40cmである。遺物はカマド周辺と東壁際を主体として多量に出土し、22点を図示した。須恵器蓋・壺・高台付壺・甕、土師器甕、土製支脚、鉄製品（刀子・鎌）がある。時期は8世紀中葉～後半と考えられる。



第87図 SI32



第88図 SI32 カマド



第89図 SI32出土遺物

第33表 SI32出土遺物観察表

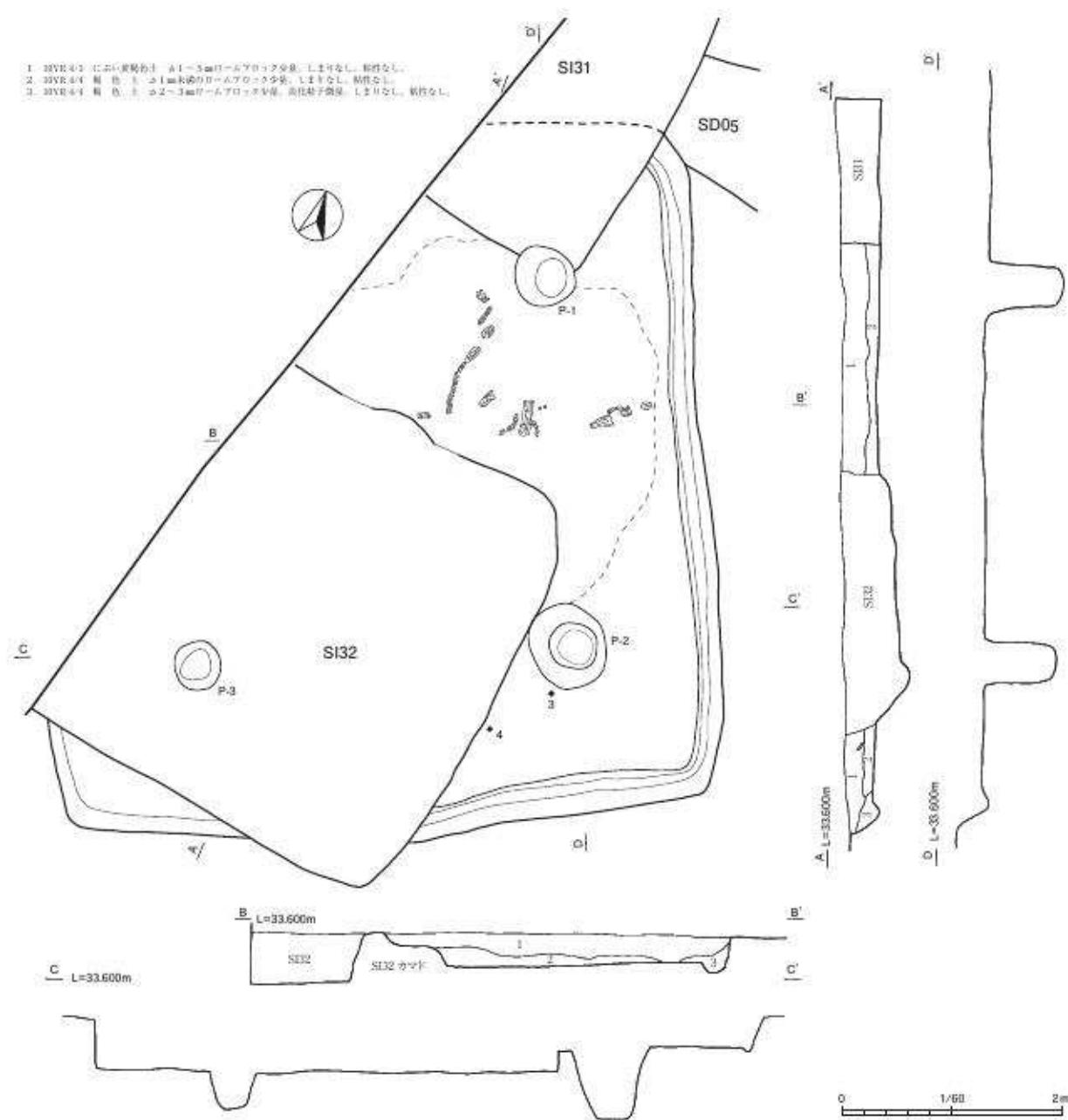
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	13.6	3.4	—	高さのある擬空珠状の構み。口クロ調整、天井部回転ヘラケズリ。	灰	砂粒・骨針	ほぼ完形	床面
2	須恵器	坏	14.8	4.3	9.0	外面口クロ調整、体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	黄灰	砂粒・白色粒	口縁～底	床面
3	須恵器	坏	13.4	3.9	9.0	外面口クロ調整、体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ナデ。	黄灰	砂粒・小礫	ほぼ完形	覆土
4	須恵器	坏	(15.4)	4.7	(10.0)	外面口クロ調整、体部下端ヘラケズリ、底部ナデ。	灰黄	砂粒・石英	口縁～底	覆土
5	須恵器	坏	13.3	4.4	8.0	外面口クロ調整、底部ヘラ切り後ナデ。	灰	白色粒・雲母	完形	床面
6	須恵器	坏	—	(4.2)	8.6	外面口クロ調整、底部回転ヘラ切り。	灰	砂粒・小礫	体～底	覆土
7	須恵器	坏	12.0	4.3	8.4	外面口クロ調整、体部下端～底部ナデ。	黄灰	砂粒・石英	口縁～底	覆土
8	須恵器	坏	6.8	(3.6)	(7.0)	外面口クロ調整、底部回転ヘラ切り。	灰	砂粒・石英	口縁～底	覆土
9	須恵器	坏	(14.8)	3.4	(8.8)	外面口クロ調整、体部下端ヘラケズリ、底部ナデ。	灰黄	砂粒・白色粒・雲母	口縁～底	覆土
10	須恵器	坏	—	(3.3)	9.6	外面口クロ調整、体部下端ヘラケズリ、底部ナデ。	にぶい 黄褐色	砂粒・石英	体～底	覆土
11	須恵器	高台付坏	—	(2.8)	(13.2)	外面口クロ調整、ハの字状の高台が付く。	灰	砂粒・石英	底	覆土
12	須恵器	壳	20.0	—	—	口縁部は外反し、端部は折り曲げ突帯状になる。外面平行叩き、自然軸。	灰黄	砂粒・小礫・長石	口縁	床面
13	土師器	小型壳	(16.4)	—	—	口縁部破片。胴部内外面ナデ。	にぶい 褐	石英・長石	口縁～割	覆土
14	土師器	壳	(23.0)	—	—	常緑型壳口縁部破片。胴部内外面ヘラケズリ。	灰黄褐	砂粒・石英・長石	口縁	床面
15	土師器	壳	23.4	—	—	常緑型壳口縁部。胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	灰褐	石英・長石	口縁	覆土
16	土師器	壳	(24.2)	—	—	口縁部が受け口状になる常緑型壳。胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	橙	白色粒・石英・雲母	口縁～割	覆土
17	土師器	壳	27.0	—	—	口縁部が受け口状になる常緑型壳。胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	明褐	石英・長石・雲母	口縁	床面
18	土師器	壳	(24.0)	—	—	口縁部が受け口状になる常緑型壳。胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	にぶい 黄褐色	白色粒・石英・雲母	口縁	覆土
19	土師器	壳	(30.0)	—	—	口縁部が受け口状になる常緑型壳。胴部内外面ヘラケズリ後ナデ。	褐	白色粒・石英・雲母	口縁～割	覆土
20	土製品	支脚	残長14.0cm、径5.3cm、下端部を欠損する棒状の土製支脚。表面に指痕を残し、被熱により縮くなっている。	赤褐	雲母多量・砂粒	ほぼ完形	カマド			
21	鉄製品	鎌	残長10.5cm、幅2.1～4.0cm、厚さ0.5cm、重さ52.65g、刃部先端付近を欠損し、着柄部は折り返される。				覆土			
22	鉄製品	刀子	残長12.6cm、刀身幅1.0cm、茎幅0.7cm、刀身厚さ0.3cm、茎厚さ0.4cm、重さ12.38g。茎部に木質が残存する。				覆土			

SI33(第90・91図、第34表、遺構図版10、遺物図版8)

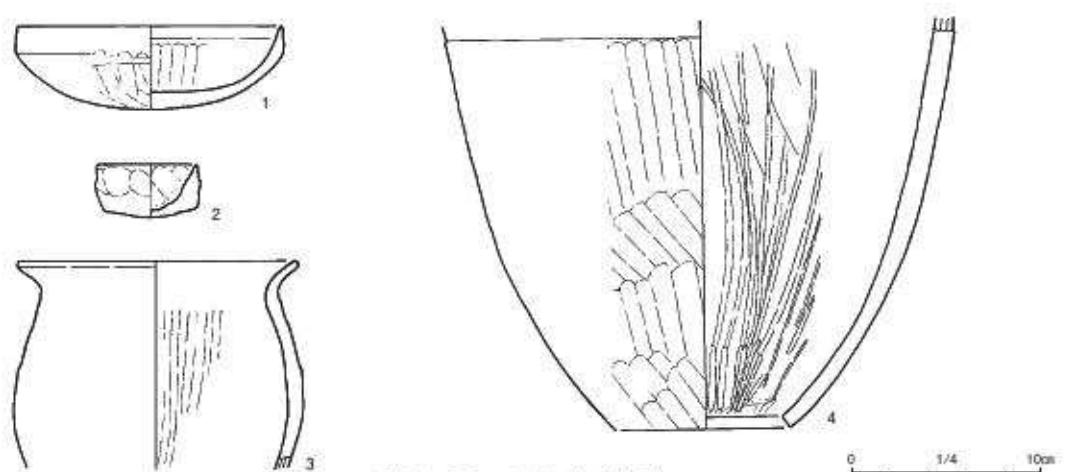
調査区中央部南側のI-9・I-10グリッドに位置し、北側壁から西側壁にかけて調査区外になる。検出部分の大半はSI32に切られており、北東隅部もSI31・SD05に切られているが、遺構の依存状態は良好である。平面形は方形を呈し、規模は東西方向6.10m、南北方向は5.80m以上、残存壁高は25cm。覆土は3層に分層される自然堆積である。残存する床面は緩やかな凹凸があり、硬化面が検出された範囲の床面には炭化材が散在していた。付帯施設は壁溝、主柱穴3基が検出されている。壁溝は東壁及び南壁部分で確認され、幅15cm前後、深さ8cmである。主柱穴は基本的配置で検出され、P-1が径56cm、深さ66cm、P-2が径78cm、深さ60cm、SI32の範囲から検出されたP-3が径44cm、深さ50cmである。掲載遺物は4点である。土師器坏、床面出土の土師器小型壳上半部、試掘トレンチ出土遺物と接合した土師器瓶、手捏土器がある。時期は6世紀後半と考えられる。

第34表 SI33出土遺物観察表

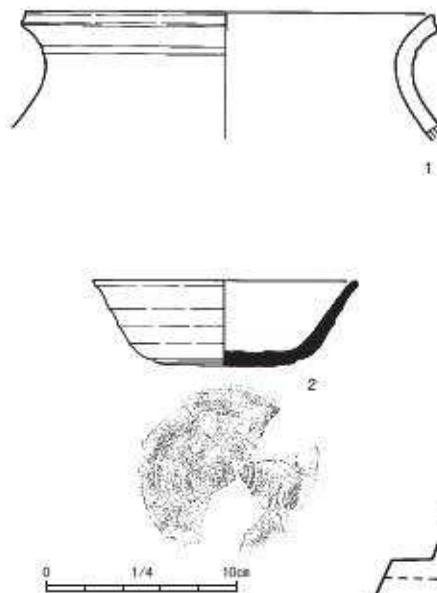
番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	(14.0)	4.4	—	口縁部が直立する半円形の坏。体部外面ヘラケズリ後ミガキ。内面ミガキ。	明赤褐	白色粒・石英・雲母	口縁～底	覆土
2	土製品	手捏土器	5.2	3.3	5.0	丸底気味の底部で体部は短く立つ。内外面指痕。	にぶい 赤褐色	砂粒多	口縁～底	覆土
3	土師器	小型壳	14.4	<11.0>	—	胴部に最大径をもつ壳上半部。器面荒れて調整不明瞭。内面ナデ。	赤褐	砂粒・白色粒・石英	口縁～割	床面
4	土師器	瓶	—	—	(9.0)	内済しながら開く單孔の瓶。胴部外面ヘラケズリ。内面ミガキ。	明赤褐	白色粒・石英・雲母	胴～底	床面



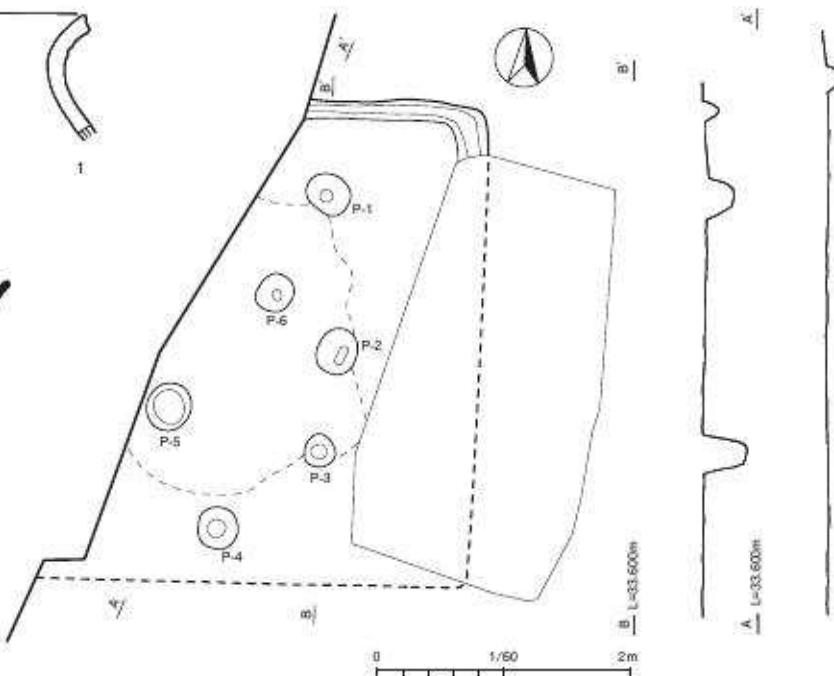
第90図 SI33



第91図 SI33 出土遺物



第92図 SI34出土遺物



第93図 SI34

SI34（第92・93図、第35表、遺構図版10、遺物図版8）

調査区南側のK-8・K-9グリッドに位置し、遺構の西側は調査区外になる。耕作土が床面まで達し、東壁部分も攪乱によって消失しているため、遺構の遺存状態は極めて悪い。平面形は方形基調で、検出された床面から推定される規模は東西方向3.50m以上、南北方向3.80m前後、残存壁高は壁が僅かに残存する北側壁で最大8cm。床面は緩やかな凹凸があり、中央部からは顕著な硬質面が検出されている。付帯施設として北壁側のみ巾10cm、深さ10cmの壁溝が検出されている。他に住居推定範囲からは不規則なピット6基が検出されている。本住居に伴うものであるかは不明瞭であるが、位置的にP-1とP-3は主柱穴の可能性がある。遺物は極少量が出土し、図示し得る遺物は須恵器壊、土師器甕の2点のみである。時期は明瞭ではないが、8世紀前半の可能性が高い。

第35表 SI34出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・底形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
I	土師器	甕	21.2	—	—	常輪型甕口縁部破片。胴部内外面ナメ。	明赤褐色	白色粒・石英	口縁	覆土
2	須恵器	壊	14.0	4.5	7.3	丸底気味の底部。内外面クロロ調整、底部回転ヘラ切り。	灰白	砂粒・白色粒	口縁～底	覆土

第3節 土坑・井戸跡

土坑として調査を行った遺構には、地下式坑5基（SK01・02・03・04・08）、方形堅穴状遺構1基（SK05）、陥し穴状土坑2基（SK10・11）を含み、他に方形土坑1基、かわらけが一括出土した円形の小型土坑1基がある。なお、SK06・07は木根及び風倒木痕と判断されたので欠番とした。井戸跡は調査区南端部から1基のみ検出されている。

1. 地下式坑

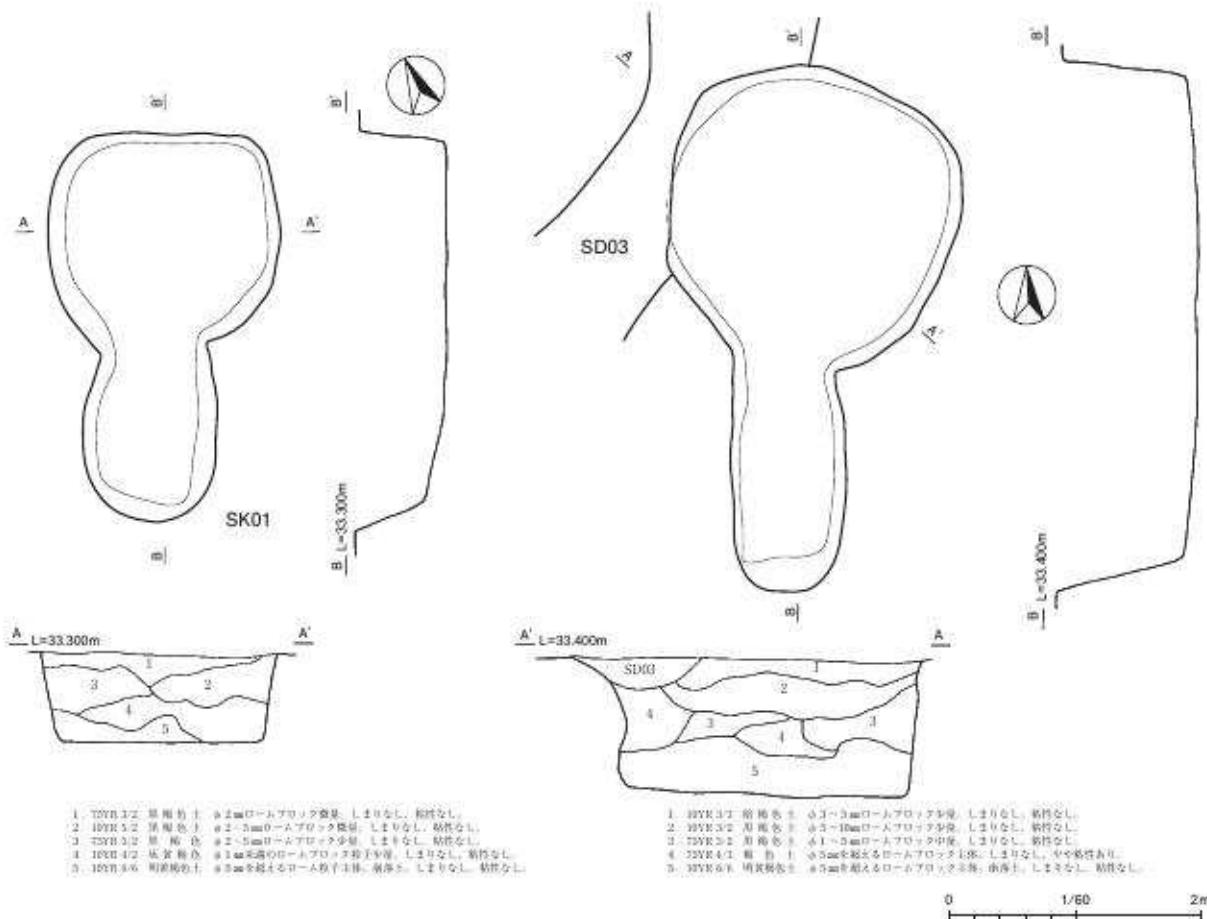
地下式坑は、調査区東側のJ-15~17グリッド内に4基（SK01・02・03・04）が集中し、調査区西側のF-8グリッドから1基（SK08）のみ検出されている。いずれも地下室は単室で、平面形状は方形を基調としている。豊坑と地下室の間に連結部を有するタイプと思われ、連結部は無段である。

SK01（第94・96図、第36表、遺構図版11、遺物図版9）

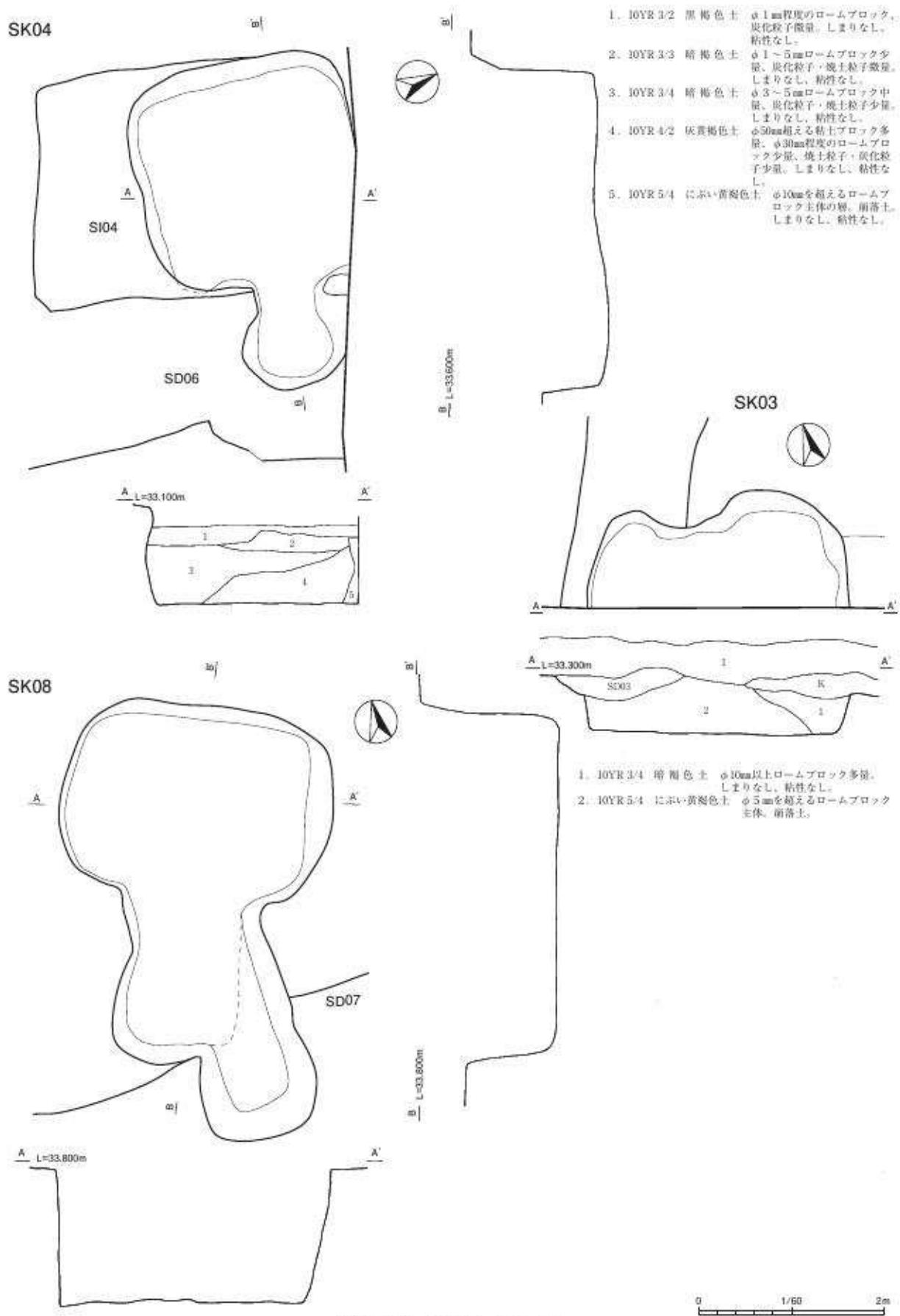
調査区東側のJ-17グリッドに位置する。豊坑を基準にした主軸方向はN-27°-Eを示す。地下室は方形を呈し、東西方向1.80m、南北方向1.60m、深さは75cm。豊坑は幅1.05m、長さ1.46m、豊坑から地下室に向かって緩やかな傾斜があるが、連結部は無段である。遺物は覆土中層から上層にかけて自然礫・焼石等と混在する状況で多量に出土しており、12点を図示した。古瀬戸瓶子、常滑焼甕・小型壺・片口鉢、椀型滓と渥美焼と思われる甕の胴部片がある。

SK02（第94・96図、第36表、遺構図版11、遺物図版9）

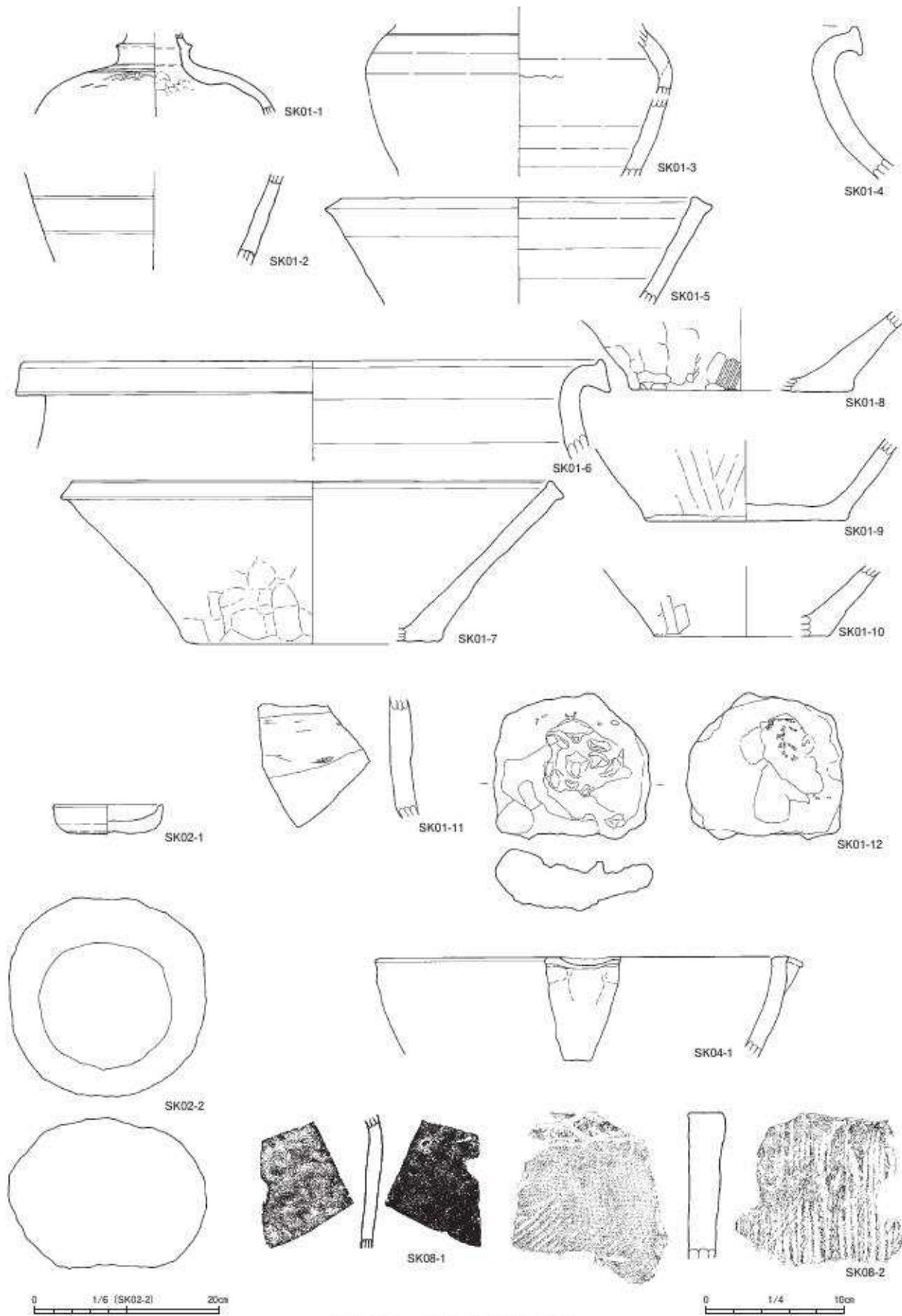
調査区東側のJ-16グリッドに位置する。豊坑を基準にした主軸方向はN-4°-Eを示す。地下室は方形を呈し、東西方向2.30m、南北方向2.20m、深さは110cm。豊坑は幅0.90m、長さ1.90mで、地下室に対して斜方向に歪んだ状態で連結されている。連結部は無段である。遺物は少量で、覆土上層出土のかわらけ小皿と五輪塔（水輪）の2点を図示した。



第94図 SK01・02



第95図 SK03・04・08



第96図 地下式坑出土遺物

SK03 (第95図、遺構図版11)

調査区東側のJ-16グリッドに位置し、遺構の南側約1/2は調査区外になる。地下室部が東側、豊坑部が西側になると思われる。規模は全長2.80m、地下室は東西方向1.50m、南北方向1.20m以上、深さは75cm。豊坑は幅1.00m以上、長さ1.30mで、連結部は無段である。掲載遺物はない。

SK04 (第95・96図、第36表、遺構図版11、遺物図版9)

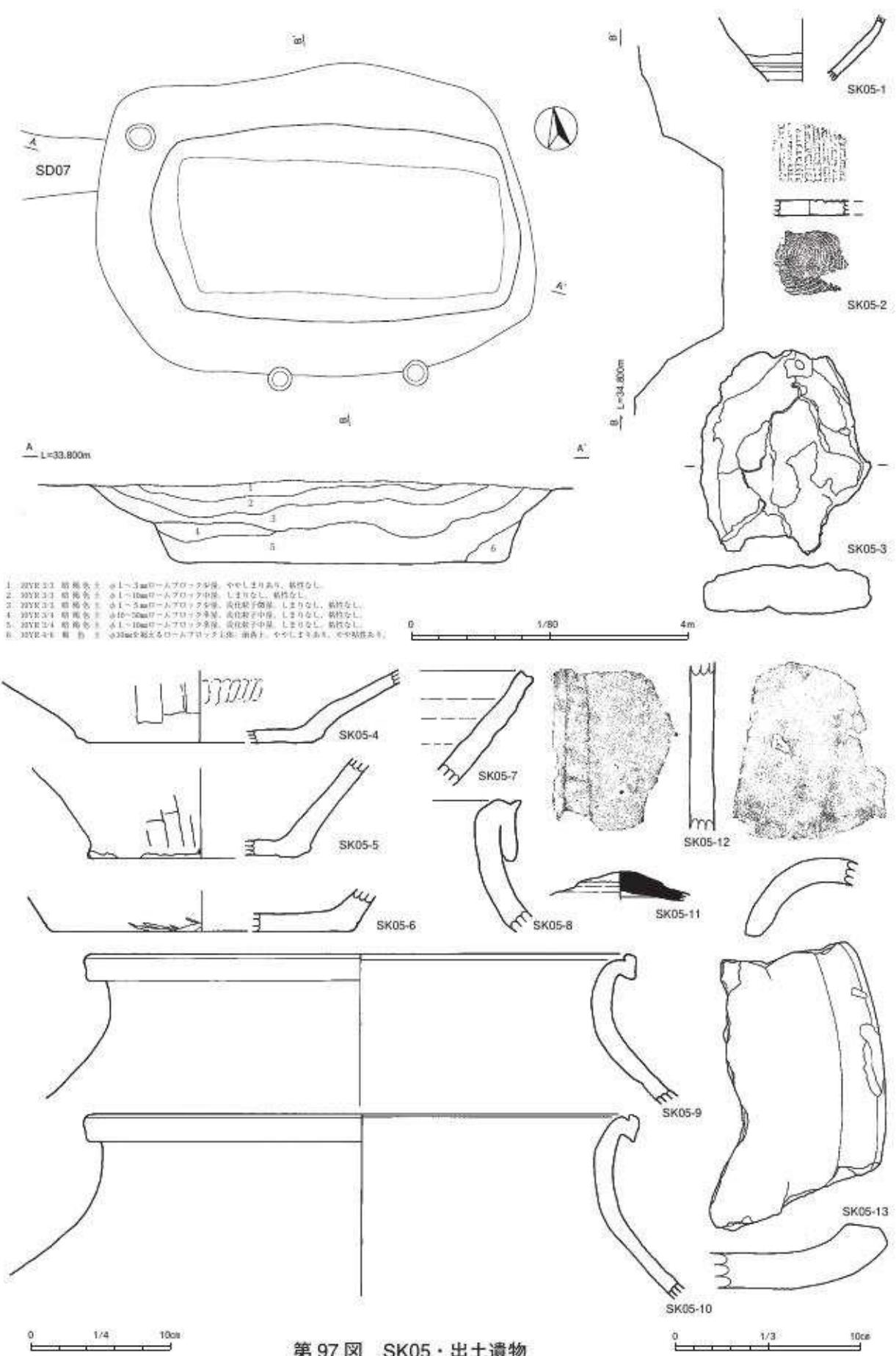
調査区東側のI-15グリッドに位置し、古墳時代の住居跡SI07と中世の溝跡SD05を切って掘り込まれている。豊坑を基準にした主軸方向はN-74°-Wを示す。地下室は方形を呈し、東西方向2.40m、南北方向2.38m、深さは140cm。豊坑は幅1.10m、長さ0.80mの円形基調と思われ、地下室との間に巾74cm、長さ40cm前後の連結部がある。連結部は無段である。遺物は覆土から少量が出土し、常滑焼片口鉢1点を図示した。

SK08 (第95・96図、第36表、遺構図版12、遺物図版9)

調査区西側のG-8グリッドに位置する。豊坑を基準にした主軸方向はN-18°-Eを示す。地下室は東西方向が長い長方形を呈し、東西方向2.92m、南北方向2.05m、深さは150cm。豊坑は幅1.45m、長さ1.85mで、地下室に対して斜方向の南側に延びる豊坑が付随する。新旧は不明であるが、底面の深さもほぼ同じであることから豊坑の掘り返しと判断された。地下室と豊坑の連結部は無段である。遺物は覆土から少量が出土し、常滑焼甕胴部と布目瓦の2点を図示した。

第36表 地下式坑出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
SK01-1	古瀬戸	瓶子	—	—	—	瓶部に段を有する灰釉の瓶子口類、肩部に沈線が這り、草葉文様の曲線で装飾される。14世紀代の古瀬戸中期様式II～Ⅳ期頃か。	灰白	白色粒・黒色粒	肩～肩	覆土
SK01-2	古瀬戸	瓶子	—	—	—	灰釉の瓶子胴上部破片。2条の沈線が這る。1と同時期と思われる。	灰白	白色粒・黒色粒	肩	覆土
SK01-3	常滑焼	甕	—	—	—	甕肩部～胴部破片。内面に接合痕。	暗灰	砂粒多・石英	肩～肩	覆土
SK01-4	常滑焼	甕	—	—	—	破断面を砾石に転用した甕口縁部破片。口縁断面横T字状。常滑5-6a型式	灰白	石英・白色粒	口縁	覆土
SK01-5	常滑焼	片口鉢	(25.0)	—	—	内面は平滑で、口唇部が僅かに張り出す。常滑8-9型式	にぶい赤褐	石英・白色粒	口縁～体	覆土
SK01-6	常滑焼	甕	(41.8)	—	—	甕口縁部破片。口縁断面横T字状。常滑5-6a型式	灰	石英・白色粒	口縁	覆土
SK01-7	常滑焼	片口鉢		11.8	18.0	内面は平滑で、口唇部が僅かに張り出す。常滑8-9型式	にぶい赤褐	石英・白色粒	底	覆土
SK01-8	常滑焼	片口鉢	—	—	(16.0)	片口鉢底部破片。体部外縁方向のヘラナデ、内面は平滑。	にぶい赤褐	石英・白色粒	体～底	覆土
SK01-9	常滑焼	片口鉢	—	—	14.2	体部外縁方向のヘラナデ、内面は平滑で、底部は砂目。	根・灰黄褐	石英・白色粒	体～底	覆土
SK01-10	常滑焼	片口鉢	—	—	(12.4)	片口鉢底部破片。破断面砾石に転用。体部内面自然釉。	灰白	白色粒・黒色粒	体～底	覆土
SK01-11	諏美焼	甕	—	—	—	諏美焼と思われる甕胴部片。外縁を砾石に転用。	灰	砂粒・白色粒・雲母	肩	覆土
SK01-12	鐵萍	—	長径11.5cm、短径10.5cm、厚さ4.6cm、重さ623.69g、橢形鍛治萍。							覆土
SK02-1	かわらけ	小皿	8.0	2.1	4.2	平底で厚手の糞口クロ成形かわらけ。体部下端、底部ナデ調整。	根	白色粒	口縁～底	覆土
SK02-2	石製品	五輪塔	径21.0cm、厚さ16.0cm、重さ9,600g、砂岩製の水輪。下面中央部に窪みが残存する。							覆土
SK04-1	常滑焼	片口鉢	(29.0)	—	—	片口部破片。片口部両側に指おさえ痕。口唇は僅かに張り出す。	灰褐	石英・白色粒	口縁	覆土
SK08-1	常滑焼	甕	—	—	—	甕胴部破片。	灰褐	石英・白色粒	肩	覆土
SK08-2	瓦	半瓦	残長10.0cm、厚さ2.0cm、凸面繩叩き痕、端部ヘラナデ、凹面布目。				灰	石英・雲母	—	覆土



2. 方形堅穴状遺構

方形堅穴状遺構としたものは、調査区中央部から1基のみ検出されている。

SK05 (第97図、第37表、遺構図版11、遺物図版9)

調査区中央部のG-9・G-10・H-9・H-10グリッドに位置する。平面形状は長方形、断面形状は箱状を呈する大型の堅穴状遺構で、長軸方向はN-78°-Wを示す。規模は長軸の東西方向が6.00m、短軸の南北方向が3.20m、深さは130cmで、底面の掘り込みは鹿沼軽石層まで達している。覆土は6層に分層される暗褐色土の自然堆積である。遺構確認面では、遺構の掘り込みが深いため、壁面上部が崩落し、東西方向7.00m、南北方向5.00mの楕円形状の平面プランで検出された。底面は緩やかな凹凸があるが、視覚的には平坦で、ピット等の付属施設は検出されなかった。遺物は覆土上層を主体として多量に出土している。掲載遺物は13点で、古瀬戸鉢・碗、常滑焼甕・片口鉢、蓋状の土器、布目瓦、茶臼（下臼）、炉壁がある。

第37表 SK05 出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	古瀬戸	平塗	—	—	—	灰釉の平塗底部破片。	灰白	白色粒微量	体	覆土
2	古瀬戸	鉢皿	—	—	—	灰釉の鉢皿底部破片。	灰白	白色粒少量	底	覆土
3	炉壁	—	長さ145cm、幅110cm、厚さ3.5cm、重さ539.36g、内面は淬化する炉壁片。							覆土
4	常滑焼	片口鉢	—	—	(18.0)	片口鉢底部破片。体部内面指痕痕、底部は砂底。	灰黄褐	石英・白色粒	体～底	覆土
5	常滑焼	片口鉢	—	—	(16.0)	片口鉢底部破片。体部外表面横方向のヘラナデ、底盤は砂底。	にぶい赤褐	石英・白色粒	底	覆土
6	常滑焼	片口鉢	—	—	(21.0)	片口鉢底部破片。体部外表面ヘラナデ、底部は砂底。	灰	白色粒	底	覆土
7	常滑焼	片口鉢	—	—	—	片口鉢口縁部破片。口唇部が僅かに埋んでいる。	にぶい黄褐	石英・白色粒	口縁	覆土
8	常滑焼	甕	—	—	—	甕口縁部破片。縁帯部を頸部に接合させる。常滑8～9型式	灰褐	雲母・白色粒	口縁	覆土
9	常滑焼	甕	(40.0)	—	—	甕口縁部破片。口縁断面N字状。常滑6a～6b型式	灰褐	石英・長石	口縁	覆土
10	常滑焼	甕	(40.0)	—	—	甕口縁部破片。口縁断面N字状。常滑6a～6b型式	にぶい褐	石英・長石	口縁	覆土
11	須恵器	蓋？	—	—	—	クロコ調整、貼り付けた摘みを潰した様な形状。	灰	石英・白色粒	天井？	覆土
12	瓦	丸瓦	残長1224cm、厚さ1.7cm、凸面ヘラナデ、端部面取り・ヘラケズリ、凹面布目。				黒褐	石英・雲母	—	覆土
13	石製品	茶臼	残長15.0cm、厚さ2.0cm、重さ374.40g、安山岩製の茶臼下臼の端部片。							覆土

3. その他の土坑

SK09 (第98図、遺構図版12)

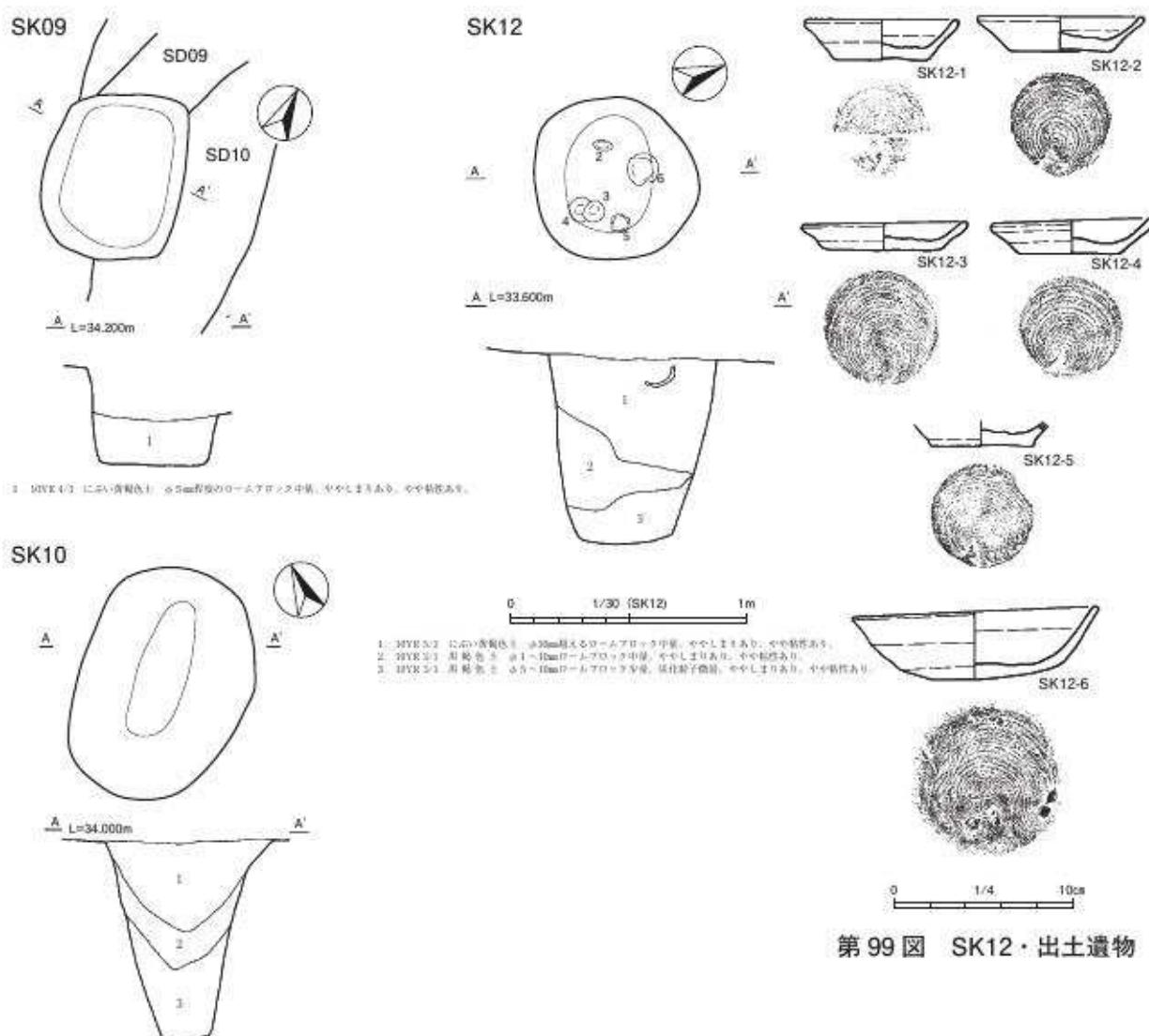
調査区東側のF-6グリッドに位置し、新しいSD09・SD10と重複し、奈良・平安時代の住居跡SI19を切っている。平面形状は隅丸長方形、断面形状は台形状を呈し、長軸方向はN-20°-Wを示す。規模は長軸1.40m、短軸1.14m、深さ96cmである。遺物は土師器細片が少量出土したのみで、明瞭ではないが、中・近世と考えられる。

SK10 (第98図、遺構図版12)

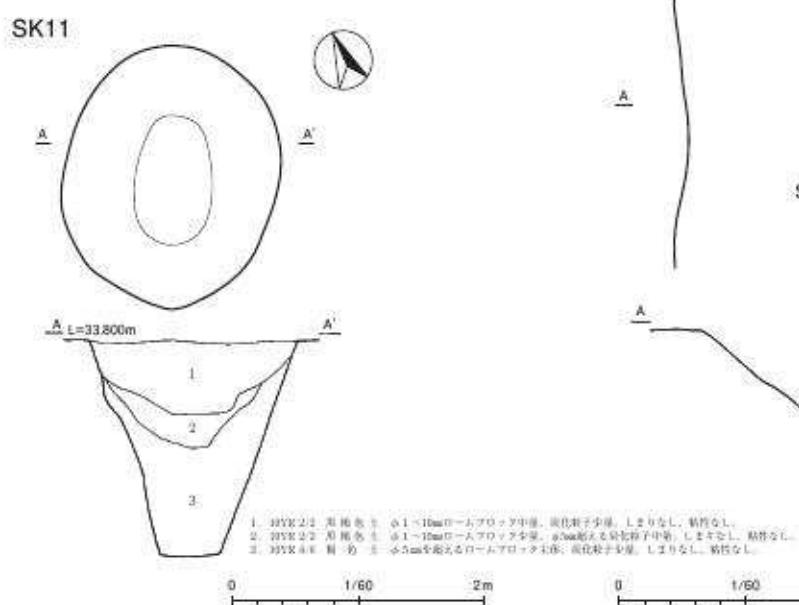
調査区西側のE-3グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は台形～漏斗状を呈し、長軸方向はN-42°-Eを示す。規模は長軸2.00m、短軸1.40m、深さ155cmである。出土遺物がなく、明瞭ではないが、形態的に縄文時代の陥し穴状土坑の可能性が高い。

SK11 (第98図、遺構図版12)

調査区西側のD-2グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は台形～漏斗状を呈し、長軸方向はN-31°-Eを示す。規模は長軸2.04m、短軸1.68m、深さ170cmである。出土遺物がなく、明瞭ではないが、形態的に縄文時代の陥し穴状土坑の可能性が高い。



第99図 SK12・出土遺物



第98図 SK09・10・11

第100図 SE01

SK12（第99図、第38表、遺構図版12、遺物図版9）

調査区南端部のN-8グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は円筒状を呈し、径70cm、深さ80cmの小型の土坑である。遺物は覆土上層から一括で出土している。かわらけ大皿1点（6）とかわらけ小皿5点（1～5）があり、いずれもロクロ成形で、時期は12世紀代と考えられる。

第38表 SK12出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	かわらけ	小皿	.82	23	5.2	体部は直線的に開く。ロクロ成形、底部回転糸切り	にぶい 橙	石英・雲母	完形	覆土
2	かわらけ	小皿	9.0	2.0	5.6	体部は直線的に開く。ロクロ成形、底部回転糸切り	にぶい 橙	石英・雲母	完形	覆土
3	かわらけ	小皿	9.3	1.6	6.2	体部は直線的に開く。ロクロ成形、底部回転糸切り	にぶい 橙	石英・雲母	完形	覆土
4	かわらけ	小皿	9.0	2.0	5.8	体部は直線的に開く。ロクロ成形、底部回転糸切り	にぶい 橙	石英・雲母	完形	覆土
5	かわらけ	小皿	—	—	5.6	体部は直線的に開く。ロクロ成形、底部回転糸切り	にぶい 橙	石英・雲母	体-底	覆土
6	かわらけ	大皿	13.8	4.0	7.0	体部は内溝気味に開く。ロクロ成形、底部回転糸切り	橙	石英・雲母	完形	覆土

4. 井戸跡

SE01（第100図、遺構図版12）

調査区南端部のN-8グリッドに位置する。中世のSD14北側壁面を切る状況で掘り込まれている。平面形状は円形、断面形状は円筒状を呈する素掘りの井戸で、径98cm、深さ2.60m以上で、湧水が多いため、完掘までには至らなかった。出土遺物がないため明瞭ではないが、中世のSD14を切っており、近世の所産である可能性が高い。

第4節 溝跡

溝跡は総数14条検出されている。ほとんどが遺構の一部分の調査であるため、全容が窺えるものはないが、時期決定出来うる遺物の出土もあり、資料的には良好な状態で検出されている。

SD01（第101図、第39表、遺構図版12、遺物図版10）

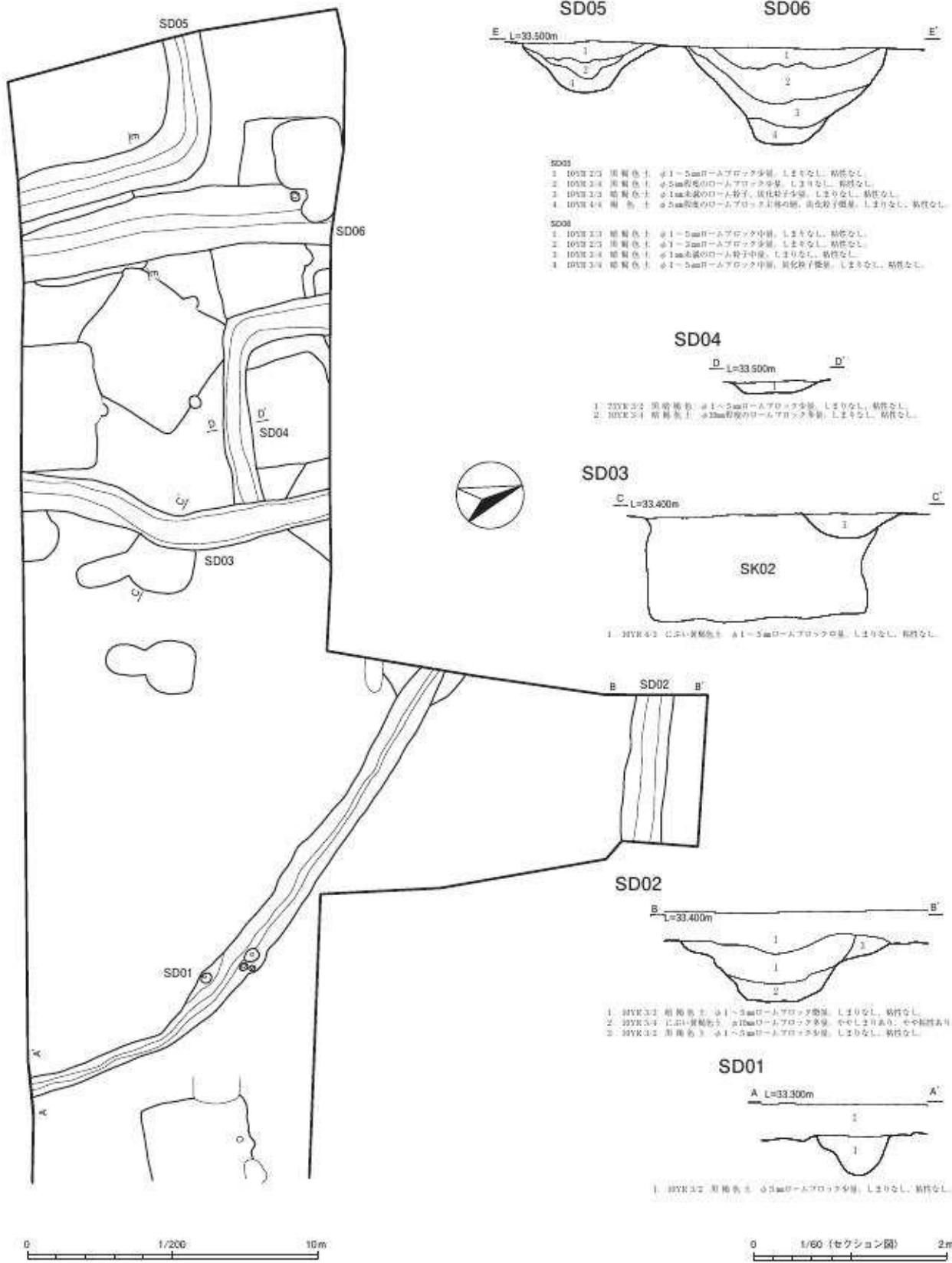
調査区東側に位置し、I-17・J-17・J-18・K-18グリッド内を弧状に走行する。走行方向は北西-南東-南方向。断面形状は台形状を呈し、規模は最大幅1.15m、底面幅20-28cm、深さ40cm、検出長は20.50m。遺物は少量で、常滑焼片口鉢1点を図示した。

SD02（第101図、遺構図版12）

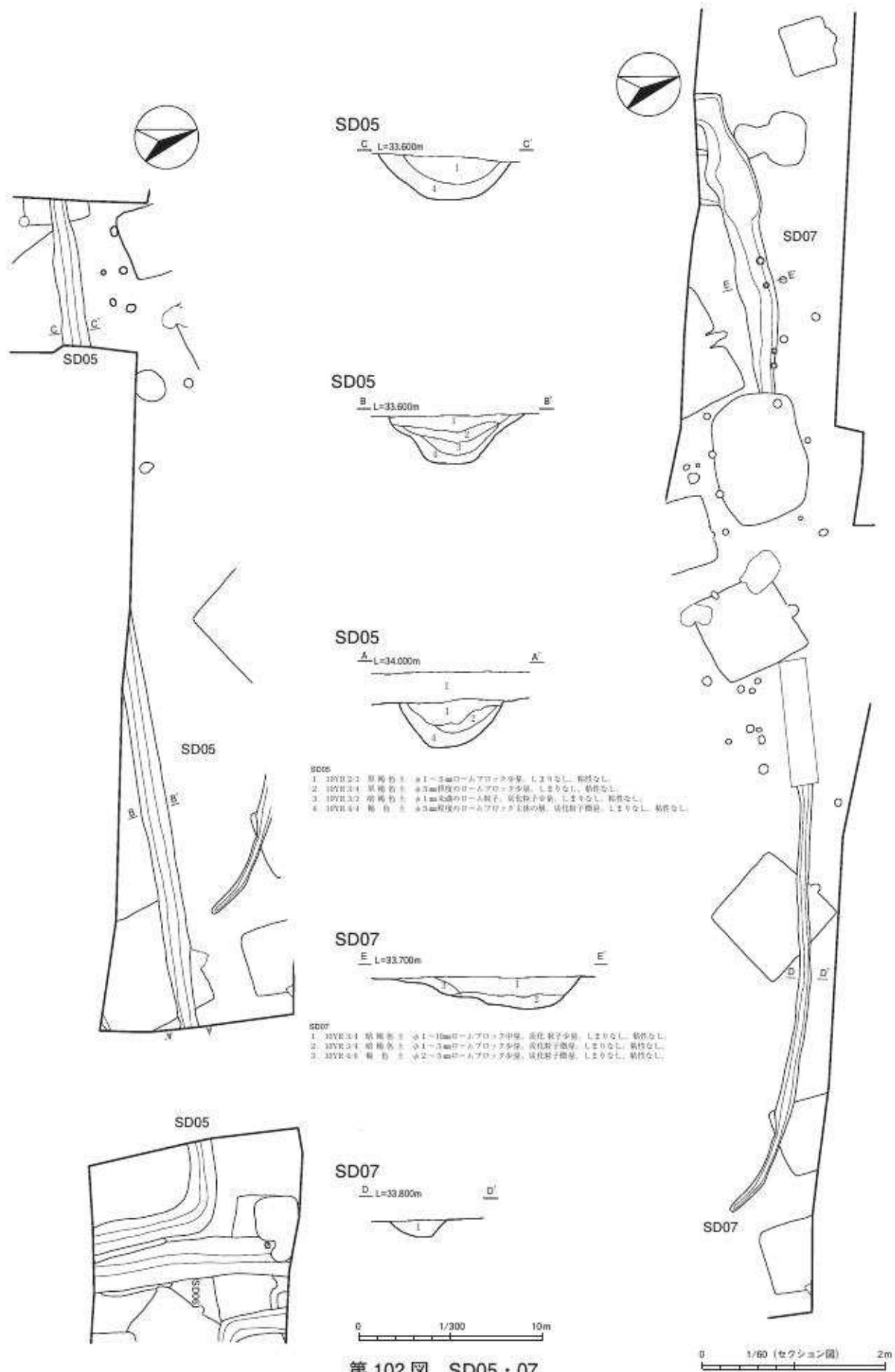
調査区東側に位置し、H-17・H-18・I-17・I-18グリッド内を直線的に走行する。断面形状は台形状を呈し、規模は最大幅1.15m、底面幅50cm、深さ40cm、検出長は5.20m。走行方向は西北西-東南東方向。遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。

SD03（第101図）

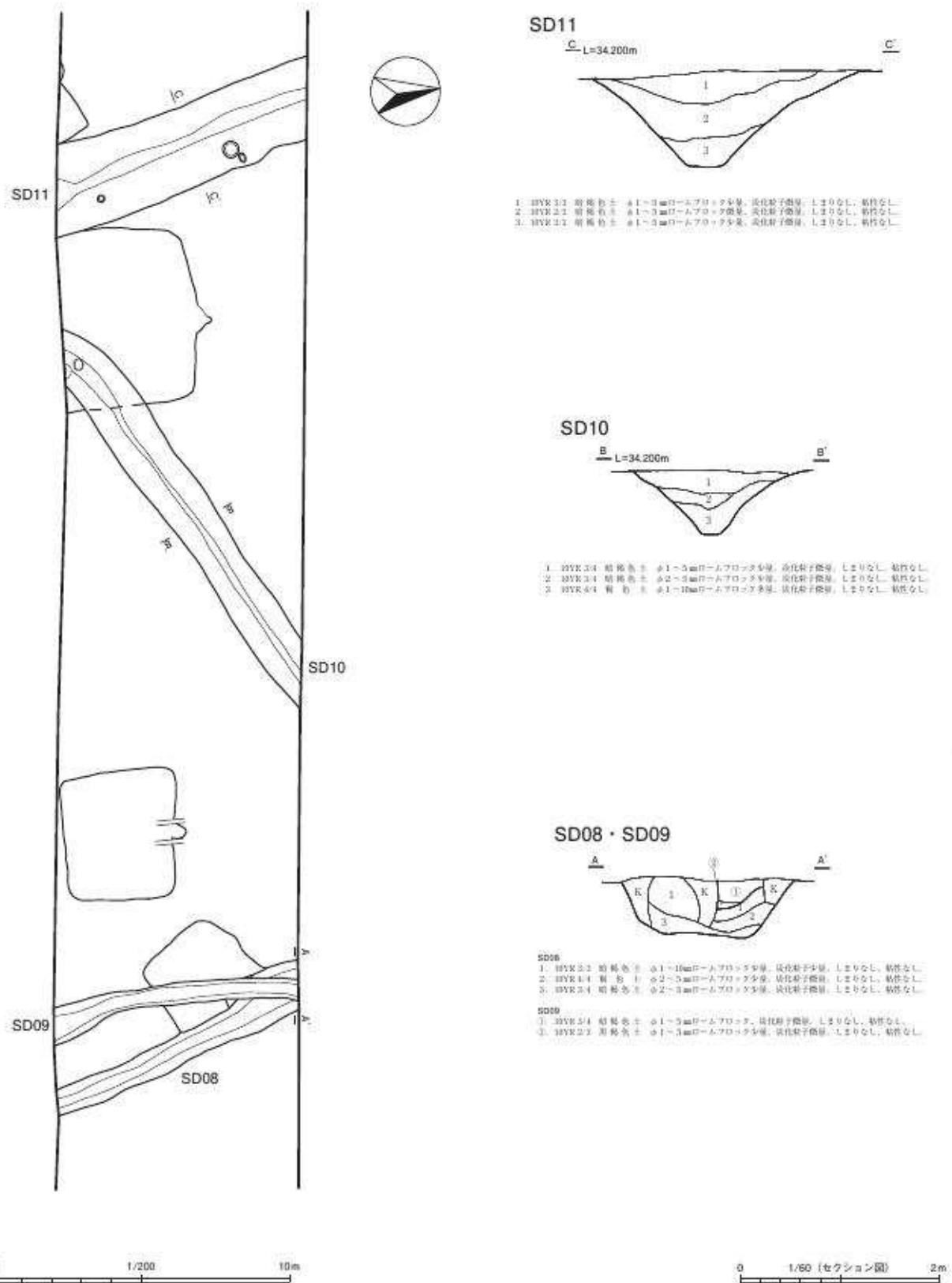
調査区東側に位置し、I-16・J-16グリッド内を弧状に走行する。走行方向は北-南-南西方向。SI03・SK02・SK03を切っている。断面形状は皿状を呈し、規模は最大幅1.40m、深さ15cmの浅い溝で、検出長は11.00m。SD04と重複するが、同時期のものである可能性が高い。遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。



第 101 図 SD01・02・03・04・05・06



第102図 SD05・07



第103図 SD08・09・10・11

SD04 (第101図)

調査区東側に位置し、I-16グリッド内を直線・L字状に走行する。走行方向は東-西-北方向。SI04・SI05・SI08を切っている。断面形状は皿状を呈し、規模は最大幅1.30m、深さ20cmの浅い溝で、検出長は9.00m。SD03と重複するが、同時期のものである可能性が高い。遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。

SD05 (第102・105図、第39表、遺構図版13、遺物図版10)

調査区東側から中央部に位置し、I-10・I-12・I-13・I-14・I-15・J-15グリッド内を直線・L字状に走行する。調査区中央部から東側を西-東方向に走行し、調査区東側のJ-15グリッドで南方向に屈曲する。断面形状は台形状を呈し、規模は最大幅1.50m、底面幅40cm、深さ50cm、検出長は推定部を含めて約55mである。伴う遺物か判断できないが、古墳時代～奈良・平安時代の遺物が覆土中に多量に含まれており、6点を図示した。時期は重複関係から中世以降の可能性が高い。

SD06 (第101・105図、第39表、遺構図版13、遺物図版10)

調査区東側から中央部に位置し、I-15・J-15グリッド内を直線的に走行する。走行方向は北北東-南南西方向。断面形状は台形状を呈し、規模は最大幅2.22m、底面幅50cm、深さ105cm、検出長は10.80m。掲載遺物は常滑焼甕口縁部2点と内耳鍋口縁部1点である。時期は13～14世紀代と思われる。

SD07 (第102・105図、第39表、遺物図版10)

調査区中央部から西側に位置し、G-8・G-9・H-11・H-12・H-13・I-13グリッド内を弧状に走行する。走行方向は南東-北西-西方向。断面形状は皿状～台形状を呈し、規模は幅0.60m～3.00m、深さ10～30cmの浅い不規則な溝で、検出長は推定部を含めて約60mである。調査区中央部では耕作土及び攪乱で消失したものと思われ、確認されなかった。遺構西端のG-8グリッドでは分岐して調査区外南方向に延びている。掲載遺物はかわらけ小皿と常滑焼片口鉢の2点である。

SD08 (第103・105図、第39表、遺構図版13、遺物図版10)

調査区西側に位置し、F-6・G-6グリッド内を直線的に走行する。走行方向は北-南方向。SI09・SK09を切って、SD10が覆土中に掘り込まれている。断面形状は台形状を呈し、規模は幅0.96m～1.70m、底面幅30～96cm、深さ50cm、検出長は9.00m。遺物は少量で、内耳鍋片と土師器片があるが、図示できる遺物は出土していない。

SD09 (第103図、遺構図版13)

調査区西側に位置し、F-6・G-6グリッド内を直線的に走行する。走行方向は北北東-南南西方向。SD08・SI09・SK09を切っている。規模は最大幅1.18m、深さ20cmの浅い溝で、検出長は9.00m。遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。

SD10 (第103図、遺構図版13)

調査区西側に位置し、E-5・F-4・F-5グリッド内を直線的に走行する。走行方向は東北東-西南西方向。SI21を切るF-4グリッドで南方向に屈曲する可能性がある。断面形状はV字状を呈し、規模は最大幅1.75m、底面幅25cm、深さ60cm、検出長は13.00m。遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。

SD11 (第103・105図、第39表、遺構図版13、遺物図版10)

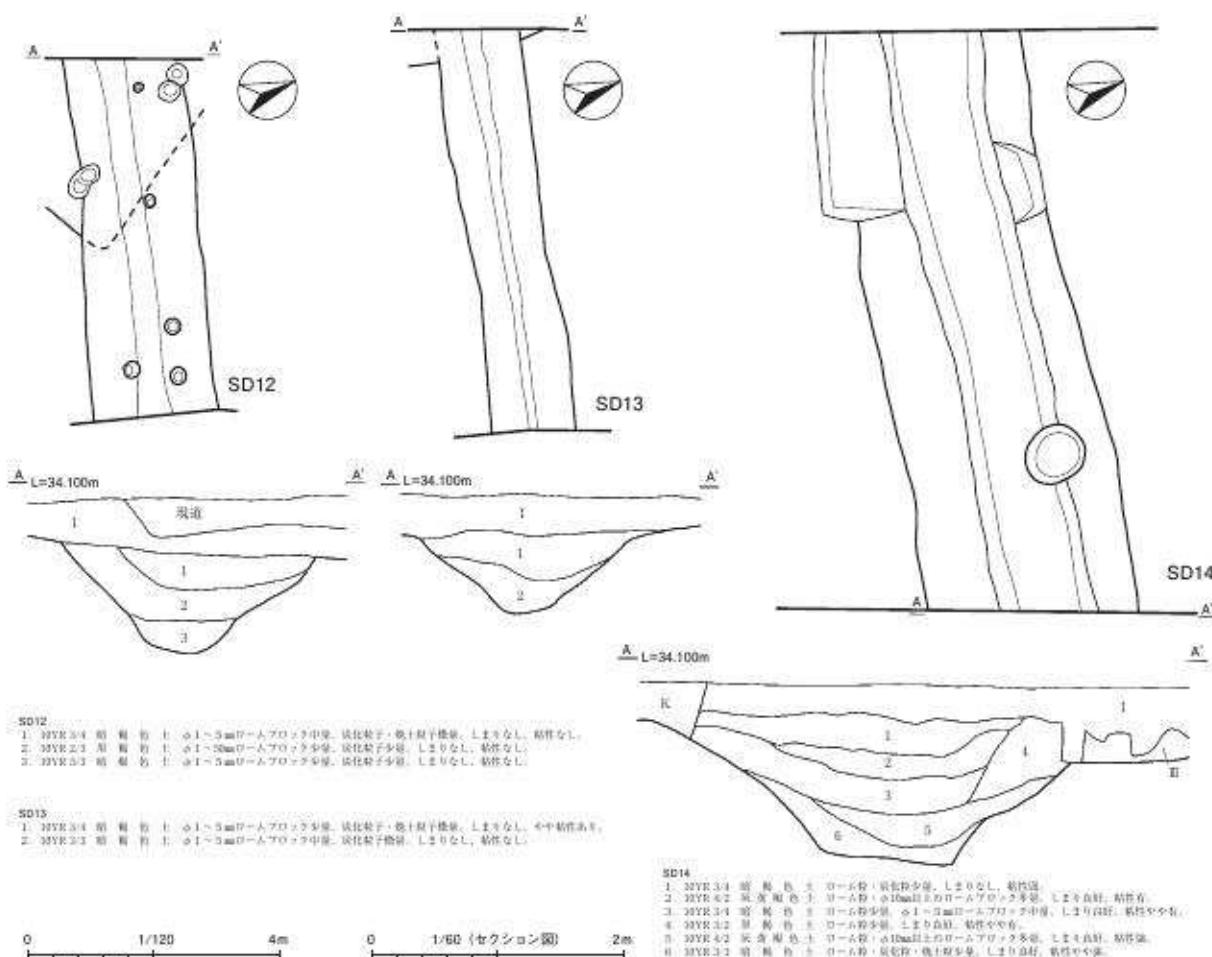
調査区西側に位置し、E-3・E-4・F-3・F-4グリッド内を直線的に走行する。走行方向は北-南方向。SI21・SI25を切るF-3グリッドで西方向に屈曲して調査区外に延びる可能性が高い。断面形状は台形状を呈し、規模は最大幅2.95m、底面幅50cm、深さ90cm、検出長は9.00m。掲載遺物は2点である。常滑焼甕胴部と混入遺物と思われるが、底部にヘラ記号のある須恵器坏の2点を図示した。

SD12 (第104図)

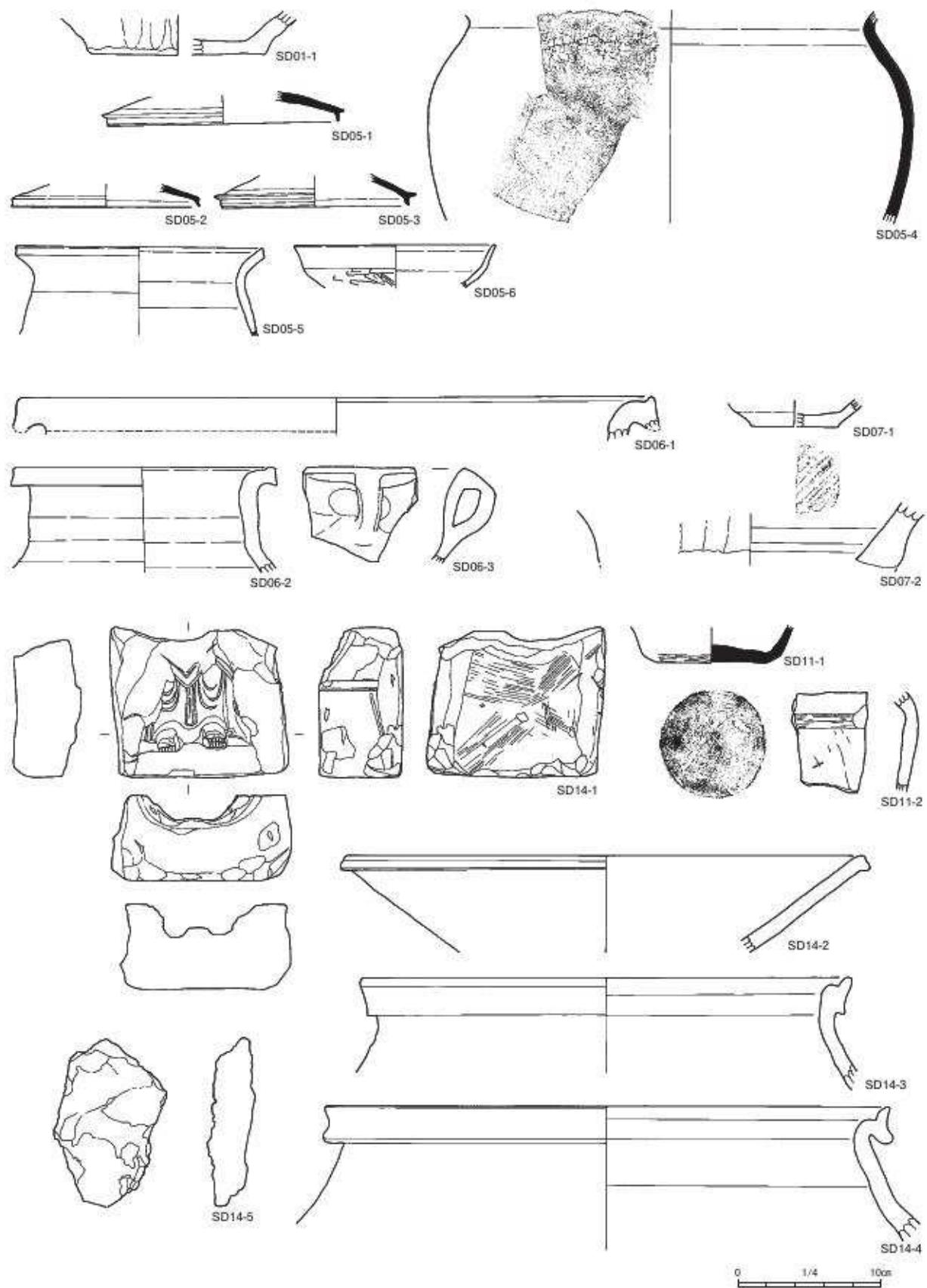
調査区北側に位置し、D-12・D-13グリッド内を直線的に走行する。走行方向は西北西-東南東方向。SI26・SI27を切っている。断面形状は台形状を呈し、規模は最大幅2.00m、底面幅40cm、深さ65cm、検出長は6.00m。現道直下を同方向に走行していることから地境の溝である可能性が高い。時期的には近世以降と推測される。遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。

SD13 (第104・105図、第39表、遺構図版13、遺物図版10)

調査区北側に位置し、F-11グリッド内を直線的に走行する。走行方向は西北西-東南東方向。SI30を切っている。断面形状はV字状を呈し、規模は最大幅1.30m、底面幅16cm、深さ55cm、検出長は6.40m。遺物は少量で、常滑焼片と土師器片があるが、図示出来る遺物は出土していない。



第104図 SD12・13・14



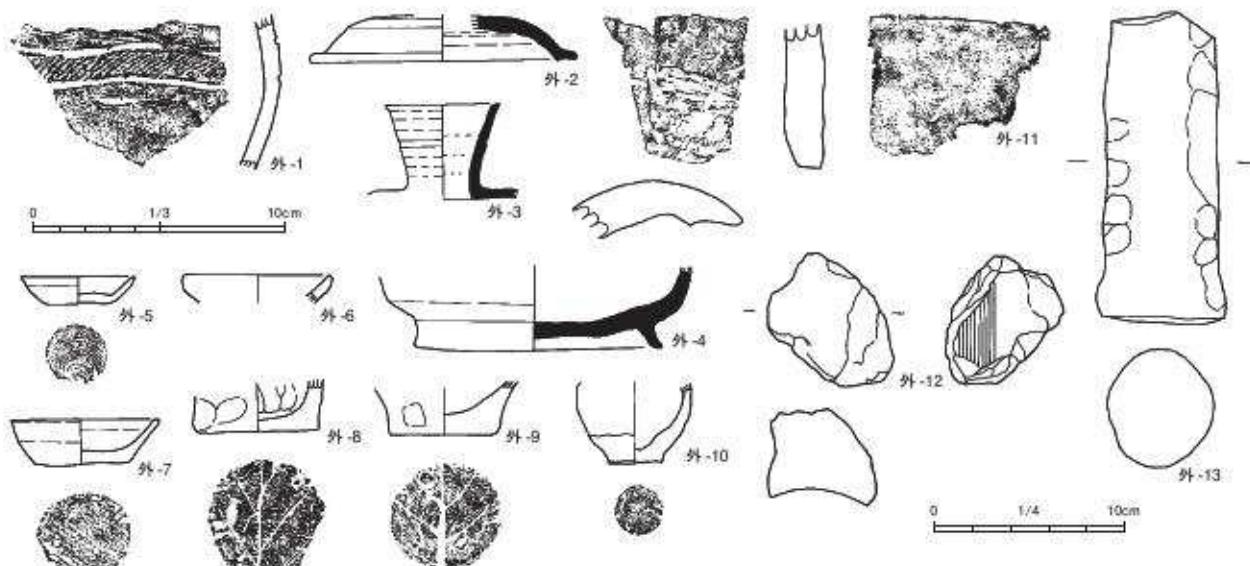
第105図 溝跡出土遺物

SD14 (第104・105図、第39表、遺構図版13、遺物図版11)

調査区南端部に位置し、N-7・N-8グリッド内を直線的に走行する。走行方向は西-東方向。北側壁面を切ってSE01が掘り込まれている。規模は最大幅3.32m、深さ110cm、検出長は9.50mで、断面形状は台形状を呈し、底面幅は1.00mとかなり広い。覆土は6層に分層される自然堆積で、暗褐色土とロームブロックを多く含む層が互層になっていた。遺物は覆土から比較的多量に出土している。掲載遺物は5点で、常滑焼窯口縁部、覆土最下層出土の仏像鋳型、炉壁である。

第39表 溝跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	幕高	底径					
SD01-1	常滑焼	片口鉢	—	—	(11.0)	片口鉢底部破片。体部外面縦方向のヘラナデ、底部は砂底。	灰褐	白色粒・石英・雲母	底～底	覆土
SD05-1	須恵器	蓋	(15.8)	—	—	返しを有する蓋口縁端部破片。ロクロ調整。	灰	石英・白色粒	口縁	覆土
SD05-2	須恵器	蓋	(13.0)	—	—	返しを有する蓋口縁端部破片。ロクロ調整。	灰褐	石英・白色粒	口縁	覆土
SD05-3	須恵器	蓋	(12.8)	—	—	返しを有する蓋口縁端部破片。ロクロ調整。	暗灰黄	石英・白色粒	口縁	覆土
SD05-4	須恵器	甕	—	—	—	甕頭部～胴部破片。外面格子目叩き。内面ナデ。	黃灰	砂粒・石英・雲母	頭～胴	覆土
SD05-5	土師器	甕	(17.0)	—	—	常輪型の小型甕口縁部破片。外外面ナデ。	灰褐	砂粒・石英・雲母	口縁	覆土
SD05-6	土師器	甕	(13.8)	—	—	須恵器甕身横値甕口縁部破片。体部外面ミガキ。	にぶい 帯	砂粒・白色粒	口縁	覆土
SD06-1	常滑焼	甕	(44.0)	—	—	口縁部が受け口状を呈する甕口縁部。	灰褐	白色粒・石英・雲母	口縁	覆土
SD06-2	常滑焼	甕	(18.4)	—	—	口縁部が受け口状を呈する甕口縁部。常滑5型式。	橙	白色粒・雲母	口縁	覆土
SD06-3	在埴土器	内耳鏡	—	—	—	内耳部分破片。外面煤付着。	にぶい 黄橙	白色粒・石英・雲母	口縁	覆土
SD07-1	かわらけ	小皿	—	—	(5.8)	ロクロ成形、底部ヘラケズリ。	明赤褐	白色粒	底	覆土
SD07-2	常滑	片口鉢	—	—	—	体部下端破片。体部外面縦方向のヘラナデ、内面は平滑。	明黄褐	白色粒	体	覆土
SD11-1	須恵器	甕	—	—	7.6	ロクロ調整、底部手持ちヘラケズリ、又の線刻あり。	灰	白色粒・黒色粒	底	覆土
SD11-2	常滑	甕	—	—	—	甕肩部破片。肩部外面にカギ目状の調整がある。	にぶい 褐	石英・白色粒	肩	覆土
SD14-1	土製品	鋳型	残長10.4cm、幅12.5cm、厚さ5.9cm、重さ734.0g、上部を欠損する仏像正面側の頭部。右側縁に合わせ目と思われる沈線が横位に引かれている。表面の仏像態部分は使用したことにより背みを帯びている。善光寺阿弥陀仏三尊像の鋳型と思われる			にぶい 帯	白雲母多・石英	下部	底面	
SD14-2	常滑	片口鉢	(36.0)	—	—	口縁部破片。口唇部に沈線が遺る。内面自然釉。常滑7型式。	にぶい 赤褐	石英・白色粒	口縁～体	覆土
SD14-3	常滑	甕	(34.0)	—	—	甕口縁部破片。縁帶部を頭部に接合させる。常滑6b～7型式	にぶい 赤褐	石英・白色粒	口縁	覆土
SD14-4	常滑	甕	(39.2)	—	—	甕口縁部破片。口縁断面N字状。外表面自然釉。常滑6b～7型式	灰	石英・白色粒	口縁	覆土
SD14-5	炉壁	—	長さ11.7cm、幅7.9cm、厚さ3.3cm、重さ198.0g、内面が濃褐色を呈してガラス化し、本炭痕がある。							覆土



第106図 遺構外出土遺物

第5節 遺構外出土遺物（第106図、第40表、遺物図版11）

遺構外の出土遺物として13点を図示した。器種には縄文後期土器片（1）、須恵器蓋（2）、須恵器長頸壺（3）、須恵器盤（4）、かわらけ小皿（5・6・7）、土師器甕底部（8・9）、古瀬戸小壺（10）、布目瓦（11）、羽口（12）、土製支脚（13）がある。

第40表 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
外1	縄文土器	深鉢	—	—	—	沈鋸区画に細縄文が充填される胴部片。加曾利B式期	にぶい 橙	白色粒・石英・雲母	胴部	表採
外2	須恵器	蓋	(14.0)	—	—	天井部回転ヘラケズリ。退化した返しがある。	灰	白色粒・石英・雲母	天井～口縁	I-12
外3	須恵器	長頸瓶	6.0	—	—	ロクロ調整。全体に灰を被る。	灰	白色粒・石英	口縁	H-11
外4	須恵器	盤	16.3	<14>	13.0	ロクロ調整。底部回転ヘラ切り。高台はハの字状に付される。	灰	長・石・白色粒	底	K-19
外5	かわらけ	小皿	6.0	1.5	3.2	ロクロ成形。底部回転条切り。	橙	白色粒微量	口縁～底	F-7
外6	かわらけ	小皿	(8.0)	—	—	ロクロ成形の小皿口縁部破片。	橙	砂粒・石英・雲母	口縁	T-13
外7	かわらけ	小皿	7.6	2.4	4.7	ロクロ成形。底部ヘラケズリ。	橙	石英・白色粒	口縁～底	N-8
外8	土師器	甕	—	—	6.6	底部に木葉痕のある甕底部。	橙	白色粒・石英・雲母	体～底	I-13
外9	土師器	甕	—	—	5.8	底部に木葉痕のある甕底部。	橙	雲母・白色粒	底	H-11
外10	古瀬戸	小壺	—	<4.3>	2.7	胴部上半及び内底面に灰粒。底部回転条切り。	灰白	白色粒・黒色粒	胴～底	E-11
外11	瓦	丸瓦	残長7.7cm、厚さ2.0cm、凸面ヘナナデ、端部面取り・ヘラケズリ、四面布目。	—	—	—	橙	石英・雲母・白色粒	—	E-11
外12	土製品	羽口	長さ7.0cm、幅5.8cm、厚さ4.0cm、重さ135.92g。外面はガラス化する。内径は10.0cm前後が想定される。	—	—	—	橙	石英・白色粒	—	K-9
外13	土製品	支脚	残長16.0cm、径6.8cm、表面に指頭痕を残す棒状の土製支脚。ほぼ完形で下端部がやや太くなっている。	—	—	にぶい 黄褐色	砂粒・石英・雲母	ほぼ完形	J-10	

第6章 まとめ

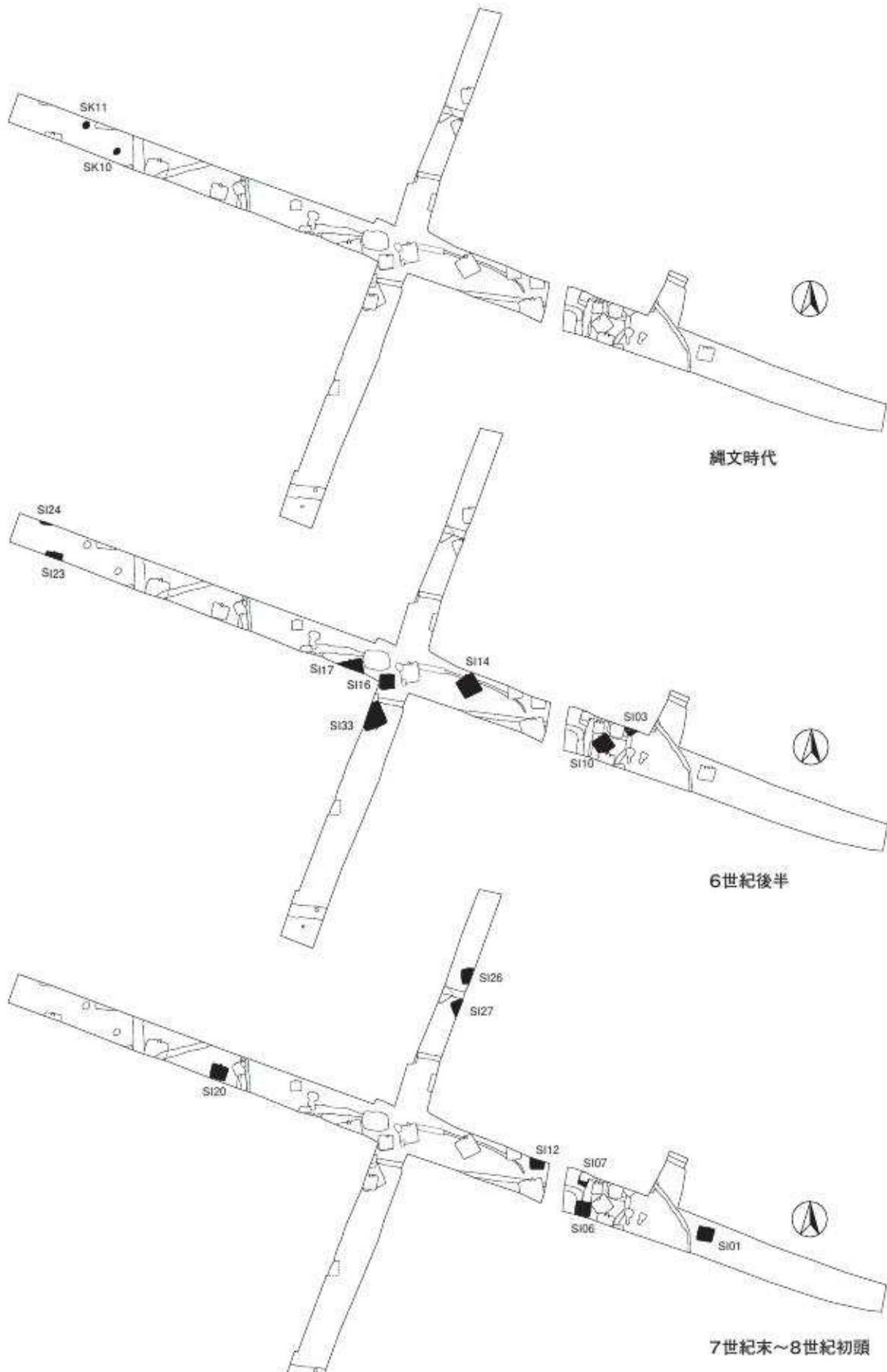
本遺跡において検出された遺構は、住居跡34軒、地下式坑5基、方形堅穴状遺構1基、土坑2基、陥し穴状土坑2基、井戸跡1基、溝跡14条である。遺物は古墳時代後期、奈良・平安時代、中世を主体に出土している。本章では検出された遺構の時期別の変遷と、中世の遺構と遺物について述べて、調査のまとめとしたい。

第1節 遺構の変遷について

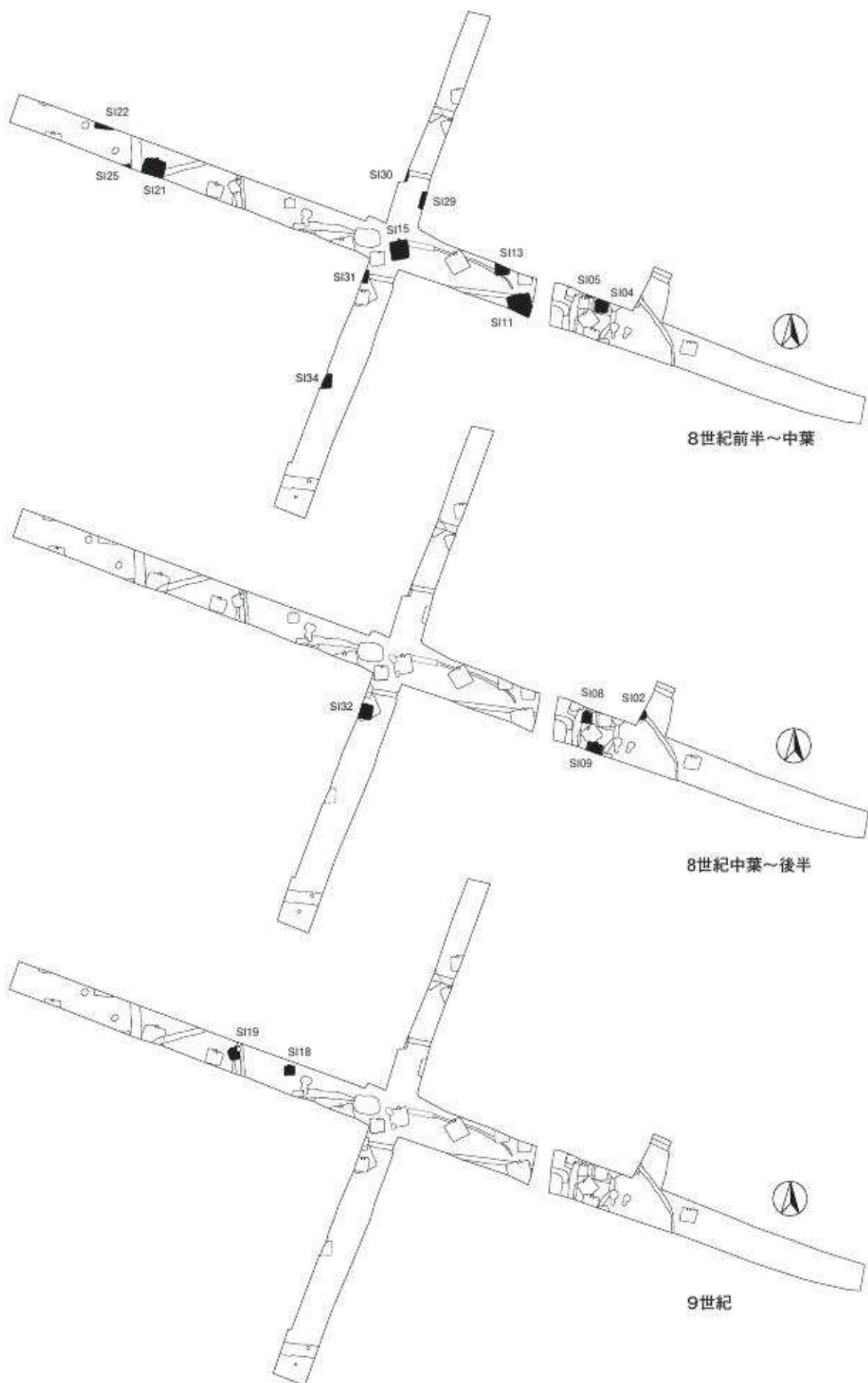
第107~109図は今回の調査で検出された遺構の変遷を時期別に示したものである。本遺跡で最も古い遺構は、縄文時代の陥し穴状土坑の可能性が高いSK10とSK11であるが、縄文時代に調査範囲内が居住地として活用されていた痕跡は皆無で、猫松遺跡・長原遺跡の調査成果にあるように、縄文時代の本遺跡周辺が狩猟の場であったことが窺われる結果が得られたといえよう。本遺跡に集落が営まれるのは古墳時代後期の6世紀後半以降である。検出された集落は時期別に概ね5時期に分けられ、6世紀後半の住居跡は8軒(SI03・10・14・16・17・23・24・33)、7世紀末~8世紀代の住居跡は7軒(SI01・06・07・12・20・26・27)、8世紀前半~中葉の住居跡が最も多く12軒(SI04・05・11・13・15・21・22・25・29・30・31・34)、8世紀中葉~後半の住居跡は4軒(SI02・08・09・32)、9世紀中葉~後半の住居跡は2軒(SI18・19)になる。集落は6世紀後半に出現し、一時的に途絶えるが、7世紀末~8世紀初頭に再度集落が形成され、8世紀前半に集落としてのピークを迎えている。住居数の推移をみると、9世紀代には居住地として急激に衰退し、終焉したと判断される。古代の集落が終焉した後の中世以降では、12世紀代の土坑1基(SK12)、13~15世紀代の地下式坑5基(SK01・02・03・04・08)、方形堅穴状遺構1基(SK05)、溝跡2条(SD06・14)、中世もしくは近世と思われる溝跡12条(SD01・02・03・04・05・07・08・09・10・11・12・13)、井戸跡1基(SE01)、土坑1基(SK09)が検出されているが、中世段階においても居住地としての痕跡はほとんどなく、検出された当該期の遺構と遺物からは、鉄・銅製品等の生産の場もしくは祭祀場・墓域として、本遺跡周辺の台地上が活用されていたと捉えられる。その後、近世には現在とほぼ同様の畠地になっていたものと考えられる。

第2節 中世の遺構と遺物について

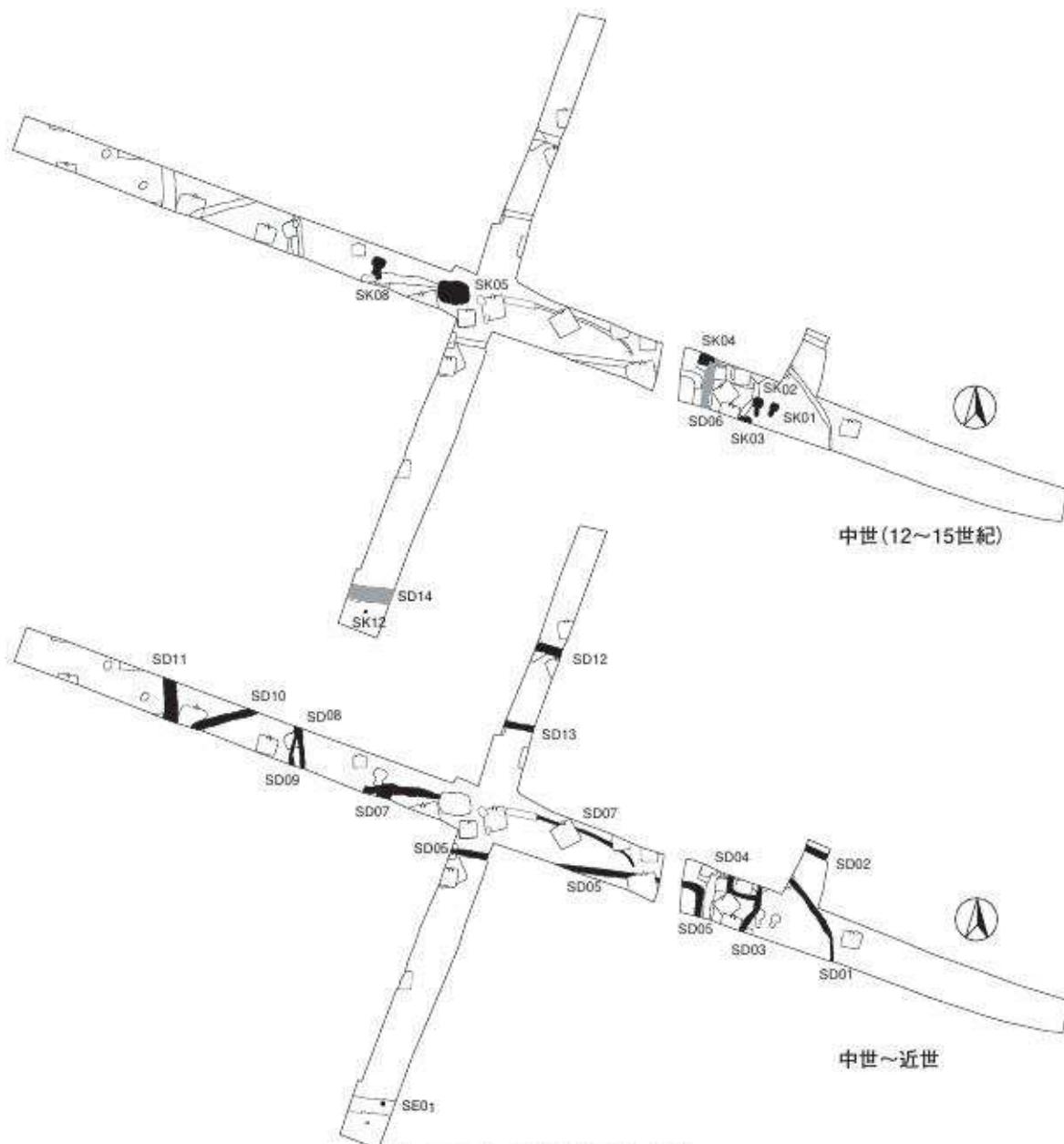
本遺跡を特徴付ける資料として中世の遺構と遺物が挙げられる。検出された中世の遺構は、かわらけが一括出土した土坑、古瀬戸・常滑焼等が出土した地下式坑・方形堅穴状遺構、仏像鋳型・常滑焼等が出土した溝跡がある。その年代観を示すと、6点のかわらけ(SK12-1~6)が出土したSK12は、類例に乏しく明瞭ではないが12世紀代と考えられ、かわらけ初現期の一括資料と思われる。地下式坑は、遺物の出土量の多いSK01で判断すると、常滑焼甕(SK01-4・6)が13世紀中葉の常滑5~6a型式、片口鉢(SK01-5・7)は14世紀後半~15世紀前半の8~9型式、古瀬戸瓶子(SK01-1)は瓶子II類で14世紀代と思われる。13世紀中葉~15世紀前半とかなり時間幅があるが、磁石に転用されている5~6a型式の常滑焼甕を2次利用(転用)期とみると、14世紀後半~15世紀前半代の所産である可能性が高い。方形堅穴状遺構(SK05)は、常滑焼甕(SK05-9・10)が13世紀後半の常滑6a~6b型式で、1点のみ14世紀後半~15世紀前半の8~9型式の甕口縁部(SK05-8)がある。SK01とほぼ同時期の遺物で、14世紀を中心とした時期の所産



第107図 遺構変遷図（1）



第108図 遺構変遷図（2）



第109図 遺構変遷図（3）

と思われる。溝跡では、地下式坑のSK04に切られるSD06から13世紀中葉の常滑5型式の甕(SD06-2)が出土しており、中世では最も古い13世紀代の所産と考えられる。なお、1点出土した内耳鍋(SD06-3)は時期的にSK04の混入遺物の可能性が高い。SD14出土の常滑焼甕(SD14-3・4)は13世紀後葉～14世紀前半の6b～7型式で、片口鉢(SD14-2)は14世紀前半の7型式と思われる。

SD14は最下層から仏像鋳型が出土しており、遺構の時期を13世紀後葉～14世紀前半に特定すると、鎌倉末期に東成井を本拠地とした鋳物師・沙弥善性(宍戸鳴井善性)の時期と重なることになる。沙弥善性は常陸国から下総国にかけて活動した鋳物師で、本拠地は宍戸莊鳴井、現在の東成井一帯にあたる。沙弥善性は鋳物師大工としてその名が見えるので、鋳物師集団の長とみられており、現在知られている作例は、延慶二年(1309)二月二一日銘常陸国久慈西郡戸崎村(那珂市戸崎)の蓮光寺梵鐘、応長元年(1311)十一月日銘下総国印東莊八代郷船方の薬師寺梵鐘、正和五年(1316)三月十四日銘常陸国鹿島郡の安福寺梵鐘の三口である。このうち現存するのは薬師寺梵鐘のみで、現在は千葉県成田市宗吾の東勝寺(宗吾靈堂)に保管され

ている。作例が残されていることから14世紀初頭の東成井において鑄物師集団が活動していたことは明白な事実であり、今回出土した仏像鑄型は、時期的に沙弥善性に直接関係する遺物の可能性もある。

仏像鑄型本体をみると、仏像下半身膝下の正面側のみ残存しているもので、詳細は不明であるが、中世に流行した善光寺式阿弥陀三尊像と考えられる。鑄型の残存部から像高を推測する方法として、現存する鎌倉～室町期の善光寺式阿弥陀三尊像の像高と裙（裳裾）及び両足巾の判明する図版・写真等で比率を算出した結果、裙と像高の比率は中尊の阿弥陀如来像が4.16～4.60、両脇持立像が4.26～4.85、両足幅と像高の比率は阿弥陀如来像が5.76～7.14、両脇持立像が6.20～7.76になった。出土した鑄型の裙は7.4cmで、中尊の阿弥陀如来像の比率で算出される像高は30.78～34.00cm、両脇持立像の比率では31.52～35.89cmになる。両足幅は4.6cmで、阿弥陀如来像の比率から算出される像高は26.50～32.84cm、両脇持立像の比率では28.52～35.70cmになる。最大でも35.89cmの像高であることから、善光寺式阿弥陀三尊像の両脇持立像の観音菩薩もしくは勢至菩薩のどちらかの鑄型である可能性が高く、像高は、最も誤差の少ない両脇持立像の裙と像高の比率で算出される31.52～35.89cmと推測される。次の特徴を挙げると、納衣の端部がU字状ではなくV字状を呈していることである。両足部分に近い場所に納衣の端部が下がるものは阿弥陀如来像であるが、端部はほぼU字状であり、V字状のものはほとんど見受けられない。両脇持立像の場合は、納衣端部の表現がかなり上部に位置するものが多いが、千葉県茂原市に所在する行徳寺の善光寺式阿弥陀三尊像の両脇持立像は、両足部分に近い場所にV字状の意匠が表現されており、近似する例といえる。何れにしても推測の域をでないが、本資料で造られた仏像が現存している可能性もあり、今後、検討すべき課題としたい。

引用・参考文献

- 茨城県教育財團 中・近世研究班 1995 「茨城の中世かわらけについて」『研究ノート4号』 財團法人茨城県教育財團
茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会 2011 「茨城中世考古学の最前線～編年と規準資料～」 茨城県考古学協会
大久保隆史 2011 「猫松遺跡 長原遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告 第348集 財團法人茨城県教育財團
小川和博 2008 「須釜堀内遺跡」 石岡市教育委員会
小野正敏 2001 「図解・日本の中世遺跡」 財團法人東京大学出版会
霞ヶ浦町郷土資料館 2000 「祈りの造形 -中世霞ヶ浦の金工品-」 霞ヶ浦町郷土資料館
全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 編集・発行 2005 「全国シンポジウム
中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集」
曾根俊雄・大賀健・長谷川秀久・石山啓・鈴木徹 2011 「中島遺跡」 石岡市教育委員会
曾根俊雄編 2011 「市内遺跡調査報告書第6集」 石岡市教育委員会
千葉隆司 2006 「地名と考古学」『婆良岐考古 第28号』 婆良岐考古同人会
東国中世考古学研究会 2009 「中世の地下室」 高志書店
湯原勝美・秋山泰利・後藤俊一 2011 「岡原遺跡」 常陸大宮市教育委員会

附編 資料紹介 石岡市東成井 西久保遺跡出土の和同開珎について

石岡市教育委員会 曽根俊雄

1. 資料の由来

本稿で紹介するのは、本書で報告された「東成井山ノ神遺跡」の周辺において出土した「和同開珎」である。

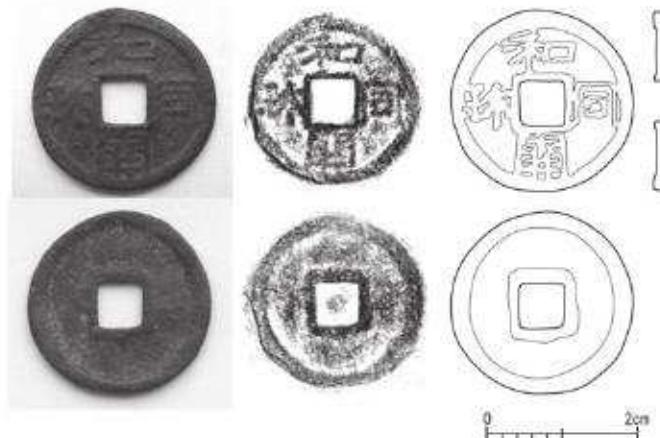
本資料は、昭和30年代後半、土地所有者の大和田氏によって水田作業中に偶然発見されたという。発見された場所は、國部川左岸の標高24m内外の水田であり、地番は石岡市東成井字西久保2957番地である。現在同地は、「西久保遺跡」として埋蔵文化財包蔵地に登録されている（第4図・注1）。

資料は現在も採集者で土地所有者の大和田氏宅に保管されている。今回の資料紹介にあたり、所有者のご協力のもと、図化・採拓・写真撮影を行なった。作業にあたっては大和田誠氏に全面的なご協力をいただき、また仲介の労を田崎徹氏にとっていただいた。深く感謝申し上げる。

2. 資料の概要

和同開珎の銅錢である（第110図）。

完存し、遺存状態も良好である。外縁外径は24mm、外縁内径は20mm、内郭外径は8mm、内郭内径は6.5mm、厚さ1mmである。書体はやや磨耗が見られ、特に「珎」は不鮮明である。「開」は隸書であり、いわゆる「新和同」にあたる。



第110図 西久保遺跡出土和同開珎

3. 小結

現在、茨城県内で確認されている和同開珎は、つくば市明石遺跡、土浦市弁才天遺跡、鉾田市須賀下、そして石岡市茨城廢寺跡出土の計4例である。そのほか茨城県出土と考えられる和同開珎の破片が1点あり（川井2011）、本資料は6例目となる（注2）。

今回の東成井山ノ神遺跡の発掘調査で検出された古代の遺構は竪穴住居跡だけだが、第3地点-1では円面鏡や綠釉陶器の破片が出土しており、また第3地点-1A周辺には「古館」という地名も残る。これらの状況証拠や和同開珎の出土を考えると、当地が古代においても拠点的な集落であった可能性も浮かんでくる。

注

- 1) 「八郷町遺跡台帳No.1」（西宮1994）では「和同開珎出土地」として紹介され、「八郷町大字東成井西久保2985」とあるが、大和田氏に確認したところ、出土地は上記の「西久保2957」との御教示をいただいた。
- 2) 西宮1994で、「昭和40年代後半の頃、山崎地内からも和同開珎が1枚出土している」と紹介されているが、詳細は不明である。

引用文献

- 川井正一 2011 「和同開珎の可能性のある銭貨について」『埋蔵文化財部 年報30<平成22年度>』茨城県教育財團
西宮一男 1994 「八郷町遺跡台帳No.1」八郷町教育委員会

写 真 図 版

調査区



1 調査区東側全景 西から



2 調査区西側全景 南東から

遺構図版2
調査区



1 調査区南側全景 南西から



2 調査区北側全景 南西から

標準堆積土層・住居跡



1 標準堆積土層 1 南東から



2 標準堆積土層 2 南東から



3 SI01 遺物出土状況 南から



4 SI01 カマド 南から



5 SI02 全景 北西から



6 SI03 遺物出土状況 北から



7 SI04 遺物出土状況 北から

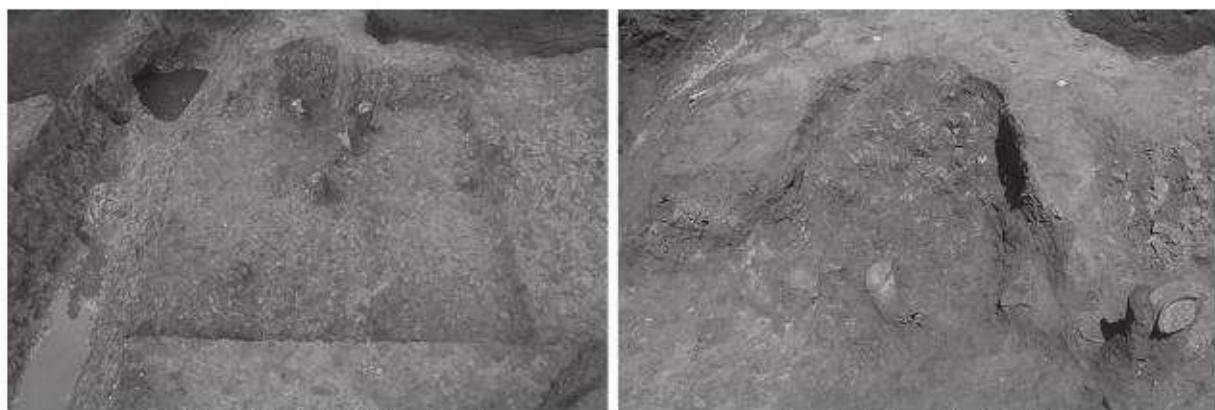


8 SI05 全景 南から



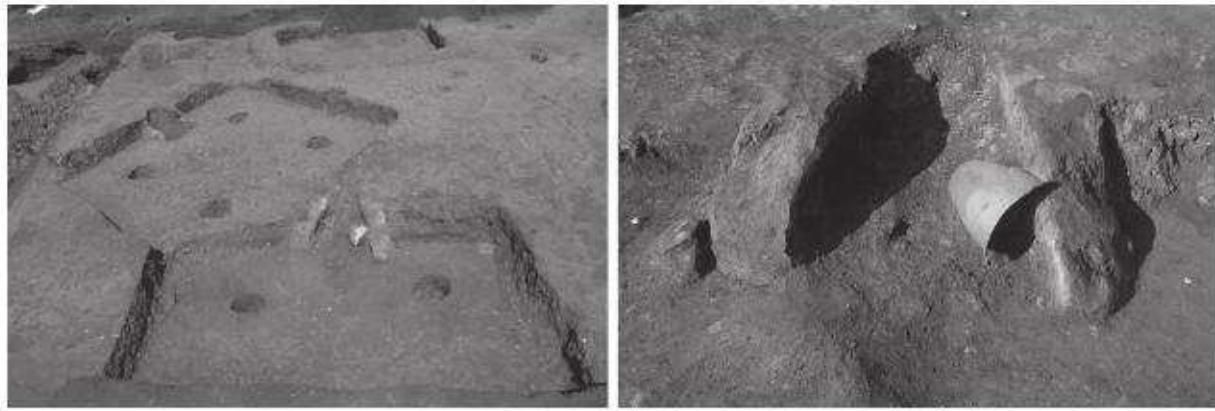
1 SI06 遺物出土状況 南から

2 SI07・SK04 全景 南東から



3 SI08 遺物出土状況 南から

4 SI08 カマド 南から



5 SI09・10 全景 南西から

6 SI09 カマド 南西から



7 SI10 遺物出土状況 南東から

8 SI10 カマド 南東から

住居跡



1 SI11 セクション 東から



2 SI11 遺物出土状況 南から



3 SI11 カマド 南から



4 SI12 遺物出土状況 北から



5 SI13 遺物出土状況 南から



6 SI14 セクション 南から



7 SI14 遺物出土状況 南東から



8 SI14 カマド 南東から



1 SI15 遺物出土状況 南から



2 SI15 カマド 南から



3 SI16 セクション 南から



4 SI16 全景 南から



5 SI16 カマド 南から



6 SI17 炭化材出土状況 西から



7 SI17 カマドセクション 南から



8 SI17 カマド 南から

住居跡



1 SI18 全景 南から



2 I19 全景 南から



3 SI20 全景 南から



4 SI20 カマド 南から



5 SI21 全景 南から



6 SI21 カマド 南から



7 SI22 遺物出土状況 南東から



8 SI22 鉄斧出土状況 東から

住居跡



1 SI23 遺物出土状況 東から



2 SI23 遺物出土近景 南から



3 SI23 カマド 南から



4 SI24 遺物出土状況 東から



5 SI25 全景 北から



6 SI26 全景 南から



7 SI26 主柱穴遺物出土状況 南から



8 SI26 カマド 南から

住居跡



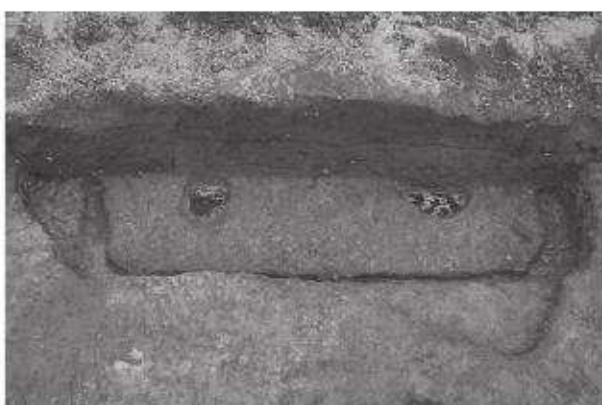
1 SI27 全景 南西から



2 SI27 カマド 南から



3 SI28・SD12 全景 北西から



4 SI29 遺物出土状況 西から



5 SI29 紡錘車・鉄製品出土状況 北東から



6 SI30 全景 南から



7 SI31・32・33セクション 東から



8 SI31 全景 西から



1 SI32 遺物出土状況 南から



2 SI32 遺物出土近景 北から



3 SI32 カマドセクション 南から



4 SI32 カマド 南から



5 SI32 カマド支脚出土状況 南から



6 SI31・32・33 全景 南東から



7 SI33 遺物出土近景 東から



8 SI34 全景 南から

地下式坑・方形竪穴状遺構



1 SK01 セクション 南から



2 SK01 全景 南から



3 SK02 セクション 北東から



4 SK02 全景 南から



5 SK03 全景 北西から



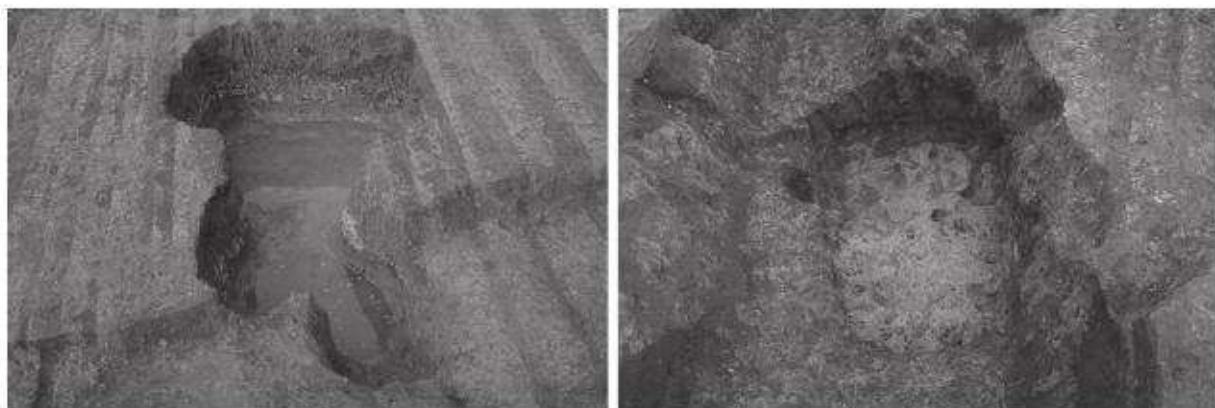
6 SK04 全景 東から



7 SK05 セクション 南西から

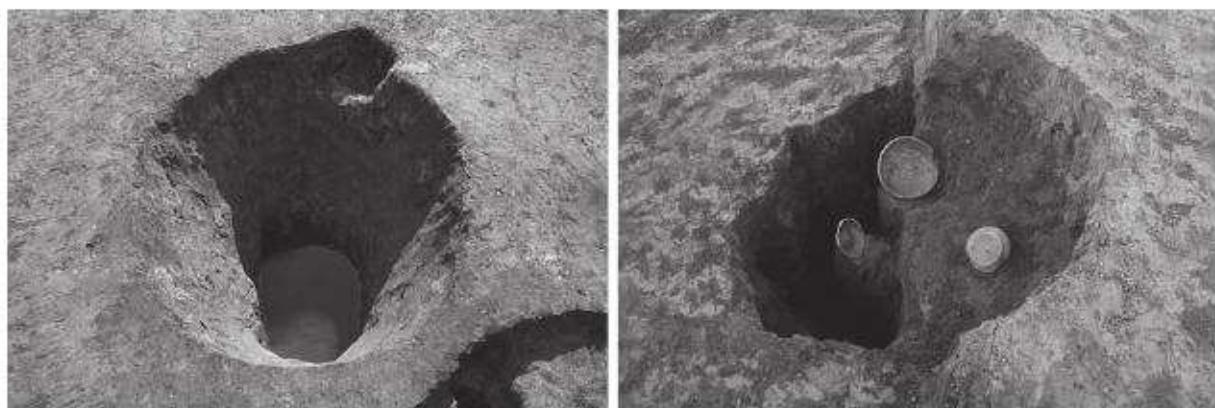


8 SK05 全景 西から



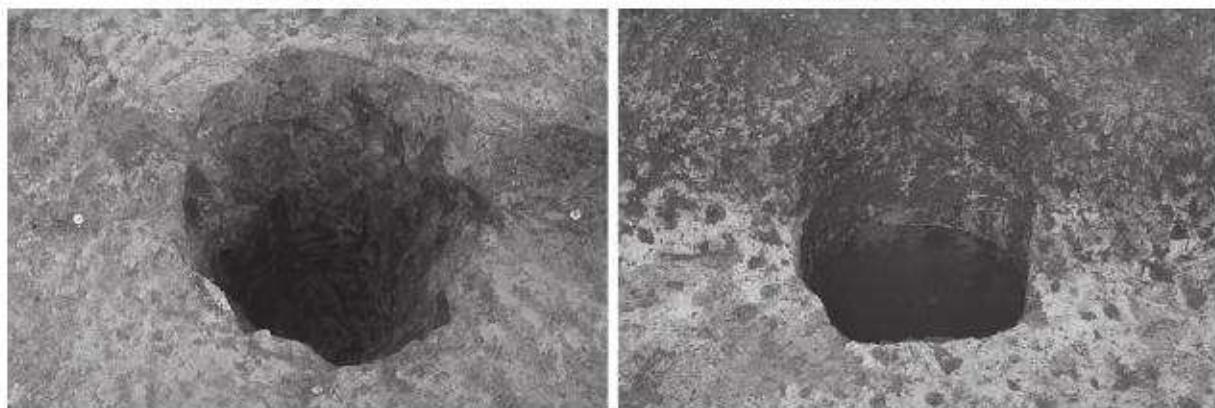
1 SK08 全景 南から

2 SK09 全景 北から



3 SK11 全景 北東から

4 SK12 遺物出土状況 1 南から



5 SK12 完掘状況 西から

6 SE01 全景 南から



7 SD01 全景 北西から

8 SD02 全景 北西から

溝跡



1 SD05・06 セクション 南から



2 SD05・06 全景 南から



3 SD10 全景 南西から



4 SD10 全景 南西から



5 SD11 全景 南から



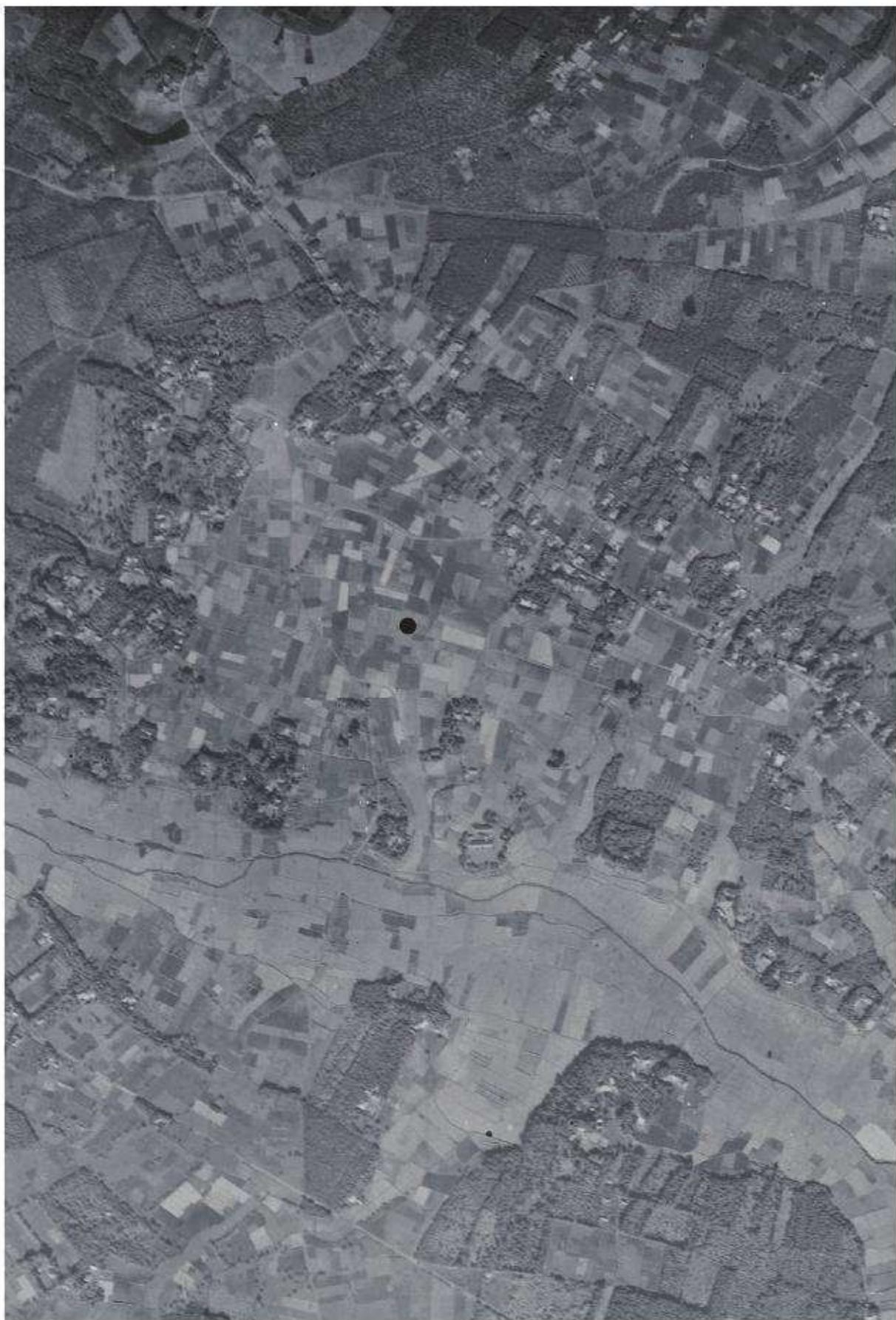
6 SD13 全景 東から



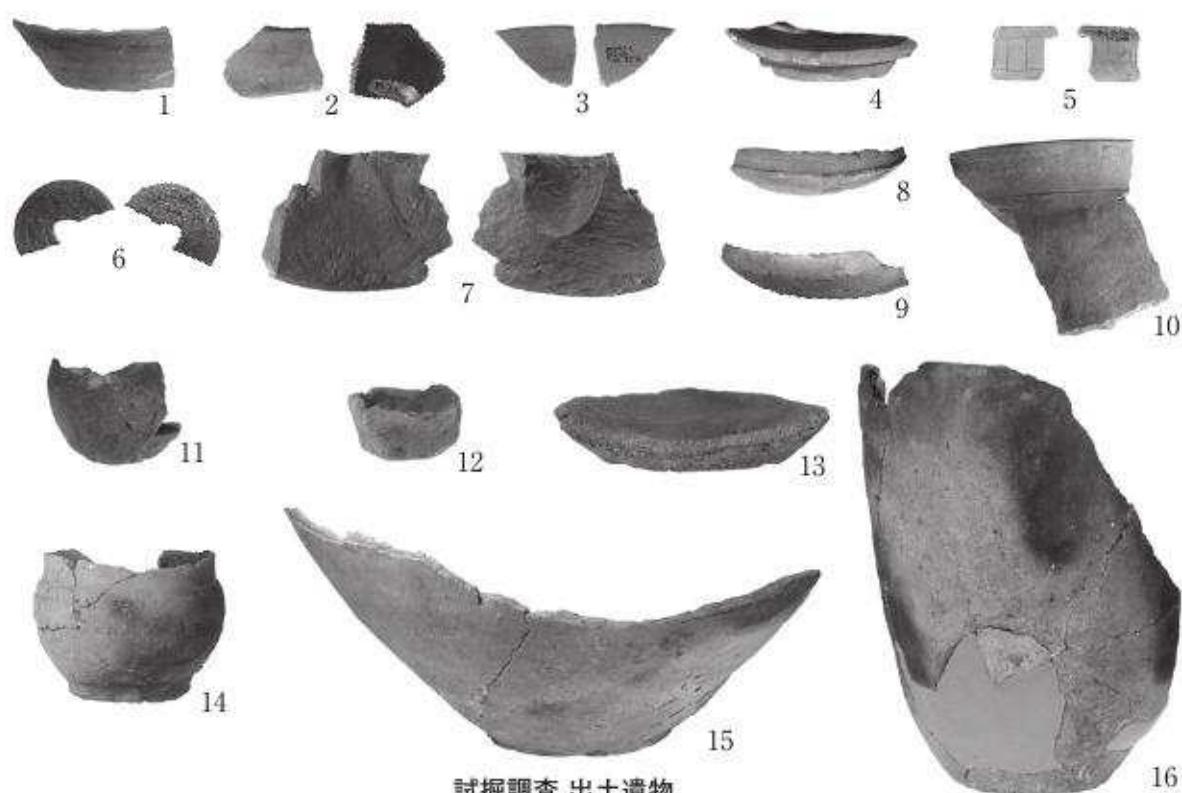
7 SD14 セクション 西から



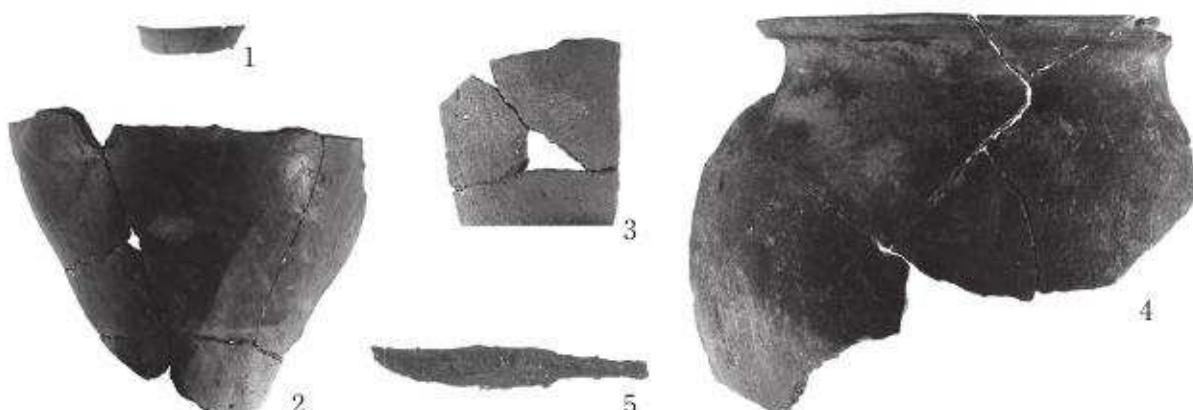
8 SD14 全景 西から



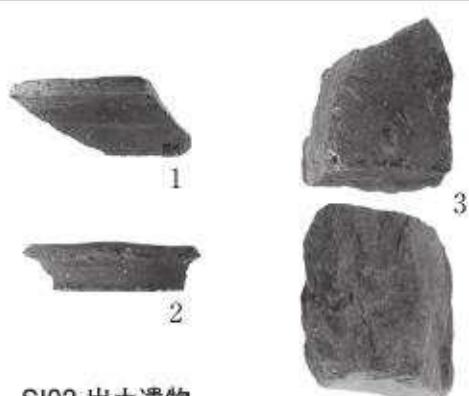
東成井山ノ神遺跡周辺空中写真 (昭和 22 年 10 月 25 日・米軍撮影)



試掘調査 出土遺物



SI01 出土遺物

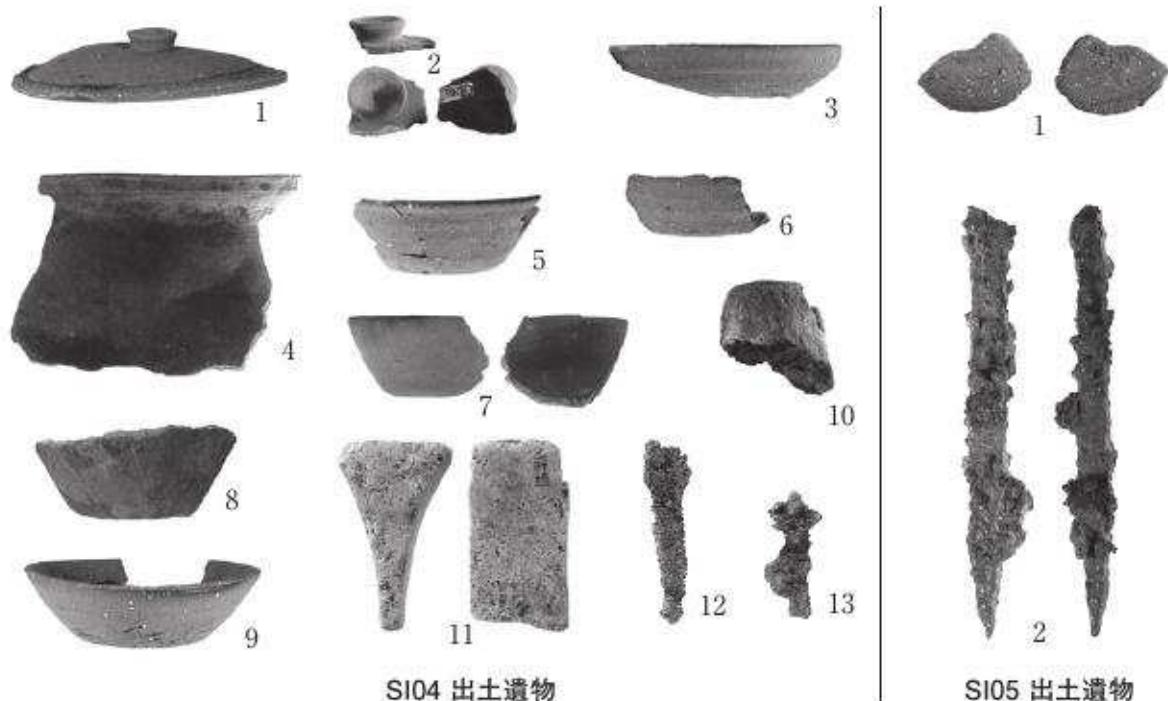


SI02 出土遺物



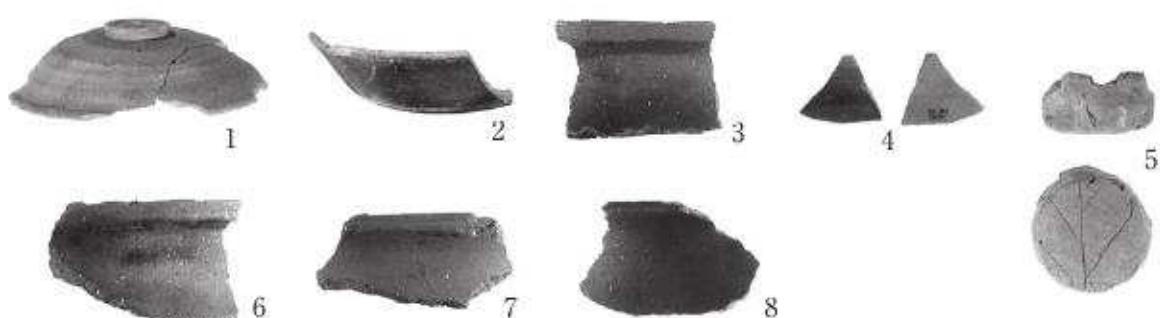
SI03 出土遺物

遺物図版 2

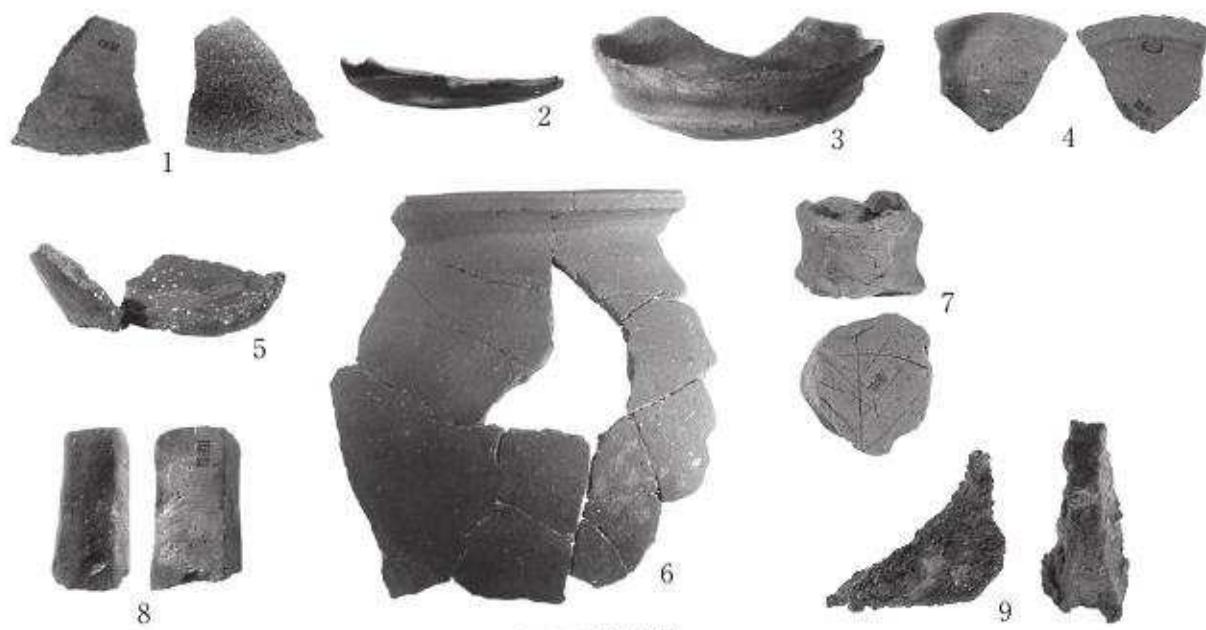


SI04 出土遺物

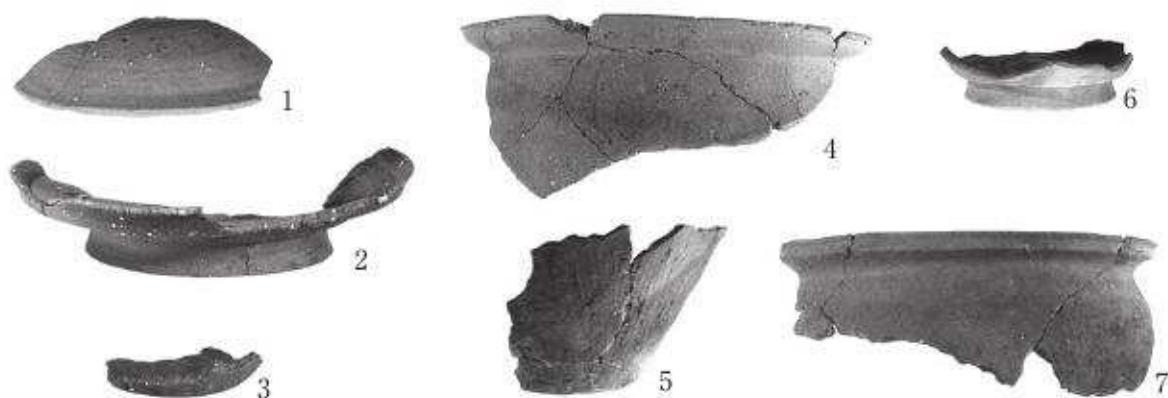
SI05 出土遺物



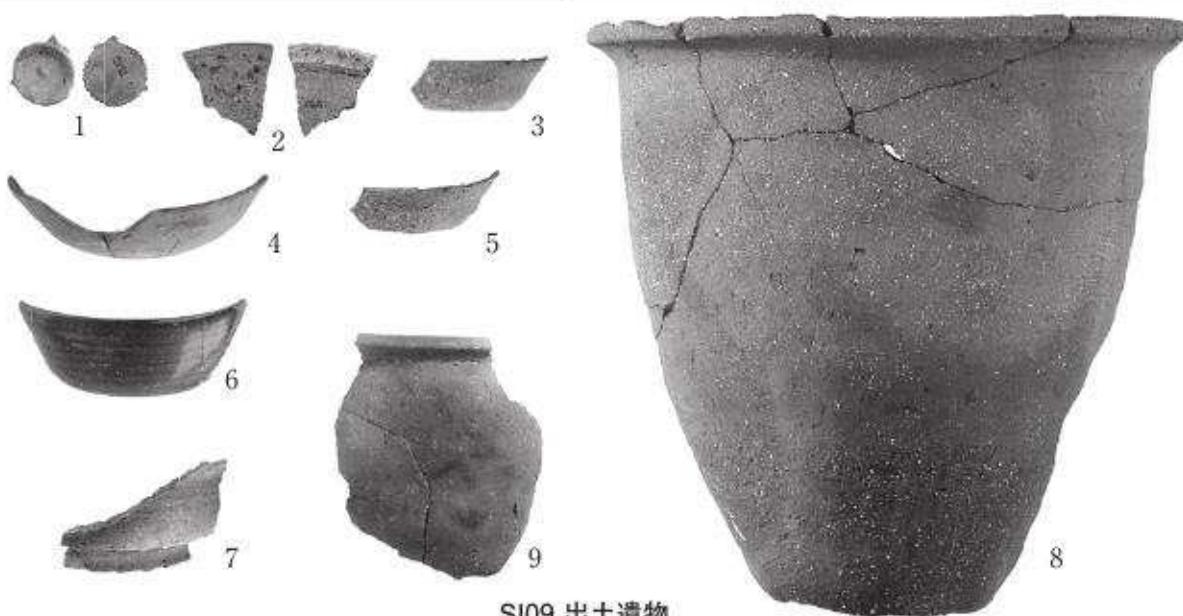
SI06 出土遺物



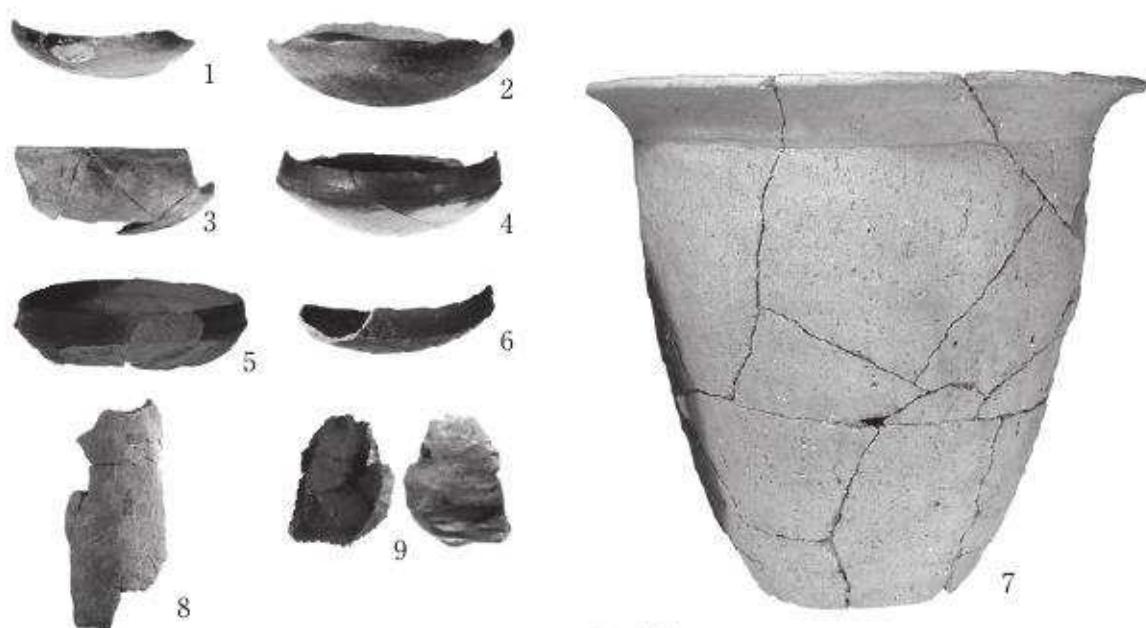
SI07 出土遺物



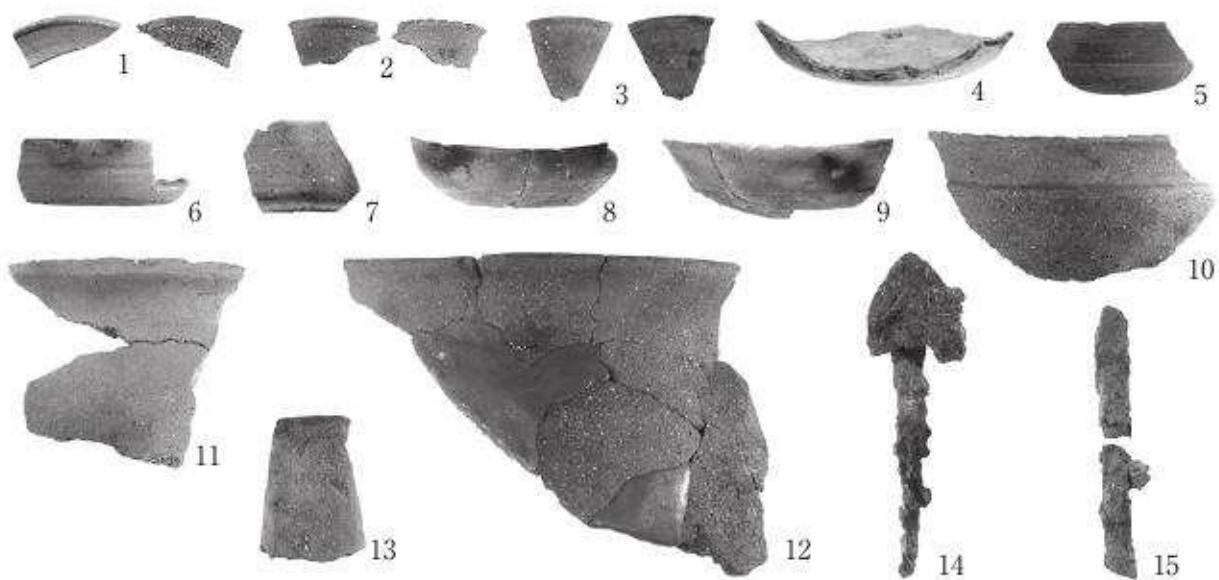
SI08 出土遺物



SI09 出土遺物



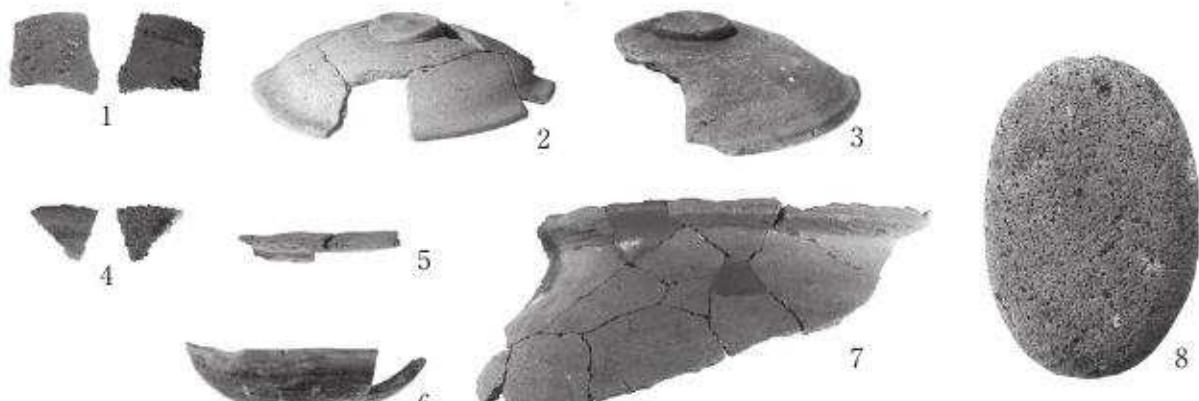
SI10 出土遺物



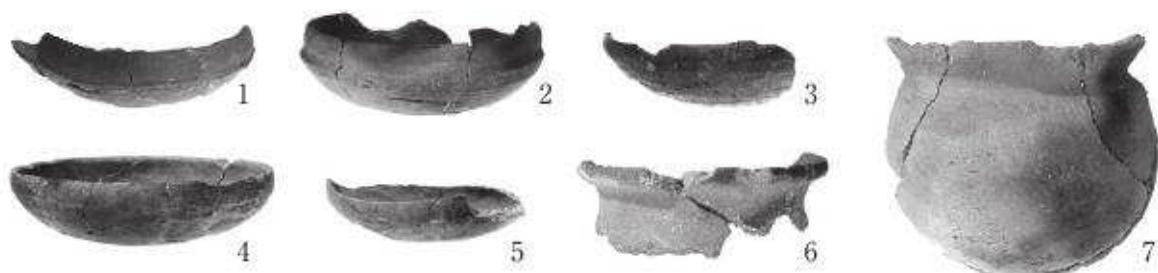
SI11 出土遺物



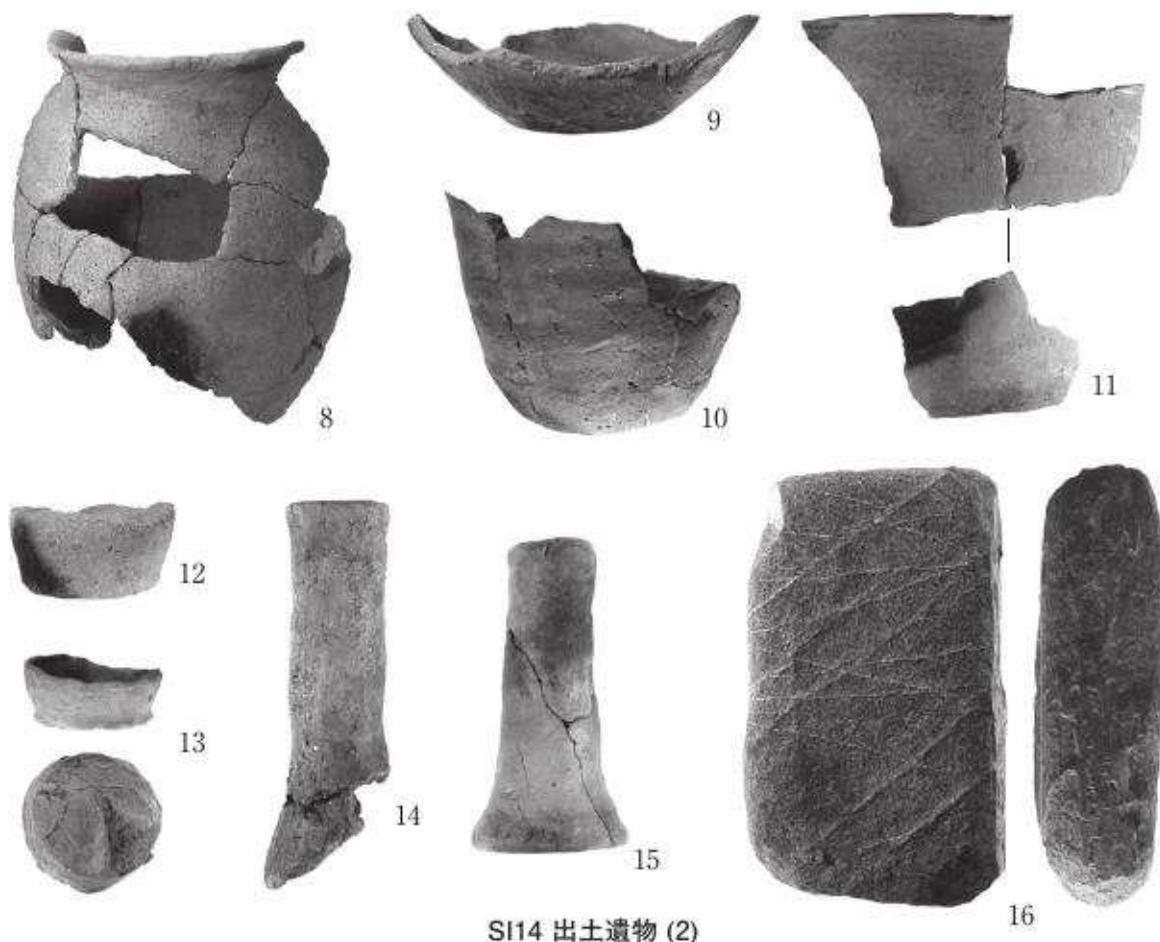
SI12 出土遺物



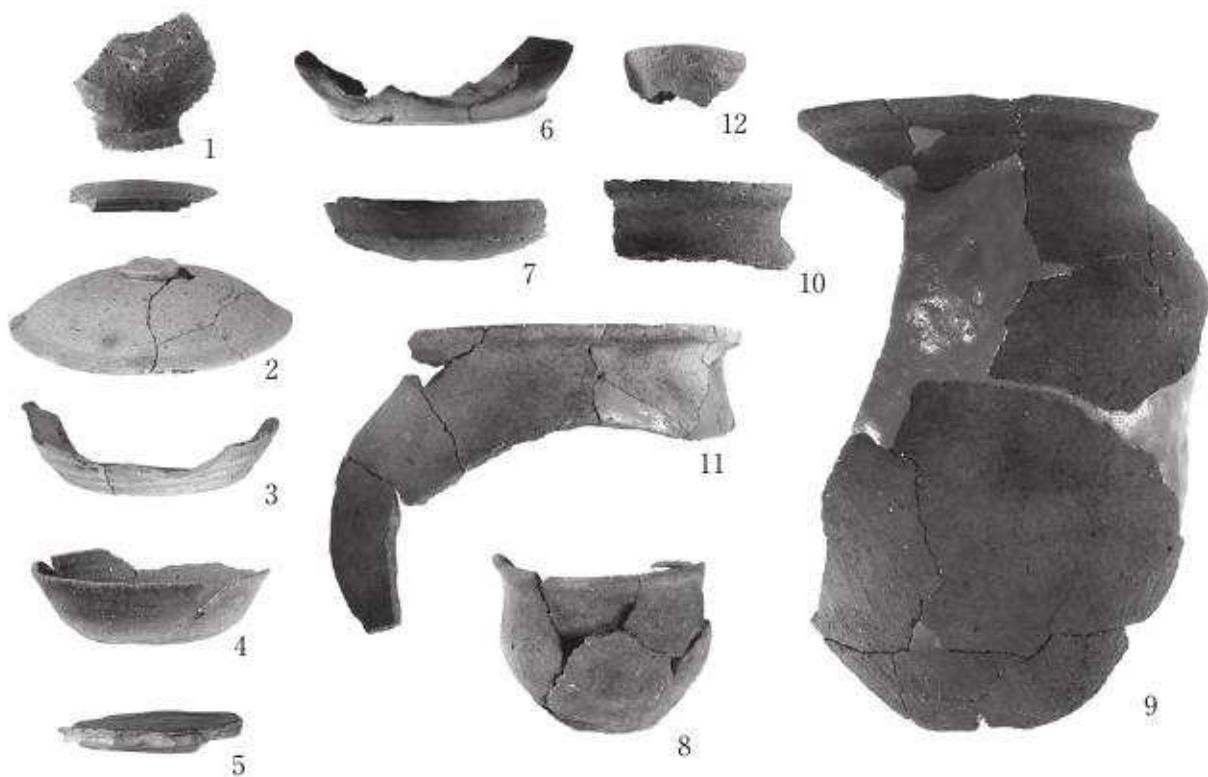
SI13 出土遺物



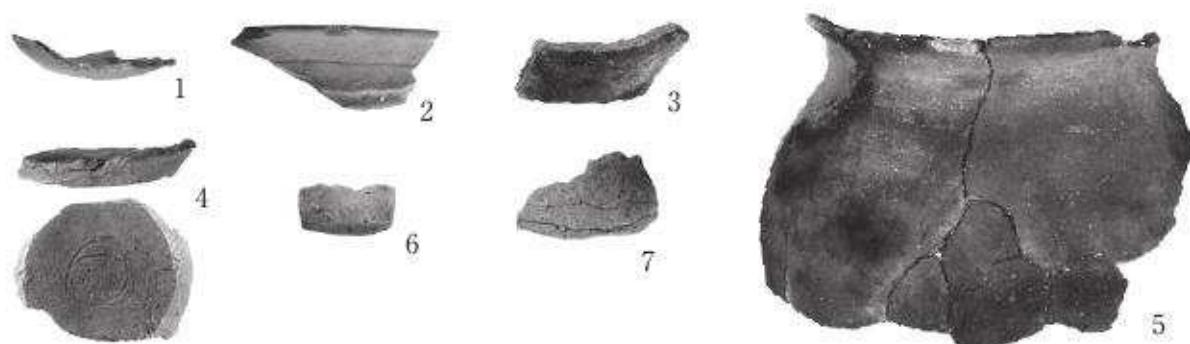
SI14 出土遺物 (1)



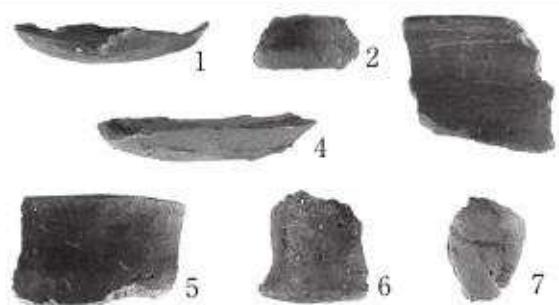
SI14 出土遺物 (2)



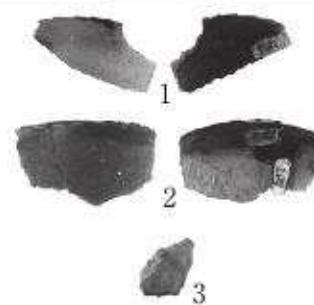
SI15 出土遺物



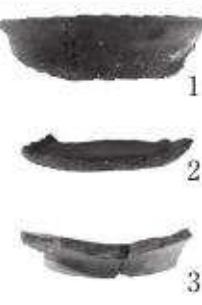
SI16 出土遺物



SI17 出土遺物



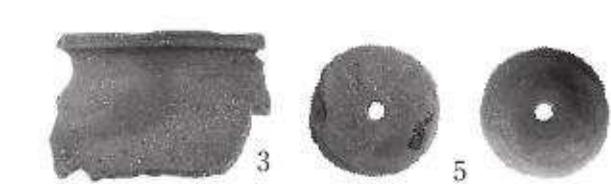
SI18 出土遺物



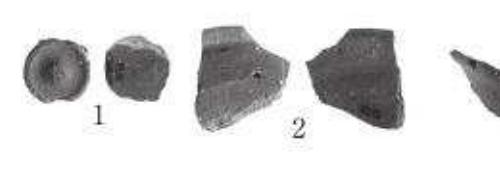
SI19 出土遺物



SI20 出土遺物



5



4



5



8



13

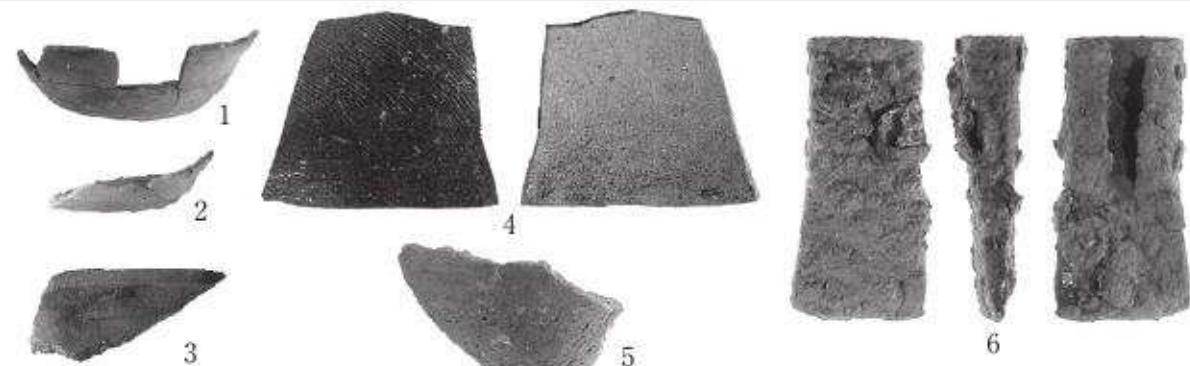


14

SI21 出土遺物 (1)



SI21 出土遺物 (2)



SI22 出土遺物

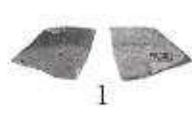


SI23 出土遺物

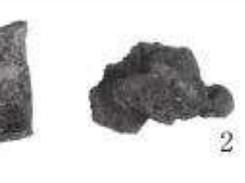
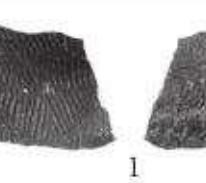


SI24 出土遺物

SI25 出土遺物



SI26 出土遺物



SI27 出土遺物

SI28 出土遺物

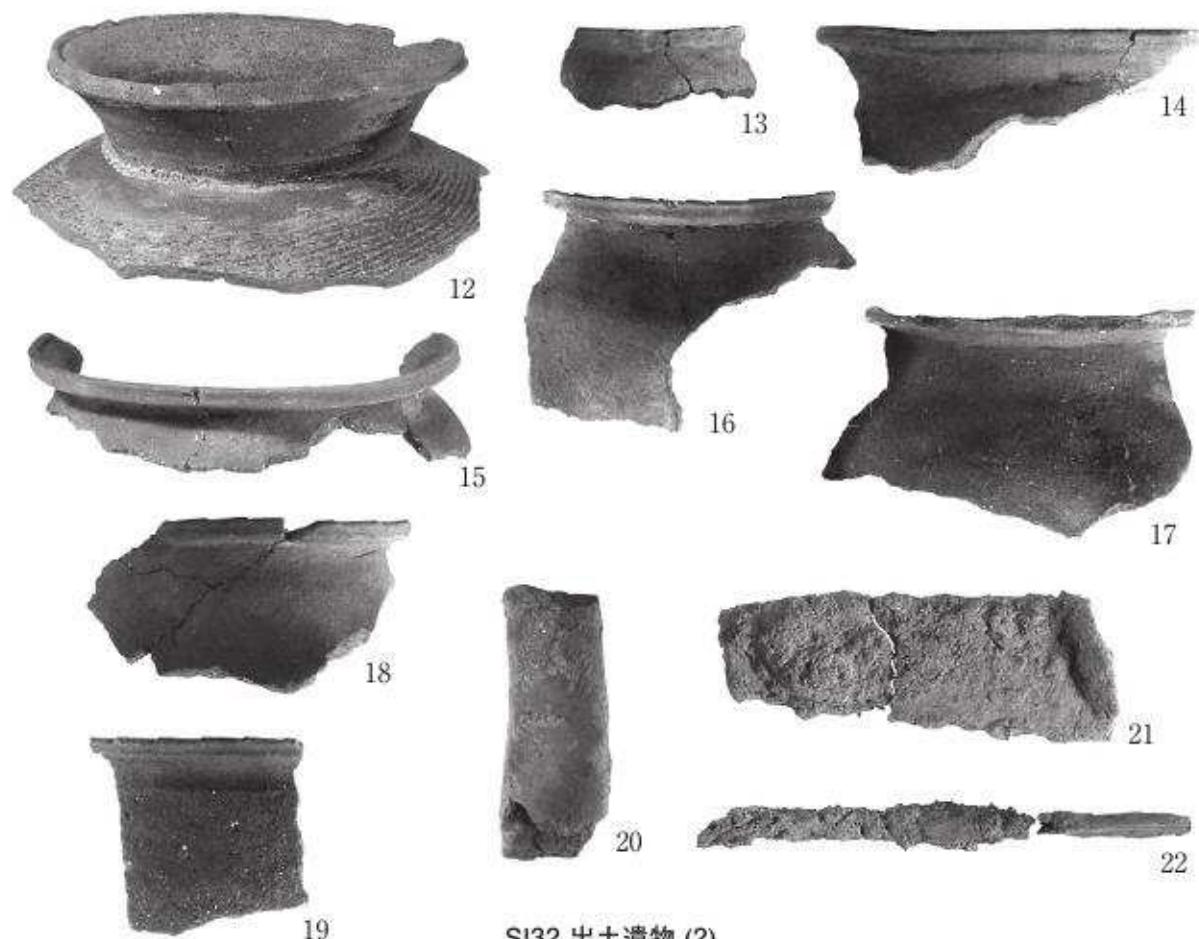


SI30 出土遺物

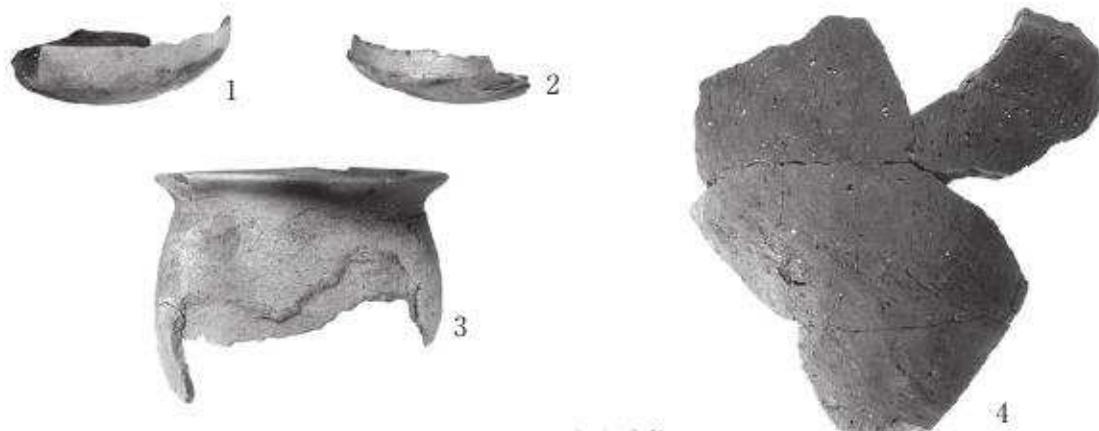
SI31 出土遺物



SI32 出土遺物 (1)



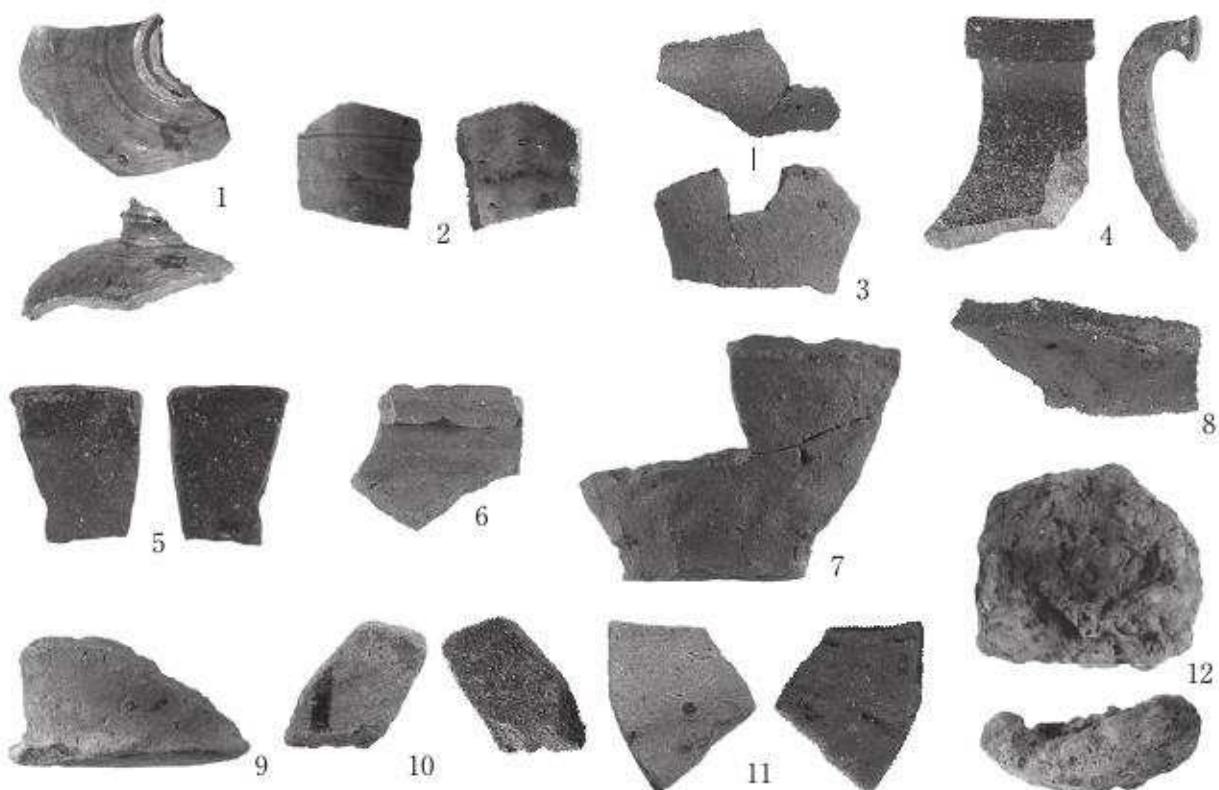
SI32 出土遺物 (2)



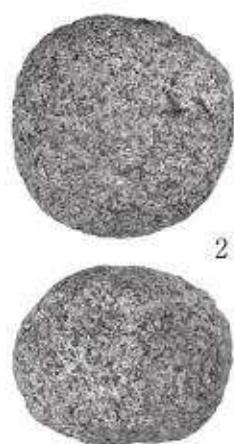
SI33 出土遺物



SI34 出土遺物



SK01 出土遺物

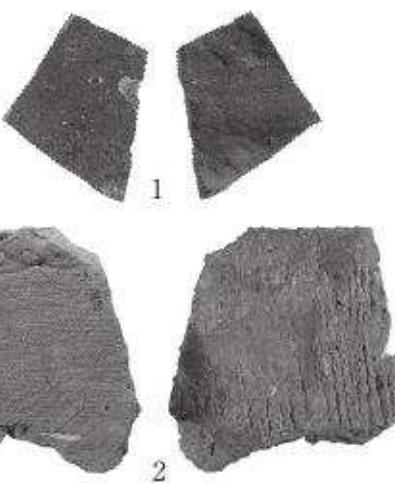


SK02 出土遺物

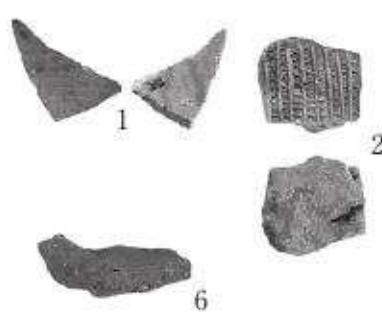
1



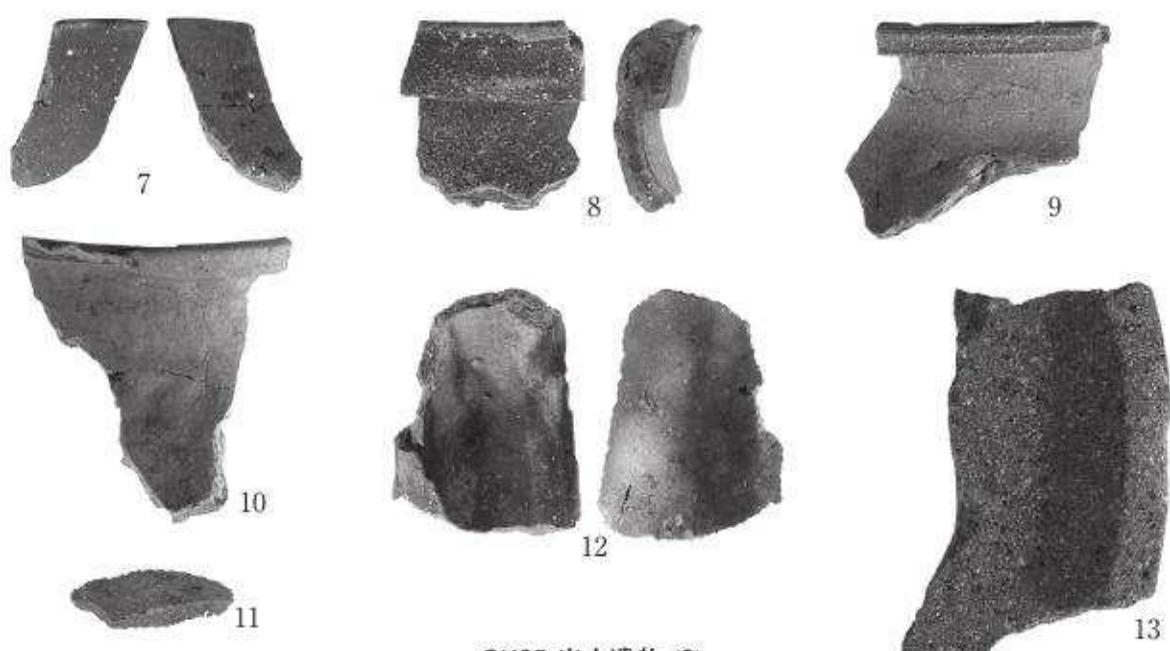
SK04 出土遺物



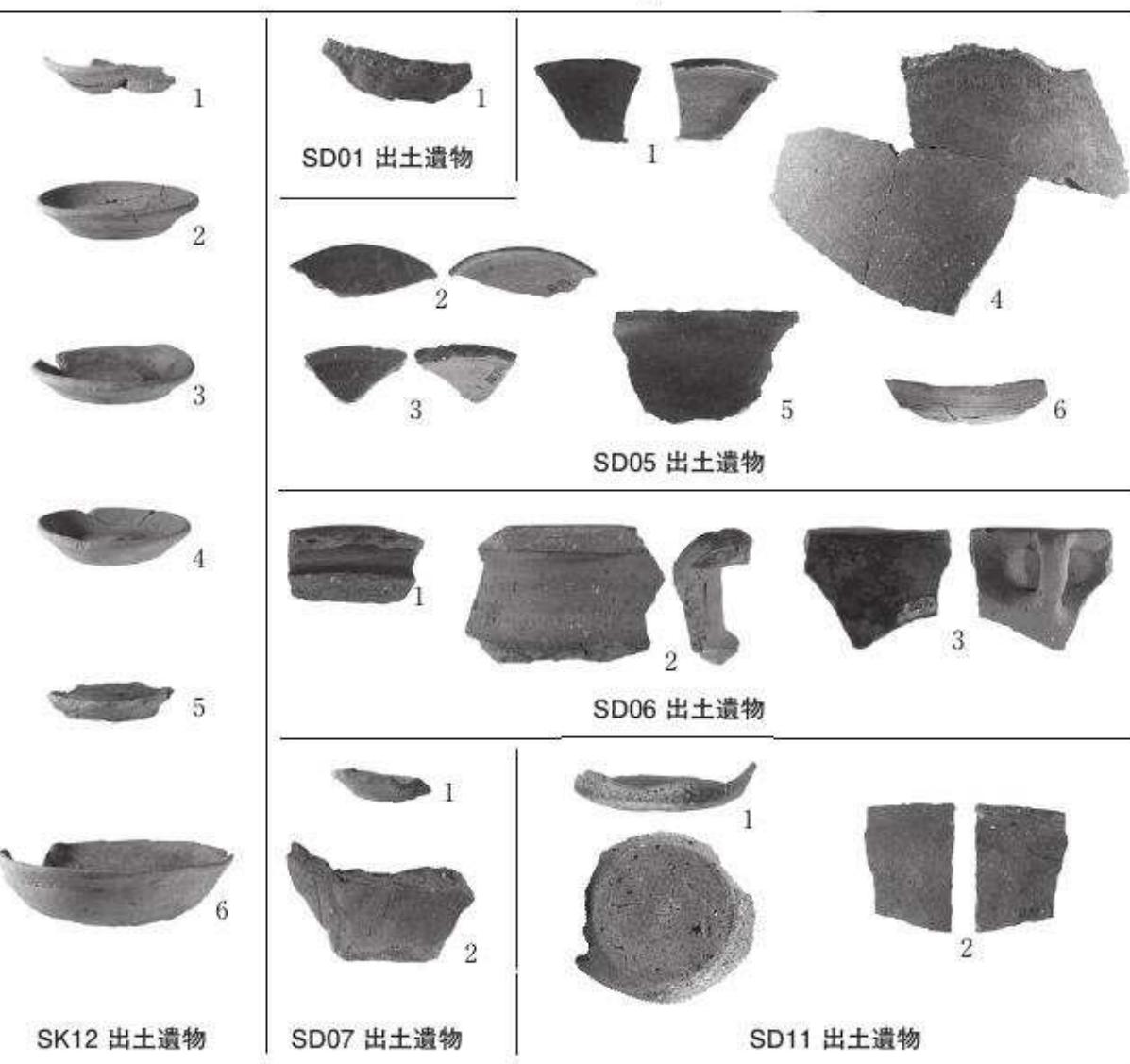
SK08 出土遺物

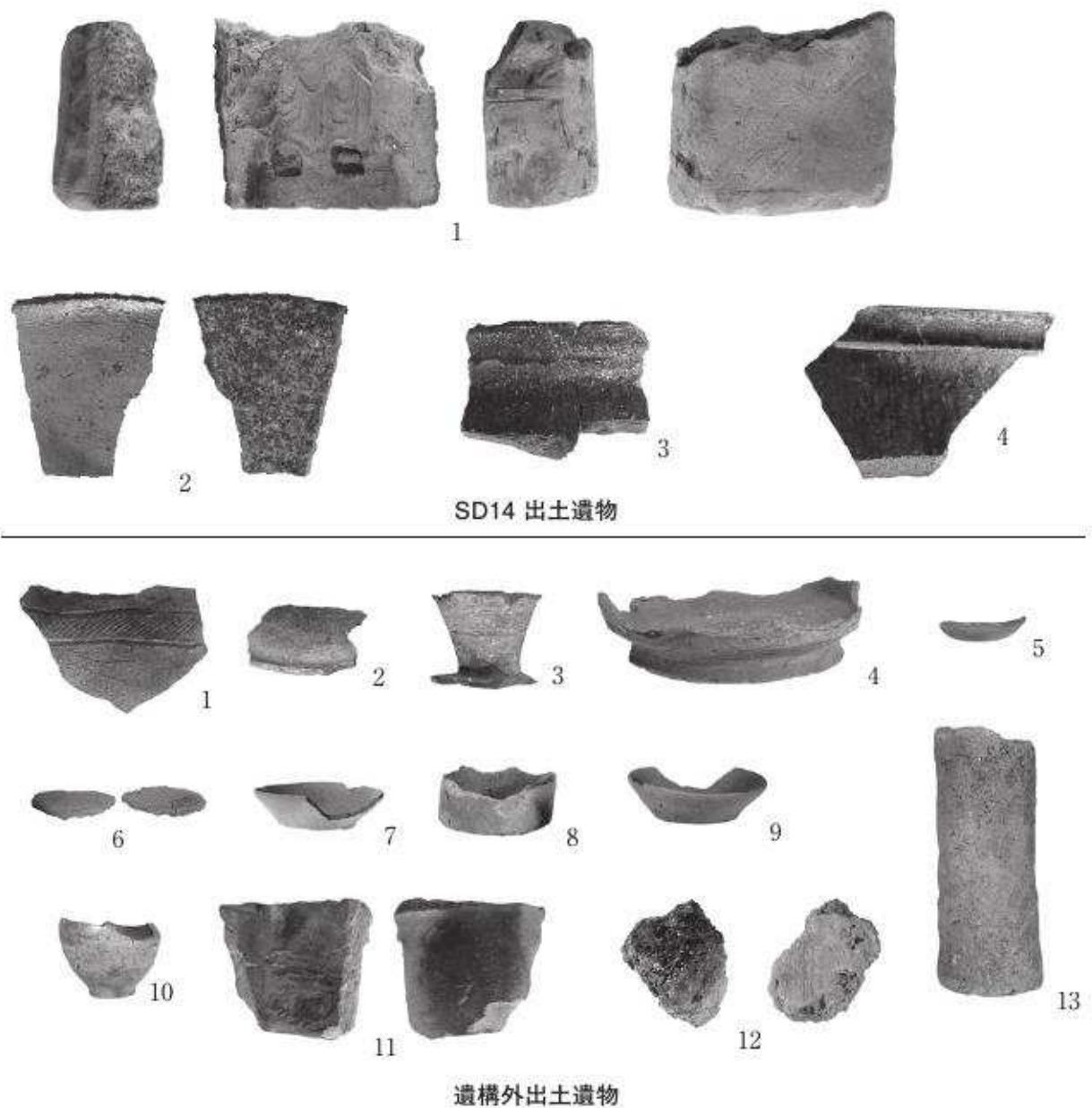


SK05 出土遺物 (1)



SK05 出土遺物 (2)





SK01 · 05 出土炉壁



SD14 出土炉壁

報告書抄録

ふりがな	ひがしなるいやまのかみいせき								
書名	東成井山ノ神遺跡								
副書名	県管轄地帯総合整備事業(東成井西部地区)に伴う発掘調査								
シリーズ名	石岡市埋蔵文化財調査報告書								
編著者名	曾根俊雄 福山俊彰 秋山真好 佐藤俊								
編集機関	株式会社ノガミ 〒950-1136 新潟市江南区曾川甲527番地3 Tel 025-280-6620								
発行機関	石岡市教育委員会								
発行年月日	西暦2012(平成24)年3月16日								
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
ひがしなるいやまのかみいせき 東成井山ノ神遺跡	ひがしなるいやまのかみいせき 茨城県石岡市 ひがしなるいや 東成井832ほか	08463	137	36° 15° 39°	140° 16° 17°	20110712 ~ 20111109	約3,030m ²	道路建設	
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物					
東成井山ノ神遺跡	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	堅穴住居跡	34軒	土師器、須恵器、手捏土器、土製品(支脚・紡錘車)、石製品(紡錘車)、鐵製品(刀子・鎌・斧・鎌・釘)、布目瓦、瓦石、鐵鋤				
		中世	地下式坑	5基	常滑焼、渥美焼、古瀬戸陶器、かわらけ、内耳鏡、仏像鏡型、五輪塔(水輪)、茶臼、鐵滓、炉壁、古錢				
			方形堅穴状遺構	1基					
			土坑	2基					
		中・近世	溝跡	14条					
			陥穴状土坑	2基					
時期不明	井戸跡	1基							
要約	古墳時代～中・近世に至る遺構が検出され、6世紀代と7世紀末～8世紀前半を中心とする集落跡が確認された。中世段階では地下式坑、方形堅穴状遺構、溝跡が遺構の中心となり、常滑焼、古瀬戸陶器、かわらけ等の良好な資料が出土している。中でもSD14から出土した仏像鏡型は特筆される遺物である。								

石岡市埋蔵文化財調査報告書
東成井山ノ神遺跡
—県管轄地帯総合整備事業(東成井西部地区)に伴う発掘調査—
発行 2012(平成24)年3月16日
編集・発行 石岡市教育委員会 〒315-0195 茨城県石岡市柿岡 5680番地1 TEL 0299-43-1111
株式会社ノガミ 〒950-1136 新潟市江南区曾川甲 527 番地 3 TEL 025-280-6620
印刷・製本 株式会社ライフ 〒286-0134 千葉県成田市東和田 595 TEL 0476-24-1564